

大正十一年九月十二日第三種郵便物認可
大正十三年三月一日發行　大正十三年二月十三日印刷納本

女性改造

三月號

Pompeian
beauty specialties

ポンピアン冬の化粧法

ポンピアン・マッサージ・クリーム

基礎化粧



お化粧に一番大切なことは、化粧の下地を造ると云ふことで、殊に冬季はこの基礎化粧を省いたり、不完全であつた場合どんなお念入りのお化粧も、思ふやうに化粧映えのするものではありません、是非共マッサージ・クリームで完全な生地の整理が必要です。



ポンピアン・ナイト・クリーム（夜のクリーム）

下化粧



基礎化粧をおやりになつて、その上に初めて下化粧をなさるのが、眞正の生きたお化粧法の順序です、ポンピアン・ナイト・クリームは冬の模範的な下化粧料で化粧押へとなり、また荒れ止めとなり特に荒れ性の方に適はしい理想的な冬季下化粧料でございます。



ポンピアン・粉白粉（ビューテー パウダー）

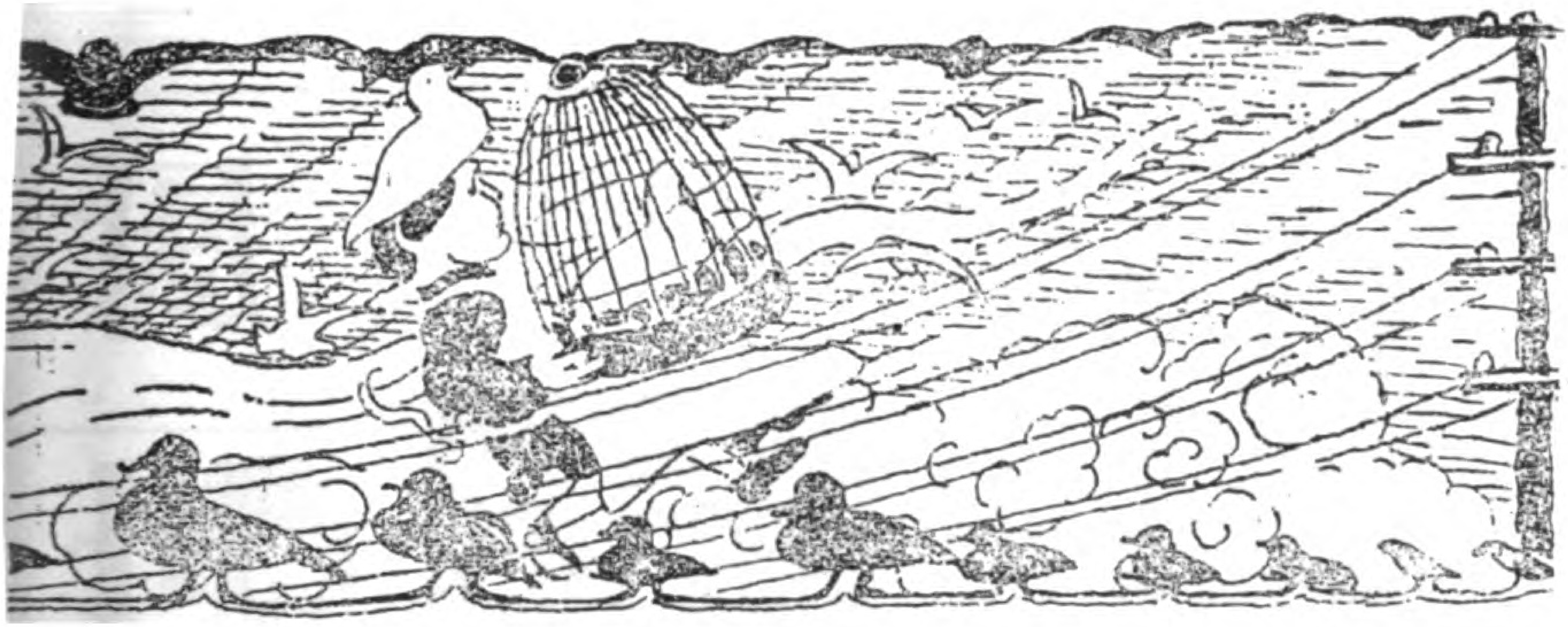
仕上げ



マッサージ・クリームで基礎化粧、ナイト・クリームで下化粧、この二つで立派な化粧映えのする完全な下地が出來上りますから、其の上に今世界的に評判となつてゐる粉白粉で仕上げをなさいませ、寒さに向つても少しも化粧崩れの愛のない生々とした眞に美しいお化粧が出來上ります。



米國ポンピアン會社東洋總代理店
東京・佐々木商店・銀座



女性改造三月號目次

法學博士 末弘嚴太郎著

嘘の効用

定價貮圓六拾錢

送料十九錢

四六判上製

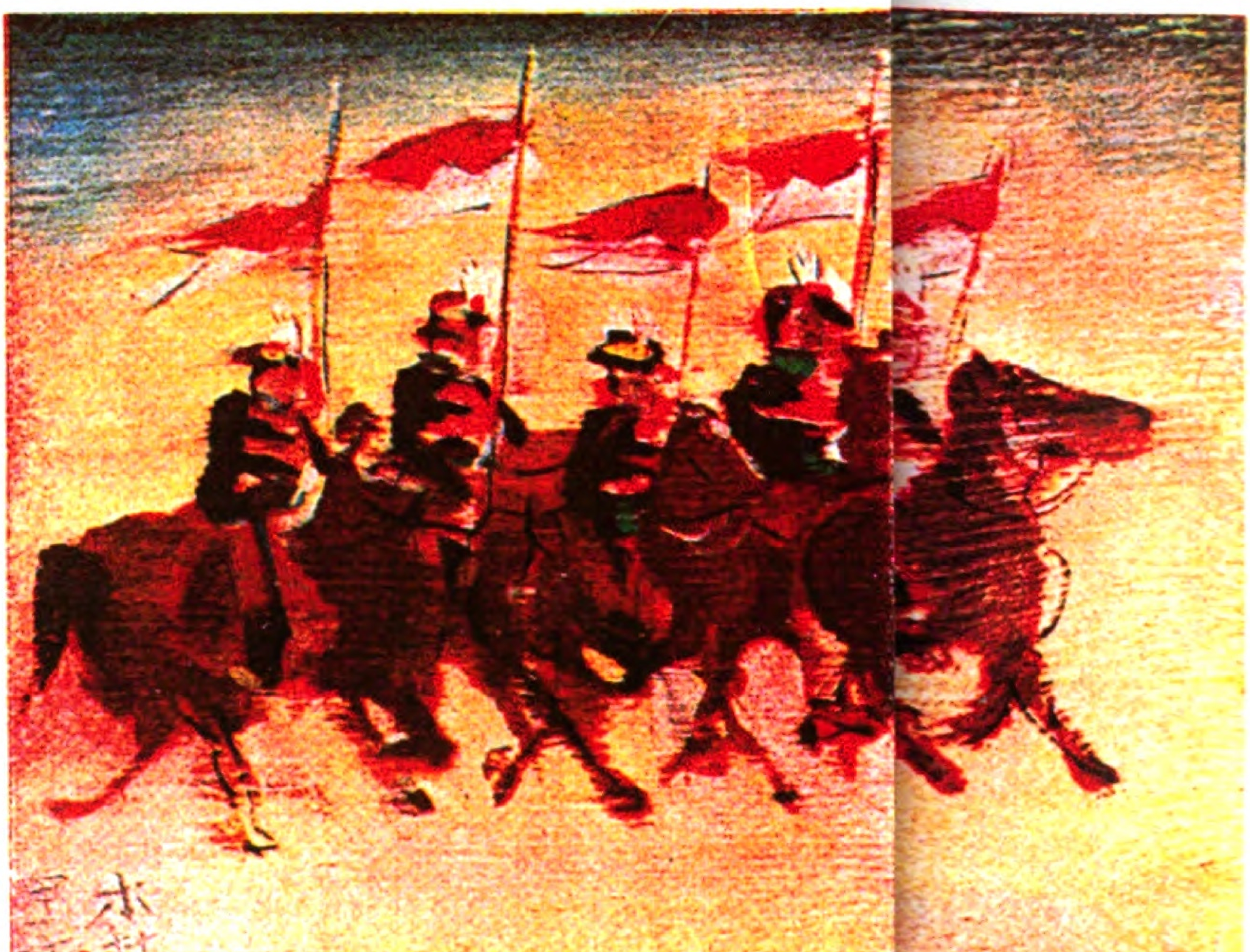
廿五版

私どもは本書は總ての階級、總ての國民によつて必讀さるべき「國民讀本」だと思ひます。國內の保守的分子が優勢な爲めに、法令が移りゆく社會人心の傾向を充分に追隨出來ず其處に「法令」と「社會」との間に溝渠が出來た場合、「法令」と「社會」とを調和せしむるものは唯一「嘘」あるのみです。そうした深い寓意と使命とを以つて生れた本書は、道德の許した嘘、法律で保護した嘘、社會で許した嘘、親子の情をつなぐ嘘、大岡裁判に於る嘘の地位鬼子の裁判に於る嘘が社會生活に有効であるのを說いて現代人の反省を促し尙ほ「役人の頭」では法治國と官僚主義との關係を明かにし、その他過激法案、工場法、住宅問題、世界恒久平和の理想、陪審制度、婚姻と法律等を新しい法の立場から書かれた近來稀に見る有益な著書です、新しき法治國民の何人も再讀、三讀すべきものだと確く信じてゐます。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二



木村莊八



賀牋

與謝野晶子

雲上のことと思はじ世の中のいみじきものの第一とせん

いにしへに通ひ未來にかがやきぬ限りもあらずめでたき妹背

御よはひ盛りの春をことほぎて相寄り給ふ太子と姫は

この春よひがしの宮を夢みざる男子もあらじ少女もあらじ

御車の衣の色目の物語人申すなり花のごとしと

わが女王太子の宮に入りましししいみじかる夜の春の雪かな

僻見

芥川龍之介



廣告

この數篇の文章は何人かの人々を論じたものである。いや、それらの人々に對する僕の好惡を示したものである。この數篇の文章の中に千古の鐵案を求めるのは勿論甚だ危險である。僕は少しも僕の批判の公平を誇らうとは思つてゐない。實際又公平なるものは生憎僕には惠まれてゐない、——と云ふよりも寧ろ惠まれることを潔しとしない美德である。

この數篇の文章の中に謙讓の精神を求めるのはやはり甚だしい見當違ひである。あらゆる批判の藝術は謙讓の精神と兩立しない。就中僕の文章は自負と虛榮心との吸ひ上げポンプである。

この數篇の文章の中に輕佻の態度を求めるのは最も無理解の甚だしいものである。僕は締切り日に間に合ふやうに、匆忙とペンを動かさなければならぬ。かう云ふ事情の下にありながら、しかも輕佻に振舞ひ得るものは大力量の人のゐるばかりである。

この數篇の文章は僕の好惡を示す以外に、殆ど取り柄のないものである。唯僕は僕の好惡を出來るだけ正直に示さうとした。もし取り柄に近いものを擧げれば、この自ら僞るの陋を敢てしなかつたことばかりである。

晉書禮記は「正月元會、白獸樽を殿庭に設け、樽蓋上に白獸を施し、若し能く直言を獻ずる者あらば、この樽を發して酒を一飲ましめたことを語つてゐる。僕にこの數篇の文章の中に直言即ち僻見を獻じた。誰か僕の爲に白獸樽を發し一杓の酒を賜ふものはないか？ 少くとも僕の僻見に左袒し、僻見の權威を樹立する爲に一臂の力を假すものはないか？

一 齋藤茂吉

齋藤茂吉を論ずるのは手輕に出來る藝當ではない。少くとも僕には余人よりも手輕に出來る藝當ではない。なぜと云へば齋藤茂吉は僕の心の一角にいつか根を下してゐるからである。僕は高等學校の生徒だつた頃に偶然「赤光」の初版を讀んだ。「赤光」は見る見る僕の前へ新らしい世界を顯出した。爾來僕は茂吉と共におたまじやくしの命を愛し、淺茅の原のそよぎを愛し、青山墓地を愛し、三宅坂を愛し、午後の電燈の光を愛し、女の手の甲の靜脈を愛した。かう云ふ茂吉を冷靜に見るのは僕自身を冷靜に見ることである。僕自身を冷靜に見ることは、——いや、僕は他見を許さぬ日記をつけてゐる時さへ、必ず第三者を豫想した虚榮心を抱かずにはゐられぬものである。到底行路の人を見るやうに僕自身を見ること

などの出來る筈はない。

僕の詩歌に對する眼は誰のお世話になつたのでもない。齋藤茂吉にあけて貰つたのである。もう今では十數年以前、外山の原に近い借家の二階に「赤光」の一卷を讀まなかつたとすれば、僕は未だに耳木兎のやうに、大いなる詩歌の日の光をかい間見ることさへ出來なかつたであらう。ハイネ、ヴェルレエン、ホイツトマン、——さう云ふ紅毛の詩人の詩を手あたり次第讀んだのもその頃である。が、僕の語學の素養は彼等の內陣へ踏み入るには勿論淺薄を免れなかつた。のみならず僕に上田敏と厨川白村とを一丸にした語學の素養を與へたとしても、果して彼等の血肉を啖ひ得たかどうかは疑問である。(僕は今もなほ彼等の詩の音樂的効果を理解出來ない。稀に理解したと思ふのさへ、指を折つて見れば十行位である。)この故に當時彼等の詩を全然讀まずにゐたとしても、必しも後悔はしなかつたであらう。けれども萬一何かの機會に「赤光」の一卷をも讀まなかつたとすれば、——これも實は考へて見れば、案外後悔はしなかつたかも知れない。その代りに幸福なる批評家のやうに、彼自身の色盲には頓着せず、「歌は到底文壇の中心的勢力にはなり得ない」などと高を括つてゐたことは確かである。

且又茂吉は詩歌に對する眼をあけてくれたばかりではない。あらゆる文藝上の形式美に對する眼をあける手傳ひもしてくれたのである。眼を?——或は耳をとも云はれぬことはない。僕はこの耳を得なかつたとすれば、「無精さやかき起されし春の雨」の音にも無關心に通り過ぎたであらう。が、差當り恩になつたものは眼でも耳でも差支へない。兎に角僕は現在でもこの眼に萬葉集を見てゐるのである。この眼に猿簑を見てゐるのである。この眼に「赤光」や「あら玉」を。——もし正直に云ひ放せば、この眼に「赤光」や「あら玉」の中の幾首かの悪歌をも見てゐるのである。

齋藤茂吉を論ずるのは上に述べた理由により、少くとも僕には余人よりも手輕に出來る藝當ではない。且又茂吉の歌の價値を論じ、歌壇に對する功罪を論じ、短歌史上の位置を論ずるのはをのづから人のゐる筈である（たとひ今はゐないに

しろ、百年の後には一人位、必ず茂吉を賛美するか、或は茂吉を罵殺するか、どの道眞劍に「赤光」の作者を相手どるものの出る筈である。）かたがた厳然たる客觀の舞臺に齋藤茂吉を眺めることは少時他日に讓らなければならぬ。僕の此處に論じたいのは何故に茂吉は後輩たる僕の精神的自叙傳を左右したか、何故に僕は歌人たる茂吉に藝術上の導者を發見したか、何故に僕等は知らず識らずのうちに一縷の血脈を相傳したか、――つまり何故に當時の僕は茂吉を好んだかと云ふとだけである。

けれどもこの「何故に？」も答へるのは問ふのよりも困難である。と云ふ意味は必ずしも答の見つからぬと云ふのではない。寧ろ答の多過ぎるのに茫然たらざるを得ないのである。たとへば天滿の紙屋治兵衞に、何故に彼は曾根崎の白人小春を愛したかと尋ねて見るが好い。治兵衞は忽ち算盤を片手に、髪が好いとか眼が好いとか或は又手足の優しいのが好いとか、いろいろの特色を並べ立てるであらう。僕の茂吉に於けるのもやはりこの例と同じことである。茂吉の特色を説明し出せば、それだけでも數頁に及ぶかも知れない。茂吉は「おひろ」の連作に善男子の戀愛を歌つてゐる。「死にたまふ母」の連作に娑婆界の生滅を語つてゐる。「ロぶえ」の連作に何ものをも避けぬ取材の大膽を誇つてゐる。「乾草」の連作に未だ嘗なかつた感覺の尖鋭を弄んでゐる。「この里に大山大將住むゆゑにわれの心のうれしかりけり」におほどかなる可笑しみを傳へてゐる。「くろぐろと圍らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬつゆじもはふり」に素朴なる畫趣を想はせてゐる。「かうかう」「しんしん」の Onomatope に新しい息吹きを吹きこんでゐる。「父母所生」「於此岸」の佛語に生なましい紅血を通はせてゐる。……

かう云ふ特色は多少にもせよ、一一「何故に？」に答へるものである。が、その全部を數へ盡したにしろ、完全には「何故に？」に答へられぬものである。成程小春の眼や髪はそれぞれ特色を具へてゐるであらう。しかし治兵衞の愛するのは小春と云ふ一人の女人である。眼や髪の特色を具へてゐるのも實は小春と云ふ一人の女人を現してゐるからに外ならぬ。

すると小春なるものを掴まへない以上、完全に「何故に？」と答へることは到底出來る筈のものではない。その又小春なるものを掴まへることは、――治兵衛自身も掴まへたかどうかは勿論千古の疑問である。少くとも格別掴まへた結果を文章に作りなどはしなかつたらしい。けれども僕は僕の好んだ茂吉なるものを掴まへた上、一篇の文章を作らなければならぬ。たとひはつきり掴まへることは人間業には及ばないにもしろ、兎に角義理にも一應は眼鼻だけを明らかにした上、答辯の約束を果さなければならぬ。この故に僕はもう一度あり餘る茂吉の特色の中へ、「何故に？」と同じ問を投げつけるのである。

「光は東方より來たる」さうである。しかし近代の日本には生憎この言葉は通用しない。少くとも藝術に關する限りは屢西方より來てゐるやうである。藝術――と大袈裟に云はないでも好い。文藝だけを考へて見ても、近代の日本は見渡す限り大抵近代の西洋の恩惠を蒙つてゐるやうである。或は近代の西洋の模倣を試みてゐるやうである。尤も模倣などと放言すると、忽ち非難を蒙るかも知れない。現に「模倣に長じた」と云ふ言葉は日本國民に冠らせる惡名の代りに使はれてゐる。しかし何びとも模倣する爲には模倣する本ものを理解しなければならぬ。たとひ深淺の差はあるにしろ、兎に角本ものを理解しなければならぬ。その理解の淺い例は所謂猿の人眞似である。（善良なる猿は人間の所業に深い理解を持つた日には二度と人眞似などはしないかも知れない。）その理解の深い例は藝術の士のする模倣である。即ち模倣の善惡は模倣そのものにあるのではない。理解の深淺にある筈である。よし又淺い理解にもせよ、無理解には勝ると云はなければならぬ。猿の孔雀や大蛇よりも進化の梯子の上段に悠悠と腰を下してゐるのは明らかにこの事實を教へるものである。「模倣に長じた」と云ふ言葉は必しも我我日本人の面目に關はる形容ではない。

藝術上の模倣は上に述べた通り、深い理解に根ざしてゐる。況やこの理解の透徹した時は、模倣はもう殆ど模倣ではない。たとへば今は古典になつた國木田獨歩の「正直者」はモオパスサンの模倣である。が、「正直者」を模倣と呼ぶのは

ナポレオンの事業をアレキサンダアの事業の模倣と呼ぶのと變りはない。成程獨歩は人生をモオパスサンのやうに見たであらう。しかしそれは獨歩自身もモオパスサンになつてゐた爲である。或は獨歩自身の中に微妙なる獨歩モオパスサン組合の成立してゐた爲である。更に又警句を弄すれば、人生も亦モオパスサンを模倣してゐた爲と云はれぬことはない。「人生は藝術を模倣す」と云ふ。名高いワイルドのアフオリズムはこの間の消息を語るものである。人生?——自然でも勿論差支へない。ワイルドは印象派の生まれぬ前にはロンドンの市街に立ち罩める、美しい鳶色の霧などは存在しなかつたと云つてゐる。青あをと燃え輝いた糸杉もやはりゴツホの生まれぬ前には存在しなかつたのに違ひない。少くとも水水しい耳隱しのかげに薄赤い頬を光らせた少女の銀座通りを歩み出したのは確かにルノアルの生まれた後、——つひ近頃の出來事である。

便宜上もう一度繰り返せば、藝術上の理解の透徹した時には、模倣はもう殆ど模倣ではない。寧ろ自他の融合から自然と花の咲いた創造である。模倣の痕跡を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然新しいと云ふものはない。が、又獨自性の地盤を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然古いと云ふものはない。「正直者」は上に述べた通り、獨歩モオパスサン組合の製品である。と云ふのは何も署名だけは獨歩であると云ふのではない。全篇に獨歩の獨自性をにじませてゐると云ふのである。すると獨歩の見た人生は必しもモオパスサンを模倣することに終始してゐた譯ではない。これはワイルド自身にしても、人生の藝術を模倣する程度を嚴密に規定はしなかつた筈である。實際又自然や人生はワイルドのアフオリズムを應用すれば、甚だ不正確に複製した三色版と云はなければならぬ。就中銀座街頭の少女などは最も拙劣なる三色版である。

近代の日本の文藝は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした獨自性の表現に志してゐる。苟くも日本に生を享けた限り、齋藤茂吉も亦この例に洩れない。いや、茂吉はこの兩面を最高度に具へた歌人である。正岡子規の「竹の

黒歌」に發した「アララギ」の傳統を知つてゐるものは、「アララギ」同人の一人たる茂吉の日本人氣質をも疑はないであらう。茂吉は「吾等の脈管の中には、祖先の血がリズムを打つて流れてゐる。祖先が想に堪へずして吐露した詞語が、祖先の分身たる吾等に親しくないとは吾等にとつて虚僞である。おもふに汝にとつても虚僞であるに相違ない」と天下に呼號する日本人である。しかしさう云ふ日本人の中にも、時には如何にありありと萬里の渺彼にゐる先達たちの面影に立つて來ることであらう。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遥けくてかうかうと風は吹きゆきにけり
野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命をおとしかねつも

ゴッホの太陽は幾たびか日本の畫家のカンヴァスを照らした。しかし「一本道」の連作ほど、沈痛なる風景を照らしたことは必しも度たびはなかつたであらう。

かぜむかふ欅太樹の日てり葉の青きうづだちしまし見て居り
いちめんにふくらみ圓き粟畑を潮ふきあげし疾風とほる
あかあかと南瓜ころがりゐたりけりむかうの道を農夫はかへる

これらの歌に對するのは宛然後期印象派の展覽會の何かを見てゐるやうである。さう云へば人物も無い譯ではない。

狂人のにほひただよふ長廊下まなこみひらき我はあゆめる
すき透り低く燃えたる瀧の火にはだか童子は潮にぬれて來

のみならずかう云ふ畫を描いた畫家自身の姿さへ寫されてゐる

ふゆ原に繪をかく男ひとり來て動くけむりをかきはじめたり

幸福なる何人かの詩人たちは或は薔薇を歌ふことに、或はダイナマイトを歌ふことに彼等の西洋を誇つてゐる。が、彼等の西洋を茂吉の西洋に比べて見るが好い。茂吉の西洋はおのづから深處に徹した美に充ちてゐる。これは彼等の西洋のやうに感受性ばかりの產物ではない。正直に自己をつきつめた、痛いたしい魂の產物である。僕は必ずしも上に擧げた歌を茂吉の生涯の絕唱とは云はぬ。しかしその中に磅礴する茂吉の心熱の凄じさを感ぜざるを得ないのは事實である。同時に又さう云ふ熔鑛爐の底に火花を放つた西洋を感ぜざるを得ないのも事實である。

僕は上にかう述べた。「近代の日本の文藝は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした獨自性の表現に志してゐる。」僕は又上にかう述べた。「茂吉はこの竪横の兩面を最高度に具へた歌人である。」茂吉よりも秀歌の多い歌人も廣い天下にはあることであらう。しかも「赤光」の作者のやうに、近代の日本の文藝に對する、――少くとも僕の命を托した同時代の日本の文藝に對する象徵的な地位に立つた歌人の一人もゐないことは確かである。歌人？――何も歌人に限つたことではない。二三の例外を除きさへすれば、あらゆる藝術の士の中にも、茂吉ほど時代を象徵したものは一人もゐなかつたと云はなければならぬ。これは單に大歌人たるよりも、もう少し壯大なる何ものかである。もう少し廣い人生を震盪するに足る何ものかである。僕の茂吉を好んだのも畢竟この故ではなかつたのであらうか？

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや

非才なる僕も時々は僕を生んだ母の力を、――近代の日本の「うらわかきかなしき力」を感じてゐる。僕の歌人たる齋藤茂吉に藝術上の導者を發見したのは少しも僕自身には偶然ではない。

（以下次號）



阿部次郎　芥川龍之介
與謝野晶子　大村嘉代子
德田秋聲　千葉龜雄

家庭に於ける文藝書の選擇に就いて

千葉　どうも日本には家庭に讀ませるためまた讀まして見たいといふ性質の本が大へん少ないやうですね。それは昔から子供や婦人といふものに特別何か讀ませるといふやうなことを考へなかつたためでもあるでせうが、向ふからきたものにはそれがあるところをみると一體に教育が劣つてゐるから、さういふ種類の本が多く出來なかつたのでせう。とにかく家庭にはどういふ物を讀ませるかといふ標準は、一般家庭として決つてゐないのですから、今日のやうに思想が錯綜してゐる時代に於て、さういふことを話しておくことは決して無用のことではあるまいと思ひます。今夜はさういふことを決めるんだらうと思ひます。

德田　どうもむづかしいね。そしてその讀物は文藝書といふ

のですか。

記者 文藝書といふ考へでした。

芥川 で、それは婦人と子供の讀物と限るのですか。

阿部 婦人の讀物と子供の讀物とを分けてやつた方がいゝと思ひますが。それとも一緒にして單に家庭の讀物としますか。

與謝野 私は子供を入れた方がいいと思ひます。

阿部 子供を問題にいれなければ家庭と外とを分ける必要はないでせうね。要するに子供に讀ませていゝか惡いかといふことになるのでせう。

千葉 併しそれは子供の年齡にも關してくることでせうね。

阿部 やはりそれは話の流れてゆくまゝに任せておいたらどうですか。

與謝野さんのお宅ではお子さんの大きい方はどの位になられますか。

與謝野 二十二です。

阿部 中等教育を受けてをられるのは何人ですか。

與謝野 唯今四人受けさせてゐます。

阿部 その方々の讀物についてはどうしておいでですか。

與謝野 別にさういふことはかまひません。何でも子供が勝手に私共の書齋から引出して讀むものを讀ませておきます。

阿部 勿論文藝物も讀ませるんでせうね。

與謝野 讀めとは申しませんが、勝手に讀んでゐるやうです。

阿部 興味をもつておいでですか。

與謝野 文藝物と限らず、いろいろのものに興味をもつて亂讀してゐるやうです。私自身の經驗では、子供の時には汎く亂讀した方が得なやうです。

德田 それは與謝野さんのやうに文藝をやつておられる家庭ならいいですが、外の方面の家庭なら困ると思ひますね。親が讀物について制限しておかないと、文藝書を見せるといふとどうも子供が耽讀する傾向があります。そして文藝熱の性質として自分も文藝家にならうとするんですね。もと〳〵それが本質なら別ですが、本質が別にあるのに、それを忘れて文藝家にならうとするやうになるのは非常に困ると思ひますね。

千葉 ではそれを一切止めさせたいと思はれるのですか。

德田 それは程度問題ですが、反省を與へることは必要だと思ひます。同じ文藝をやるにしても、各般の學問の基礎ができないうちに、それに傾くのは危險です。

芥川　私もさういふ反省は與へたいと思ひますね。

徳田　どうも自分が文藝をやつてゐると、子供にかういふことをさせようとするのが不安なんです。

千葉　或る點まで子供のおもむく儘にしておくといふことはいけませんでせうか。大村さんどうでせう。

大村　はア、それを讀む眼の置き處を、確りと敎へさへすれば、大抵は、おもむく儘にして置いても差支へないでせうと私は思ひます。

千葉　與謝野さんは放任されてあるんですね。

與謝野　ええ、私の宅ではさうです。制限しても、讀みたければ、どうにでもして讀むでせう。唯だ文藝物ばかりで無く汎く讀んでくれさへすれば好いでせう。それには親達の書齋に汎い範圍の書物を備へて、親達が先づそれを讀むことが大切だと思ひます。

芥川　僕は實驗的に子供に西洋のクラシックを話して聞かせたことがあるのですが、大抵の子供は面白がりますね。「ドンキホーテ」とか、「アラビアンナイト」なんか喜びますね。イリヤッドなども好きますね。

千葉　さういふのゝいい飜譯があると大へんよいんですが、これから、わが國でも、さういふよいものが出ると大へんよいのですが。

阿部　イリヤッドは國民文庫刊行會に馬場さんの譯があるやうですね。

芥川　セークスピアのものなんか話して聞かせても子供は喜んできゝますよ。僕はあゝいふものをもつと普及させたいと思ひますね。

千葉　それはいゝですね。

芥川　どうも矢張り人類が子供の時に出來たものは、ほんたうの子供にも面白いと見えますね。僕の兄の子供は僕の作つたお伽噺より「ハムレット」の方が面白いと言つてゐますよ。かう云ふ惡評ならいつでも甘受しますが。

徳田　さういふ人は一體に藝術家の素質がある人ではないでせうか。

芥川　必ずしもさうではないやうですな。幽靈が出たり仇打ちがあつたりするのが面白いんでせう。

阿部　昔、富山房から坪內さんの監修でクラッシックスを書きなほした物語が幾つか出てゐますね。

千葉　學校の教師などに聞いてみるとですね。どうも文藝を好きな生徒は一體にセンチメンタルになつて、科學的の知識の方は一向駄目だといふのです。やはり文學にも種々あ

るでせうが、そのためにとかく物を感情の方でおしつけて行く。科學的の知識それから概して物を考へるといふ方面をおろそかにするといふのはどういふものですか。さういふことについてお考へになつたことはありませんか。

芥川　さういふ傾向はそりあるでせうな。しかし早くセンチメンタルになつた子供は、早くそれからぬけ出るでせう。

與謝野　感傷的になるとも限りません。素質に因ることかと思ひます。若い時には誰も一度は多少共感傷的になります。それも一つの生きた生活だと思ひます。それを通過した方が一生の内容が豐かで好いやうです。

千葉　子供雜誌なんかも近頃よつぽど病的になつてきたやうですね。

芥川　キリスト教的なものが非常に多いやうですな。

千葉　一體今の日本には、家庭の讀物として要求に應ずるだけのいゝものが、澤山あるかどうでせう？

阿部　私はないと思ひますね。特に中等教育程度の少年少女に讀ませるものとしては、どうも量が少いと思ひます。

與謝野　お伽小説と云ふやうなものはセンチメンタルなものばかりで困ります。子供を持たない人達が編輯されるからでせう。

芥川　德田さんはどうですか。

德田　私のところでは、さういふことは上の女の子だけですね。

どうも子供が文壇の空氣に觸れ易くて困るのです。兄の子は二十一ですがね。どうも近頃若い人に、文學を趣味としてでなく、樂で金が儲かるから、何か書いて一と儲けしようと云つたやうな傾向が非常にあるやうですが、それは困ると思ひます。學校へ入つてからならばいゝですが、例へば文科なら文科といつたやうに……

芥川　どうも僕は文學をやるにしても、外に職業を一つ持つてゐる方がいゝと思ひますね。ルネツサンス時代の人が畫家や建築家を兼業したやうにですね。どうも親が文學をやるからつて、やたらに眞似されたら困ると思つてゐます。

與謝野　私共の宅では一人くらゐ文學者になつてくれるゝ好いと思ふですが、それほどまでに文學に深入りする子供が無さ相です。

德田　僕んとこなんかでは、もう子供が親父のことを見て知つてゐますからね。大分こわがつてはゐるやうですよ。今ぢや音樂なんかやつてゐるんですが……

芥川　新時代の人は音樂には敏感ですなあ、

千葉　子供で文學の好きなのは職業としては別ですが、趣味としてならその人の將來の爲にも必要なことと思ひますね。

徳田　どうもそれがさういかんですね。趣味としてやるものが少くて、何でも文學者にならなければ承知しないんですから。

芥川　さう云ふことは吾々は文學をやつてゐるから分るんですが、ほかの人々はさういふことは解らないでせう。

千葉　さうすると今の問題ですが、先づ家庭に文學をいれるのがいゝか悪いか。若しいれるとするとどういふものがいゝか悪いか、それを區別する必要が有るか無いかといふことについてはどうですか。

徳田　絶對に入れないといふことは出來ないでせう。

芥川　日本には家庭にいれる文藝書が殆どないですね。同時に又善き通俗小說と云ふやうなものもないですね。から外國にあるやうなしつかりしたものが欲しいですね。

徳田　さうですね。

芥川　兎に角クラシックなものをうまく書き直したものは子供が喜ぶやうです。

阿部　僕もそれはいゝと思ふが。必ずしもクラシックな物に限るとは思ひませんね。

徳田　文學を將來やるにしても周圍に縁遠いクラシックなものを讀ませるといふのがいいと思ひますが、子供によつてはやはりそれでは胸に響かないのでせう。

與謝野　同感です。さうしてクラシックは成るたけ書き直さずに讀ませたいものです。現代の文學は勿論讀ませて置いて……

芥川　書き直さなければ子供は讀みませんよ。又書き直したのを讀ませて置いてもその爲に本物を讀まないと云ふことは殆どありませんよ。寧ろその爲に讀む位ですよ。クラシックを讀まないのは知らない爲に讀まないのですからね。尤もいつか冨山房が淨瑠璃や何かを書き直したものを出した時、文部省から苦情が出たといふことがあるさうですね。僕は正宗白鳥氏から聞いたのですが、子供はあの書き直しを讀み出して以來、歴史の時間に先生が菅原道眞のことを尋ねると、道眞の家來には松王梅王櫻丸がゐましたなどと答へるやうになつたと云ふのです。その爲にとうとう文部省から苦情が出たと云ふのです。いつの時代でも文部省はかう云ふ苦情を出しさうですね。

阿部　歴史の先生がしつかりやつてくれるといゝんですがね。どうも駄目なんですね。お伽噺などももつと現在身邊の生活から詩を發見して來るのが欲しいですね。西洋のお伽噺の飜譯物などのやうに、王樣とお姫樣の話ばかりだと、子供がお姫樣になりたがつたり、王樣になりたがつたりして面白くありませんね。勿論さういふものを讀ましていゝが、それぱかりではいけないと思ひます。

與謝野　中等教育の歴史が今のやうに嘘の多い歴史ではまことに困ります。

記者　現代に生きてゐる者は現代の物を讀みたがる傾向がないでせうか。一體クラシックのもの、現代の物とどちらがよいでせうね。大村さんあなたの學校の生徒はなど如何ですか。

大村　やつぱり現代のものを好く方が多いやうですね。

芥川　僕も少年文學の新しい創作は必要だと思ふのですよ。僕などはどうも飜譯物のお伽噺ばかり讀んでゐたお蔭で今でも王女を待つてゐる形ですよ。一體今までお伽噺を書く人は調子を落して書くやうですね。あれは調子を下げないでやらなければ駄目ですね。

大村　子供は調子を下げない方を喜びます。

阿部　子供には色々の世界があるから、それを書いたものが欲しいと思ひます。

與謝野　子供は成年頃になりますと、子供向のものより大人の世界を書いたものを讀みたがる傾向があると思ひます。大人の世界を早く覗くと云ふことも惡いとは思ひません。

阿部　本當に理解と興味とを以て讀めるならいゝが、大人の世界以外に自分達自身の世界を書いた文學を持つてゐないのはみじめですね。子供自身の立場に立つて子供自身の世界をかくこと――其處に少年少女文學の積極的な立場があると思ひます。私は子供達にさういふ文學を與へてやりたいのです。

記者　クラシックな物と現代の物と子供は、どちらを喜ぶでせうね。

芥川　ある程度まで書き直したものなら、存外クラシックな物を喜ぶでせう。小説を讀む位年の多い子供なら格別、まだ小説を讀まない子供ならその方を非常に面白がりますよ。子供には帝國ホテルよりも魔女の御殿の方が好いですからね。

阿部　或程度までは讀物は親が選擇してこれを贈物として子供に與へるといふ方法も必要ですね。

德田　それは親の素養の程度によりますね。

芥川　尤も讀まされるとなると面白くなくなるかも知れませんね。僕は教科書に使つたウエルテルにはすつかり閉口してしまつたことがある。

千葉　文學といふものは他の學問とは、一寸違ひますからね。評論とか哲學とかいふものは、基礎を與へねば出來ないが、文學は格別基礎的な學問がなくても解るといふ處から、どうしても耽讀するやうな傾向がありますから、遂に前にあげたやうな、物を考へるといふ習性が少くなる、一つはわが國の社會が物を考へさせるやうに出來てないなど、いろいろな點から、これを無制限にしておくのは危險です。ですからこれはやはり相當監視の必要があると思ひます。自殺をする女性などについて聞いてみても何事も感情一ぺんで片づけてしまうといふやうな。文學に盲醉したといふ人達が多いやうです。殊に子供には批判力がないから、生涯に影響することも多いでせう。さういふ子供の時代に批判なしに文學を讀むと、讀んだ物を直ちに實行しようとする。またさういふ批判力を奪ふものが文學です。だから文學といふものは非常によい物ではあるが、同時にまた非常に危險でもあります。であるからどうしても撰擇は必要だと思ひます。殊に日本のやうな學校教育の仕方ではそれが必要ですね。やはり教育者とか思想家、文學者は、さういふ點に注意をしてやる方が親切なやり方であると思ひます。

阿部　いい讀物を提供してやるといふことが一番必要ですね。

千葉　私の經驗からみてもですね、センチメンタルな文學の一方に、恐ろしい殺伐で軍國主義的な、岩見重太郎とか幡隨院長兵衛とか云つたやうな、松之助式のものを、魚屋の小僧とか、何とかいふ人々が見てゐる。不知不識之にひきいれられてしまつて、青年團に入つて他の人間をなでぎりにするといふやうな武勇をふるふやうにもなるんですね。こんな類のものは今日、小學校の子供でも盛んに讀んでゐるやうですが、あゝいふものを無制限に讀ましておくのは、いけないと思ひます。一つは、正しい意味で少年少女の心をひきつけるやうな、よい書籍が大へん少ないせいではないでせうか。

德田　新聞の講談なんかも子供によつては喜びますね。あれは困る。

芥川　子供は多少超人が好きなんですな。無法に强い人々に

憧れるんですね。大人もその形はありますがね。

阿部　それで親が或程度まで注意してやる必要があるとすればどういふものがよいでせうね。

千葉　どうも日本では、科學的のものとか、社會的のものとかの人類の發達から見て書いた世界歴史とか、そういふ少年の讀み物がないですね。基礎的觀念を子供に與へるやうなものがないのです。外國にはさういふものがかなり多いやうですね。たとへば近頃アメリカで非常に讀まれる、ヘンドリツク・ヴン・ルーンの「人間物語」といつた種類のものは非常にいいのですが。また必ずしも現代のものと限らず、「ギリシヤ神話」とか「アラビヤンナイト」とか、「グリム」とか、「イソップ」とか、或は罪のない冒險物で、ステヴンソンの「寶島」とか、シキンキイウッチの「砂漠を通して」とかいつたもの、また一般の家庭では、トムスンの「科學大系」や、ウエルズの「歴史の外輪」や、ダアウヰンの「種原論」とかいふもの位は備へて置き、娘の結婚の時も、それぐらゐのものは、書庫に入れてやる位にしたいですね要するにもう少し日本にも人文、社會、自然の諸方面の科學的なものが欲しいですね。センチメンタルなものばかりでなく。尤もセンチメンタルでない一切の藝術、詩でも小說でも、世界的に許される名作なら、進んで讀んでほしいのですけれど。

芥川　それは一體科學的なことを、藝術的に書いた物が少いではないでせうか。それに親の方でも科學的な物を子供に讀ませる工夫が足りないではないですか。

千葉　それはさうです。如何してさういふ知識を與へるかについては、一向考へてゐないやうですからね。

德田　それに一體日本では子供もさういふ科學的なものを嫌ふぢやないでせうか。それがまた日本人本來の性質ではないでせうか。

阿部　外へ連れて出て實物を見ながらすると大變興味を持つといふ話ですよ。實際やつた人の話ですがね。

德田　學術的のことを教へることが難しいのではなく、先生の頭が偏してゐるから、興味をもたせ得ないんだとも言へますね。

與謝野　一般の親達が讀書嫌ひだから困ります。それにまた中等學校の先生達が狹い專門に偏して、汎く知つてゐない所から、生徒に人生の全部を連帶的に知らせることが出來ないやうです。

千葉　まあ大抵は、家庭へ歸ると科學方面、社會方面の方は

やらないで、小說でもあると、その方を讀むんですね。要するに、わが國は、その文藝を味はう基礎になる、他の學問が充分に家庭と社會に廣まつて居ないので困ります。

記者　外國では外を步く學生を見ても、コンパスとか三角定規を持つてゐるのが多いと云ひますが、日本ではさういふのが少しもないやうですね。

阿部　それをやるには今のところ「理科少年」といふやうなその方面だけのものでは駄目ですね。やはりお伽噺の出る雜誌の中にそれをとり入れるやうにするんですね。

千葉　それあさうでせう。今出てゐる「子供の國」ですね、あれなども藝術的な觀念は大へんよく出てゐるが、これは何から起るといふやうな具體的な槪念が少いやうに思ひます。

阿部　トルストイのクロイツァ、ソナタの中に、娘たちはロマンティックな綺麗なものばかり讀まされて、男が女中部屋に忍んで行くといふやうなことを書いた、娘が最も讀まなければならぬ小說は讀まされないといふやうなことが書いてありますね。さういふものを讀ませることはどうでせうね。

與謝野　汎く雜多なものを讀む習慣が出來さへしたら、何を讀んでも相殺して害にはならないでせう。批評の見識も出來ませう。一體に人間の本性に惡の部分もあるのですし、社會も惡に富んでゐるのですから、子供にばかり専ら君子善人の讀書法を望むのは無理だらうと思ひます。親達が第一そんな風に讀書をしては居ないのですもの。

德田　敎育が完全に行はれるならば讀ませる方が本當ではないかと思ふが、それが完全に出來ないからなるべくさういふことは知らせたくないと思ひますね。さういふことは、ひとりでに知る時がくるのだから。美文集のやうな讀本も感服しません。

芥川　阿部さんのは何れ覺えるからには始めから覺えさせておいた方がいいと云ふのでせう。

德田　暗い方面は知らないですめばそれに越したことはないと思ふね。それでなくても惡には染みやすいのですから。それよりも聰明でありたいと思ひます。一人でも惡を知らない人の多い方を望みます。

阿部　知らないではすみますまい。

德田　濟む人も隨分ありますね。社會に立つて人に尊敬されるくらゐの人は、大抵惡は知らないと思ひます。

芥川　性慾などは敎らなくても覺えますね。

阿部　男と女とは違ふと思ひます。女の子の場合にはそれが自衛上の智識を與へることにもなるでせう。

徳田　機會は男も女も均等な譯ですがね。知らないで濟む人もずゐぶんあると思ひますね。ほんとに濁りのない結婚生活を送る人が……。

芥川　一體變にセンチメンタルな少年少女小說は不愉快ですね。

千葉　クラシックのものでも芥川さんがさつき仰有つたやうに、書き直すといふやうにしたらいゝでせうね。

芥川　少くとも講談倶樂部程度の通俗小說よりは外國の物の書直しの方がいゝと思ひます。……しかし今、問題はどこにあるのですか。

阿部　その女中の部屋へ男が忍んでゆくやうなものは讀ませていいか惡いかといふところです。與謝野さんどうでせう。

與謝野　さういふ物も自然に讀むなら讀ませた方がいいと思ひます。よい物を一方で澤山讀んでゐれば差支がありません。醜や惡も美や惡の引立役になります。きたないものもあるのが人生の眞實です。きれいづくめ、美しいづくめ、よいとこづくめの教育は虛僞を教へるものだと思ひます。人生の全部を知らせたいと思ひます。

記者　大村さんはどうです。

大村　讀ませるには及びませんが、萬一さういふ本が自分の子供の机の上にあるのを見た時は母親も一緒に讀んで讀む態度、眼のおきどころを敎へて行かなければならないものだと思ひます。

與謝野　一緒に讀んでやるといふことはとても出來ないでせう。子供達もいやがると思ひます。さういふのを一緒に讀むのは子供達に羞恥を感じさせますし、また窮屈を感じさせもします。さういふ感じは持たせない方がいゝと思ひます。

大村　一緒に讀むと申しましたつて時と處を同じにして肩を並べて讀む事をさすのではありません。

芥川　娘といふのは、青年女子といふのですか？　全くの子供ですか？

阿部　女學校の上級位に、その邊の問題です。

千葉　さういふものはある種の興味のみを持つて讀みはしませんか。

阿部　讀みませうね。

芥川　僕は現に讀みましたよ。

千葉　實際は大抵讀んでゐるやうですよ。

與謝野　さうです。さうですから窮屈に制限することは無駄です。それよりも親兄弟が率先して常に雜多な好い物を讀んで、その空氣の中に自然に子供達を浸らせるが宜しい。

阿部　作者の取扱ひ方が問題になつてくると思ひますね。作者の心持や態度が、非常に影響しますから。トルストイなどがさういふ材料を取扱ふと御説教のやうになるでせう。「闇の力」のやうに。

德田　しかし私の言ふのは父兄の立場から言ふのです。實際は誰でも觸れるでせうけれど、父兄からは觸れさせないやうにしたいのです。實際さういふことのルーヅな家庭には間違ひが起りやすいのですから。父兄は實際の上でさういふ間違ひのおこる機會のないやうに十分注意する義務があるでせう。讀ませたところで、どうせ小説などでは實世間のことなどわかる氣遣ひはないのですから。舟木さんのことなどでも、さう思はれます。

芥川　一體親と云ふものは自分の子供が女中部屋へはいつた時に許すですが、少くともあきらめるですが女中部屋へはひる小説を讀むのは許さないですね。

千葉　子供に批判する力があれば讀ませてもいゝと思ひます。

阿部　それが問題なのです。

千葉　ある者にはそれだけの批判力はあるでせう。

阿部　普通の大人の程度ですか。

千葉　いや、中學上級位の子供の程度です。

芥川　何と云つたつて面白ければ讀みますよ。

大村　ですから親はよそながらそれを見守つて眼の置き處を確りと、具體的に云ひにくければ抽象的な話にしてでも、子供に確りとなづかせるやうに話してきかせる必要が起るのです。

與謝野　すべての好い物に興味を持たせる習慣をつけて置けば、子供自身に比較し取捨する力が出來ると思ひます。

阿部　自分の子供には今の處では必要がないが、ある時期を見て讀ませようと思ひます。

千葉　私は一切かまひません。

阿部　德田さんは時期を選擇した方がいゝと思ひますか。

德田　大體の方針を示せばいいと思ひます。

千葉　選擇といふことゝもむづかしいのです。出來れば、何を味つてもそれに傷つけられぬ程度に、思考力を與へる方が一番無事でせうね。

記者　人生の暗い方面のことは教へる必要はないでせうか。

どうでせう。

徳田　どうも教へない方がいゝと思ひます。私の實感から言へば、若いものにはさう云ふところに對する恐怖と羞恥心とが強くなつては困るのです。

千葉　しかし子供に讀ませる時には、そのアウトラインを示し與へるといふことも勿論親切な仕方だと思ひます。つまり此の本の書かうとした目的は、かういふものだといふことをですね。私はさうしたらいゝと思ひますが。

阿部　私は必要だと思ひます。たゞお説教にならない程度でね。ごく大體のヒントを與へることは必要でせうね。

千葉　英國の家庭のやうに、一般的にトルストイの物は入れないとか、ゾラのものはいれないとかいふやうに、はつきり標準をきめてしまふやり方はどうですかね。

芥川　しかしさうすると、尚反動的に讀みたがりはしませんか。アナトールフランスがローマ法皇から破門された時には、アメリカでは非常に、フランスの物が讀まれたといふ話ですからね、それに子供はわかりさへすれば大人の讀むものを讀みたがりますね。

徳田　どうもよくないことには親が注意をしても友達などから感染してくるから駄目ですね。性教育だつてさうですよ。

千葉　ゾラの「女の一生」が賣れ、ヴエデキントの「春のめざめ」が賣れたと云つても、それが何も傑作だといふ意味ばかりではないのですから。

阿部　人生の暗黒面、人生の理想的でない方面を子供に見せておくといふことは必要でせうか、どうでせう。

千葉　暗い方面が人生にあるものだといふ事を、或る點まで知らしておくといふことは必要ですね。

徳田　私はさういふ方面はなるべくしまつておきます。自分で知るかも知れませんが、さういふことは自分で知るのがあたりまへだと思ひますね。馬鹿でないかぎりは年と共に知つて行くでせう。概念を與へておいても、實際には餘り役立たないでせう。

芥川　藝術品によつて、さういふ方面を知らせるといふことはどうですか。

徳田　藝術に依て知らせるより、實生活の方がよく解りますね。

千葉　私はやはり藝術で知らせて置くのもよいと思ひます。といふのは、藝術ではその暗いものに意義をつけて教へて呉れますからです。實生活の方は、強ゐずとも自然と分つて來ると思ひます。

徳田　それも實生活に觸れて初めて效果が生ずるので、淺薄

な文藝にかぶれた程度では危いものです。

千葉　さういふ考へを養つておくことは、あとで實生活に當つた時に好いではないですか。

德田　藝術はさういふ方面には大して役に立たないと思ひます。藝術と現實とはかなり距離があると思ひます。だから藝術によつてさういふ事を知つたところで、役には立たないと思ひますね。

千葉　趣味としてならどうですか。

德田　それは無論その程度だから、實際に役立たないことになるのです。

與謝野　趣味として知つて置くと云ふことが實生活に好い指導を與へると思ひます。

千葉　わたしは、人生の趣味を養ひ、人生といふものの眞實を知るために、多少にかゝわらず、藝術趣味は能へて置きたいと思ふ。

德田　勿論いいものなら讀んでいけないといふんぢやないんです。別の言葉で云へば子供が所謂健全に育つものならいいと思ふんです。總ての要素が均濟的に具備してゐるやうたものならば、推薦してもいゝことは言ふまでもないでせう。

芥川　僕も年をとつたせいか、近頃年々健全なものがよくなりますね。

德田　よくなるでせう。

芥川　言葉をかへて云へば、浪漫派から古典派になつてゆくんですね。

千葉　健全といつても――健全といふ意味が第一問題ですがとにかくどういふものが健全であるか、どういふものが健全でないかといふことを決める標準は一寸むづかしいでせう。

德田　一つの趣味に偏しないものであつたら。何しろ正直に子供を育てゝ貰ひたいですね。

千葉　それは贊成です。

與謝野　實生活の現狀では人を不正直の方へ押しやるやうですが、學問や藝術でそれを出來るだけ食ひ止めたいと思ひます。

芥川　すると今問題は、トルストイ派かトルストイ派でないかと言ふところですね。

德田　何もトルストイがさう言つたからと言つて、さうする必要はありませんね。

芥川　それはもう德田さん自身非トルストイ派の證據です

よ。全然認めないのですか、トルストイの説は？

徳田　さう大して眞理とも思ひませんね、日本では何か一つ思ひつくと、それにばかり偏して、全體の釣合ひを忘れてしまふと云ふ傾きがあるやうです。性教育なぞでも、一つの流行ですが、そんなことを公然教へると、子供がさう云ふ方でませたものになつて始末にいけないだらうと思ふ。

阿部　僕は條件づきでトルストイ派ですね。普通にいふ健全なものばかりでは足りないと思ひます。リアリステックスでかなり突込んだものをも時期を見て讀ませておきたいと思ひます。

與謝野　私も阿部さんのお説と同じやうな考へで居ります。

芥川　さういふことはその子の年齢と性質を考へた上で、やるのがいいでせうね。しかし僕もどつちかと言へばトルストイ派ですな。尤も「春のめざめ」や「女の一生」などは大人も讀む必要はないですから、勿論子供も讀む必要はないですね。

千葉　おつ母さんが、文學書を讀むことについてはどうですか、母の讀み物としていいものがありますか。

芥川　母親の讀みものも、活動寫眞に出るやうなセンチメンタルなものは讀ませたくないね。

阿部　母親が何を讀めばいいかと云ふことは、一般の標準でいいものを讀ませればいいと思ひます。

與謝野　母親の讀物と限らず、人として讀むべきものを父も母も子供も同じやうに讀むやうにしたいと考へます。

千葉　今、婦人雜誌が、よく讀れてゐるやうですが、どうも作家も婦人雜誌に書くとなると、一般に調子をさげて書くやうです、それだけセンチメンタルになりますね。殊によく讀れる雜誌等は、慘酷なほど調子をさげてありますね。新聞の小説なども餘程さげてゐますね。

與謝野　私は以前から婦人雜誌と云ふものの必要を認めない一人です。男も女も同じ程度の物を讀むが宜しい。讀むやうにならなければ、女はいつまでも二次的存在者の位置に停滯します。

芥川　「女性」に出てゐた大谷光瑞さんの「對支横議」を讀んでごらんなさい。女にも對支問題の理解を要求してゐる形ですから。

千葉　それ等を讀んでゐる婦人は、さういふセンチメンタルな物語を、本當の藝術だと思つて讀んでゐるんですから、お母さんが讀むから子供に向つても、さういふものを讀ませるといふやうになるが、それは私はいけないと思ひ

ます。

芥川　それはさうですね。

千葉　殊に賣れるもの程、調子が低いですね。德田さんは作家として、お考へはどうですか。

（こゝで大村大人がお歸りになる。）

德田　小說ですか、さうですね。自分ではさういふ積りもないんですが、新聞の小說なんか調子をおろしてゐるんだらうと思ひます。

芥川　德田さんの新聞小說はおろしてゐないですよ。少々ともおろしてないですね。

德田　「主婦の友」なんぞに久米君のが出るとそれも讀む。渡邊霞亭などのが出るとそれも喜んで讀むといふやうに、今の母親なんかまるで無選擇ですよ。選擇も多少あるでせうが一般的にはありませんね。

芥川　一般的に選擇がないとすれば、やたらに詰め込むことはどうですかね。

千葉　地方などの讀者に對してあゝいふものはどうだらうかと思ひますね。尤も地方の婦人などは本を讀む機會もあまりないでせうが。

芥川　僕は或る程度まで低級な通俗小說は危險だと思ひますね。何か戀愛の問題でもあると、男女とも自分がその通俗小說中の人物になつたやうな氣になつて、途方もない眞似をやり出しますからね。

千葉　向ふで氣がつかないうちに何か與へるといふことは出來ないでせうかな。

芥川　通俗小說が向上するには、どうしても文壇のレベルが高くならないといけないでせう。文壇のレベルが非常に高くなれば、隨つて通俗小說も高くなると思ひます。

記者　それには讀む人の程度が高くなることが必要でせう。

芥川　だが神武天皇以來讀む人の程度がどの位高くなつたかは非常に疑問ですな。

千葉　流行作家と云はれる人のでも、婦人に讀まれる數が非常に少なくて、何故少ないかとなればあまり高尚な藝術は、一般に理解されないからです、イギリスでも、第一流の大家のヘアデイのものなどは、ケインや、コレリイなどの何分の一も賣れないのですからね。

芥川　私のレベルが高くなればといつたのは一般にといふのです。さうなれば相當の才人も探偵小說や中間讀物を書くやうになると思ふのですが、

千葉　もう少し一般に學校教育の程度を高める必要がありま

せう。

阿部　本質的にはそれですね。

千葉　小學の三年程度ぢや駄目ですね。さうかと云つて專門學校もどうかと思ひます。高等女學校でも何とかしてさういふ教育をもつと高めて徹底させたらいゝでせう。たゞ私のいふのはもつと批判の力をつけるといふ精神を持つて、ゆくことです。

阿部　少年少女の文學で、外國のものを飜譯して纏めた非常にいいものが欲しいですね。飜譯の仕方に就いては注文がありますが、何しろ誤譯指摘がこわくて原文の一語一語にひきずり廻されてゐるやうな器械的な飜譯は、この場合特に困ります。

德田　子供のものより大人のもの、飜譯がよく出來てゐないですね。實に亂雜です。世界の名篇傑作がめちや〱にされてゐるのは困ります。外國ものを整理する必要があります。

記者　具體的に云つて西洋のもので、日本の子供にすすめるのにどういふものがいいでせう。

千葉　「アイビヤンナイト」それから「ギリシヤ神話」「イソツプ」等はいいですね。アンダーセンのものもいいと思ひます。少女などにも、「小公子」「小公女」「家なき子」程度で、隨分よいものが澤山あるではありませんか。

芥川　ダンテの「神曲」などもあれをわけて、一つづつ讀んで聞かせるとそりあ喜んで聞いてゐますよ。

記者　阿部さん、今の日本の青年子女に讀ませるものとして何がいいでせう。

阿部　中學や女學校の四年生位からなら夏目さんのものなんかはいいでせうね。常人が自分で讀み出すなら一二年頃からでもかまひませんが。

芥川　久保田萬太郎君の御伽芝居も好いものですよ。誰も何とも云はないが、坪内さんのものなどよりも數等藝術的ですよ。尤も種は西洋ですが。

阿部　僕の友達は中學に行つてゐる子供の讀物に困つて、夏目さんの「坊ちやん」を讀ましたら、それを幾度も〱繰返して讀んで面白がつてゐると云つてゐました。

德田　僕も夏目さんのものなら無條件でいいと思ひます。武者小路君のものなぞも毒にはならないからいゝでせう。

千葉　菊池さんのものもいいでせう。

與謝野　私は學校（文化學院）で芥川さんのものも菊池さんのものも讀ませてゐます。それから森先生や夏目先生、島崎藤村先生のもの、有島武郎さんのものと云ふ風に……また古典の方では平家物語、榮華物語、枕草紙を讀ませて居

ます。先づかう云ふものを讀んで置けば近松物などは生徒自身で讀んで解るでせう。また漢文學の方では漢魏、唐宋の詩文を讀ませて居ます。今の中學の漢文讀本は軍國主義的で困りますよ。

阿部　廿歳位になつたら近松のものも讀ませたらいいでせう。尤も少し困るところもあるが。

芥川　私は近松の「油地獄」だけは讀ませたくないですね。あんな無意味な戯曲があるものではない。

徳田　近松なんか讀ませる必要がありますかね。

阿部　そりあ必要があるでせう。近松が無用になつたら日本人は困りますよ。

徳田　心中ものなんか讀ませる必要がありますかね、梅川忠兵衛みたいなものは、讀ませなくてもよからう。また讀みもしないでせう。讀んでもわからないでせう。

阿部　今時心中するものに近松を讀んだからといつてその爲めに心中する者もあるまいが、もしも本當に死ぬ時、あの主人公の氣持になれればよいではないでせうか。

芥川　今でも下町には久保田萬太郎、近松秋江を通じて近松氣分が大分ありますよ。

徳田　さういふ偏した趣味もあるでせう。

千葉　それではおしまひに一つづつ日本の家庭に贈る讀物をあげませうか。私は「希臘神話」を出します。

阿部　『希臘神話』は僕もいいと思ふ。尤も中には困る話もあるが。

芥川　僕は「アラビヤナイト」をつけ加へます。

與謝野　私は少し硬う御座いますが森先生の「即興詩人」を

徳田　一般的のものとしては「プルタークの英雄傳」など誰にもいゝでせう。

千葉　婦人の讀物としてはダンテの「神曲」などもよいですが、エリオットやヂッケンスあたりの小説も推奬したいですね。近代のものには、讀んで欲しいものが無數ですね。少くともロマン・ロオランやドストエフスキイはそれから一般にもつと哲學や社會科學の本も讀んで貰ひたいと思ひます。それからもう一つは、自然に關し、動植物に關したもの　たとへばメエテルリンクの「花の知識」や、ファブルの昆虫物語のやうなものを讀みたいです。

記者　阿部さん、最後に日本の家庭に入れてよい哲學書をあげてくれませんか。

阿部　さうさねえ。

芥川　阿部さん自身の譯した、リップスの「倫理學上の根本問題」をあげれば好いですよ。

阿部　一つだけ出すとなると責任が重くなつて困りますね。まあ、プラトンぐらゐにして置きませうか。

記者　ではこれで。遲くまで御苦勞樣でした。

（一月三十日夜　帝國ホテルにて）



婦人の世紀

平林初之輔

一

ギリシヤやローマの昔には、普通の歴史の書物にのつてゐる人間の外に、歴史の上には少しも現はれず、市民としての權利を全然もつてゐないで、たゞ市民のために食物や衣服や其の他の必要品をこしらへることを永久のそして唯一の任務としてゐた悲しい人々があつた。それは卽ち奴隷である。「奴隷は人間であるか?」とこれ等の古代人にたづねたら、百人が百人共「人間ではない」と答へたに相違ない。實際古代には、奴隷は一名「物を言ふ道具」と呼ばれてゐたのである。アリストートルのやうな大哲學者でさへも、奴隷を人間と見做すことができないで、奴隷は永久に、自由民のために犬馬の働きをすべき道具だと思つてゐたのである。ところが此の奴隷制度は、ギリシヤやローマの市民が考へたやうに永久なものではなくて、ローマの滅亡と共になくなつてしまつた。むしろ奴隷制度といふ、窮屈な制限があつたゝめにローマ帝國は滅びてしまつたのである。

　ところでこゝに不思議なことがある。同じ人間と生れながら、自由市民から道具扱ひにされ、生殺與奪の權を握られてゐた奴隷は、きつと千人が千人とも、自己の境遇を悲しんだり、市民に對して不平をもつたりしてゐたに相違ないと吾々には思はれる。然るに實際はそれ程でもないのである。生れながらにして奴隷であつた人間は、主人に打たれ、叩かれ、賣られ、殘酷な勞働を强制され、或は殺されてもしやうがない、それが奴隷の本分なのだと考へてゐたのである。これ程いたましい、これ程不正義なことが世の中にあらうか? と言ひたいのであるが、實際は、思ひもよらぬ手近なところにこれと同じいたましい事實が橫はつてゐるのである。そして

此の事實は、ちやうど、奴隷制度がローマの社會を滅ぼしたやうに、今日の社會の進歩發達を妨げる致命的の障害となつてゐる。申すまでもなくそれは婦人である。私は少しも誇張しないで言ふが、婦人問題の解決は、今日の文明社會を生かすか滅ぼすかの鍵である。

二

今日の婦人の中には、自分達の境遇がどれだけみじめであるかに氣のついてゐる人は極く少數である。

私はこれを示すために、最も手近な、そして婦人の傳統的地位が最も完全に、保存されてゐる、中間階級の家庭を例にとらう。雇人なしに夫婦或はその親子だけが共同體をつくつて生活してゐる家庭を例にとらう。さういふ家庭では、婦人の仕事は、どの家庭へいつて見ても同じことである。そして歴史がはじまつてから數千年來同じことである。臺所の仕事洗濯、子供の守り、針仕事、……それが版を押したやうに凡ての家庭を通ずる主婦のつとめである。生活の程度が下るに從つて、その外に、手内職、工場勞働等が附加されることはあつても、前に言つたゞけの仕事、一言で言へば家内勞働は最少限度のつとめとして主婦に課せられてゐる。勿論一軒々々の家庭について言へば、このやうな婦人の仕事が、勞力の點から言つて、男子の仕事より過激だとは言へない、男子の方が却つてひどい勞働をしてゐる家庭の方が多いのである。ことに上の階級に進むに從つてさういふ傾向がある。その代り、雇人をつかつて家内勞働をさせてゐる上流の家庭では、婦人は全くする仕事がないといふ現象が起る。けれども、ここで私が問題とするのは、個々の家庭で男女の勞働が不平等だといふやうなことではなくて、社會的に婦人の仕事が、家内勞働といふ、最も機械的な、最も退屈な、最も興味のない繩張の中へ、數千年來一貫して閉ぢこめられてゐたといふ一事である。それは、古代の奴隷が、主人のために、生産の仕事を一手でひきうけてゐたのと同じことである。數千年來、椽の下の力持ちとなつて、太古から今日まで何のかはりもない、文明の進歩とはまるで交渉のない家内勞働をすることが婦人の唯一の仕事であつて、その他の、文明に貢獻し、歴史の表面にあらはれるやうな仕事は、まつたく男子の占有だつたのである。男女の社會的關係は、奴隷と自由民との關係に異らなかつたのである。

三

これに對し、善良な、貞淑な、多くの婦人は言ふだらう、「自分は家内勞働を少しも苦痛とは思はない、又自分の境遇に對して少しも不平はない、それどころか、毎夕食膳を準備して主人の歸りをまつのは此の上ない樂しみである」と。又或る婦人は言ふだらう「妻が夫に從ひ、夫が外に出て働き、妻は内を守るのは、萬古不變の掟であつて、婦人が、社會に出て働いたり、政治的權利を要求したりするのは間違ひである」と。更に又或る婦人は言ふであらう「女のくせに婦人運動を叫んだり、内を守らずに外へ出て働いたりするのは、女の道をはづれた邪道である」と。

私は之等の良妻賢母に對して、相當の敬意ををしむものではない。そして「男のまねをして」外に活動しやうとする婦人の中に、不眞面目な女や、墮落した女があることも十分に認める。けれども、この不眞面目な婦人や、墮落した女のために、婦人運動そのものを「邪道」視することはできないのである。今日參政權を獲得してゐる西洋諸國の婦人は、皆不貞くされだらうか? 今日、日本で、家内勞働の埒外に出て事務員になつたり、婦人記者になつたり、音樂家になつたり女工になつたり、看護婦になつたり、女教師になつたりしてゐる婦人達は、皆女の道をはづれた人達だらうか? 如何に舊式な教育家でも、この問に對して「然り」と答へる勇氣はもたないに相違ない。

こゝに重大な問題が横はつてゐるのである。それは、個々の婦人が好むと好まないとにかゝはらず、また個々の婦人の希望や意思が如何にかゝはらず、更に道學者の嘆息や、女子教育家の憤慨などに頓着なく、默々として動いて行く社會進化の激流が、遂に、數千年來微動だもしなかつた「婦人の天職」「女の道」を動かしはじめて來たといふことである。そして、從來は單なる家庭内の問題に過ぎなかつた男女の關係が重大な社會問題として、吾々に當面して來たといふことである。奴隷制度の下にあつて、多くの奴隷が、奴隷制度の不正に氣がつかなかつたやうに、數千年來の家族制度の下にあつて、多くの婦人がその缺陷に氣がつかないにかゝはらず、婦人參政權問題、婦人職業問題等の部分的問題を露拂ひとして婦人解放の運動は、今や序幕に入つてゐるのである。

この時に方りて、吾々は徒らに、反動的歎息を洩して、父長制度の背を追慕し、進化の流れを無益にせきとめやうとするよりも、冷靜に、家族制度の由來と現狀とを檢査して、その缺陷を補ふ準備をしなければならぬ。さうしなければ前に言つたやうに、今日の文明は、家族制度の暗礁に乘り上げて

離破する惧れがあるのである。婦人の世紀か、文明の沒落か婦人を奴隷狀態から解放するか、婦人を飽くまでも奴隷狀態に幽閉しやうとして、進化の潮流に逆ふか、現代は、この重大な分岐點に際會してゐるのである。これは誇張ではなくて事實である。次にその理由を説明しよう。

四

家族制度は人間の歴史と共にはじまつた古い制度である。家族制度は單に男女の戀愛によりてできあがつた結合ではなくて、經濟的の必要に迫られて生じた結合である。その證據には、蕃人の中には、力づくで女を奪つて來たり、金銭或は物品で女を買つたりして結婚する風習が行はれてゐる。そして此の場合當人同志の戀愛といふやうなことは、全然無視されてゐる。然らば、如何なる經濟的必要が、結婚を促し、家族制度を生んだか。

人間の社會に最初に行はれた分業は、兩性間の分業であつた。男子は戰爭と狩獵とを仕事にし、婦人は衣食住の仕事と子供の養育をすること、これが人間最初の分業であつた。これだけが人間活動の一切であると同時に、人間が生活するためには、ぜひともこれだけの仕事はしなければならなかつた。そこで、既に男女間に嚴密な分業が行はれてゐる以上、男子も婦人も獨立して生活してゆくことは極めて困難になつた。男女が一つの共同體をつくつて、互に助けあう必要が生じて來た。こゝに家族制度の起源がある。家族制度は、道學者が叫ぶやうに、日本固有の制度でもなく、日本の祖先だけが遺した美風でもなくて、全地球の表面にひろがつてゐる最も普遍的な制度の一つである。この制度は、歴史の進化につれて、盛衰はあつたが、大體に於て、近世までは、種々の不文律と成文律とによりて、益々その結合が鞏固になつて來たといふことができる。ところが近世になつて、その結合が急激に緩んで、かつては人生至上の樂であつた「家庭のまどい」が無殘にも破壞され、數千年來、道德の根元と考へられてゐた「婦人道」がぐらついてきたのである。これは、近頃の婦人がふしだらになつたのでもなく、生意氣になつたゝめでもなくて、家族制度そのものゝ經濟的基礎がぐらついて來たからである。

五

先に述べたやうに、人間の社會がはじまると同時に、男女の分業が先づ第一に行はれたが、その後、婦人は今日までは

ば同じ仕事を繰り返してゐたのである。ところが、男子はさうでなかつた。婦人が數千年來千遍一律の家内勞働に閉ぢこめられてゐる間に、男子は人間社會を野蠻狀態から文明にまでひき上げた。文明の進步と共に男子の分業は發達して國家の政務から大工左官等の手工業に至るまで、一切の社會的の仕事が男子の間に分割され獨占されてしまつた。換言すれば、男子は、社會人として、社會のためにはたらき、婦人は百年一日の如く、たゞ狹い家庭のためにのみ勞働した。人類の文化は、男子の手によりて、男子のみの間に進步發達し婦人は永久に家庭の中に閉ぢこめられ、家内勞働と「内助」とにその一生をすりへらしてゐた。そこで婦人は、社會的には何等必要のない、從つて權利もなく發言の自由もない、ただ男子の都合次第で、裝飾とされ、道具とされ、娛樂とされる人形となつてしまつた。男子の要求のためには賣淫制度も公認されて、二十世紀の白晝に臆面もなく公娼制度が存在してゐる國もある。かくの如き婦人の境遇に氣がついて、人形から人間にならうとして家出をしたのが、イプセンの「人形の家」の女主人公ノラである。但し、ノラは、此の社會的の問題を、家庭的に解決しやうとしたゝめに、單に家出をしただけで、婦人問題の解決には何等の貢献をもしてゐないのである。婦人問題は家庭問題ではなくて、社會問題である。從つて、それは、社會的にのみ解決し得るものである。

反動的家族制度保存論者が、家内勞働と内助とを婦人の永久不變の天職として神聖化してゐる間に、人間の社會は默々として進化し、一方婦人の家内勞働を不必要ならしめると同時に、他方、これまで男子のみの舞臺であつた、社會が婦人の參加を痛切に要求しはじめて來た。この兩方面の進化は、家族制度の基礎を動搖させ、家族制度の根本的變革を要求するやうになつた。そこに、近世婦人運動の根據があるのである。次に私はその事實を具體的に示さう。

六

かくの如く家族制度を動搖させ、婦人の社會的の地位に激變を要求してきた原因は、近世に於ける機械の發明と、それによりて促進された產業革命である。

先づ第一に婦人の家内勞働が不必要になつて來た方面から考察しやう。

從來家庭婦人のつとめとして重要なものであつた子女の敎育の大半は近世文明と共に眞先に、主婦の手から、社會の手に奪はれてしまつた、小學校、幼稚園、哺育所等の普及によ

りて、子女の教育の殆んど全部が、母親の責任から學校教師の責任に移されてしまつた。活動寫眞、公開の競技會其の他の娯樂機關の發達によりて、子女は、その娯樂をも家庭の中から仰がずに、社會から仰ぐやうになつた。

次に家内勞働の中心をなす、衣食住が、殆んど今日では社會的に供給されるやうになつた。家屋をつくることが、婦人の手から社會の手に奪はれたのは太古のことであるが、衣服は最近まで、婦人の家内勞働によりてすつかり生産されてゐた。先づ綿をつむいで糸にし、糸を織つて布をつくり、布を縫つて着物にするまでの仕事が、從來はすべて家庭の主婦の仕事であつた。

ところが、紡績機械の發明によりて、糸を紡ぐことが先づ主婦の手から奪はれ、機織機械の發明によりて、機を織ることが主婦の手から奪はれ、今日では、呉服屋へ行つて、好みの反物を買ふ方が遙に便利で安價になつた。ついで仕立屋の獨立によりて、婦人の家庭勞働の最後の堅壘であつた裁縫さへも、主婦の手から社會の手に奪はれやうとしてゐる。昔は嫁入り女は、糸紡ぎや機織りの術を知つてゐることが絶對必要條件だつたのであるが、今日では、裁縫だけが、嫁入女の必要手藝となつてしまつてゐる。やがて、裁縫も必要でなくなる時代が來ることは確實である。現に上流と下流の婦人には、裁縫は必ずしも必要がないのである。

次に食物の方はどうかといふと、この方面でも大部分の仕事が家庭から奪はれてしまつてゐる。かつては一軒一軒に醸造した味噌、醤油、酒等が社會的分業によりて生産されるやうになつたのをはじめとして、一切の食料品が今日吾々は商店から買つてゐる。家内でつくつた食料品が食膳にのぼるやうな機會は、都會の家庭では絶無といつてよい。又調理法に於ても、水道が設けられて水を汲む世話がなくなり、瓦斯が設けられて、煮沸が便利になり、電燈が行き渡つて燈火の心配がなくなつた。おまけに、食料品店、料理店、公衆食堂、カフエ等の普及によりて、一家の全員がそろつて食卓に向ふやうなことは殆んどなくなつた。賃銀生活をしてゐる男子は三度の内で二度は家庭外で食事をすますやうになつて來た。かくの如く家族制度の根柢をなす婦人の家内勞働は、刻々社會の手に交附されつゝあるのである。

七

次に社會が、家庭婦人を要求してゐることを實例によりて示さう。

家内勞働が、急激に社會に吸收されると共に、社會は男子だけでは間にあはなくなつて婦人の參加を痛切に要求しはじめるのである。從來男子に獨占されてゐた社會の文明が、ぜひとも婦人の參加に待たなければ維持することが出來なくなつたのである。そこに近世に於て猛然として勃興して來た婦人職業問題の根據があるのである。

手近い例をあげると、敎育が、家庭婦人の手から社會の手に移ると、男子のみでこれにあたることが不可能になつて來た。そこで女敎師が需要されて來る。今日小學敎師の三分の一は婦人の手によつて行はれてゐる。その他、看護婦といふ社會的の仕事は全部婦人によりて占められてゐる。電話交換局の交換手も全部婦人である。タイピストも半ば以上婦人の手に握られて來た。銀行や會社や、郵便局や官廳へ行つても婦人事務員の見えないところは殆んどない位である。その他高等敎育機もぼつ〳〵婦人に開放され、婦人の音樂家、美術家、著術家、記者、醫師、牧師、學者等も續々增加してゐる東京の市街自動車では婦人が車掌を獨占してゐる。かつては男子の獨占であつた俳優が、今では多くの女優を生んでゐる。

更に職業婦人の驚くべき增加は、工場勞働者に於て見ることが出來る。特に、機織工場紡績工場等は婦人を中心とし、その他凡ゆる工場に於ける女工の數は年々激增しつゝある。

以上は日本の例であるが、西洋文明國に於てはこの傾向は一段と進み、婦人の巡査があり、婦人の軍人さへもあり、婦人の代議士、政治家、法律家等をも生んでゐる。ロシアでは婦人の人民委員（ロシアの最高官吏）を出し、イギリスでは最近、勞働大臣の次官の椅子を婦人が占めた。更に婦人には最も不適當だと思はれてゐた運動さへも婦人の侵入を免れることはできなかつた。「女大學」の著者をして婦人の水泳競技を見せしめたら、彼は憮然として、現代を末世なりと歎息するたらう。けれども、社會は駸々として進歩してゐるのである。

八

家族制度の基礎をなす、家内勞働はかくの如くに打ち壞され、婦人の多數は、かくの如く、從來彼等の唯一の天地であ

つた家庭から社會へ追ひ出されてゐるのである。それにも拘らず、この進化の潮流に敢然として逆つてゐるものは、古い法律、制度、慣習、道徳、並にこれを擁護する頑迷者流の一團である。彼等は、ローマが奴隷制度のために滅びた歴史がやがて、彼等がすむ文明を呪はんとしてゐることに氣がつかぬのである。そして、婦人運動の一部に過ぎない。婦人の參政運動、公娼廢止運動、大學の婦人に對する開放といふやうなことにさへ反對してゐるのである。

經濟的に婦人が家庭から社會に開放されてゐるのに、法律的、慣習的に婦人を昔ながらの家庭の中に閉ぢこめやうとするのは、一切の反動運動と同じく、社會と文明を滅さうとする企てゝある。婦人の家庭奴隷からの徹底的解放、それは、私の希望でもなく、確信でさへもなくて、將に來らんとする事實である。私は婦人運動の將來を豫言する力はもたぬ。けれども、婦人の徹底的解放が、必然的に行はれることは、以上私の論旨を一讀された人には明白だらうと思ふ、それが十年後か百年後かはわからぬが、あまり遠い將來ではないと思はれる。もうよりかゝる徹底的解放は、私有制度、男子の相續權、並びにそれから生ずる法制上の男子の諸々の特權と至大の關係をもつてゐる。けれども今日多くの文明國の婦人が獲得した婦人參政權は、之等の問題を平和に解決する第一歩であるに相違ない。

要するに婦人問題の解決は、今日の社會を脅かしてゐる凡ゆる問題の解決と密接不離の關係をもつてゐるのであつて、婦人の世紀がはじまる時は、人類のほんとうの歷史がはじまる時である。而して、婦人を奴隷とする家族制度の次に來る家族制度は、男女の愛によりて結合された家族制度であることは想像するに難くない。何となれば、婦人の家內勞働がなくなつてしまへば、愛以外に男女を結びつける鎖はなくなるからである。（二月七日）

時評

青年日本の黎明

千葉龜雄

攝政宮の御婚儀は、われ等をして、若い大正時代の黎明を感享せしめる。

政治の情態から見れば、なるほど大正時代は明治の延長である。現代の政治者は、みな明治維新の勳功者の尻尾にくつついてか、もしくはその氣分や思想に同化して、いづれかによつて今日の地位に經のぼつた人々である。けれどもよく考へて見れば、彼等がそれぞれ明治の勳功者から、そのままの思想なり、氣分なりを享け入れたと云つても、それはその勳功者等が、維新の當年におけるやうな、清新で、世界的なはつらつたるそれでは無かつた。その勳功者達もやはり人間であつた。段々と年をとり、功が成り。名があがつて來ると、人間的な弱點からいつか民衆に對する情熱よりも、自分の環境と勢力に對する執着力の方がよりつよくなつて來た。そこで閥をつくる氣分、公けの組織の中に自分の私勢力を遺傳しやうとする欲望の方がより強くなつた。そして將來民衆の自治力によつて、その閥を破られない手段についてよほどの考案をこらした。明治中期から今日にわたるところの官僚主義の精神はかくして生れて來たのである。所が腐敗しきつた政黨が、またそれを打開しやうとはせずに、却つて官僚人の御機嫌を取り結んで甘い汁をすはうとしたので、現代のわが國に見るやうな、停滯と混亂の狀態は、その多年の內訌の膿じるが、弱い吐け口を見出して突出したものだと見るのが至當なやうである。

なるほど、明治大正をかぞへて見れば、當年の新時代ももう五十七年の老境に入つて居る。人間の五十七年はすべての生理機能が硬化し始める老境である。頹齡の入口である。

さうした老人達によつて統治されて居る現代の日本が、陰鬱で混亂して、すべてに行き詰るのは決して不思議な運命ではない。時代はどうしても、新解決を要求して居るのである。

思へ、遷都以來五十七年の帝都であつた東京市は、自分で自分の機能が老衰したことをつくづくとさとり、更に新らしいものとして更生するために、自分から自己を煉獄の火に焚いた。われ等は無情の東京にすらもかへり見ねばならぬ。

今攝政宮の御婚儀において、われ等はほのかながらに、青年日本の新らしい黎明を象徴するのである。二千五百年の日本は、これまでも老いんとして幾度か更生した。明治維新の大業は青年の明治天皇と、青年の各藩俊才の活力によつて成し遂げられた。われ等は現代においてもわが若い民衆達の世界がほのぼのと、面前にひらけゆく悦びを敏感するのである、時代はすべて新たになつた。古い人間の力がこの運命のくびきをどうしやうといふのだ。「過去の知識が、なるほど何ものかを新しい知識に注入するかも知れぬ。けれども新しい民衆の新しい生命の爲には、それの一切すらも避けねばならぬ」と、メエテルリンクが「普通選擧」論で說いた眞理はこゝにおいて正しい。然り、時代は青年の兩性のみが、一切の責任と幸福と、艱難を、老朽ちた前代の老人から享けついで、その解決の營みに從事すべき時代になつたのである。過去の一切に耳を傾けずに、兩性青年達が、自己の世界を創造すべき時代が今や來たのだ。

ラとアの二政治宗

ラシアのソビエツト政府の開祖であつた、ころの、ニコライ・シエニン氏が死んだ。文字通り「父母を失つた」やうな、ラシア國民の悲しみが新聞紙上から消えない中に、引續いて、アメリカの前々大頭領であつたウツトロオ・ウヰルソン氏の訃が報道された。惡魔は必ず道連れをつれて來るといふのはこの事であらう。そしてこの東西兩半球の二人の人格と事業を對照して考へることは、われ等にとつて深い興感をそゝるものでなければならぬ。二人は同じく、世界大戰を機線として、世界の面前に躍り出して來た二つの花形である。そして二人の病氣が、强度の神經衰弱に歸因して居たことを、二人の世界人類に對する情熱が、どんなに二人の肉體を蝕ばむだかを思ふていたましさを深くする。けれども、われ等がより以上に、殊に現代世界史の鐵板上に、いつまでも二人の姓名を記錄しやうとするのは、二人が、人道と民衆利福の上に最も時宜性をもち、最も永遠性をもつた人類的眞理を將來の世界に向つて遺産したことにある。ロイド・ジョオジが、定義のないオポチユストに終始し、クレマンソウや、ムッソリニが、舊式な國家主義に固執し國家觀の境域にのみ彷徨した時

代にあつて、レエニン氏が早くも祖國ラシアの惱みを解決する爲に、——といふよりも、むしろ世界のプロレタリヤの爲に、あの勞働政府の世界を、化石した舊ラシアの基礎の上に押し立てたといふこと、またウヰルソン氏が戰爭の上に高く超越して、長く忘れられた人類精神の復活を取り戻しに獅子吼したことといふことは、世界民衆史の上に、永遠に記憶すべき偉大な新記錄を作つたものでなければならない。理想を持つ近代政治家とは正にかくの如きものでなければならない。有限の世に生きて、永遠の理想を拓くものこそその人である。

たゞ正しい理想だけを執して、それを實行にうつす强固な意志を持たないウヰルソン氏が、失意に終つた境地がこゝにある。理想を實行する鐵の如き意志、神の如き實地的機能の具有されたこと、これがレエニン氏を不朽にする特質である。そこにウヰルソン氏が近代型を暗示し、レエニン氏が、來るべき時代の人類型を象徴する。

神社崇敬と漢學

淸浦首相は、いわゆる民衆に行はれる危險思想をためなをす方法といふ、貴族院の一員の質問に對して、神社崇敬の信念を盛んにさすると答へた。それも一つは、祖先崇敬の精神をかき起す爲であると答へた。そういへば、政友本黨の床次氏も現內相である水野氏も、みな神社崇敬をもつて、有力な危險思想をはらひ淸める守護神と主張する人々である。神道が宗教であるか否かは、學者間にもすでに定說がある。あまりに立入つた議論をする自由は、この問題について與へられてないが、氏等は果して敎育上における、信仰、道德、思想の獨立性と交涉を、どんな風に思惟して居るのか。それからが知りたい。いなそれよりも、凡ての主義の提唱者ほど、その信仰に忠實であり、純眞なものはない。然らば氏等はどんな祖先を崇拜しどんな神社を崇敬するが故に、そんな時代傾向と、民衆の意志に背反した社會的地位に居るのであるか。その上になを、氏等は、神社を崇拜し、祖先を崇拜する——いわゆる淳風美俗を實踐した模範なるものを、どんな風にして示し得るといふのであるか。また貴院議員副島氏と、文相江木氏は、國民精神の復活の爲には、漢學を盛んにする外に方法がないと斷論した。「漢」とは一體どこの國をさすのであるか。西洋から來る學問が惡いとて、支那の學問でそれを防がうとするのは、借物をもつて借物を笑ふのではないか。なつて居らん。われ等の理想は、歐米でもない、支那でもない。たゞ東西五千年の文化をたゞ大膽に遠慮なく採り入れて、日本の生活素の充分な滋養とし、そこから獨立した新日本の文化を新たに打開する一事にある。江木氏は共に新興日本を語るに足りない。

近代女性に對する五つの觀察

一　感受性
二　スタイル
三　顔
四　言葉
五　思慮

（一）女の藝術的感受性について

川路柳虹

女といふものは感受性の強いものとされてゐる。感情的なこと、感覺的なことに於て男よりも優つてゐるとされてゐる。智力や意志については男が優り感情に於て女が優ると見るのが古來からの一般の女に對する見解である。

それは無論生理的にまた心理的にさういふ根據はあり、さういふ向にあることは眞理である。けれども私は藝術に對する女性の感受性に對してはこれだけの根據のみではなほ且つ律し去れない複雜なものがまだあるやうに考へられる。

いふ迄もなく藝術といふものは（廣く文學をも含めて）いつも感受さるゝ對象であり、感受する力によつて理解されてゆ

くものである。鑑賞とは先づ何より藝術を感受することから發足し、そこに味はふ能力が生れてくる。味ふといふことは無感覺では出來ない仕事である。それ故感受性の强い人が藝術を味ふ上に於ては有力な一つの資格をもつといふことは言へる。ところで感受性の强い女性は藝術を味ふといふことに於て男性に優つたものであると言ひえやうか。

從來西洋の女性（勿論敎養ある智識階級の女性だが）は一般に藝術の愛好者乃至鑑賞者として許されてきてゐる。夫が仕事に沒頭して疲れてきた頭を慰めるために妻君が自分の讀んだ小說の話をしたり、或は劇の話をしたりするやうなことは西洋の一般家庭に於ける風習で、藝術的敎養は他の智的敎養と並行して、といふより寧ろそれ以上に女性の任務と看做されてゐるやうだ。展覽會が始まればその觀衆の過半は女性であり、音樂會、舞踏、芝居みな女性の觀衆に大半を奪はれる。書物にしたところが女の讀者を多數にもつものほど流行的書物となしうる。かくの如く女性の藝術に對する愛は旺んである。藝術の愛護者は女性であるやうである。けれども多數の女性に愛さるゝといふやうな藝術を探つてみるとそれが必ずしも立派なものであるとは言へない場合が多い。即ち女性の「好むもの」といふものには何か女性共通の素質があつてさういふものが女性の感受性を最も强く刺戟するものであるらしいのである。これは色々の例證を擧げてもつと深く說明してゆかなければ正しい結論を作ることは出來ないことで、今は與へられた紙數よりないまゝほんの概說に止めて置くが、近き例をとつて最近の日本の文學で有島武郎氏の作品や倉田百三氏の作品、又賀川豐彦氏のかゝれたものなどが女性の讀者を非常に多くもつといふやうな事實から考へてみても、そこに何か他の人々の作品よりも多く女性を惹きつける要素をもつてゐるかといふことを考へてみたい。勿論有島氏にしろ倉田氏にしろ女性のためにかいたといふやうな作家ではない。ただこれらの人々に共通な要素は第一その倫理觀の感情的であること、理智的批判は豐富であり乍らその理論の根柢に感情的な要素を多分に含むこと、戀愛の純性を至上に考へてゐること等は作品そのものゝ素質に差はあり乍ら共通に考へられることで、有島氏の作品の一々が深い人道的な熱意と共に純粹な感傷をもつ點、倉田氏の作品の戀愛の純性に徹した感情の世界を至上に認めたり、またその人生觀に於て肉慾を否定して感情としての愛のみを認めたりするやうなこと、一言にしていふと、事實そのものを愛さうとするより感情によつて受け入られる世界を理想としてそこへ達する傾向を示

して居る點の如き共に多くの女性の欣喜を享けてゐる個處のやうに思ふ。即ちそれは必ずしも作品の容態として所謂女性的といふ如き纖弱なものではない。女性的なものに對する愛は勿論多くの女性にある。纖弱可憐、夢幻的な要素を含む藝術は一般女性の愛好するものである。けれどもそれらの要素が何かしら女性の全體を動かすためには尠くとも一種の感情の合理化が必要なのである。感情の純粋性を尊重し、そこに生くることを至上と考へるやうな強い熱意――それが女性に共通な一つの欲求りないやうに思はれる。涙のなく、同情のない世界は女性の厭ふ處である。女性の世界に涙や同情を道德とする世界たらしめたいのである。つまり戀愛中心の思想の如きが女性一般に迎へらるゝのもそのためで、それを肯定したい希望は凡ての女性にある。それ故無秩序な感情の世界はまた女性の忌む處である。ホウイットマンはミユツセのやうには女に好かれない詩人である。それは同じ浪漫的な感情の世界でも前者が無秩序な感情を肯定してゐるに反し後者の方がより多く合理的に多感的な要素を含むからである。涙のない樂天觀を女性は忌む。淸濁併せ吞むなどいふことは女性の好まぬ處である。即ちこれが感情の倫理化合理化が女に共通する要素である所以である。

可憐なもの夢幻的なものに對する愛ももとはそれが交り氣のない世界、純粋の世界をもつからである。しかもそれが女性の憧憬となりうる種の力をもつためにはつとめて女の心理を甘やかし感覺をそゝるものであることを要する。これを突きつめてといふと女性の藝術に對する愛は旺んだが、その鑑賞に際しては決して嚴正な批評的態度が採れないといふことである。そして細かい全體的な鑑賞の努力が困難なことである。好きと嫌ひにはわけられても、善いと惡いとに判斷がしかねる。好きなものが善いといふやうなことは女性から聞かされる批評の一つである。

これらのことから綜合して考へると、女性の感受性は豐富だが絶對に男子より鋭敏であるとも强烈であるとも言ひかねる。云はゞ部分的には鋭敏であり强烈ではあるが、凡てを一樣に感受しようとする態度は困難なのである。一般の例にとつて見ても、女が女を批判する場合に於て男子の眼の及ばぬ微細な點を抉り出すことがある。しかしそれは一人の女が他の一人の女の或る一部をのみ見、感じた批評で他の部分は全く沒却されてゐる場合が多い。女の手でかゝれた小說の心理描寫が往々一部の女性心理の解剖に努めて作全體の焦點を忘れ勝ちになる如きその弊の一例であらう。即ち女の好くもの

に對しては極度の愛をさゝげる。しかしこれに反する部分は全く默殺する。作品を味ふにしても手法の餘り細かい味などを除り顧みない。女に一番乏しいものは正しい批判力でそれはつまり非感情的な要素を一番の根據にせねばならぬ點に於て女性の不得意となすところらしい。女の作家は多いが女の批評家は古來から甚尠いのもこの理であらう。エレン・ケイ女史の如き非凡な評論家にしてなほその說くところは戀愛中心の感情本位說を離れられないでゐるに見てもわからう。

女性も時代と共に變化する。而して今日迄の女性が進化してきた唯一の努力はその智的方面の精進にある。フエミニズムの運動は全く女性をその惡い環境から解放さして男子と同じ地位に置くために先づ何より缺乏した智的教養を深めてゆくことに努力したことであつた。智識の向上は批判力の進步を來す。女性的趣味が今日、甘い、安價なものゝやうに思はれてゐるのは女性の趣味性に對する批判力の乏しい爲めによる。夫れ故根本的に性的差別に離れがたいとしても、女性の感受性の部分的に陷り易い事をつとめて改める努力もやはり智的向上に俟つより仕方がない。感情は智性に洗はれるほど尊い。高く正しい理智をその惡い感傷から救ひうることになららうと思ふ。

（二）往來で見る此頃の女のスタイル

宇野浩二

私は電車に乘つてゐる時、窓の外を走つてゐる町の商店を一々目で追ひながら、昔から――少なくとも明治以前にも――あつた商賣屋と、新奇に――つまり西洋諸國と交際してから――現はれたものとを、比べて數へて見ることがある。子供のやうな話である。靴屋、時計屋、金物屋、唐物屋、帽子屋、吳服屋、寫眞屋、カフエー、本屋、家具屋、宿屋、硝子屋、銀行、――とこれは出鱈目に擧げて見たのであるが、試みに諸君の覺えいある町の軒並の商店を思出して見ても、先

づこれと大差ないだらうと思ふ。すると、半分以上は私の所謂背なかつた商賣屋であるのに氣がつくだらう。子供に聞かせるやうな馬鹿々々しい話であるが、私自身まつたく子供のやうに、こんなことに感心することがあるのである。

町の商賣屋でさへそれ程新奇になつてゐるのである、まして肝腎の人間の風俗が新奇にならない譯には行かないだらう。これも矢張り町を歩いてゐる時、私はふと往來の若い婦人たちの風俗に目をとめて、これはいつの間にか着物の仕立方なども以前とは違つて來たのだらうか、とさへ思はせられることが屢々ある。無論、そんな筈はないのであらうが、言ふ迄もなくそれは着てゐる人たちの身體の恰好が變り、歩き方、手の振り方が變り、着物の着方が變つたからであらうか。例へば當節の年少の婦人たちは、以前と違つて、餘り下前を折り返して着物を着てゐる人が少ないやうに思はれるが、それでゐて、昔の婦人たちよりも、その歩いてゐる樣子を見ると、却つて反對の效果を擧げてゐる、即ち如何にも活潑に裾がさばかれて、派手な模樣の裏地が、足もとで磯邊の浪のやうに礙つて見える。甚だ見事である。言ふ迄もなく、それは當節の婦人たちが腰紐をずつと高く締めるためと、又一つには、昔と違つて、足を外輪に蹴出して、大股に歩くやうになつたからであらう、それは足を長く見せ、自然背を高く見せる。私はことごとく贊成である。

いつ頃からのことであるか、はつきり覺えないが、何でも男の學生たちにセルの行燈袴がはやり出して、而もそれをなるべく長目に、足首の見えぬほどにぞろりと穿いて、さういふ人たちに限つて、好んで草履が用ゐられた時分のことであつた、その時分、年の幼い女の學生たちの中に、前記男の行燈袴とは反對に、なるべく短い袴を穿いて、袴の下に出來るだけ多く靴下の足を見せるやうな風俗が現れた。現今は殆どそれが一般になつて、隨分大きな女學生までさういふ好みになつたやうだが、あの恰好も大變よろしい、あれも亦前記腰紐を高く締めるのとは別の方法で、背を高く見せる方法の一に違ひない。多分、學校行にはあゝいふ短い袴を穿いた娘たちが、同時に、稍々大きくなつてからとか、或は家庭にあつて外に出る時とかには、あんな風に腰紐を高く締めて、長い裾下の裾を活潑にさばいて歩く人たちであらう。以前は、娘たちが、例へば電車や汽車などに乘つてゐる場合、それの腰掛に掛けてゐるのを見ると、腰掛の上に坐つてゐるのなどは話の外として、大抵腰一ぱいに深く腰掛けて、膝を直角以上に折り曲げて、如何にもつゝましやかに又窮屈さうに見えた

ものであるが、今は反對に、なるべく淺く腰掛に腰掛けて、如何にも樂々と、膝も鈍角に、への字型に曲げてゐる、中には足を組合はしてゐるのさへ見受けられる甚だ快活である。

さうはいふものゝ、私は又一方古風な、言ふと、なるべく町の片隅を、恥かしさうに、足を内輪にして、ちよこ〳〵と小股に歩く婦人たちにも、大いに同情を持つてゐるものである。さういふ婦人たちが、家に歸ると、早速外出の着物を脱いで、それを女中任せにすることさへいとほしさうに、自分で一枚一枚敷茣蓙の上でたゝむのを、それを最も貴重な、壞れ易いものにでも觸るやうな手附で、眞に心から愛撫するやうな恰好で、一つの裾、一つの袂の端にさへ、その撫でる手を行渡らして、皺寄すること、折れることを心配しながら、一つ一つ簞笥にしまふ心持を、この上なく可憐に思ふものである。だが、これからの時代は、そんな風にして、病的にさへ見える仕方で、着物などにこだはる風は次第になくなるだらう。當節の少女たちが着物をしまふには、がちやんと音のする觀音開きの洋服簞笥の扉を開けて、その前で兵隊のやうに無雜作に脱いだ後から、後からそれ等を吊鉤か何かに手早く引掛けるだらう、そしてがちやん〳〵扉を閉めると、その瞬間もはや今しまつた着物のことなど忘れるだらう。もつとも、これは當節流行の洋服の場合である。

洋服といへば、これからは當然婦人たちの間に、一日一日と流行して行くことは疑ひない。先に言つた、今の若い婦人たちの着物の着方は、即ち從來の日本の婦人服を、西洋流に着こなしてゐるものと見ることが出來る。今は、電車に乘つても、汽車に乘つても、男には和裝より洋裝の人の方が遙かに多くなつたが、今に婦人たちもさうなるだらう、現に女の子供たちの間では、和裝よりも洋裝の方が多い位に見受けられる、さういふ彼女等が大きくなつたら――言ふ迄もなく、彼女等は洋服と共に大きくなるに違ひない。

考へて見ると、最早や日本の着物は、質から言つても、柄から言つても、織方から言つても、明らかに行き詰まつてゐる、無論、その道の商人たちはそれ〳〵工夫をして、一日も改善を怠らずに研究してゐるやうだが、その成績は何處か病的で、頽廢的で、飯櫃である、最早やこれ以上變りやうのないところ迄行き詰まつてゐるやうに見える、そして、それを着る人たちの方でも、今は持て餘し出したやうに見える。そこへ行くと、洋服は、雨か風か、今は未開の世界である。どんな工風でも、趣考でも凝らすことが出來る。而もさういふ婦人たちの考へ方も、歩き方も、手の振り方も、ことごとく

洋服流になつて來た。私の或友人の説に、當節は一つの戀愛の場面にしても、昔のやうに袖を噛んだり、袂を弄つたりするやうなことが廢れて、愛する者とは何の惡びれるところもなく、道のまん中を手を引き合つて散歩するやうになり、又愛を現す時には忽ち西洋流に男の胸に顔を埋める仕草をするやうになつた。さうなると、當然日本着物や、日本髪などは不適當で、不自由だといふのである。なる程さうであらう、と私も思ふ。

初に、私は電車の中から見た町の今昔の變り方に就いて述べたが、實際それから思ふと、人間の風俗は一歩も二歩も變化の進行が遲かつたと云ふことが出來るだらう。大いに變つた方がいゝ。

しかし、最後に私は、そんな事、君自身はどちらがいゝのか、どちらでもいゝでは分らないぢやないか、白か黒か、どちらかに定めなければいけない、と詰られたら、――では、私は言はなければならない、即ち正直なところ、私の好き嫌ひは四分六分にわかれる、つまり四分の好きは新流の方へで、六分の好きは舊派の方へである。これは多分、私自身が男の舊派に屬するからであらう。(一一・一)

(三) 明治大正の女性美の推移

鏑木清方

安永年間に出た「當世女風俗通」といふ本に美人の六風といふのがある。其の内に温風といふのにぼんやりふうと註して曰く「温はやはらかと訓て先づ温さうなる風なり、其の容中肉に肥り目は細く背ちと下りぎみに、丈高からず低からず、顔は丸の方へ近し」とある。麗風といふのにはつんとしたふうと註して「麗は烈しと訓て温風とはうらはらなり背釣り瘦形にて丈高く顔は長き方なり、ちとづきのないといふ風なり、傾城にありて尤も佳なり」また威風、のつしりとした

ふうとして威はおどすと訓ですつと押出したところで恫りさせる風なり、誰怖いと思はぬ樣子勇に當れり、其の容首筋ちとぬき出でて、胴短く裾長に腰細く小股切れ上り、背はちと屈みめにて腰より末は反りたる樣に見ゆるなり、のつしりとは尻を伸すの意、そいしたてのよいといふなり」跡は略すが安永といへば今からザツと百五十年ばかり昔のこと、一世紀からたつと人の顏には變りがなくとも見る人の好尚には變化がある、昔に一向持てなかつた顏立が今の流行となる例も珍らしくない。

明治時代の風俗が男子には斷髮、廢刀といふ革命的な變りやうがあつたけれど、女性の方はさしたる變動もなく德川末期の風俗の延長であつたので、百年も前のこの「女風俗通」の顏立は明治になつても相應に巾を利かして居た、溫風といふのは今世人の知つてゐる人に例を求めれば、川田芳子などがそれであらう。厲風といふのは初瀨浪子といふところだらうが、さて威風といふのは見當らない。二十年ばかり前の源之助の切られお富などが先づ其の人であらうか。女性美を補ふその風俗は明治にあつては江戸趣味を基調として作られてゐた。江戸趣味の解釋はこゝに説く餘地を有たぬけれど、それは江戸もずつと末期のデカタン趣味で英泉、國貞、國芳の浮世繪、爲永一流の人情本、默阿彌の世話物の一部が端的にそのいかなるものなるかを物語つてゐる。藍辨慶に黑繻子の襟をかけた素袷、白縮緬のゆまき、あるひは鳴海絞の單衣に黑繻子と八反の晝夜帶しどけなく、達磨返しか櫛卷の女、前にあつた威風といふのに屬するのが、毒婦型といふので人氣があつた。併し明治初年の有名な高橋おでんは色白な肥り肉だつたといふ、毒婦といつても月夜に青白い人魚のやうな凄艶なのもあれば、燕脂の滲んだやうな赤い毒の花もあつたのだらう、おでんやお百はそれであつた。權妻風といふ一種の型は明治の中期に目立つて見える、大きい丸髷に水色の手柄、八分玉の珊瑚の簪といふ好みで、お召の裾長くゴク／＼いふ黑縮緬の一つ紋乃至三つ紋の羽織、紋はなるだけ小さいのが粹だと悦ばれた。束髮の行はれたのも古いことだが今日顧みて尙ほ美しい印象を止むるものはない、夜會結びがあまり若くない婦人に寂びた品を與へたことを記すれば足りる。小學生の桃割れ、娘義太夫の銀杏返しも美しかつた。

明治の美人型は輪廓の少しも崩れない細面を尊重して、目鼻立の整つたやゝ人形型の顏立を推賞した傾きがある、併し一葉女史はその名著「たけくらべ」に「一つ／＼とりたてゝは美人の鑑に遠けれど人が見る目の愛嬌溢れて、身の擧動の活

くしたるは快きものなり」と一家の美人觀を示してゐる。

大正期にはいつてからは、たとへ在來の美人型からは外れて、輪廓に多少の缺點があつても表情や動作によつて、めざましい美しさを示すやうなのが認められるやうになつて來た。靜から動へ、單純から複雜へこれが明治から大正へかけて變つて來た美人觀賞の推移である。

細面や丸顏を美しいと見た時期は長かつた、勿論今でもそれに美を認むることは變りはしないが、角顏からも美を見出して軒輊なきものとしたのは大正期の新らしい解釋によるもので、いかに眼がよからうが唇が美しからうが、顎骨が張つてゐる顏は明治美人の月旦からは省かれてゐた、それが今日では歐洲や米國の美人をも別に異國の顏の持主とは思はぬやうになつて來て、顎骨の尖つた眼の大きい異人系の顏立が、寧ろ表情に豐かなところから多く迎へられるやうになつた。

半襟の巾を狹く出して胸の皮膚を現はす風俗は二三年來流行して來た。依つて來るところ歐風模倣にあること勿論だが、一面從來の美を顏にのみ求めてゐた美人觀から、肉體の美を重視するに至つた一端だといふ解釋も成り立つ。女性美は元來顏にのみ止まるものではないのに、昔は人前に行水もし、湯屋では混浴が常に行はれて怪しまなかつたのに、それは一切樂屋のことゝして身じまひをしてからは肌を示すことを醜態とした、併しながら夏はうすものを直に着たり、ちよつとした身じろぎにも肌を現はすことはあつても、積極的に曲線の美を示さうとした機會は全くない。明治期に歐洲から傳へられた海水浴は、歌麿も海女をかりて現はした姿を人の前に示すに至つたけれども恐らく進んで自分の肉體美を誇る爲めに渚へ立つた女性は一人も無かつたらう、始めは健康を保つ爲めの潮湯治として溫泉に浸る心で衣を濱に脱いだものであらう、かくて游泳に興を覺ゆるやうになり、大正期には海水帽にも、海水着にも美術的な裝ひを凝らすやうになつて、始めは赤や青の段々染のメリヤスで男のシャツのやうに胸をつゝみ、肱にまで及んでゐたのが、肩から豐かな二の腕を露出し、乳房の隆起の央に近く肉體を示すやうになつたのは勿論水を切る實用上の要求からではあるが、強烈な白日の下に肉體美を輝かして、潮浴びつゝ自由な天地に思ふまゝに生を歡ぶ態は明治にあつては思ひも及ばぬ女性美の發露である。

輕快な洋裝もまた今日以後の女性によりてその美を示すに至るものと思ふが、明治傳來の風俗にも優婉棄て難きものも尠くない。

艶やかな丸髷に映る液體のやうな半透明な鼈甲の櫛笄、瑠

縮緬の着物のシツトりした裾や袂、靜かな歩みにつれて匂ひ零れる友染の長襦袢、これを東京の代表的美しさと見れば、髪の飾りは百花の亂れ咲くに似て京染の振袖、厚板の帶、金扇をかざして燈火に舞ふ京舞子は西の都の美を代表するものであらう。肉體の有つ曲線を損はざるに於てこそ洋風は美しけれ、ちりめんを有つ國のきものの美はまた世界の何處に求められよう。

（四）趣味から見た近代女性の言葉

久米正雄

女の言葉に就いて、何か感想を書けと云ふ注文である。が、言葉と云ふものは、衣服や容貌と違ひ、人爲的に選擇とか化粧とか、割合に出來ないものである。それは勿論、美しい言葉遣ひを習得するとか、訛を矯正するとか、語調を音樂的に韻律づけるとか、いろ／＼な技巧は、幾らか其人の心掛に依つて、練磨出來るであらう。が、併しさう云ふ人爲的な、技巧的な要素は、言葉の本來の目的上、却つて邪魔にこそなれ、決して美と實用とを共に助ける事にはならない。──つまり現在の言葉に、其人の人格と教育の自[illegible]の結果から、生じ來つた動かすべからざるもので、動かしてはならないものである。

さう云ふ意味で、現在行はれてゐる女性の言葉の、いづれの斷片にだつて、私は嘗つて注文を持つた事がない。私に取つては女性の言葉は、唯一絶對のものであり、至上の音樂であり、神そのものに直屬するものである。

女性の言葉と云ふものは、美と實用とをそれ自身兼ねてゐるものである。恐らく世界中の神の作品で、これほど美と實用とを巧みに兼ね備へたものはあるまい。

そして若し女の言葉で、一番非美で非實用向きのものと云へば、可憐な日本流社交の挨拶、それが女性同志だつた場合

に、最たるものを發揮するだけであらう。かう云ふ場合私は彼女らの吐くものを、言葉とは認めない。それは徒らなる口の開閉であり、聲帶の動搖であり、壓搾された一種の呼吸である。

それ以外、女性の言葉は、言葉の形をなさぬ、叫びに類したものであり、一個の藝術品である。否、女性の言葉としては、短くて叫びに類すれば類する程、益々よさを發揮する。斷片的で、間投詞的で無意味で、あればある程、魅力がある。「まア！」「あら！」の如きは、彼女らの懐劍である。此の懐劍一つの使ひやうで、千變萬化、どんな長い臺詞でも生きる。どんな乾燥な話でも生きる。「あの……」「……ねえ。」の如きですら、矢つ張り本來の使ひ道は、女性のものであらう。「あのウ、ねエえ、先生。」の一言で、「潮風」の中の女學生は、女人好きの里見弴を魅了した。その、あのウ、ねエえ、センセーエ、の中に、千萬無量の色氣と、無邪氣とを兼備してゐたからである。

「厭。」「厭よ。」「厭だわ。」の如き、彼女らの一種の短銃である。此の使ひやう一つで護身にもなり、威嚇にもなり、口說にもなる。凡そ女性の使ふ言葉にして、此の位數多く使はれ、用途の廣いものはあるまい。或種の女の如きは、「あら厭だわ。」とか、「厭な人ね、ホントに」とか、「厭」のヴアリエーシヨン一つで、他の言葉は少しも知らなくと立派に人生が通つて行けるから大したものである。そして時には、承諾の場合ですら、それを逆に濫用する。世の男性に取つて、此言葉ほど苦勞させるものはあるまい。それと對をなすものは、或ひは「いゝわよ。」「よくつてよ。」であるかも知れない。

總じて女性の言葉で、私は不良めいたものが、恐く好きである。不良めけばめく程、實感が豐富で、閃發的で、餘韻が多くて、――一言に云へば藝術的だからである。

「トテモ、ステキね。」の如きでさへ、云ふに云はれぬ妙味がある。

況んや、所謂上品な言葉を、不良めかして投げやりに使はれると、益々以て好きにならざるを得ない。「……遊ばせ」なぞを、ゆつくり使はれた日に、一遍で願ひ下がつて了ふ氣になるが、それが短くつまつて、「アツセ」と云ふやうな使ひ方でもされて見給へ、どんな事でもアツス氣になるではないか。

要するに不良と云ふことは、近代女性の特長で潑剌と云ふ言葉の代名詞だからである。

長田幹彦君の家庭小說には、きつと若い女が、「あたくし」

と云つてゐる。此頃の東京生れの士女なら、多くさうなのださうである。私は詳しくは知らないが、確に女性の言葉としては、ワと響かせない所なぞは、妙味の一つであらう。私は女性が殊に、「私？」と聞き返す時の、あの「私」が好きである。

京阪地方の女性の言葉の優しさ美しさは既に定評のある事だが、私に云はせれば、あれは一種の遊蕩美である。あれを享樂するのは、一種のデカダン、それも舊式のデカダンである。

要するに出來るだけ短い中に、出來るだけ實感の溢れた、間投詞的な言葉こそ、女性の言葉と云ふ音樂の、キイノートでなければならない。

（五）日本女性の理性的でないことは日本男性の理性的でないことを證する

秋田雨雀

嚴密な意味でいへば、私達男性は女性に對して非難の矢を向けることは出來ない筈である、なぜなれば、私達男性は女性に對して明かに壓迫階級に屬し、支配階級に屬してゐるからである。何んな言葉を持つて來てもこの事實は否定することは出來まいと思ふ。可なり聰明な思想家と言はれる人でも、何かの大きな出來事があるたびに自己を說明したり、辯護したりする場合に、何時でも、その出來事に關係してゐる一二人の女性を無視したり、侮蔑したりしてゐる事實を多く見る。そしてそれが、男性の特權であるかのやうな口吻を平氣で洩してゐるのは、從來の地位や富を有して女性を買賣することを名譽だと思つてゐる種類の人達と少しも變りがないのである。それが戀愛上の三角關係を構成した場合などに一番多いやうだ。私は最近起つた二三の戀愛關係なぞを見てゐるが、やはりその事實が明瞭に現はれてゐる。男性はいつにで

も雄辯に自分を語つてゐるが。女性は何にも言つてゐない。いや言つてゐないのではなくて、言ふ機關もなければ、また言ふことも許されてゐないのだ。そして世間の女性もまたそれを平氣で容認してゐる。甚しきは、同性の不幸や苦痛を男性と一緒になつて一層深からしめてゐる例さへ度々見受けられる。

日本女性の最も理性的でない方面は何か――といへば、それも嚴密には男性及び男性本位の今日の社會の罪ではあるが、やはり戀愛及び性的方面であらうと思ふ。私などは多くの女性を知つてゐるとはいへない方の人間ではあるが、自分の知つてゐる範圍に就いて言つても、日本女性の戀愛及び性に關する自覺は實に貧弱なものであると思ふ。思想、藝術なぞに興味を持つて、其方面に進んでゐると言はれてゐる女性が一度戀愛及び性の問題に觸れると、全く平素の態度を失つてしまつて、思想も藝術もそつちのけにして、全く自己の存在を沒却してしまつた例は殆んど擧げきれないほどだ。戀愛や性は重大である。然し戀愛や性は自己の生活に統一されてこそ意味がある。日本の女性は戀愛や性を支配しないで、反對に支配されてゐる。支配、被支配の言葉も正確に當つてはゐない。女性は性のために眩惑され、混亂されてゐる。それは要するに、日本の女性に生活がないからである。そして生活のないといふことは、ないのではなくて、實に彼等は與へられてゐないからである。今日の家庭、今日の學校、今日の社會は今日の女性に何ういふ戀愛及び性の敎戒若しくは忠告を與へてゐるか？そして彼等の戀愛及び性に關する誤算や過失に對して何んな殘酷な刑罰を與へてゐるか？それを考へると、私達はもはや何事も言ふことが出來なくなる。

私はたゞ女性に「よく見よ、そして戰へ！」といふ警告を與へる前に私達自身の生活を三省しなければならない

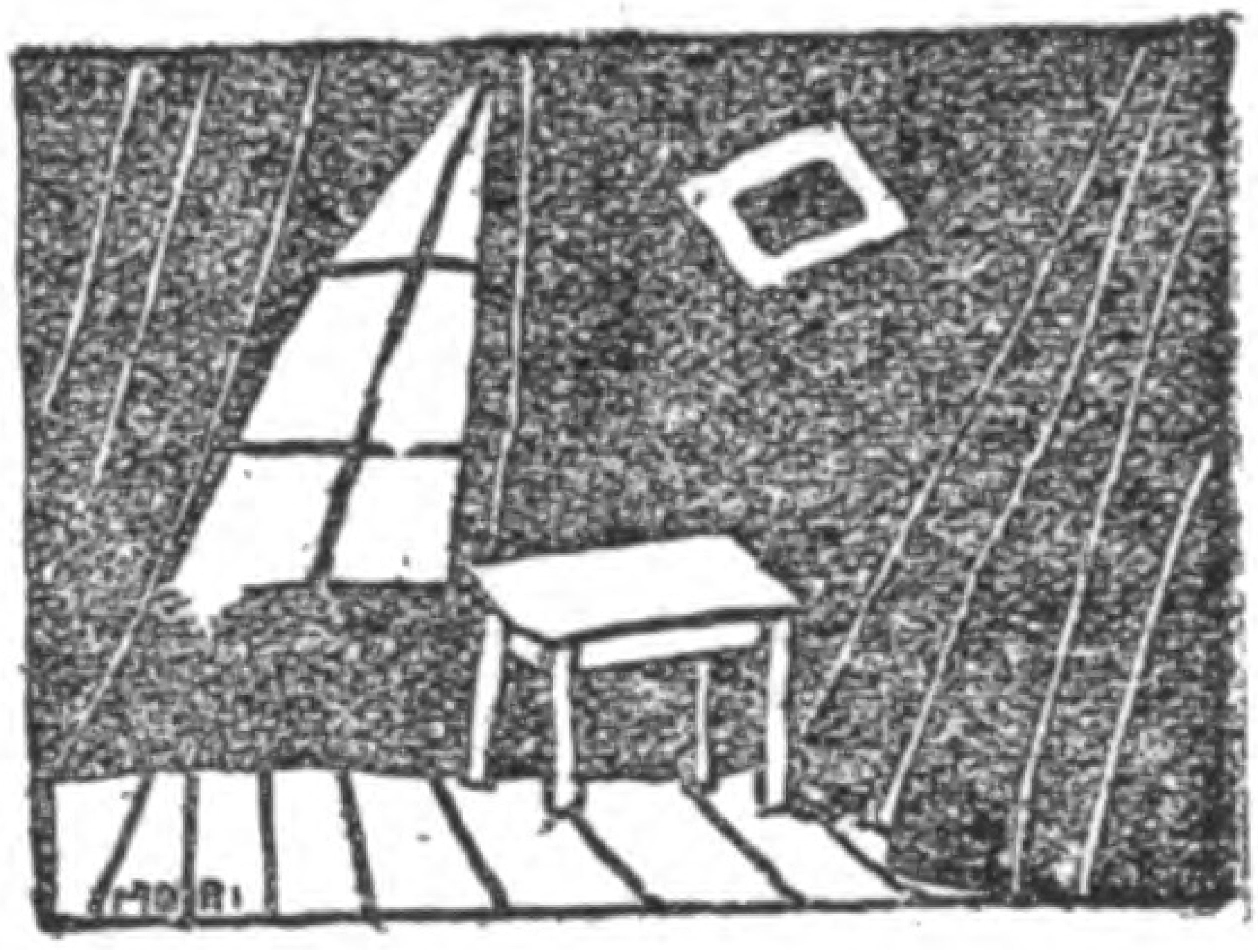
次ぎに日本女性の理性的でないことは、社會的でないと言ふ點である。これも前に述べたやうに、その大部分は男性自身の罪ではあるが、現實的に見た日本女性の最も大きな缺點の一つと言つていゝ。社交的といふことは、社會的であることを意味しない。日本の女性は社交的にはなりつゝあるかも知れないが、眞の意味での社會的には發達してゐない。智識的になりつゝある。然しながら、理性的にはなつてゐない。

私の知つてゐる一老婦人が、橘宗一殺害事件の當時に、今の新しい婦人達が政治運動は奔走なぞしてゐるが、なぜあの慘虐事件に女性として、母としての運動を起さないのだらうと憤慨してゐたのを聞いた。橘宗一の殺害事件は決して單に女性に對してのみの問題ではないが、一個の新しい女性思想家と、全く別の世界に屬してゐる一少年のために女として母として勇敢に立つべきであることは、老婦人の言葉を待つまでもないないことだと思ふ。それに對して何れだけの運動があつたか、不幸にして私はそれを聞かない、聞かないばかりではなく、反對に、人類の敵であり、國民將來の仇敵である殺害者の助命運動に喜んで捺印した婦人さへあつたといふことを聞いた。日本の女性は女性自身の運命を知らない、また知らうともしてゐないことは、この一事をもつても知れる。人類としての女性民族としての女性。乃至女性としての女性の自覺は少しもない。

　ある種類の女性は政治を云々する。ある種類の女性は社會事業を云々する。またある種類の女性は藝術を云々する。然しそれは要するに、男性の與へたところもので男性の社會の一つの殘滓に過ぎない。女性は女性自身の創造を持たなければならない。理性のないところには眞の創造のある筈がない。然し女性に理性のないことは、パラドックスのやうだが、男性自身の理性のないことを證明してゐる。

（一九二四、一、三一）





伯林帳

在伯林 益田甫

一、マーク變動の話

ある口下宿のかみさんが、臺所の隅の椅子に腰をかけて、前掛けで顏を覆つて泣いてゐた。「おかみさん。何故そんなに泣くのです。何か悲しい事でも起つたのですかね。」と聞いてみた。するとおかみさんは泣き濡れた顏を上げて私をみ上げ乍ら、

「まア益田さん。聞いて下さいよ。こんなくやしい事つてがありませうか。」

と前置きをして泣きじやくりつゝ語り出した話と云ふのはかうだ。

彼女は去年の春まである町にレストランを經營してゐた。彼女は寡婦でしかも三人の女の子を抱へてゐる。亭主は五年前に病死してしまつて、さして多くも無い遺産を種に、レストランを買つて經營してみたのであつた。而し女手で三人の子まで抱へて料理店を經營して行く事はかなり困難な仕事だ店が繁昌すれば子供達に眼が屆かない。子供達に氣を配つてゐれば店の方に穴が開く。そこで彼女は思ひ切つて去年の春そのレストランを人に賣つてしまつた。その價格が一萬二千マークであつた。

ところがその前日彼女のレストランの近所に住んでゐる人に會つた所が、一萬二千マークで賣つたレストランを、今度は最近に一千萬マークに買ひ手がついて、受渡してしまつたと云ふ話を聞かされた。で彼女はそれが口惜しくて、神樣に

お恨みをのべてゐた處だと云つて、又聲を上げて泣き出した「まア考へて御覽なさい。一萬二千マークで賣つた店が、たつた一年の違ひで千倍近くの値で賣れたなんて。これが口惜しくなければ人間ではありません。もう一年私が我慢してゐれば、私は今百萬長者になれたんです。私は一度も神樣にさからつた事は無いのに、神樣は私をこんなめにばかりお會はせになるのです。」

さう云つてさめ〴〵と泣き出した。

此の話を日本にゐる日本人に話したら、誰も彼も下宿のおかみさんに同情するであらう。若し日本でそんな事があつたとしたら、又賣りをした人は不當利得とか何とか云ふ事になつて、お上の御厄介になるべき人間だ。處が伯林に住んでゐる私は、此の下宿のかみさんの泣きごとがあんまり馬鹿々々しいので、あぶなく噴出しさうになつてしまつた。

獨逸のマーク相場はそれ程不安定なのである。一年前の春一萬二千マークの價値であつたレストランが、一年後には一千萬マークに賣れたと云ふ事が、ちつとも不思議でない程にそれを口惜しがつて泣いたかみさんを笑ふ程に、たつた一年の間にマーク相場は、一千倍近くも下落してゐるのである。私が當地に到着した當時、二月の中旬には英貨一ポンド（日本金の十圓弱）を兩替すると、八萬マークばかり受取れたものだ。それが半年後の現在では、百八十萬マークも呉れる程下落をしてゐる。

勿論の事マーク相場が下落をすると、それにつれて總ての物價は騰貴する。獨逸國内では、自分の國の金の權威と云ふものをちつとも認めてゐない。例へば私が來た當座は電車賃が百五十マークであつたが、マークの下落と共に次第に騰貴して、現在では三千マークになつてゐる。外國の金を持つてゐて、その時々に兩替をしてゐる人に對しては、此の不安定な物價の騰貴もさして苦にはならないが、一般の獨逸人にとつては實に恐ろしい時代である。一日も安閑として金を握つてはゐられない。今日一仕事をして十萬マーク儲けて、やれ嬉しやと思つてゐると、もうその翌日はその十萬マークの金が、半分の價値しか持たなくなつてしまうと云ふ樣な有樣なのだ。さうかと云つて外國の金が手易く買へるかと云ふと外國の金を獨逸マークに兩替をするのは、到る處の兩替屋銀

行で、何時でも喜んで替へてくれるけれど、さて獨逸マークを外國金に兩替すると云ふ事は殆ど不可能の狀態である。聞く處によると、大きい會社や商店の取引は、內分の國の金ではお斷りださうだ。悲慘と云はうか何と云はうか、自國人が自國の金で取引を斷る。こんな事が今日までの歷史にあるだらうか。

大會社商店の重役などは、さうして外國金を手に入れる事が出來るから好いとして、さて下給の會社員や、店員や、勞働者などの窮狀は實に同情に餘りある。物價が日增しに騰貴するからと云つて、幾分の增給はあるだらうが、とてもマーク相場と比例した增給などはあらう筈がない。だから一般獨逸人は日增しに苦境に陷つて行くばかりだ。

自然と背に腹はかへられなくなつて來て、正當の事をしてゐたのでは顎が干上つてしまうので、不正を働く者が多くなつて來る。女は最も手近な金儲け法として淫賣を働く。伯林の新聞を見ると、毎日人殺しとか强盜とか云ふ記事が、家常茶飯の樣に書きたてられてゐる。少し人の出る街に行つてみると、晝間から帽子を深く被つて眼を光らせてゐるストラーセダーメ（當地では淫賣婦を StIas eDanic 町の女と云ふ）が横行してゐるのを見る。デーパートメントストーアの女賣子、其他の商店の女店員、女事務員、女工、甚だしきは小學校の女教員などまでも、半分淫賣の樣にして、夜になるとカフエーやレストランのテーブルに陣取つて、金箱を見つけやうとあせつてゐるのを見る。彼等、彼女等の主な敵手は外國人だ。獨逸人は大概さう云つた有樣で大した金を撒き散らす樣な餘裕がありつこはない。皆外國人をつまへて、好い御飯にありつかうと云ふのが目的なのである。何れ別項に書くつもりだが、外國人對手の下宿をしてゐる人達の惡化は、實に驚くべきものがある。

二三日前に買つた靴下が、たちまちにして倍になり、一プンドのパンの價が二三日買ひ後れした爲めに二プンドの價を拂はなければならない世の中だ。こんな恐ろしい事があるだらうか。これまで苦境に陷ると、道德など云ふもの〻權威は次第に薄くなつて行く。道德を兎や角云つてゐられる國民程幸福な國民は無いと、私は此處に來てつく〴〵感じさせられた。

二、佛白に對する感情

「佛蘭西人白耳義人との交通をお斷り」

音樂を聞き乍らカフエーの一杯も飲んで、好い氣持にならうとしてカフエーへ行く。入口をくゞらうとする、眞正面の入口の扉に此の紙札が禮々と貼りつけられてあるのを見る。私は此處に來た當座それを見ただけで、かなり不愉快な氣持にさせられてしまつて、すつかり幻滅を感じてしまつたものだ。憎み合ふ感情を露骨に見せつけられる時位不愉快なるは無い。カフエーと云ふカフエー、レストランと云ふレストラン、おそらく此の札の貼りつけて無い店は無い。時々普通の商店の入口にも此の札が貼つてある。有名な大デパートメントストーアの、ウエルトハイム、カウフハウス・デス・ウエステンス、テイトツ、ヤンドルフなでの入口にも貼つてある。

それからある二三の店では、ショーウヰンドウの硝子に各國の國旗を描いて、それぞれの國語で、例へば日本の國旗の側には片假名でニホンゴモハナシマスと書いてある樣に、各國語で店員が應接する意味を示してゐる處がある。處が佛蘭西の國旗の上には、わざ／＼×印を書いて、禮々しく消してあるのなども見た。

每日の新聞紙を見ると、必らず佛蘭西との交涉する項だとか佛蘭西人の獨逸に對する行動などが、特大の活字で第一面の先頭に掲げられてある。

どうして佛蘭西と獨逸とはかう仲が惡いのだらう。勿論獨逸にとつて佛蘭西は憎いには相違ない。世界戰爭には敗けるルール問題で又やつつけられる。重ね重ねの恨みはあるに違ひ無いが、獨逸人が佛蘭西を憎くむ感情は、決してそんな事の恨みだけでは無い。とても理性では判斷がつかない程、總てを超越した憎みの感情だ。

ある獨逸人の知人が私にかう話した。

「自分でもどうしてかう佛蘭西が憎くいのだかわからない。戰爭に敗けたり、ルール問題でやられたり、殘念には違ひ無いが、それだけの理由ぢやない。獨逸だつて曾つては佛蘭西を同じ樣にやつつけた歷史を持つてゐるのだから、それはお互同志だ。此の感情は私達獨逸人が、おぎやアと云つて此の世の中に生れ出た時から、先天的に持つてゐるものなのだ。

だから君達外國人にはとても判るまい。」

成程彼の云ふ通りだ。

それからもう一人他の知人と何かの話のついでに、私が巴里に滯在してゐた事を話すと、彼は早速私に問ひかけた。

「巴里は好い處だと思ひますか。」

「え丶、巴里も好い都ですね。」

と何の氣なしに答へると、彼は鼻先でふゝと笑つて、

「伯林とどつちが好きです。」と又問ひかけるのだ。「どつちも好いと思ひます。それ〴〵違つた好い處を持つてゐますね。」

私はさう答へた。すると彼は猶もしつこく、

「君の仕事の爲め、研究の爲めにはどつちが好いと思ひます。」と問ひかける。私は劇の研究が主な目的なので、その方面では何と云つても伯林の方が遙かに好いのだ、私の思つてゐる通りを云ふと、彼は待つてゐましたとばかりに、

「巴里なんかだめですよ。道樂者が遊び歩くのには好いでせうが。兎に角全く廢つぺらで、内容なんて云ふものはちつともありやしません。」と前書きをして、巴里は好く佛蘭西のすべてを代表してゐる。佛蘭西そのものが巴里と同じ事だとか巴里が佛蘭西の總てを語るものだとか云つて、一人で惡口を並べ出した。坊主が憎くけりや袈裟までも、の諺の通りで、佛蘭西と云ふと何から何まで憎くてたまらないのが獨逸人の感情だ。

こんな話も聞いた。戰爭前に獨逸を去つて戰爭後に故國に歸つたある獨逸人が、伯林に着くとすぐある煙草屋の店に這入つた。そして煙草を買つて歸りしなに、「アディユ(Adieu)＝さようならの意＝」と云ふと、煙草屋の亭主は彼に返辭もしないで、いきなり憎みつけたので、彼は不思議に思つて、その事を他の友人に話すと、アディユは佛蘭西語から來てゐるさよならで、戰前は大概の獨逸人が使つてゐた言葉であつたが、戰爭以來全く使用されなくなつたのださうだ。アディユは私が獨逸協會中學で獨逸語を敎はつた時にも、たしか獨逸人の會話の先生から敎はつてゐる事を記憶してゐる。處が今日では全く此のアディユを聞く事が無い。そのかはりに Auf Wiedersehen 或は Guten Tag を用ひてゐる。Guten Tag は今日はの意で、戰前にはさよならには殆んど使はれなかつたのださうだが、今日ではこれが普通のさよならに使

はれてゐる。佛語系のアディユの代りとしてグーテンタツヘが新たに用ひられる樣になつたのださうだ。

私が巴里に滯在中こんな話を聞いた。ある寄席で獨逸人の藝人は給金が安いので、多勢雇ひ込んで舞臺に出した處が、見物人がその事を知つて騷ぎ出したので、間もなくその藝人たちを解雇しなければならなくなつてしまつたと云ふのである。そんな話は聞いたが、直接に不愉快を感じさせられる樣なめに會つた事は一度も無かつたのに、伯林に來るとそれがさらにある。將來の反感と戰爭で敗けたり、又戰後にいぢめられたりした恨みが手傳つて、かてゝ加へて獨逸人のかたくなな國民性と相待つて、此の露骨な憎しみになつたのであらう。白耳義は佛蘭西にお伴の形でそばづゑを喰つてゐる位のものだと。私は別に白耳義人に對する直接の反感には、貼札以外に接した事は無い。

何時ルール問題の片が附くものか、今の處さつぱりあてもつかないらしいが、例へルールの解決がつき、表面的の獨佛の握手が纏つたとし處で、兩國間に横たはる此の感情の溝渠は、兩國のどつちかゞ滅亡しない限りは、永久に父子相傳的に歴史を繰り返すだけの事であらう。世界人類の平和などと口先で叫んでゐても、感情の溝渠はどうする事も出來ない。考へれば考へる程、不愉快な惱ましい問題だ。

三、伯林人の惡化

獨逸人は今苦境のどん底にもがいてゐる。貧すれば鈍するの例にもれず、獨逸人の道德的神經は次第に鈍つて行くばかりだ。道德を頭にいたゞいてゐたのでは、今の獨逸人は頭を上げる隙が無い。一般に獨逸人の惡化は驚くべきものがある。それでも地方に旅をしてみると、田舍の人達はまだ純朴な好い處を失はずにゐる處もあるけれど、とても日本の田舍者の正直さとはまるで違ふ。前者は正直にしてやれば幾らかにありつけるだらう、と云ふ根膽を含んだ正直だ。敬虔な純な後者の正直さとはまるで違ふ。それでも兎に角田舍に旅をすると、ほつと安心をする事ができる。不安の中に埋まつて、始終神經を尖らせてゐなければならないのはたまらない。旅はそれが無いだけでもどんなに好い氣持だか知れない。

獨逸人、殊に獨逸の都會人の惡化は實に怖ろしい程だ。伯

林人が以前はどんな氣持の人々であつたかは知らないが、兎に角現在の伯林人に對しては、一寸の油斷もできない。何故伯林人がさう惡くなつたのであらうか。勿論獨逸ばかりでなく、一般に都會人が地方人よりも人ずれがしてゐるのは普通だが、伯林人程人ずれのした都會人も尠いだらう。

伯林の惡化した最大の原因は、在留の外國人にある。伯林の人々の尠くとも二十プロセントは外國人であらう。その他に外國の金を握つて暮してゐる獨逸人が又かなり尠くない。彼等は下落したマーク相場に外國貨を兩替して、紙幣束を切つて見せるのだ。貧乏のどん底にもがいてゐる土地の人達はどうしてそれを默つて指をくはへてみてゐられるものか。貧民窟へ行つて犬に牛肉のロースを喰べさせる處を見せびらかす様なものだ。餓えてゐる彼等は、どうせ犬に喰はせるのなら、俺達だつて少し位つまみ喰ひをしてもかまふまい、と云ふ根性から、當然の事の様なつもりで外國人からかすめ取る事を考へるのだ。

流石に大商店ではさう云ふ事は尠いが、小さい店へ外國人が買ひ物に行くと、倍にも三倍にも高く品物を賣りつけたり何萬何千と云ふ金勘定のまぎらはしさにつけ込んで、つり錢をごまかしたりするのは朝飯前の仕事だ。強盜、追剝、殺人などもさして珍らしくは無い程、伯林には外國人相手の事件が日に〱續出する。かてゝ加へて、伯林の警察の緩慢な事は、とても日本の警察とは比べものにならない。話が橫道に走るが、日本から一歩外に出て見ると、誰でも驚き且つ有難く思ふのは日本の警察權の行屆いてゐる事だ。かなり行屆きすぎて有難迷惑な處や、かたより過ぎるすきが無いでもないが、兎に角安心して住めるだけでも日本の警察權には感謝をしなければなるまい。何處へ行つても日本の様な警察は尠い。難を云へば警察官があんまり威張りすぎるせいか。人民と警察官との間の親和が缺けてゐる事だ。

警察の話はそれだけにして本題に戻る。私の直接間接に遭遇した挿話を少し書いてみやう。私が當地に來て最初に知り合つた伯林人の家族がある。五十ばかりのお母さんと、三十を少し出た息子との二人暮しだ。大變に私に親切にしてくれるので、私も日本から持つて來た土産物を贈つたりして、かなり親しく交際してゐた。親子はいつも私に「外國人が一人

で物を買ひに行くと、何でも高く賣りつけられるから、買ひ物がある時には一緒に行つてあげる。」と云ふのだ。當時は獨逸語も日本仕込みの片言で、すこぶる不自由だつたので、幸にして親子のどつちかに一緒について行つて貰ふ事にしてゐた。處がさて後になつてわかつた事だが、彼等親子は自分の知つてゐる店へばかり私を案内して行つて、店員や店の亭主などと話し合つて、定價より少し高く私に賣りつけさせて、その尻尾を切つてゐたのであつた。何の事は無い、結局一人で行つた方が反つて安かつたかも知れないのであつた。

こんなのは極く罪の輕い方で、友人の舞踊家の石井漠君と妹の小浪さんのひどいめに會つた事件を紹介しやう。兄妹はまるつきり獨逸語がわからない。伯林にもう二三年もゐる友人の成田爲三氏の骨折りで、貸間をみつけて納つた。當時のきめた間代が二間で十五萬マーク、日本金の約十五圓だ。家主はユダヤ人のお婆さんで、親類も兄弟も無く、たつた一人ぼつちだと云ふのである。二日ばかり經つと警察に屆けをしなければならないから、一ケ月分の家賃の九十割の税金を拂へと云つて來た。石井君は英語で自分はその邊の事情を知らないから友人に聞き合せてから拂ふと云ふて、追ひ返してしまつた。するとその晩になると、電氣の元のスヰッチをひねつてしまつて、部屋に電氣をつけさせない。電氣をつけてくれと交渉をすると、一ケ月分の電氣代として十五萬マークを先拂ひにしなければつけられないと云ふのだ。一ケ月分の間代が十五萬で電氣代が十五萬なんて云ふ事は、三つ兒の頭で考へてもうそと云ふ事は明らかだ。石井君はすつかり怒つてしまつて、婆さんをどなりつけたものだ。そしてその晩は眞闇な中で我慢をしてねてしまつた。翌日になると日本の大使館から呼び出し狀が來てゐるので、兄妹で大使館へ出かけて行くと、「君は家主のお婆さんを蹴つたりなぐつたりしたさうだね。」と飛んでもない話なので、好く聞きたゞしてみると、朝早くお婆さんがやつて來て、石井君を呼び出して説諭をしてくれと嘆願して歸つて行つたのださうだ。石井君はすつかり婆さんの話をして、大使館の誤解を解いて、さて家へ歸つてみると、表の戸を内から堅く鍵をかけてしまつて、呼鈴を押しても扉を叩いても開けてくれない。荷物を全部家の中に閉ぢ込めたまゝ、宿無しの狀態にされてしまつたわけだ。そ

の日はもうおそかつたので友人を訪ねて泊めて貰ふわけにも行かず、啞同然の二人づれで、苦しい思ひをしてやつとホテルに泊めて貰つて、翌日成田氏と一緒に警察へ行つて屆けると、警察官は笑ひ乍ら「君の方でひどい事をしたからそんな事になつたのだらう。君の來る前に婆さんが來てすつかり話して行つたよ。」との話なので、石井君も成田氏もその行屆いた惡辣さに驚かされてしまつた。結局すつかり本當の話をすると、貸間の事件は警察では扱へない。警察には外に澤山事件があつて、とても澤山の貸間の悶着の捌きなどにかゝり合つてゐられないから、住宅局へ行つて屆けろと云ふのだ。獨逸には貸家貸間の管理をする住宅局と云ふのが特に設けられてある。又住宅局に出かけて行くと、石井君はまだ住宅局の方に屆けが出てゐないから、此の事件は住宅局でも扱へないと又々斷られてしまつて、やむを得ず辯護士を頼んで裁判所の御厄介にまでなつてしまつた。とう〳〵その爲めに約一ヶ月ばかりと云ふものは、兄妹で着換への下着一枚無しで、友人の間を泊り歩くやうなさん〴〵なめに會はされてしまつた。好く聞いてみると　その婆さんは何度も外國人を自分の家に泊めて、その手で好い加減せしめてゐるのださうだ。外國人相手の貸間をしてゐる人々の惡い事は實に激しい。すでに二三年も當地に住んでゐる成田氏自身も、その後石井君と同じ樣なめに會はされた、一週間ばかりの間に二軒も移轉をして歩いた事があつた位だ。警察官のみならず他の官憲の人達まで外國人に對しては、一種の嫉妬反感を抱いてゐるので、頗る不親切だ。だから實にどうする事も出來ない。

その他にある日本人はピアノを買ふのに、自分で買ひに行くと例の手で高く賣りつけられると思つたので、下宿のかみさんに買ひに行つて貰つた。そしてその後その家から他へ移轉をする際に、ピアノを持ち出さうとすると、家主のかみさんが、そのピアノは私のだから持ち出してはならないと云ひ出した。そんな事は無い、たゞ買ふ時に買ひに行つて貰つただけの事だと云ふと、受取りを持ち出して來て、「それみろ、ちやんと受け取りに私の名が書いてあるぢやないか。」と主張をしてとう〳〵ピアノ一臺をせしめられたと云ふ樣な話もある。

伯林　中央、ウンタア、デン、リンデン街のとつつきにあ

る。公園ティーヤガルテンは、夜暗くなるとまるで人通りがなくなる。何故だと云ふと危險だからだ。最も公園と云つても、端から見えない位の大森林だが、それにしても伯林の中心なのだから驚く。危險だと云つても別に猛獸が住んでゐるわけでも何でもなく、盜難の恐れがあるからだ。盜難と云つても當地の盜難は頗る危險だ。うつかりするとすぐ生命をやられる。二日程前だつたと思ふが、ギリシヤの留學生が、グリューネワルドと云ふ伯林の西の新開地で強盜殺人に會つたと云ふ記事が新聞に出てゐた。

外人に對する伯林の惡化は理由があるとしても、伯林人は必ずしも外國人に對してばかり惡化したわけではなく、同じ伯林人同志の間でも同じ樣に惡が行はれるのだ。極度の苦境が、彼等から今や道德的神經を奪ひ去らうとしてゐる。每日の新聞を見ると、兄弟で共謀して親を殺して、その財産を奪はうとしたとか、二人の人妻が相談をして、その亭主を殺して財産橫領を計つたとか、まるで人間として考へられない樣な犯罪がシキリに傳へられてゐる。

私達日本人の間にはまだ道德が強く光つてゐる。何と云ふ幸福な我々だらう。と私は此處に來て始めて感じた。

四、伯林人の生活

たつた一年の間に金の相場が一千倍も下落する。昨日働いて儲けた金が今日は半分の値打にしか使へない。かう云ふ恐ろしい不安な世の中を獨逸人はどうして暮してゐるのだらうか。前にも述べた樣に銀行會社大商店の重役なには、それ〳〵外國との交渉もありするので、外國の金を手に入れる事が出來るから、自分の國の金がどう下落してもさして苦痛は感じないとして、中流以下の會社員、店員、職工、勞働者、などは、勿論外國貨で給金を拂つて貰へるわけではなし、と云つて自分の國の金の相場が十倍に下落したからと云つて、十倍の給金が拂ひ渡されるわけでも無い。日に〳〵物價は騰貴する。給金はその割に上げて貰へない。生活は苦に傾く一方である。

それでも小さい乍らも一軒店をかまへてゐるとか、自前で仕事をして店を持つてゐるとか云ふ人は、時の相場で自分の店の品物が捌けるから、その日〳〵の食ひぶちには困るまい

何と云つても一番悲慘なのは給金取りである。

彼等の第一の武器は同盟罷業だ。いざ喰へなくなると、彼等はすぐにその武器を持ち出す。だから現在の伯林には同盟罷業が絶えた事が無い。ある友人が、會社員をしてゐる彼の友人に、旅行をしたいと思ふが一人ではつまらないから一緒に行かないかと誘つたところが、會社員は夏の間に二週間休暇が貰へるけれど、それもまだ間があるから、今は行かれないと一度は斷つたが、暫く考へてゐてぽんと膝を叩き「うむ多分行かれるだらう。二月ばかり同盟罷業が無かつたから、もうそろ／＼ある頃だ。」と云つたと云ふ話がある。まるで一口話の樣な話だが、全く好くうがつてゐる插話だ。デパートメントストーア、(獨逸ではカウフハウスと云ふ)の店員のストライキだとか、機械工場全般のストライキだとか、さう云ふストライキの記事が始終絶える事無く新聞紙上に傳へられる。彼等がストライキをやると、必ずそれが成功をする。家常茶飯事の樣にストライキを亂發するらしい。紙幣も郵便切手にも勞働者の繪を印刷してゐる獨逸でも、やはり資本家は資本家だとみえて、ストライキをやるまでは自分の方から値上げをしないものとみえる。

面白いストライキの例はカフエーやレストランなどの給仕が、不景氣の爲めに客の貰ひが漸々少くなつて、生活しきれないと云ふので起したストライキだ。それは私がまだ伯林に來る前の話で、私は何も知らずにカフエーへ行つてみると、給仕が勘定書の下に一割だけ餘計なものを書き込んで請求するのを不思議に思つてゐると、その一割が給仕のストライキの結果、獨逸國内全般に渡つて給仕は客の呑み喰ひをした額の一割を客からティップとして請求すべし、と云ふ規定として現れてティップなのである。恐らく何處の國へ行つてもボーイがティップを勘定書に書き込んで請求をする國はあるまい。獨逸の奇觀の一つだ。

一般に給金取りの一ケ月に稼ぐ額と云ふものは、我々外國人から見ると實に氣の毒な程僅かなものだ。日本金に換算して五十圓も毎月取つてゐる人は、かなり上給な方で、日本ならば少くとも二三百圓の月給取りに相當するであらう。彼等はどんなものを喰つてゐるかと云ふと、實に現在の獨逸人は粗食で、一週間に二三度も肉を食ふ家庭は相當な中流でなけ

ればない。朝はコーヒーと、日本で拳骨パンと俗に云ふ拳骨大のパン、獨逸ではブレーチヘンと云ふのにバタをつけたもの、それに暮し向きの好い處では腸詰めをはさんで二つか三つ喰べる。日本でもさうだが他の英米佛すべて晩餐が一番上等なものを喰べるのが通の習慣だが、獨逸では晝めしが一番好い御馳走になつてゐる。晩餐は喰べてから間も無く寢るのだから澤山喰べては毒だと云ふので、晝めしに好いものをこしらへて、澤山食べるのだと云ふ。肉を燒いたり煮たりして喰べるのは普通は晝めしにする。毎日肉を喰べるのはかなりの上流でなければならない。一週間に三度も肉を喰べれば上等の部類だ。野菜だとか、魚、殊に獨逸人は鰊の酢につけたものを好く喰べる。それと主な食物は馬鈴薯だ。馬鈴薯は大概毎日晝めしに揚げたり、ゆでたりして喰べる。殆ど獨逸人の晝のお腹は馬鈴薯でふくらむ樣なものである。英米人は第一にオールドーブルをたべて、次にスープ、魚、肉、冷肉、と云つた具合に、一度の食事に幾皿も平げるが、獨逸人の食事は非常に簡單で實質的である。スープと外に一皿きりしかたべない。その一皿に肉も野菜も馬鈴薯も一緒に、充分お腹が出來るだけ盛り込んで喰べてしまふ。それは家庭ばかりでなくレストランへ行つても同じ事である。此の習慣は今日の獨逸をどんなに助けてゐるか知れない。これが英米の樣に、外見的な小さな肉片を二皿三皿も皿を代へて食べる習慣であつたら、今日の獨逸人はどうしてゐるだらう。急に習慣を捨てるわけには行かず、と云つて習慣通りにしてゐたら金がかゝつて堪らない。晩めしは非常に又簡單だ。コーヒーか紅茶かコヽアかの飲みものと、スタウレと云ふ黑い長いパンを一分乃至二分位の厚さに切つて、腸詰めをはさんで喰べる。それが普通の家庭の晩めしだ。暮し向きの好くない家庭では、晝めしも、此のスタウレですませてしまう樣なのも澤山ある。殊に晝間は主人が稼ぎに出てしまつて留守の樣な家では、主人にも此のスタウレをお辨當に持たせて出して、家族も此の簡單なのに、野菜のスープか牛の骨を煮出したスープ位をこしらへてすませてしまふ。そして日曜だけに料理らしい料理をこしらへて一週間を送ると云つた家庭は決して尠くないのである。

衣類はどうかと云ふと、男ならば、洋服の形さへしてゐれば、どんなものを着てゐやうとみつとも無くないのが伯林だやはり流行があるにはあるが、それは若いしやれものか外國人の爲めの流行であつた、中流以下の人達は隨分ひどいものを着てゐる。洋服の價格なども外の國から較べたら、まるで只の樣な安さなのだが、獨逸人にはなか〳〵その安い洋服さ

へも流行を追ふ事は困難な事だ。女の衣裳も、私は此處へ來る前に巴里に三週間ゐたが、巴里から此處へ來ると、まるでお江戸から片田舍に來た樣な相異であつた。昔買つたものでとても流行後れで着られないので、簞笥の隅に押し込んで置いた樣なものを、今更になつて引張り出して、暇を見ては少し手を入れたと云ふ樣なものを着て、大威張りで大道を歩いてゐる。大商店のショーウヰンドを飾つてゐる流行衣裳は外國人相手のストラーセダーメの買ひものに過ぎない。

伯林人にとつて一番有難いのは住宅だ。住宅はすべて住宅局の管理に委されてあるので、家主がべらぼうな値上げをしたりする事は出來ない。日本の家主のやうな事をすれば、すぐ住宅局から告發されて罰金を取られなければならないので家賃はまるで時代遲れな程の安さである。私の同居してゐる家は、日本で云へば裏店の樣な、四階目のきたない家ではあるが、かみさんは一ケ月現在でも一萬マーク位しか拂つてゐない。臺所共三間で臺所には水道も煮物をするストーブも附いてゐる。一萬マークと云へば現在では日本金のたつた五錢である。そんな有樣だから　らしく家庭を持つのに家を借りたりするのは、とても今の處不可能の狀態である。新らしく家を借りるのには、前の借家人から高い金を拂つて權利を買はなければならないのだ。それが出來ない人は、人の借りてゐる家の間借りをするのだが、此の間借りの間代は家賃から較べると雲泥の相違で、べらぼうに高い。それも住宅局の管理になるのであるが、間借りの方は何處も大概家具附なので、値段を一定する事が困難だ。そこへ行つて外國人の借り手が澤山あるので、幾らでも高く借り手がつく處から、住宅局には內證で、家賃から較べると金と泥との相違程の間代を拂はせられる。新世帶を持たなければならない樣な若い伯林人にはこれも大きな苦難であらねばならない。

現在は以上の如くして苦しい乍らも生命をつないでゐるけれど、彼等は今後をどうするつもりなのであらうか。とても此の狀態は一朝一夕にも恢復される見込みはない。マークは日に〳〵暴落を告げるばかりだ。下級民がどうにかして喰つて行ける間は好いとして、いざ喰へなくなつた時こそ、恐怖時代はその極に達するのだ。それも遠くない將來に於て到來せずにはゐないであらう。共產黨員は獨逸の國內にかなり大きな勢力を占めて、所々に擴がつて來た。伯林在住の私達も一日として安らかな日は無い。

私は伯林の中流以下の人々の生活を、淚無しには見てゐられない。



山の旅籠

山の旅籠の
朝の味噌汁すへば
ころころと芋のまろべば
生れ故郷の妹よ。
こはをかし
涙こぼるるぞや。

竹久夢二

文壇名家の夫人印象記

津田光造（1—5）
杉ひろ子（6—7）
高須芳次郎（8—12）

北原白秋氏夫人

前北原白秋氏夫人江口章子さんは、所謂人妻とか世話女房とか云ふよりも白秋氏の友人と云つた方が近い。白秋氏を聖人型の人とすれば、章子さんは寧ろ惡魔型の女であると謂へよう。

　惡魔型の女と云ふと、これは又、非常にチャーミングな概念です。エゴイスティックで、ロマンティックで、理智的で、聰明で、勝氣で、氣前が好くて、フキーブルで、センセイショナルで、人一倍怖け深くて、大袈裟で、虚榮心が強くて、快活で、華やかで、陽氣で、浮氣で、冷嚴で而も情熱的であることを意味するのです。

　たしかに、章子さんと云ふ人は、斯うした性質の總べてを具へた頗る近代的な女性です。さう云ふ性質の或るものは、白秋氏の持つて居る性質と、非常に深く結び付く事も出來たのですが或るものは非常に強く反撥し合はなければならなかつたのです。白秋氏があの葛飾の片田舍に引き籠つて、非常に困窮して居た頃の章子さんは、白秋氏に最も近い章子さんで、白秋氏が小田原へ來てから、別莊を建てる樣になつ

てからの章子さんは、白秋氏に非常に遠い章子さんになつてしまつたのです。

それでも、白秋氏も章子さんも、めい／＼その性質の長所と短所を認め合ひ、許し合つて、長短相補ふと云ふ形になり、もつと積極的には、各々が、各々の長所をして、益々自由に闊達に生長せしめる樣に努力し合ひ、激勵し合ふと云ふ風があつて、小田原時代のこの夫婦の生活には、實に羨むべき美しさがあつたのです。尠くとも、その頃、白秋氏の家庭を訪問することは、わたし達に取つて、一つの大きな樂みであり、救ひでさへあつたのです。世の有ゆる不幸な人達の味方になつて、それらを温かく抱いてやりたいと云ふ精神が、この夫婦の生活意識となつて居たからでせう。

斯うした生活狀態が、白秋氏の名聲を、期せずして天下に博せしめた時に、章子さんのそれまでの謙抑の生活が失はれた。白秋氏をして今日在らしめたのは、この才女の内助の徳の致す所であると云ふ章子さんの優越感が、そろ／＼我々にでさへ鼻に付きかけたのだから、山本鼎氏の樣な親戚關係の人達から見たら、少からず、それに反感が起つたであらうことは想像される。その結果、章子さんはあゝした悲劇の主人公となられた。

現白秋氏夫人は、斯うした章子さんの悲劇の生活そのものゝ中から復活した女性を思はせる樣な、謙抑そのものゝ象徴であるとも見えるしとやかな婦人です。一男を擧げて、白秋氏は今新しい家庭生活の中に惠まれて居る。

谷崎潤一郎氏夫人

谷崎潤一郎氏と來たら、とても氣むづかしやで、短氣で、性急な人だ。斯う云ふ人の奧樣になる人も亦一苦勞であると同情する。餘程、同化力の豐かな、軟柔性に富んだ女性でなくてはと、つく／＼思ひやられるのですが、全く、潤一郎氏夫人は、さう云ふ特性を具備した代表的女性とでも謂ひませうか、つまり、氣の利いた世話女房の典型です。

家庭内の潤一郎氏は、奧樣に對して微塵も甘い顏を見せないと云つた風だから奧さんが若し、その氣心をよく飲み込まないと、とても、やり切れないであらうと思はれる。それほど潤一郎氏は、家庭に在つて權柄で、と云ふと少し語弊がありさうだが、少くとも、異性に對して高壓的なタイラントであると思はれる程要心深くして居るから、奧樣の力でも、あれでは少しもぼんやりしては居られまい。矢張り、あ

んな遅ましい劇曲を書く位の人間は遠つて居るなと思はれる程、ピシツ〳〵と、遠慮會釋もなく、宛もそれは疾風迅雷の如くに、急所を突つ込む樣にするのだから、奥樣の立居振舞を、潤一郎氏の前で見て居ると、痛ましい位である。

「お茶を持つて來う！」と、例へば、癇癪一聲、呶鳴り付けてしまふ樣な譯だから、堪らない。

それでも、奥樣は馴れつ子で、にこ〳〵しながら（さう云ふ時の奥樣の表情には、如何にも良妻らしい、夫に對する了解の色が流れて居る）、お茶を持つておいでになる。今まで、夫婦喧嘩でもやつた居たのかと思ふと、これで先づ〳〵安心と云ふ事になる。

潤一郎氏がさう云ふ流儀だから、奥樣は、我々訪問客に對して、痒い所へ手の行くほど行き屆く。餘り氣が付き過ぎて、氣の毒な位になる。昔、王樣にかしづいた女も、斯うしなければならなかつたのかと思はれる程に、もう少し、ぼんやりして居て貰つた方が、らくだと思はれる程に、奥樣の氣の配り方は鋭敏になつて居る。

「お風呂が大變熱かつた樣でしたね。氣がつかずに居てすみませんでした。遠慮なく呶鳴つて下されば好かつたのに」

斯う云つた風です。潤一郎氏に呶鳴られつけて居るものですから、矢つ張り、斯う云ふ時には、潤一郎式にパキ〳〵とやつて除けて貰つた方が、奥樣に取つては氣持が好いのかも知れない。

差し向ひで話をして居る場合でも、奥樣は、編み物を持つたりして、如何にもさうする事が女としての天職であるかの樣にまめ〳〵しい。

菊地寛氏夫人

菊池寛氏の奥樣は、何處か川田芳子を思はせる樣な顔立ちで、背丈も高い方ではない。日本の女としては、先づ中肉中背の愼ましやかな婦人――現代中産階級の主婦の代表的タイプとでも謂ひませうか。

菊池寛氏はあの通りの、何ちらかと云へば、文士――元來蒲柳の質とか云つて、弱々しい病身の人間を憶ひ出せる所の文士には珍らしい頑丈な、達摩さんの樣な逞しい體をした親分肌、政治家肌の人で、何う見ても、神經家らしい所がない。實際、家庭内の菊池寛氏は、谷崎潤一郎氏の樣な、氣むづかしい所はない樣である。着物の着方からして下前下りに着て、無造作に兵兒帶など卷き付けて居る所などは、如何にも菊池式無頓着をよく現して居る。

尤もあれは、お腹があんまり肥りすぎて居るので、ちつときちんと前を合せたくも合せられないので、自然にあんな風になるのかも知れない。だからよくボンチの材料にされてしまふ。紬の着物など着て居ると、却つて田舎の村長さんと間違へられさうである。これは何う考へても、奥樣の罪ではあるまい。菊池寛その人の持前の現はれと云ふより外はあるまい。奥樣がどんなにそばで骨折つて、やきもき云つても、何うしてもさうなつてしまふには致方があるまいと思ふ。

奥樣が、それで、何んなに立派な着物を着るのが好きなめかしやであるか何うかは知らないが、わたしはまだ、奥樣がそんなに派出なけば〳〵しい裝りをして居られた所を見た事がない。

一度、僕は菊池氏の家で夕飯を御馳走になつた事があつた。その時、最初お膳を持つて見えたのが、菊池氏の奥樣であつたと覺えて居る。それから、お替りには、菊池氏の一人娘である未だやつと幼稚園へ行き初めた位の、房々した髪をおかつぱさんにした肥つた女の兒が來て、お櫃を持つて、きちんと行儀よく坐つた。岸田劉生氏の麗のモデルの樣に。

「お孃ちやんがお給仕?」

僕はこのおかつぱさんのお給仕が、酷くいぢらしく、そしてこの上もなく賢明なものに見えた。と同時に、奥樣が日頃子供の養育に對して、どんなに細かな注意を拂つて居られるかがよく分つた。

「奥樣は、却々、あぢな事をする人だ」

お膳のものを漁りながら、僕は、菊池氏の家庭が持つ一種美しい人情味の發露を味つた。「文藝春秋」の親分になる人の奥樣には、矢つ張り何處か違つた所がある。

その晩、菊池氏は芝居見にでも行くらしかつた。奥樣と子供を連れて出た。僕も一緒にそこまで電車に同乘して別れたのだが、その時も奥樣は、金ピカらしく目立つた見せつけがましい裝りはして居られなかつた。

宇野浩二氏夫人

わたしがこれまで突き合つて來た詩人、小説家の奥樣で、日本髪に結つて居る人は尠かつた。大抵、現代的な束髪で、近頃は西洋風のオールバックに結つて居る人が多い樣だ。谷崎潤一郎氏の奥樣も、北原白秋氏の奥樣もそれからたしか菊池寛氏の奥樣も、さうだつた。西洋風の束髪もその人の顔や體の恰好に依つて、よく似合ふ人もあれば、如何にも態とらしくて、取つて附けた樣に氣障なのもある。さう云へば日

本髪の方は尙更さうで、丸髷のよくうつる顏もあれば、銀杏返しにしてよく引立つ顏の人もある。中には是非共日本髪にして貰ひたいと註文したい樣なのもあれば、反對に、何うしても西洋風に結つた方が好い人もある。武林無想庵氏の奧樣の中平文子さんなどは、是非共西洋髪にしなければ似合はないだらうと思つたが、宇野浩二氏の奧樣には日本髪がよく似合ふと思つた。

いやに髪の事を氣にする樣だが、髪は女に取つては、命から二番目位に大切なものであると云ふ考へ方は昔からあることで、そしてさう云ふ考へ方には、今もなほ、女の方には勿論の事、男にしても、大した變りは無ささうである。髪はたしかに、女の品位や性格を表示する所の最も重大な要件であるに相違ない。女が髪の事で苦勞をするのは小說家が傑作を書くのに苦心するのと、同じ樣なものであらうと思ふ。

それはとにかくとして、日本現代の女性が、擧世滔々として日本髪を捨て、フオーレン、スタイルの模倣や追從に日もこれ足らずと云ふ有樣である時に宇野氏の奧樣が丸髷にして居られるのを見た時は、たしかに一種のなつかしさを覺えた。それには宇野氏の好みからの要求もあることであらうが、日本の婦人の日本の服裝には、丸髷は何うしても捨て難いものである。

日本固有の文化の樣式で、世界の如何なる文明國にも、斷じてその追從を許さない所のものは、決して尠くないと思ふのであるが、丸髷、島田、銀杏返しの如きは、たしかにその一つとして擧げるに足るものであると思ふ。併し、それは支那婦人の纏足を美とする樣なもので、共に婦人をして男子の嫉妬や性慾や家庭の囚にするものだと云ふ樣な、八釜しい議論が出て來た日には面倒になるから止める。僕は日本の現代の婦人が、何でも西洋の猿眞似さへすれば好い氣になつて居る樣な風潮が、少し鼻につきかけて來たから一寸觸れる氣になつたのです。

さう云へば、全く、宇野氏は何か書いたりするに、あまり家に落着いて書かないで、何處かの下宿か旅へでも出て多く書くらしい。よく家を空けて、奧樣に留守居をさせて置く。僕はよくエプロンを着て玄關へ現れる奧樣が、「あら、今日もまだ歸りませんの」と云つて、淋しさうに、そして氣の毒げに挨拶をされる顏を想ひ出す。

吉田絃二郎氏夫人

丸髷に結つた黑繻子襟のデツプリ肥つた年増女が、長火鉢の向ふに坐つて長煙管で煙草を燻らして居た。と云つ

たら、誰れでもそれは何處かの茶亭か料理屋の女將の姿を想ひ出さずには居られないでせう。吉田絃二郎氏の奥樣は、たしかにさうした女將型の婦人の一人であると覺える。

都會の中の雜音と塵埃とから稍々離れた瀧の川の町に、純日本風の通人が住ふに相應しく造られた所の、茶人好みの別莊風の家がある。八疊の書齋から、遙かに低く見下された所に、やゝ古りさびた池があつて、夏時は其の上に白い水蓮の花などが、清楚な感觸を靜かに浮かせ、ロマンティックな情調を漂はす。庭は芝生植込みなど程よくあつて、中に一際抽んでて、泰山木が蒼々としたその滑らかな葉を陽に輝かしながら、ゆつたりと聳えて居る。

斯うした別莊構への庭と、それを背景とした住家とを持つた幸福な小說家吉田絃二郎氏の奥樣は、併し、見た所あまり幸福でもなささうである。あれが小說家の住む家でなく、茶亭か料理屋でもあつたなら奥樣はそこの女將として、如何にも女將らしい眉目が具はつて居て似つかはしいがな、とさへ思へるのである。あんまり靜かでひま過ぎて、退屈で、物足りなくはないだらうかと、うかゞつて見た譯ではないが、思ひやらずには居られないのである。

子供が無い所爲でもあらうか。？子供の無い家庭と云ふものは、亭主が浮氣で女狂ひをするとか、惰け者で働かないとか、稼いでも酒が好きで、醉つぱらひだとか云ふ事になると、絶えず波瀾が起きたりして、人間味が溢れて居るから賑やかである事受合ひであるが、さうでない限りは、どうも諸道具調度建具に至るまで、きちんと整ひ過ぎて居て、夫婦の間も左樣然らばに流れてしまつて、淋しくもあれば冷たくもあり勝ちなものである。

吉田氏の奥樣には、何處かさう云つた淋しさ冷たさがある。吉田氏が女狂ひをしたと云ふ話もなければ、醉つぱらひで、奥樣に管を卷いたと云ふ話も聞かない。聞いて居るのは、非常な勉强家で精力家だと云ふ事だけである。そこが奥樣に取つて幸福な所でもあれば、同時に又、非常に不幸らしくも思へる所である。何うして天は宮島資夫氏の家庭に、うんざいまんざい五人も子供を授けて、絶えず波瀾重疊を醸させて置きながら、吉田氏の奥樣には一人の子供をさへ恵まないのであらうか――もう一つおまけに宮島氏をあんな醉つぱらひにして、吉田氏を聖者の樣にして置くのか？　他事ながら、思へば恨めしいと云ひたい位である。

斯うなると、芥川龍之介氏の云ふ樣

に成程、天は人間に對して決して公平なものではないと云ふ議論が成立ちさうである　然らば吾々は人力を以て天の不公平に打勝たうか。

阿部次郎氏夫人

阿部先生の奥様は非常に靜なかたである。ものをおつしやるにも、動作をなさるにも、實際、靜といふ言葉で云ひ表すのが一番適して居るやうに思はれる。少しも飾氣のない、あくまでも地の儘といふ感じが如何にも快く思はれる。あゝいふ澄んだ感じのする女性は珍しいと思ふ。ものをおつしやる時には、相手の顔を御覧にならずに少し顔をそむけてお話しになるが、その時のお眼や口許がどちらかと云ふとよく聖者にみるやうな、純な、透徹した感じを與へる。お話して居て大變に樂だ。奥様の人格そのものに包まれて、安心して物が云へ、おだやかな氣持で對坐して居られるやうな氣がする。

いつか、あの大地震後間もなくのことであつた。いろ／＼地震當時のお話を伺つて居るうちに不逞鮮人の話が出た。先生のおうちのお庭にも不逞鮮人が逃げ込んだと云つて大騒ぎをしたさうである。その時奥様は、追ひかけて來た人々から其の鮮人を救ひ匿つてやらうと思はれたさうである。當時、先生はまだ外國においでで、奥様は小さいお子様達と共にお留守居中だつたのである。男手といつては殆んど無かつた。先生のお家の庭はなか／＼廣い、それに周圍が喬木の林になつてゐるから一寸、人がかくれてゐてもわからない。普通の婦人であつたら、たゞ其の噂だけでも充分驚き恐れたに違ひない。が、奥様は其の鮮人は少しも害をしようとは思つて居ない普通の鮮人で、たゞ鮮人であるがために追ひかけられ逃げ込んで來たのであつたら非常に氣の毒だとお思ひになつたのださうである。そして若し本當に其の人がかくれて居たなら　どんなにでもして御自分の家にかくまつて置いて上げようと思はれ、お子様やおうちの人々をすつかり寝ませになつてから、夜一人で庭を探してお歩きになつたとのことである。萬一其の鮮人から撃たれでもしたならそれまでのことと覺悟していらしたのださうである。私は其お話を伺つて非常に感動した。普通の場合であれば兎も角あの大異變の際、あの所謂流言蜚語の盛んに傳へられて居た時に、それだけのハツキリした公正な考へを持つといふことは、非常にあり難いことであると思ふ。奥様は其のお話をなさる時、矢張りいつもの通り物靜かな低い聲で、それは極めて何でもない、

當然なことのやうにお話になつた。それだけに一層、私は感動させられた。日本の女性のために實にありがたいと思つた。奧樣がたゞ一人で夜、生命をかけてまで、追はれた鮮人を探して歩かれた時の御心持を考へると實に尊い氣がする。私自身、さういふ不幸な人のために、充分盡して上げる機會に出會ひながら、私は自分の臆病から、みす〳〵それを取逃して來た。それぱかりか、兎もすればいろ〳〵の流言を信じ、それらの不幸な人々を疑ふことさへあつた。私は奧樣のお話を伺つて居る間に其のことを思ひ出し、自分が恥ぢられると共に、心の中で奧樣に感謝した。

私は其の日奧樣とお別れしてからも、非常に興奮してゐた。今でもあの時の氣持はハッキリ心の中に殘つてゐる。

志賀直哉氏夫人

女中さんが取次に這入つた間を敷石の上に立つて待つて居ると、門から大原女が這入つて來た。玄關脇の臺所の方へ行つて、

「奧樣、買うておくれやす。」と云つてゐる。

「よろしいの？ よろしいのでなければ駄目よ」などゝいふ明るい聲がそれにつゞいて聞えて來た。一寸、意外な氣がした。同時にホッと安心した氣持になつた。

私は其の日、暫く逃れてゐた京都から、震災後の東京へ歸つて行くことになつて居た。私は其の春にも京都へ行つた。そして、「志賀先生をおたづねしたいな」と思つた。が、勿論、それはさう思つただけで實行出來なかつた。何となく恐ろしい氣がしたからである。また、人の家へ一人で出かけて行く勇氣もなかつたからである。が、今度は違つて居た。大地震のおかげで私は隨分大膽になつて居た。それに果して無事に東京へ歸り着くことも出來るかどうかわからなかつた。「いつ死ぬかもしれない」といふ氣がして居た。が、それでもまだ、先生をおたづねするといふ考へにハッキリなつてゐたわけではなかつたが、兎も角も先生のお家の前まで行つて見よう、さう思つて、その朝起きると直ぐに出かけたのであつた。所が案外にお家が直ぐにみつかつた。しかも御門の戸が半ばあいてゐるのである。

「這入つて行つてみよう。其儘出て來てもいゝから。」さう思つてする〳〵と這入つて行つた。と、思ひがけなく、玄關脇の臺所に女中さんが二人、洗濯をしてゐて、私は其の人達に出會つて

しまつたのである。

「先生は御在宅ですか？」さう言つて名前を告げたが、勿論、私には、先生が會つて下さるかどうかさへも疑はしかつた。で、私は、女中さんが奥へ取次に這入つて行つた其の後、かなり不安な氣持で立つて居たのである。

　大原女はそのうち臺所から出て來て歸つて行つた（と思ふ。或はまだ歸らなかつたかも知れない。ハッキリ、今覺えてゐない）。と、

「どうぞ、こちらへ。」といふ明るい、輕い調子の聲がきこえた。

「私におつしやつたのだらうか？」と私は迷つた。それにしてはあまりに親しげな調子である。迷つた儘立つて居ると、再び、「どうぞ、こちらへ。」と、其の聲がくり返された。同時に、先刻取次に這入つた女中さんが臺所口から出て來て玄關の戸をあけてくれた。奥樣は玄關の上り口の所に立つていらつした。私は先刻の「どうぞ、こちらへ」といふお聲から、大分安心はしかけてゐたが、それでもまだ何となく不安を感じながら奥樣のお顔を仰いで見た。そして、その輝きの強い、ハッキリした印象的なお眼の中に、やはらかい親しげな色を認めるとスッカリ安心した。私は、はじめてお目にかゝつた人のやうでもなく、すつかり打ちとけた。安らかな氣持を感じたのである。聰明な感じ、それが決して冷たくならずに、反つて非常にあたゝかな、ふつくらした、同時にしつとりした、なつかしみのあるものとなつて感じられるお方である。ものゝおつしやりやうなども貴族の方には珍しく極めてファミリアで親しみがある。ゆたかで味のある夫人、さう申上げたい氣がする。いつまでも安心してお側によりそつて居られるやうな感じのするかたである。

　奥樣は寫眞など出してみせて下さつた。私はよく、あまり近しくない人と話をして居ると非常にかたくなり、時によると陰鬱になつたりする。それが奥樣には初めから一寸もさういふ感じが湧かない。極めて安易な氣持でお話をしたり伺つたりすることが出來るのである。如何にも志賀先生にふさはしい奥樣であると思つた。私はその時一度しかお目にかからないが、あの時のことを思ひ出すと、いつでも快い氣持がよび起される。

高濱虚子氏夫人

昨年夏、德富蘇峰氏の「日本國民史」の恩賜授賞祝賀が、帝國ホテルで開かれた時、私も祝賀の意を蘇峰先生に表する爲め出席した。その際、私は久振

に虚子さんに逢つた。話は明治新聞史の材料などに亘つたが、やがて創作のこと、「ほとゝぎす」のことなどに移つた。そのうち、私は不圖、明治三十一年頃、虚子さんが、私の主宰した「文藝新聞」に「煤掃」と題した俳文を寄せて下さつたことを思ひ起した。

「あの時分の虚子さんは未だ若かつた。」

と私は思つた。その「煤掃」を書いて貰ふため、私は仲猿樂町の「ほとゝぎす」發行所を訪ふた。それは僅か二間か三間しかない小さな家で、表から見える臺所口に夫人が頻りに洗濯して居た、恰度それは、虚子さんが結婚後、赤ん坊を設けた頃のことである。

夫人のことは、豫ねてから聞いて居た。夫人は神田淡路町の下宿高田屋で暫く虚子さんと一緒に居た。その高田屋には、俳壇の驍將と云はれた碧梧桐氏が二階の一室に宿つて居た。例の「俳諧師」には、高田屋のこと、夫人のことが出て居るのだ。

私がそれらの事で、豫め夫人のことをほのかに聞いて居たので、臺所口に居る夫人の方へ眼を注いだ。夫人は大柄な、いかにも健康さうな人に見えた。圓い顏、愛嬌に富んだ穩かな表情、「どうしても南國の女性に見る趣だ。」と私は思つた。が、何れかと云ふと、藝術家の奥樣と云ふよりも、實直な商家の夫人と云ふやうな感じがした。私は多く夫人と言葉を交さなかつたけれども、二言三言、云はれる言葉の調子が、優しく丸味を帶びて居た。少しも癇高いところがなかつた。

その後、私は、鎌倉で虚子さんに逢つて、その家で、午餐の饗を受けた時、夫人も出て來られたが、その際の印象は、昔見た第一印象と餘り變らなかつた。いくらか年を取つたと云ふこと丈が、ちがつて居た。

「あの夫人なればこそ、虚子さんの家庭が幸福であるのだ。」

と私は切に感じた。と云ふのは、虚子さんは一見すると、俳人らしい、のんびりした落着きがあるのだが、氏自ら酒間私に打開けたところによるとあれで非常に氣短かで癇癪持ちである。氏は力めてそれを抑へて、よく友人に接し、後輩に交るのだが、家庭では時にその癇癪が發揮せられることもあるらしい。けれども夫人は穩かで、春の海のやうな感じがするから、その柔か味が自ら虚子さんの氣短かや癇癪を靜めることになる。そして夫人の脊は、虚子さんよりも稍高く、格幅も以前は大きく見えた位であつた。それに仲猿樂町時代から質素な服裝をして浮華なところが微塵もない。

坪内逍遙氏夫人

大正三年の春である。私は恩師逍遙博士の推薦によつて、「通俗世界全史」の「十八世紀史」「十九世紀」を擔當したことなどで「一度皆のものと熱海へ來い。」と博士のお招きを受けた。當時私は酒を飲み出すと、徹底的に醉ひ倒れる迄飲む癖があつたので、熱海行の朝、東京驛へ驅付ける筈であつたのが、その前夜、友人と銀座で午前一時頃まで飲んだ爲め、翌朝は宿醉で頭があがらなかつた。

私は西村眞次、中島孤島の諸氏と東京驛へ集るべき前約を思ひ浮べた、思ふやうに起き出ることが出來ないで、その日の晝過ぎて唯ひとり、後から東京驛へ至つて、夕刻、小田原の宿へ着いた。そこから電報を逍遙博士の許へ發して、明朝必ず伺ふ旨を通知した。

翌日、朝餐を濟ますと、電車で熱海へ急いだ。やがて熱海に着いて、私が電車を下りると出口に博士夫人が來て居られて、私を迎ひにわざわざ歩を搬ばれた事を聞くと、私は全く恐縮しないわけにはゆかなかつた。そして夫人から逍遙博士が、私のことを氣遣つて居られたと云ふことを聞くと、私は愈よ恐縮してしまつた。今更「酒癖のために、熱海行の時間を遅らせて、申わけがない。」と思つた。

かうして私は博士の別莊へ伺つて、遲刻をわび、一同と博士の伴をして、觀梅に出かけた。白梅の花が清香を漂はしてゐる芝生の上に座して、宴を開いた時、博士夫人の心づくしに成つた種々の珍味に一段の酒興が加はつた。

私は博士を師と仰ぐと共に、また慈父のやうにも感ずる。博士に接すると、私は暖かい親みを覺える。その親みと敬仰の念とが一つに融け合ふのを覺える。從つて夫人の謙遜な、そして少しも氣取らない、高雅な温容に接すると、何となく、慈母のやうに感ずる。早く兩親を喪つた私は、時々さうした感じを起すのである。

一昨年十二月、博士の家で、忘年會を開かれた時、私は西村君と共にお招きを受けたが、席上、夫人は私らに親しく酌して下さつたので、私は喜びの餘り、ぐんぐん灘の銘酒を飲んで、非常に醉つた。そしてその歸途、よろ付いて、帽子を溝の中へ取り落した。私はそれを泥の付いた儘、頭へ被つて、家に歸つた。その忘年會の一夜の樂しかつたことは今も忘れ得ない。それに夫人が臺所に心を配つて、特に珍らしい料理を出されたので、食道樂の私は、深い喜びを感じた。

夫人は、逍遙博士の健康について、

いつも充分の注意をして、博士が若々しい健かさを保つてゆかるゝやうにして居られる。兩三年前、博士が不眠症に罹つて、非常に苦しまれた時、夫人は博士の健康を慮かつて、一時、筆を執られないやうにするため、筆硯を博士の眼の付くところへ置かず、切に休養第一の方針を執ることを勸められた。博士の不眠症が大分癒えたのは夫人の心づくしに依るところが多い。

田山花袋氏夫人

私は花袋氏のことを思ふと、時にその夫人の第一印象を胸に浮べることがある。數年前花袋氏の一家の寫眞が、或る雜誌へ出て居たのを見た時、私は夫人が大分年を取られたのを感じた。私が花袋氏夫人に接したのは氏が始めて牛込喜久井町に新家庭を作つた頃であつた。

その前、私は氏が詩人太田玉茗氏の令妹を娶つたことを聞いて居た。玉茗氏は宗教家で抒情詩人であつた。詩の上で、花袋氏と玉茗氏とは、獨歩氏以上に親しかつた。そしてその時分、戀愛小說のみ書いて居た花袋さんは、牛込の南町邊に住んで居る或官吏の娘に懸想したり、紅葉氏の新夫人が美しい丸髷姿を見せたのを羨んだりして、戀の惱みの多い日を送つて居た。が、結局運命は、氏を導いて、玉茗氏の令妹を娶るやうになつた。

ある日、私は新婚後、未だ間がない花袋さんを喜久井町の家に訪ふた。その時分喜久井町は、まるで田舍であつた。まだ空地が多くて、田畑や林や丘なども散點して居た。氏の家は丘に近いところにあつた。四邊に樹が茂つて居て、いかにも閑寂であつた。奥の六疊へ通されて、私は氏とドオデエやゾラなどの小說について話した。その頃氏はドオデエの作品を殊に愛して居た。ハイネの詩などにも共鳴して居た。

やがて夫人が挨拶に出られたのを見ると、確か頭を島田に結つて、厚化粧して居た。ふつくりした丸顏で、あど氣ない、柔和なところがあつた。全體の肉附きがよくて、態度が淑かであつた。花袋氏の戀愛小說によく出る美人とは異つて居るやうに思つたが、家庭の主婦として從順で温雅で、夫思ひの優しい人であらうと私は思つた。そして私は打見たところ頑丈で、壯士のやうな青春の花袋氏が戀の惱みを續けるであらう時代が、玆に終りを告げて、氏が新生の希望に輝く日を祝福した。

その後、自然主義の文學が流行するやうになつた頃、氏は「蒲團」を書き、「少女病」を書いて、氏が單調な家庭生

活をまぎらすために、中年の戀に餓えて居る有樣を描いた。「東京の三十年」のうちにも、氏は矢張さうした心持を卒直に書いた。それらによると、氏は家庭に於ける異端者、反逆者のやうにも思はれるが、事實、氏は圓滿な家庭の主人で、夫人との仲は極めて睦じい。子女も澤山ある。それは、夫人の力が氏の内助に資するところ少くなかつたことを無言のうちに示して居る。

中村吉藏氏夫人

小說家に閨秀音樂家の配合は、いかにもふさはしい。中村吉藏氏の夫人は、高師の音樂教授として、久しい間。令名がある。そして純一なキリスト教信者である。「無果花」「牧師の家」「雛鳩」の作家が、かうした夫人を得たのは人生の至福である。

夫人は、極めて物固い、常識のよく發達した女性だ。ピアニストなどに見るロマンチツクなところ、情熱の花蔭に夢見るやうな風は少しもない。聰明で、堅實で、正直に人生の道をゆかうとする人だ。夫人は、キリスト教を信ずるところから、飲酒家を好まない。私はこの點だけ、いつも困つた。今日の私は、晩酌一合で、納つて居るが、中村君が歸朝した頃に、徹夜して飲むと云ふ風であつたから、私は中村君の家で、酒を飲む場合、内心、夫人の酒嫌ひを慮つて、强ゐて酒量を抑へた、が、それが窮屈で堪らないこともあつた。何と云つても、中村君は私の三十年來の友人であるから、中村君の顏を見ると話がはずむ、話がはずむと、酒がうまくなる。勢ひ斗酒尙ほ辭せぬと云ふやうなことになる。それを抑へて、二三合の量で、盃を捨てるのは淋しかつた。

今となつて見ると、私は夫人の酒嫌ひに同感することが出來る。それは私の酒量が非常に減じて、家内安全を重んずるやうになつた爲めのみではない。一つは、夫人が酒から來るいろいろの弊害を意識して、私の行路を誤らせぬよう、配慮して下さつた心を思ふためである。

夫人は話上手で、中村君の沈默主義とは反對だ。そしてその態度は、寸分の隙なく、いかにも引締つて居る。それに聲が美しく、若々しい。「中村はよく酒を飲みますが、飲んでも一向面白い談もせず、いつもふうと息を吐くばかりでむつゝりして居ります。」と夫人は中村君の談敵たる資格に乏しいことを私に向つて嘆いた。が、それで居て、家庭圓滿、貯金がうんと出來る。夫人內助の巧だ。

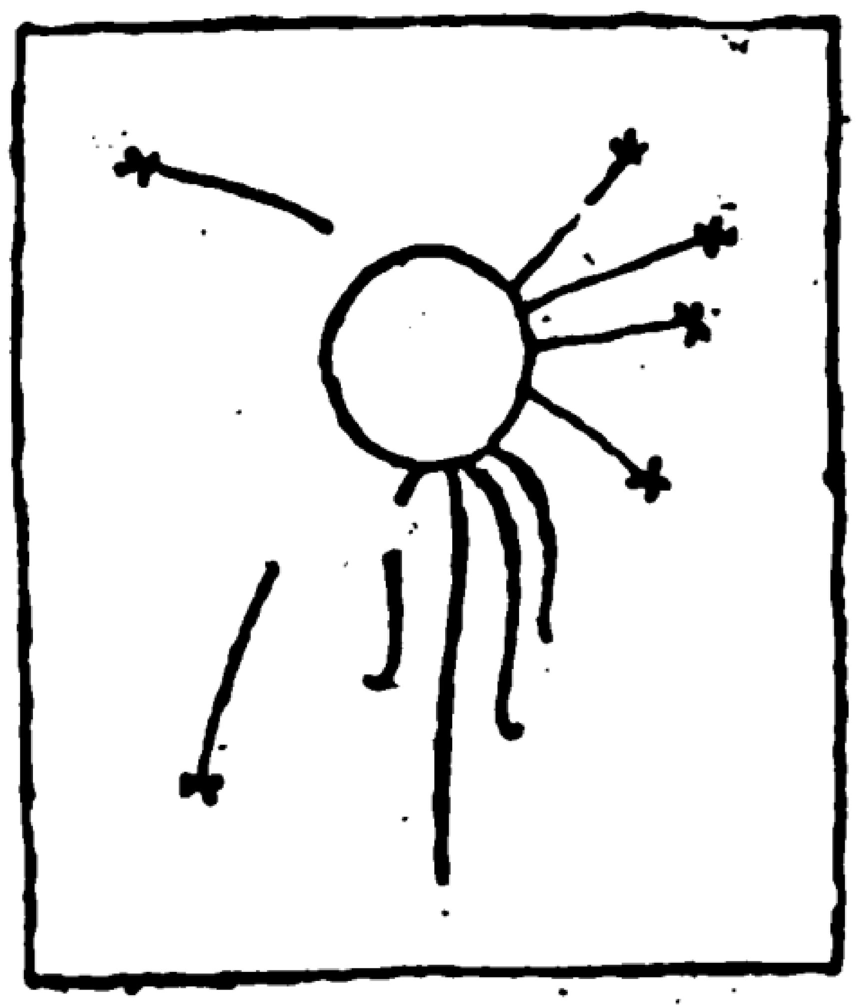
小川未明氏夫人

私は曾て「同じやうな性質のものが夫婦になると、その結果が宜くない。」と云ふことを度々聞いたことがある。夫が小説家で、妻も亦作家であると云ふやうな場合は、どうも和合しない。田村松魚氏、江口渙氏などに私はその例を見た。また氣短かな男と氣短かな女との結婚と云ふやうなものも破綻し易い。

これを小川未明氏に見ると、氏は癇癪持ちで、氣短かで激情の人だ。ところが、夫人は落着いて、物優しくて、謙虚だ。曾て小川君の結婚當時のことを私は聞いたが、夫人は小川君の強い情熱の力に深く動かされて、その一生を托する氣になつたと云ふことだ。犧牲獻身の心―それが夫人の胸に滿ちて居るやうに私に思へた。

夫人は日本女子大學の出身であるから、勿論、文學の事は相應に分明る。けれども文學のことを餘り口にしないで、質實な家庭の主婦として、未明氏を内助してゆかうとする力に全力を傾けて居る樣子がそれと見える。夫人は、少しも虚飾せぬ、化粧に身をやつすこともせぬ、芝居などへも出かけない。話して見ると、いかにも謙遜な、つゝましやかな女性である。久しい間、未明氏が物質の乏しさと戰つたその蔭に居て、未明氏を勵ましたり、またその激しい癇癪を柔げて來たりした。いかにも辛抱強い、しつかりしたところのある人である。そして誰れに對しても穩かな優しい感じを與へる人である。

大正九年秋、私が前後して、二人の愛兒を病の爲めに失つた時、曾て二兒を亡くした小川君夫妻は、ひどく私に同情した。そして夫人は、私の家に來て、その體驗した悲しみについて語り、私を慰めて下さつたことを今に忘れない。夫人は能辯でないが、しんみりとした調子で、私が力を落さないよう、ぽつりぽつりと話した。小川君の情熱に滿ちた感傷的な物の言ひ方とくらべて、私は別な快い印象を得た。そこに夫人の潜んだ力があるのであらう。私は小川君が、かうした夫人を得て、少しも家庭のことを顧慮しないで、目ざすところに進み得る幸福を羨ばないで居られない。



徳富蘆花氏訪問の記

野木光枝

―日東京から用向を帶びて暫く世間の音沙汰を聞かない蘆花氏夫妻を訪ふ。もとよりその時は訪問記を書く下心などなく、問ふことも氣まぐれで、語る人も無雜作であつたが、「それがまた一興だ」と勸める人も物好きなのでつい筆をとる氣になつた、

下高井戸で電車を降りてからものの十丁も歩いてきました。

「この路を眞直に行つて右へ曲れば火見柱が立つてゐます。そのすぐ脇が徳富さんです」と敎へられて、火見柱の下まで來て見たが、四邊には一向家らしいものが見當りません。唯小徑を狹んだ西隣りが堆い丘のやうに高まつて、その周圍が灌木や荊棘の類で自らなる垣を深く巡らしてゐます。垣越しに見られるものは冬枯の木立とその周りを塗りつぶす空の色ばかりです。中には人の住むけはひも見えぬので、連れだつてきたTさんと「どうも變ですね」と話てゐる時、私達より先に來てゐたのでせう、黑羅紗の外套を着て垣の周圍を徘徊してゐた一人の靑年と行逢ひました。尋ねてみると、

「徳富さんの住所はどうもこの垣の中らしいがよくは分らんのです。僕もさつきから尋ねてゐるのですが……」と曖昧な返事です。とにかく垣の周圍を一巡りしてみたら、入口らしいものが見當るかも知れないと、私達は南側から、粕谷村の葉場に面した西側の方へ歩きながらかなり不安でした。世間では暫く徳富さんの近況を傳へないから最近の消息は知りませんでしたが、とにかく五六年前迄は嚴重に門を鎖して來訪者を一人も許さなかつた徳富さんのことです。「高らかに嘲笑して歸る人、押強く門にかゝつて私を嗔らせた人もあつたが

貼紙を見て悄然と歸りゆく足音が一番私の胸にこたへた。」とその著「新春」の中にも述懐してゐる氏のことですから、ひよつとしたら私達も、武藏野は粕谷の風にからかはれて踵を返す仲間かも知れないと思はれたからです。

　西側に廻ると、そこは冬枯らしく植込みの生垣もまばらに透いて、垣の中程には入口と見られる古びた板戸の門が固く鎖されたまゝびくともしません。門から二間と奥へは引込んでゐない茅葺の一棟からは、夕餉の仕度には早過ぎる時刻なのに、薪を折る音がパチ〳〵としきりに聞えてきます。とにかくTさんと私とは當つて砕けるつもりの元氣で垣の外から交る〳〵大聲で案内を求めてみました。すると前髪をふくらませて高い束髪に結つた二十ばかりの田舎娘が、薪火にほてつた赤黒い頬をして出てきましたが、門の内側に立止つたまゝ、一向鍵に手を觸れやうとはしません。

「奥様にお目にかゝりたいのですが。」私達はさう言つて二枚の名刺を出すと、彼女は板戸の隙間からそれを受取つたまゝ屋根の下へ姿をかくすのでした。先生をお訪ねした筈の私達が、どうして奥様にお目にかゝりたいと言ふ氣持になつたか、それは德富さんが「新春」などにもよく書いておられる「私達の所謂ふたり者」といはれる意味を相當に理解し尊重してゐる程の人なら誰でも心づくことでせう。

　德富家の關所を通された私達は、例の門に近い茅葺の一棟へ通されました。それは臺所に並んだ十疊の茶の間で地震以來の應接室ださうです。焚火に黒く煤けた土間から、粗末な戸障子、焦茶色の疊まですつかり百姓家の一室の感じです。部屋の片隅に並べてある二つの机と云ひ、緑のテーブル掛と云ひ、置時計といひ、どれもこれも、明治四十年に氏が粕谷村へ引越以來の物らしく、茶色に暗く煤けた一室でした。部屋の隅々に立てかけた粗末な屏風には、愛子夫人がまだお若い頃の思ひつきでせう、私達が一昔も前に見たことのある少女雑誌や婦人雑誌の口繪が丹念にはりつけてありました。大きなリボンを前髪に結んだ少女や、白い鳥の毛のショールで頸を埋めてゐる舊式な若い奥さんを眺めながら、「ほとゝぎす」の浪さんのことや、「思ひ出の記」のお敏さんのことを思ひ出しさうになつたが、それよりも「新春」の口繪で見覺えのあるあの眼の大きな肥つた、變り者の德富さんや、若い時分には見る人毎から賞められたといふ美しい奥樣にお逢ひして後、一體どんな場面が展開するのか、そのことが少からず不安で、私達は、女中が出してくれた桐の丸火鉢に兩側から手をかけた儘、暫く息をひそめたやうに默つてゐました。

すみうち間もなく長い廊下を傳つてくる足音が聞えてきました。途切れ途切れにドスドスと重く床に響くその足音は蘆花氏であるにちがひないと思はれました。しかしそれは背の屈んだ歩くことが大分億劫になつた老人の姿を聯想させる足音なのです。蘆花氏がそんなに年寄りくさくなられたのであらうか——さう思ひながらじいつと障子の硝子に凝視てゐると、間もなくその硝子に映つて見えたのは、茶色のコールテンのヅボンでした。それに奥様の手作りらしい黒いブラウスを着られた德富さんは、一寸入口に立止つて大きな眼鏡で私達を透視するやうに見ておられましたが、やがて御自分で坐蒲團を持つてきてテーブルの向ふにお坐りになりました。少し背の屈んだ、體格の大きい、鬚むしやの德富さんを見て、最近六七年の間に隨分年とられたなアと思ひました。(あとになつて數へてみると氏は今年五十九です。)

挨拶が濟んでから、私達は直ぐ東京から帶びてきた用件の荷を下してしまつて、くつろいだ氣持で話だしました。

蘆花氏は體を横むけて火箸をいぢくりながら「私は此頃小說を書いてゐるのです。馬車馬式の男だもんで、一つの仕事にかゝると何も他のことが出來なくなるのです。それに小說では一番よく物が云へます。見てくれる人はその中から何か摑んでくれることもあるでせう。」と、大きな體に案外につかはしくない早口の優しい調子で話かけてをられる時、廊下を急ぎ足に歩く音がして愛子夫人がにこ〳〵しながらはいつてこられました。私は一目見てこの人は人柄のよく出來た立派な婦人だと思ひました。人柄がいいと云つただけでは分りませんが、嘗て蘆花氏が「私の妻は生れながらのイブです。」と云はれた言葉は本當だと思ひました。たゞ一眼で、その人の持つてゐる性質のいい品質を直感させる程、非常に純樸な生地の現はれた人だと思ひました。女が五十四九になつてこれ程生々した美しい愛嬌をもつて良人の心に觸れながら話たり、行つたりする人を私は全く初めて見たので一種の驚異をもつて眺め出しました。

德富さんは奥樣がはいつてこられると、わざ〳〵立つて坐蒲團を持つてきて私の前向ひ、御自分の隣りにあてがはれました。私はその樣子を眺めながらやつぱり三十年足らずの間、[illegible]に餘る努力をしてこられたアダムとイブは少しちがふと思ひました。露草の花の藍色に黑を含ませたカシミヤ地のそれもお手製らしい洋服を召した夫人は「朝鮮人のやうでせう」と、御自分の着物を眺めながら愛想らしくニツコリなさいました。それから私達はアダム德富、イブ德富の唇からポ

ツリポツリと話されてゆく人生雜感や、女性雜感を聞きながら、氏の大事さうな時間を二時間ばかり拜借してしまひました。「私達は地震以來、まだ東京に出て見ません。一層のこと復興する迄出ないでおかうかと思つてゐます。それで今日は一つ私達に何か面白い話をきかせて下さい。長い間門を鎖しておいたので、訪ねていつてもやはり逢へないと思はれるものか、そろ〳〵人が戀しくなりかけた時には訪ねてくる人も少いのです。」とおつしやつて、蘆花氏も夫人も私達の話を求められたが、口重い私は御自分達で出て見ようともなさらない東京の復興振りを話す氣にもなれず、「新聞は大抵お讀みでございませう。」と極めて野暮な返事をしました。おまけに、「先生は此頃今の日本の若い（先生から見て）作家の物をお讀みなりますか。」と勝手な方へ話題を轉じようとしました。

「若い作家、私はあんまり讀んぢやゐません。有島さんのも『星座』を讀んだだけです。あれは面白いと思ひました。お讀みでしたか。」とお尋ねを蒙る。「イエ」と頭を振つて答へると、「私が先日滿洲へ行く船の中で有島さんと札幌にゐた時分、懇意だつたといふ人に遇ひましたが、その人もやはり『星座』を讀んでゐました。そして私のところへその本を持つてきて何か賛を認めてくれと言ふのです。私はその時分有島さんも知らない、『星座』も知りませんでしたから、書くことに困つて、仕方がないから（天にまします吾等の父よ。地にゐます天の子供よ。）と書いたことがあります。

厨川さんの『人間禮讃』も讀みましたが、『人間禮讃』が未完成であるやうに、厨川さんも未完成だつたでせうに、惜しいことをしました。波多野秋子さんのことはよく分らないが有島さんも惜しいことをしました。此頃大杉君の『日本脱出記』を讀んでゐますがあれは面白いですねえ」とおつしやつて、さも面白さうに大きな眼を輝かせながら微笑まれました。

「人間禮讃」が未完成だと云はれる譯、「日本脱出記」が面白いと言はれる譯を、別にお尋ねする氣にもなれなかつたのは、一つは「新春」の中に出てゐた蘆花氏の次のやうな歌を知つてゐたからです

眠りはさめた
繩目がとけた
怒は消えた
阿爺さんが笑つてる
皆で踊ろ
裸で踊ろ

蘆花氏の云はれる『人間禮讃』の意味は勿論この歌の中に含

されてゐます。

「先生は社會主義をどうお思ひですか。」「日本脱出記」が面白いと言はれたのでふつと何の氣もなく口が辷りました。

「社會主義ですか？」蘆花氏はかう仰言つて當惑らしく口をもぐ／＼させていらつしやるのを見て、私は急に内省的な氣持になつて、蘆花氏を怒らせはしないかと少し恐縮しだしてきました。先生は實際私達が少し退窟をし出す程、長い間口をもぐ／＼させて、頭を動かしていらつしやるのでしたが、その時の御様子はたしかに日本人には一寸見られない、どこか闘抜けて鈍重な個性の際立つた、風貌だと思ひました。愛子夫人の純眞な信者らしい眼元もじいつと蘆花氏を眺めてゐました。

「社會主義……は私にはよく調べてゐないから判りませんが、人間はそれ／＼人によつてその人として一番もつともな思想に行きつくのでせうから、私には社會主義者の思想がほんたうのところ判りません」と、自分は遂に第四階級の友ではないと仰有つた有島さんの「宣言一つ」のやうなお返事をなさいました。

「先生は××登美子さんを御存じでいらつしやいませうか。」と今まで默つてをられたTさんが、この時突然さう言つて聞かれると、愛子夫人は即座に「えゝ存じてゐます。あの□□子さんの妹のことですね。□□子さんの……」と奥様は蘆花氏の記憶を呼び起さうとするやうに言はれると、蘆花氏は些か迷惑らしい表情で火鉢の中をみつめてをられましたが、

「私はあの姉妹は二人とも嫌ひです。初めて此家へ來た時から氣にいらなかつたのです。妻子のある男を誘惑するやうな女は好きになれません。昨年の何時でしたか、私に相談があると言つて、この家へ來ましたが、私は逢はないで歸しました。何も相談をする氣があつたのではなく、自分には他人の男をとるだけの腕前があることを自慢に來たのです。正月にも年賀をよこしましたが、まだ返事を書かずにゐます。妻は書けと言ひますが、結婚をして姓名が變つてゐるのですからそれを書くと私があの女の行爲を默認したやうになつて困るから書けないのです。惜しみなく愛は奪ふといふが、犠牲者を作るやうな愛は不完全です。」と幾らか興奮して話されるのをききながら、私はその××登美子さんを知らないのだから何と判斷のしようもなく默つて伺つてゐました。すると先生はその次に思はず聞耳を立てるやうなことをおつしやいました。

「女には個有名詞がないからいけない。女は三界に家がない

と言ふが、私は三界に家を作らない女が嫌ひです。場合によつては右でも左でも動くといふやうなだらしないところが嫌ひです。しつかり自分のものを摑むことですね。私は殆ど三十年の間、細君を德富の冷藏庫へいれてきたのは、たゞ細君に個有名詞をつける爲めでした。これからそろ〳〵御開帳をしようかと思つてゐるのです。」とおつしやつて、笑ひを含まれた信者のやうに明るく澄んだ眼差の眼を一寸御覽になつてから、妻はまた涙で私を人間禮讚の明るみへ連れださうと苦心してきました。」と附けたされました。

そのことは『新春』の中にも……」と言へば、「若いあなた方が思ひがけない私の讀者だつたか」といふやうな表情でお二人の肩は一瞬間晴やかに動きました。その時私は思はず眼を伏せて後暗い淋しさを味ひました。すると德富さんは言葉をつゞけて、

「私はもとから人生は十字架を負ふものだと思つてゐたのです。ところが妻は反對で人生は輝かしい樂しいところだと考へてゐるのです。そのために妻は私を明るみへ連れ出さう、樂しい埃田の園へ引き出さうとして今まで戰つてくるうち、私はだん〳〵妻の思想に引きこまれてきたのですが、私はまだ十字架の絆を斷ちきつたとは言へない狀態です。併し私の書いてゐるものが時々細君の考へを筆記してゐるのではないかと思はれて吃驚することがあります。」

とにかく蘆花氏夫婦は私の眼から見ても素晴しいふたりのひとり者にちがひないのでした。たゞ一人づつの男性と女性の中に自分の持つてゐる一切を試みようとして努力してこられた點で蘆花氏夫妻程本氣であつたふたり連れは、神代以來にも類例が少なかつたかも知れません。

「賀川豐彦さんは今東京でお働きのやうですね。御熱心に」德富氏と賀川氏の間には思想上何かの御交渉がありさうなものだと思つて伺つてみました。すると氏は「全くだ。」といふ御返事をして、暫く默つておられましたが、

「私ははじめ賀川豐彦君に逢はないで『涙の二等分』などを讀んで想像してゐたのでは、隨分ともう出來上つたすべつこい男だと想つてゐましたが、一度逢つて講演を聞いて、さら〳〵とさわりの粗いのに驚いた程でしたが、それだけ先があると思つて嬉しかつたのも實際です。あの時は面白いことがありましたよ。賀川君の講演がすんでから私が休憩室のところへいつて、『君僕を知つてゐますか』と尋ねたら知らないといふのです。『では僕によく似てゐる人を知つてゐるでせう』と聞いても知らないと言ふのです。賀川君は私の兄の蘇峰を

知つてゐるのですからね。それで私はいきなり賀川君をソファーの上へ押しつけました。そして『僕の顏をよく御覽なさい、直感で僕が誰か分らないやうで、あなたの仕事は出來ないだらう』と言つたことがありました。その時私はまた奥さんのはる子さんに『あなたは賀川君をこんな貧民窟から連出して何處か遠いところへ逃げなさい。もつとしつかり賀川君を御自分のものになさることが大事です』と言ひましたが、實際賀川君に子供が出來たのは二人きりで臺灣へ出かけたあとだつたから。など〻蘆花氏が案外な話をはじめられると、奥樣もまた、

「私共があの晩申したことがはる子さん御夫婦のためには無駄ではなかつたと思ひます。お二人で臺灣へ行つておいでになつてから、づつと夫婦らしく平均がとれて、氣持の上にも接近してこられたやうです。」とお加へになりました。

「それで私は賀川君の子供が生れた時こんな歌を送りました。

　君みよや昨年のかの夜の驚きより
　　この喜びの生れこしかな。

と蘆花氏は優しい調子をつけてお歌ひになりました。

私はこの話を聞きながら、この世にも珍らしいふたりのひとり者は、時々人知れぬうちに粕谷村をぬけでて、こんな逸話を作つてこられるのかなアと思ひました。

「世間では賀川君のことを色々に言ふやうですが、とにかく人の容易に出來ない仕事を、易々とやつてのけるだけでも眞實があつて偉いのです。物事が容易に出來るといふのは愛があり眞實がある何よりの證據です。ミケロアンゼロのつくつた伊太利のシイステノのドームは、外から觀ると紙でつくつたやうに實に輕くふうわりと出來てゐますが、あれなどはミケロアンゼロの藝術が眞實だからです。先年トルストイに逢つた時もそんなことを考へましたが、眞實があれば出來さうもないことも苦もなくやつてのけられるものです。例へば赤と青の原色をどうするかは繪師にとつては隨分苦心ですが、自然は平氣に美事にやつてのけてゐます。」と私達が思はず引いれられる程、蘆花氏の言葉は熱してきました。

「例へばダビテがエホバの祭壇を迎へる時、雀躍として喜びながら街の中を踊り歩くのを、ソオロの娘(ダビテの戀人)が窓から見てゐて『あの人は輕々しいから嫌ひだ。』と言つたといふが、天眞なダビテの喜びを輕々しいと見たソオロの娘はとらはれてゐるのだと思ひます。今の日本の人達にも明るい快活なものを餘り尊敬しないところがありませんか。」

「それは面白いお話ですね。ミケランゼロのドームの見方や

ダビテの謎などは……いろんな絆や傳統からぬけて物を見たり見出したりすることはなか〳〵のことでせうから。」と言ひながら、私などもどちらかといへば、ソオロの娘のあやまちに氣がつかなかつた組だなどと、幾分反省的な氣持になりかけてゐる傍ら、愛子夫人も心から同感だとおつしやるやうに言葉を添へられました。

「もつともソオロの娘の話の方は私の細君には異論があるのです。娘はダビテを實際輕薄だと思つた譯ではなくて、大勢の街の男女の前で踊るから嫉妬を感じてさう言つたのだと言ふのですが、それも或はさうかも知れません。」

と蘆花氏がおつしやる間際やはり女らしいところへ考へを向けて御覧になるのだと、私は奥様のお顔を見てゐました。薄暗い部屋に眞赤におこつてゐる櫻炭の方を向いて、うつむき加減に、つゝましく微笑でおられる姿は、あながち奥様に子供がないばかりではない、蘆花氏を深く愛しながら心の苦鍊を苦鍊とも思はず、易々とぬけ出てきた人に見る素直な氣高い、そしていつまで經つてもいい意味の子供らしさを失はない人だといふ敬愛の心が動いてくるのでした。

話は移つて、日本人が誰でも外國へ行けば日本思ひになつて歸つてくるといふ話が出ました。すると蘆花氏はそれが當然だといふお顔付で、

「私も若い時分は國境などのあるのを嘘だと思つてゐましたが、年をとると自然考へも變つてきます。先年アメリカへ行つてから判然日本びいきになりましたが、私は殖民地に冷遇されてゐる日本人を見て一日「お前達は皆日本に歸りなさい、その方がお互ひの國のためだしお前達の幸福にもなる」と演說して皆から正氣扱ひにされませんでしたが、どうしても國を生かし、世界を發展させるには、人々がそれ〴〵自分の生れた國で、その國を盛りたて自國をつくることから始めれば。」

とおつしやる傍ら、愛子夫人は言葉を添へて、

「混血兒といふものは可愛さうなものですね。夫婦同志はそれで好きあつたのだからいいかも知れませんが、父と母との血が違つてゐることは子供のためにはいろんな點で惨めですね。」と、さういふ不幸な子供の姿を目の前に見ながら心を惱ますやうな調子でしみ〴〵仰有いました。

私としては今まで考へてみようともしなかつた混血兒の問題を出されて、これは當分心の中にしまつておくにしても又そのうち引出して考へてみるにいい問題だと思ひました。

「近頃は『自然と人生』のやうなものをお書きになりませんか」

私は嘗て、蘆花氏の筆に描き出された、小鳥や、花や、溪流

の叫び、春夏秋冬の如何に目覺しく類稀なるものであつたかを懐しみつゝお尋ねしてみました。

「いや、私は今は自然よりも人間にはいるのがほんとうだと思ふやうになりました。」やはり民衆の中に生活があると思ふといふやうにおつしやりかけてあとを濁してしまはれた蘆花氏を、どうなすつたのだらうかと思つてみてゐると、夫人は氏を勞はるやうな優しい眼で「中を(蘆花氏の體のこと)しらべてみれば血にも肉にもう色んなすつかりのものが滲んでゐるのだから」と言はれますと、蘆花氏は火鉢に向つてうつむいたまゝ、微かに苦笑をなさいました。それから暫くの間私達のテーブルの周りが靜かになつて、硝子越しに枯草の腹ばつてゐる廣い庭先にも、暮方がひし／＼とせまつてくるのが眼にしみました。

「やはり阿爺は偉いですね、私はクリスチヤンではないからキリストのいふ父ではなく、自然を創造した阿爺は―」と蘆花氏は突然大きな眼を輝かせながら、今までにない高い聲で天地創造の神を讃歎なさるのでした。田舍のお爺さんやお婆さんの迷信的信仰なら私にも察しがつきますが、蘆花氏の樣に「私は手械足械を解きはじめつゝ私を傳はる血の脈を曳きずり／＼、一歩々々自然に、即ち埃田に歸る道程を汝と共にとりはじめました。その首途から私共がともかくも私共の埃田に歸つて自然男自然女の赤裸々な生活をはじめるまでは、實に二十一年の長い年月を要しました。」

と言つてをられる境地は、私などには理解の至らない世界だと思つて默つて拜聽してゐました。蘆花氏の信念ばかりでなく、内的生活に於て苦行の山や苦行の谷を越えて、再び平凡な平地に歸つてきた人の平凡らしい顏には、年の若い私達には見ても見えないものがあると思つてゐますから、蘆花氏の信念を非近代的だとか物足らないとか云つて單純に片附けることは出來ないと思ひました。話はまた暫く途切れました。その間に知らず識らず長居をしてゐたことが急に氣になつてきました。

「もうお暇乞しませうか。」Tさんと小聲でさう云つて、私達が急に歸り仕度をはじめると、蘆花氏は突然向き直つて、

「ただ一言私からあなた方に言つておきたいことがあります。」と嚴かな調子で言ひ出された時は、人は年をとれば氣が短くなるといふが、蘆花氏もさすがその例に洩れず、何事かお氣に觸れたことでもあつておとがめを受けるのかと私達は思はず態度を改めて、蘆花氏の顏を恐る／＼見上げました。すると氏の言はれるには、

「私が言つておきたいのは別のことではありませんが、あなた方に結婚をお勸めしたいと思ひます。男でも女でも人間は一人だけでは片輪です。私がかういふ意味はあなた方にはまだお分りにならないかも知れませんが、私は斷つてそれをお勸めします。婦人が職業を持つのもいゝが、仕事が面白くなつたために婚期を逸してはならないでせう。」と、蘆花氏でなくとも世間並の男女なら誰でも言ひさうなことをおつしやると愛子夫人も言葉を添へて、

「世間へ出て仕事をなさる人は婿えらびのつもりで働かれたらいゝと思ひます。女はやはり妻にならねばほんたうに女としての成長が出來ません。妻だけではまだ足りない、母にならねば不完全だと思ひますが、私なども子供がないからまだ足りないところがあると思つてゐます。」としんみりした調子で言はれると蘆花氏は更に言葉を强めて

「私は『女である前に人であれ』といふ言葉程嫌ひなものはない。」とおつしやるので『それはさう思ひます。女であつて同時に人でありたいから』と私も申しました。すると夫人はその次に一寸聞耳をたてるやうなことをおつしやるのでした。

「此頃新聞や雜誌などで女の人が書かれたといふものを拜見しても、一向男が書いたのか女が書いたのか、區別のつかないものがありますね。女はやはり女の心を描くのが正直だし本當だし、その方が生命がある。といふ意味のことを言はれるので私もそれには深く同感の意を表しました。更に夫人の考へでは「あゝいふ風な文章を書く人は結婚を否定する類の人ですね」といふ氣持が含まれてゐるのだと思はれましたが、そのお考へについては今の私には一途に肯定しかねるものがありました。

Tさんと私が暗い土間に降りて、コートを着る間、飴色の手縫ひの洋服にひきつめの束髪に結はれた小柄な奥さんは、閾の際に美しくかゞんで「私達がはじめて粕谷へ移つた時は、臺所とこゝの十疊の部屋と十五坪の草葺でした。」とおつしやいましたが、あとで硏べてみますと、今の德富家は宅地、山林、畑地を合せて三千坪弱、茅葺が大小四棟ださうです。私達が閾をまたいで「さやうなら」を云つた時、蘆花氏は又ひよつこり顏を出して、

「下高井戸から乘りますね」と言はれました。

二人を送り出した女中の手で、再び德富家の門が堅く鎖された頃、私達は家の直ぐ背後につゞく雜木林にかゝりながら思はず顏を見合せて聲をたてて笑ひ出しました。どうしたも

のか罪のない輕い笑ひがあとから〱と出てきます。

丁度幼い子供がかくれん坊をしてゐる時、目かくしが氣がつかないで自分の傍を通りこしたのを見て、子供が嬉しいやら可笑いやらでくつ〱としのび笑ひをする。あのときの感じに一寸似てゐました。一つは鈍重で、大陸的な感じの蘆花氏にどこか人を壓迫する頑固なところがあると思はれたからでもあるでせう。思つたより親切な信念の熱いお祖父さんだと非常に嬉しかつたからでもあるでせう。そして傍を離れた瞬　今迄のやうに、風變りな蘆花氏夫妻と案外な二時間を送つたといふことが何となく可笑しくて笑ひ出したといふだけのことでした。

武藏野の地を這ふ夕靄の中には佳々した欅の株が黒い地面に青い飛び石のやうに飛んで見えたり、雪のやうな玉菜がころころと轉つてゐたりしました。甲武の山々には淡黄ろい冬の夕陽が次第にかげつてゆきます。私達は非常に明るいのび〱した氣分で元氣よく大股で歩き出しました。機嫌のいいアダムとイブに會つたからです。（十三年一月）

レオナルドの手記

涙は心より泉む。頭からではない。

×

どうして眼は覺めてゐる時の空想よりも、夢の中ではつきり物を見ることが出來るのだらうか。

×

人が非常に欲しがつてゐて、持つて居る時には氣が付かないものは何、それは眠り。

×

恐は希望の死ぬる時に始まる。

×

後で何らのないやうにとしよつ中切り詰めてやつて居る猾は愚の斷で優等。汗たらしてものにした財産を、使はう〱と思つて居る内に、生涯が何時の間にか過ぎ去つて了ふ。

×

色慾は生殖の源、食慾は命を支へる力。
恐怖や、臆病は命を長びかすもの、
僞りは身を保護する手段。

×

あゝ人間の不幸。何ていろんな詰い爲めに諸君は金の奴隷に成ることだらう。



應募篇

農村の女性より都市の婦人へ

河野久美子

一

今宵は特に西風が強い。この地方は冬期になると何時も寒い、冷たい。烈しい西風が吹く。三日も前から、毎日々々寒い風が吹いて居る。何時になつたら止むことか心細い。こんな寒い風の吹く晩にもし火事でもあつたらと寂しい心細い感じがする。

子供は二人とも、もう熟睡して居る。風の強い大波が來るごとに、烈しく雨戸を叩いて、戸の隙よりピユーッと室内に刺し込んで來る。木の枝が波を打つて叩く音がする。春の芽を含んで居る彼岸櫻の小枝が、風に揉まれて枝と枝とがすれ合ふ音がする。

外に干してある襁褓はガリ〳〵に凍つて居るらしい。時々風の絶え間に夜警の音がするこんな寒い晩にも青年が夜警をするのらしいこの村は鐵路を去る三里、海拔二千尺の高原の一寒村であるのです。

二

この一寒村へも「女性改造」も入つて居るし、「死線を越えて」も入つて居ます。都市の言論機關の凡ても、創作の凡ての種類も入つてきます。この農村の一寒村に居て炬燵に入つて居ながら、都市の女性を眺めて居りますと文化の動いて行く有樣があり〳〵と解ります都市の女性は凡て享樂階級に屬して居る樣に見えますし、農村の女性は虐げられた生產階級に屬する樣に見えます。

都市の女性の生活難は享樂が出來ない享樂難の生活難で、農村の女性は生存が出來ない生活難である樣に思ひます。農村の小農階級は生存難に脅威されて居ります。妾が小農階級と云ふのは小作農ばかりではなく、一般の中產階級も抱擁して居ます。

妾共には都市のサラリーメンの婦人達は享樂をもう少し減少せしめたら、生活難は緩和されるだらうとさへ思はれてなりません。享樂難の生活難なら妾共もやつて見たい樣にさへ思ひます。

中野にある婦人ホームに人事相談に行く婦人達は、戀愛關係が最も多く、三角關係が多いとかと言ふ記事が見えました。三角關係も四角關係も五角關係も農村にはありません。

三角關係や四角關係で苦しんで居る、都市の享樂階級の婦人はなんといふ呑氣な有閑階級でせう。その享樂階級の婦人の行爲言論が言論機關を通じて、農村に傳播され農村の女性をして無自覺な模倣をさせます。外形的の模倣をさせます。尤も心性まで全部そう

なつては堪へられませんが‥‥。さうならうと思つても環境が許さないから差閊ありません‥‥一種の文明病の皮層なる模倣をします。これが一面からいふて都市が經濟的に農村搾取をする原因になります。都市が農村を精神的に物質的に搾取します、都市が文化的になればなる程、享樂的になればなる程享樂的情調に浸潤し、都市より生産せられたる享樂財を使用して甚だしい農村搾取が行はれることになります。

三

マルクスといふ丸藥は萬病に効能があるデモクラシーといふ音樂は萬人を享樂せしむるといふので、言論機關を通じて、職業的煽動家によりて一大交響樂が奏されて以來、農村も亦その風潮の中に入りました。小作爭議に至る處の農村にまで入り込んで居ります。

都市の資本家勞働者は多少[illegible]が増加されたかも知れません、又勞働爭議がいくら勃發しても都市の事業所轄の人々には何の反響もないことでせう。享樂階級の婦人方は三角關係にも四角關係にも關係はないことでせうが農村はさうは參りませぬ。

今まで隣り近處合壁、常に顔を見合はして居た人々と啀み合をせねばなりません。爽の小河に朝、顔を洗ひに出て挨拶を交はした人々も敵對關係に立たねばなりませぬ。一隣家の和親以上親しいものとも常に心のさぐり合ひをせねばなりませぬ。

小作農の人々も從來多くは地主の人々より肥料代など融通して居て貰ひました。之れが敵對關係に立つと同時に繼續せられなくなりました。

御承知の通り、農村には銀行といふても一里も二里も離れて居る處が澤山にあります。銀行は皆擔保をとらねば資金を融通しません。擔保といふても小作農には僅少の土地以外何にもありません。土地を擔保では近來小作爭議の爲めに銀行は資金を融通しません。

爭議の爲めに困難するのは小地主ばかりではなく、小作農自身も亦困難を來す樣になりました。

唯儲けて居るのは職業的煽動家です。○○農民組合へ加入すれば毎年一人當り會費幾圓徴收されます。そして會へ入ればいくらでも來て演説をしてくれます。演説をするにも旅費はとられます。旅費は部落組合の負擔です。以前隣村の二組合で依頼した時は三百圓費用がかゝりました。今日に至るもその三百圓の割當金額に對して、二組合では爭ふて居ます。さうして東京から來た人・は藝者買ひや女郎買ひまでして堂々と二等列車で歸りました。某々などといふ人は二拾萬圓も金をためて、三人も妾を蓄へて華美極めた生活をして居るそうです。

小作人は資金は地主、銀行からは出たくなり會費は毎年取られる。産業組合は微力で駄目ですし、一割二割の引け方をして貰つてもそれだけで生活難の緩和される處までは行かず。土地を沒收されて植林されたりすれば結局は生活の大脅威を感ずるわけですし、農村は小地主、小作農とも日々に衰頽の兆候が表はれ始めました。

四

都市の享樂階級の人々が農村へ參りますと必ず異口同音に、農村は呑氣だ。空氣が善い、生活が容易だと言ひますが、農村は決して地上の樂園ではありませぬ。都市は狂騒的に盲目的衝動によつて動いて居る樣であり、農村は昏睡的に太古の原始的農具を使用して、原始的靜生活をして居る樣に思はれますが、決してそうではありませぬ。

農村は自給自足をして居る樣でありますが決してそうではありませぬ。自給自足は野菜と米だけであるのです。味噌醤油米さへ農家でありながら自足して居ない家がいくらもあります。食料さへ自給自足でないとは都市生活をして居る人々より見れば不思議に感ぜられるでしょうが、事實そうです。農村が物的自給自足經濟より、流通的貨幣經濟に入つた證據です。一面より見れば經濟的進化です。

それだけ他の一面より言へば農村が都市の享樂的生活を模倣しつゝあるのです。

それも世界大戰の好景氣以後です。世界大戰は都市の資本家階級に莫大の利益を與へ、都市をして無數のビルデング建設の餘裕を與へましたが、農村はそれ以後急激なる地方税の負擔によつて苦しんで居ります。地方税は義務教育費の國庫支辨をなさねば到底輕減することを得ないものであります。

五

農村の青年子女が、賀川豐彦や有島武郎に醉したのも大戰の好景氣以後です。大戰の好景氣は大正八年一ケ年だけ農村に幸ひしました。唯それだけです。然し八年の景氣は九年の大瓦落によつて悉く失ひました。それ後に殘つたものは物價騰貴と莫大なる租税です、外に何にもありません。

小作爭議は一面より言へば農村全體の生存苦の呻吟です。

日本は工業立國でなくて、農業立國です。アメリカの女性の經濟的領土です。都市の女性の享樂財の生產も農村であるかも知れませぬ。いゝえ實際そうです。その農業は農村の女性が半分はやつて居ります。生糸の操業の如きは全部そうであります。

農村の女性は經濟問題にかけては、都市の女性より眞劍に考へて居ります。都市の女性が、特にサラリメーンの奥樣の如く、臺所に於ける消費經濟の方面に携はつて居るばかりでなく、農村の女性は生產の方面に於ても男子と同等の立場にあります。ですから經濟問題にかけてはその學的方面はいざ知らず實際問題に於ては遙かに眞劍であるのです。

農村の女性は生產階級に屬し、都市の女性は大體に於て享樂階級に屬すると看做しても差閊ないでせう。

六

政治問題の裏は經濟問題であり、經濟問題の表が政治だとするならば、生產經濟に尤も密接、關係がある農村の女性は、眞先に婦人參政權を享有する權利があるわけです。

某縣の某といふ農民組合長の妻は、小作爭議問題の爲めに自殺した。新聞紙上では深い内容に立至つての事情は解り兼ねますけれども、小作爭議問題には必ず多少なりとも女性が熱烈に共鳴的態度をとつて居るのです。

農村は過去に於て文化の下敷となつてきたが現在に於ても亦下敷となりつゝある。平安朝の文化は組織な農民搾取の上に咲いた美しい爛熟文化でした。安土桃山時代の文化も亦農民搾取の上に咲いた華でした。江戸に於ける元祿、文化文政の大文化も亦農民搾取の上に咲いた花でした。徳川時代の農民史農村史は地方行政官と農民との烈しい衝突以外に歴史はない様な状態であつたのです。現代は資本制經濟、中央に於ける生産の集中制、分配の集中制によつて常に農村は被搾取の立場に立ち、都市は搾取の立場に立つて居るのです。農村は現今に於て、將來に於ては猶更都市文化の偉大なるものを建設せむが爲めに被搾取の立場に立つことでありませう。

都市文化は農村搾取を基礎とする。都市享樂階級は農民を搾取する。妾共は婦人參政權を與へられた後に於ても都市に於ける婦人とは政治上の立場を異にするでありませう。

「虐げられし人々」を讀みて

根津琴枝

私は人を憎む自分の心の半面に、猶人を愛せんとする美しい心の潜んでゐる事を思ふ時、自分の人間らしい弱點のうちに強い希望を抱く事が出來る。そして何とも言へない涙ぐましい氣になる。

自分が風邪のために熱が毎日續いてゐる事も、時には藥さへ飲む事も忘れてこの「虐げられし人々」の偉大なる一卷を讀み終へた時、實際恐ろしい程の引力が私の魂を引きづつてゐた事に始めて氣がついた位だつた。まるで闇の中からおしよせて來る樣な涙さゝ重さとをもつた無限の引力は、私の「人を憎む心」と「人を愛せんとする心」に痛いほどの跡をつけてしまつた。そして私は、作者の美しい人間的な感情や愛の前にひざまづきたい心で、胸が一ぱいにされてゐた何といふ殘酷さであらう。何とい運命の不可思議であらう。何と云い美しい人の心であらう。私は幾度もくりかへして思つたのである。

先づ私共はこの作が極度の苦痛に壓倒せられながらも十分に自己の力を發揮し得た作者、ドストイエフスキーが人間として堪へ得る事の出來ない程な、苦しい自身の生活に於ける陰慘な事實と深刻な經驗をこの作中の主要なる人物の一人であり、そしてこの一篇の話し手となつてゐる青年作家、ワーニヤを通して物語つてゐるものである事を忘れてはならない。作者自らが人生の暗い恐ろしい悲慘な方面を經驗しただけに、彼はいつも不幸な貧しい虐げられ踏みつけられた人々の同伴者であつたのである。凡そほんとうの苦しみを味つた事のない人に、どうして人の苦しみを考へる事が出來よう。人の涙を解する

ことが出来よう。此の作には堪ふべからざる苦痛と屈辱の下に　幸福を失つた人々に對する作者獨特の優しい溢るるばかりの深い同情が全篇を貫いて流れてゐることが最も強く私の胸に感銘を與へるのである。

この全篇を通しての主人公は意志の弱い然し無邪氣な若い侯爵アリョーシャと地主の娘であつて、彼を愛して家をすて兩親をすてたら若い情熱の女ナターシャとである。そして幼い頃からナターシャと一緒に育つて、彼女を深く愛してゐた新進作家ワーニャが自分の戀を犠牲にして、二人に同情する所にはじまり。後にアリョーシャが殘忍酷薄な彼の父、ワルコオフスキー侯爵に周旋された金持の少女カーチャに對して愛をうつしてゆく事を知つて、ナターシャは自己の一身の幸福をなげうつてアリョーシャと別れてしまふ熱烈な、併し同時に悲慘な戀を中心として、幾多の事件や事情が錯綜して、悲劇は更に悲劇を生み複雜な葛藤はかさなつて、實に極まりない程な所にこの作の面白味がある。それと同時に作者自らが作中に「それはく暗い陰氣な物語りであつた。ペテルブルグの重苦しい空の下で屢々人知れず秘密に行はれる暗い悲痛な物語りの一つであつた」といつてゐる様にペテルブルグの一角の貧しいかくれたみじめな生活の有様が鮮明に描寫されてゐる。

この一篇の話手である青年作家ワーニャは、海のやうな深い愛の持主である。同情深い熱い涙の持主である。それと同時に、惡を見ればそれを淨化せねばやまぬ熱烈な力の持主である。彼は不思議な孤獨の老人とその死によつて老人の孫娘を知つた。彼女はイギリス人とロシヤの女の間に生れた母を持つてゐた。彼女の母は自分の幸福を失つて棄てられた女であつた。病みぬいて、苦しみぬいて、自分の戀人にも凡ての人にも見放され、遂に自分の父にすらもすてられて落魄と絶望の極度に陷つた女であつた。彼女は幼い娘ネルリをこの世に殘つた唯一の慰め子として冷い汚れたペテルブルグの街上を歩いて乞食をしながら、濕つぽい地下室の一隅で果敢なく果てた女であつた。彼の女はむさ苦しい地下室の薄暗がりの中に眠つて、幾度か自分達の貧しい寝床の上で幼いネルリと抱き合つてくらい運命に泣いた事であらう。ネルリは貧窮と苦痛と屈辱の世界に於て、あまりに早く人間の無情を知つた。浮世の辛酸をなめた。優しい母を失つた哀れな孤兒は惡婆ブブノーワの打擲と野獸の様な無慈悲の下に、疑ひ深い荒々しいいぢけた性質になつてしまつた。その上彼女は發作的な病の持主であつた。併し彼女は惡婆の手から救ひ出したワーニャの眞心はこの劇しい殘忍性を感化してしまつた。未だかつて善人を見た事のない様な彼女をして「……私あなたを愛してよ。私を愛してくれるのはあなた一人つきりですもの……」と叫ぶまでに至らしめたワーニャの天使のやうな親切さに感激せずにはいられない。彼女の胸からこの時はじめて熱い涙がほとばしたのであつたのであつた。今まで制してゐた彼女の凡ての感情が、この時一時に猛烈な力で激發したのである。彼自身から云つてゐる「私にはこの時まで堅く秘してゐた心の不思議な强情がよくわかつた。それは自

分をさらけ出してすつかり打明けやうとする欲求が強ければ強いだけ益々頑固で荒々しかつた。それは全身を愛と感謝と愛撫と涙とに献げてしまふ時に起る避け難い情熱である」と。いぢけた彼女の胸の奥底にも優しい温い愛の心は宿つてゐたのであつた。誰かよくこの虐げられし少女の胸の中にある愛の囁きをきゝ得る者があつたらうか。ただワーニヤその人だけが實に彼女の胸をうち開く愛の鍵の所有者であつたのである。更に私はネルリが病床にあつてどうしても藥をのむ事を拒んで幾度も藥を床の上になげつけた時のワーニヤの言葉をかりて見たい。

「かうしたむづかりは獨り病人ばかりにただ一人ネルリばかりにあるといふのではない。私にしろ部屋の中を行つたり來たりしながら、いつその事誰か俺を侮辱するかでなければ侮辱したと取れるほどのことを言つてくれて、さうして一時も早く何物かに感情を奔注したいといふやうな無意識的の願はあることだ。女性といふものはかうして感情を奔注して心底から泣き出すもので殊に感情の鋭敏な女はかうしてヒステリイにまでなるものだ。それが又誰にも知れぬ別な悲しみが胸にあつて、それを言はうとしても誰にといつて打明けられないといふやうな時には、かうした事はありふれたごく世間並の珍らしくもないことだ。」春の海の如く温かにひろい同情と、秋の空の如く透徹した理解に、之をよんだ私の胸の中にまで澄んだ氣が流れこむのをおぼえた。この可憐な少女の話は作中の一の挿話として表れてゐるがこれによつて社會のどん底になげすてられた、そーて殊に病的な感受性をもつた子供の心理の解剖を、それに對する敏感と同情等作者の著しい特質の表れを見ることが出來るのである。

更に女主人公ナターシャにうつして考へて見ても、輕佻浮薄な若侯爵に對して彼女は戀人の愛と母の愛とを兼ねてゐたのであつた。苦しみによつて自分が惹かれて行く事を信じてゐた彼女には、自分が捨てられても男に赦し憐むといふことが出來たのである。

更に彼女にとつての容易ならぬ戀の勁敵であるカーチャも亦限りなく子供らしい高潔な明るい魂の所有者である「私は何か心配事でもあるとすぐ自分の良心に訊いて見ますの。そーて心が穩かだと私も落着くんですよ。いつでもさういふ風にしなくちやなりませんね……」とワーニャにいつてゐる彼女の心は、遂にアリヨーシヤがナターシヤによく〳〵別れて、カーチャと共に旅に出る別れ際になつてもナターシヤをして、彼女に對し嫉妬とか恨みとかをいはせないだけの尊い力をもつてゐた。カーチャが泣きながら「姉妹になりませう。いつも手紙の遣り取りをしませう……私はあなたを永く〳〵愛します。ほんとに愛します……」といつた時「どうぞ幸福でいらつしやいまし……」といつて強く彼女に接吻したナターシヤの心には、彼女の親友であり妹であるカーチャよりほかに何ものもうつらなかつた。去りゆく戀人とそれに從つてゆく戀敵のカーチャに對する濁つた心などはどこにも見出し得ないではないか。

更にナターシヤを怒つて勘當したイフメニエフ老人の心について考へてみても、親を捨てた娘を呪ひながらも子に對する複雜な愛

情の交錯が涙ぐまるる程によく表れてゐるのである。娘を思ふ切なさは彼の傲慢よりも彼の傷けられた自尊心よりも一層強かつた事を、ワーニヤは疾うに洞察してゐたのであつた。同じやうにその父から呪はれた母親を持つたネルリが過し生活と、母の死について悲痛な物語をする事が必ずこの老人の心を感動させ、寛大な感情の方へ彼を動かす事が出來ると考へたワーニヤの推察はすつかりあたつたのであつた。ネルリを彼の老人一家にあづけるまでのワーニヤの苦心は、決して水泡には歸しなかつたのである。暗い陰氣な街、息を詰める様な大氣、賊を含んだ様な空氣の中に於ける彼女と彼女の母との、非常に多く堪へ忍んで來た思ひ出話しは老人をしてすつかり彼自身の頑固な心の殻をうちやぶらせた。そして惡人にすてられた頼りない彼の娘ナターシヤを遂に許されたのである。呪ひは消えた。春の光はさして來た。彼の家に歸つて來たわが娘ナターシヤを見るなり老人は叫んだのである。

「オヽ神様、あなたに感謝します。あなたの怒にもあなたの恵みにも……そして今宵の後で私共を照したあなたの太陽にも！總てこの一刹那の爲に感謝します！オヽ！我々は踏みつけられても侮辱されてもいゝ。我々は又一緒になつた。あの我々を踏みつけ侮辱した傲慢な面惡い奴等は、今勝手に威張らして置くがいゝ。我々へ石を投げさせて置くがいゝ！決して恐がつてはならん。ナターシヤ……我々は手に手をとつて濟まう。そして俺はあいつらにかう言つてやる。これは俺の大事な可愛いゝ俺の娘だ！お前達はあれを踏みつけたり侮辱したりした。けれども俺は、俺は可愛がつてゐる。幾千代かけて祝福してゐるゝ……」實に彼にとつては愛娘ナターシヤは彼の親友であり、彼の生命であり彼の喜びであつたのである。

かうした人達の中にあつたネルリもどうして自分の爲に斯程な愛と、斯程な人々とを見出し得ようとは思はなかつたであらう。身邊を包むみんなの溫い心は、今までの殘酷な境遇の作つた猜疑と片意地と強情とを次第にとかしてしまつたのである。ネルリはワーニヤ始め老人一家その他の情深い人のために救はれ、又その人達の爲にもネルリは一つの救ひであつたのである。「彼の子は私達に神様が遣つて下すつたのだよ。私達の苦しみの償ひにと老人は感謝してゐる。ネルリは最後に愛を感謝しつゝ幸福の中に死んで行つた。彼女が母からもらつて大切にして胸に懸けてゐた遺書一つで、一切の事實が明かになつた。彼女は殘忍なるワルコオフスキイ侯爵に見捨てられた孤兒であつたのである。何といふ數奇なる人間の運命であらう。この作は全篇一帶に重い灰色をした陰鬱な色におほはれて、その中に踏みつけられた人々の哀れな影が濃い色で現はれてゐるが、その中を通して遠くかすかに愛の合唱がきこえて來るのである。暗い運命の下を病み疲れきつて、うなだれつゝ力なく歩む人々の間に通ふ人をなつかしむ心！殘忍性でおほはれた心の奥に微かにふるえてゐる人間愛！何といふなつかしさであらう。みんな〳〵美しい人達ばかりなのだ、愚かであつても善良な人達なんだ只運命のみが冷然として彼らの頭上にかぶさ

つてゐる。寂しい。ほんとうに。作者自身が生れながらにして忌はしい病氣に呪はれ、生涯を通じて貧困と憂鬱とに襲はれた、生活苦の背景を考へてこの作を見る時、作者の魂の美しさと雄々しさが一層輝やいて來る。

ナターシャの老父母の悲歎、不思議な老人と孫娘、極惡非道の老侯爵、彼に見捨てられた母と子のいたましい運命、少女によつて私腹を肥さうとする厭婆、人の惡事を探偵する好個の無頼漢等、その他の挿話の一切は、場面と事件の展開に妙を極めてゐる作者一流の驚くべき技巧であるが、その中には常に作者自身の活々とした血がみなぎつてゐる。作者の生命が流れてゐるのである。かくの如く目まぐるしく出て來る多種多樣の人物の中に、作者の特色たる心理描寫をあらはして、作者のすぐれた精神が一篇の背景となつてゐるのである。勿論その中には不自然な程ながつたらしい會話もあるが、それが却つて性格や事件を物語る大切なものであるし、又作者自身の感傷的な部分があるにしてもそれが却つて作者の人間らしい尊さを増すものである。

この作には眞に苦しんだ人のみが察する事の出來る苦痛が表はされてゐる。不幸なる人々に對する極度の愛と、人間の悲痛に對する切なる同情をもつてせねば眞に解する事の出來ないものがゐる。作者は自分の廣い溫い胸の中に運命に泣く人々をすつかり抱擁してゐる。さうして溢るる程の同情をもつて慰めてゐる。これ實に作者自らの天性に宿る光明と殘酷な四圍の境遇に對する戰鬪とが生んだのである。これを讀み終へた私が喜ぶべき事は、私の胸にまとまつた印象の一つとして、人間的なドストイエフキーの愛が太い、鮮かな線で強く印せられた事である。私にはこの作をとかく言ふ事はとても出來ない小さい自分がこの作についてたつたこれだけの事をのべることさへも許されてゐないかの樣に私の心はせめるのである。自分の貧しさに對して、只私はこんな美しい愛を自分にも持ち得ることを祈りたい。それが出來なければせめて虐げられ踏みつけられた貧しい哀れな人々に對する熱い涙を私から失ひたくないと願つたのである。(了)

小説の讀者と婦人

名倉秀野

「記者樣、貴誌御掲載の(×××)は愈々面白くなつて來ました、伯爵はまあ何てひどい人でせう。私は××子樣に同情します。併し××雄さんのある以上必ず××子樣が變心しられる樣な事は無いと信じます。どうぞ私の自信通りにして下さいな……。」是は或雜誌で見ました其連載小說に對する讀者である婦人の方からの葉書だよりでした。そしてそれと殆ど同一の葉書たよりの可成多くのつてゐるのを見て、私は一種申し上げる事の出

來ない寂しさと情けなさを感じました。本當に私達讀書好の婦人の中にまだかうした考へを文藝作品に對して持つてゐられる方の可成多い事實に、私はいさゝか驚くと共に、なげかはしく思ふの念に堪へられません。そしてかうしたつまらぬ多くの讀者にせがまれて、(そんな事もありますまいが)作をしてゐられる作者の方に私はお氣の毒でたまりません。

今日の小説の愛讀者を考へてゐますに、讀書社會の過半(いやそれ以上)は私共婦人では無いでせうか。そして其婦人の中で、上流中流下流の三社會に分けまして、どの部類に屬する婦人の方に一番讀者が多いかと思ふに先づ私は中流社會の御婦人方に指を屈する一人です。其理由を述べ立てする必要を私はいさゝかも認めませんが、一通り申して見ますれば下流社會の御婦人方は其日々々の生活に追はれて到底讀書の暇を多く持たれてゐないでせうし、又教育の程度も低い爲文學となづくべき方面の作品に接しられる機會、も少い事と思ひます。又上流の御婦人に就いて見ますれば暇は随分御持ちでせうがどうしたのか私は未だ多くの讀書婦人を御見かけしない様に思ひます。で中流社會では殿方が多、働かれ私等女の方は割合に小説等に接する機會が多う御座います。

して見ますと近代小説の愛讀者の過半否それ以上の讀者が婦人であり、其讀書婦人の大多數が中流社會の婦人と假定しまして、其結果はどうなるでせう。其中には或は大學程度の教育を受けられてゐられる方もあるでせう。けれ共普通としましてはよくて高等女學校を卒業したかそこいらの教育程度でせう。

さなきだに感情に走りたがる私共婦人が讀者であり、センチメンタルな女學生や女學生上りの方が愛讀者であるところから、その要求する小説は勢ひセンチメンタリズムに傾いた作品とならざるを得ません。

でセンチメンタリズムの作家は婦人愛讀者の崇拜の標的であり、其作品はかうした私共婦人のバイブルです。そして其婦人が讀書界の過半以上を占めてゐる以上、作家の方には讀者の目標を私達婦人に置かれはしないでせうか。「我輩は貴様等如きつまらぬ女達を讀者の目標とはしない。」とおつしやる作家の方が一人でも多いだけ私は心から嬉しく思ふ者です。が兎も角私達婦人がお得意である事實は作家としてどうしても御見遁しにはなるまいと存じます。

文學に感傷主義の傾向が現れて來ました事が凡てを立證してゐます。では社會的に多くの讀者を持つた小説の作家がえらいのでせうか。所謂人氣作家がえらい文豪でせうか

私は人氣作家は必ずしもえらい文豪とは言ひたくありません。只小ざかしい、かしこい作家とのみ申しませう。なぜなら東西古今を通じて最も多く讀者を得た作品は不朽の名作に非ずして下らない通俗小説であつたりする事實が證明してゐます。然し其罪は作家にはあらずして、つまりは讀者である者の頭の程度の低い故によるのではありますまいか。

あのフランスの近代自然主義の第一人者グスタアフ、フロオベルが五年間の努力を以て書き上げた歴史小説「サラムボオ」も七年間の長い間かゝつて出した「感情的教育」も彼一代の傑作「マダム、ボバリイ」此六年間

の苦心の結晶であるマダム、ボバリイすら世には浪漫主義の全盛時代であつたゞけに世評は惡く殊に其忌憚なき暗所描字は一部の人々から激しく非難され、彼は實に偉大な作をなしながら失意困憊の中に「ミブウツルとペンユユエ」に筆をつけた八年目是を脱稿せずして勞作と孤獨の生涯を終りましたのは誰のせいでせう。

是を日本にとりましてもあの獨歩氏が「酒中日記」や「女難」「牛肉と馬鈴薯」等の名篇を明治卅四五年の頃に人知れず書かれてゐたにかゝわらず當時の雜誌新聞は出すのを承知しなかつたのは誰の罪でせう。さぞ作者の國木田獨歩氏は心外であつたでせう。然しへボ文學者の手になつた駄作ではなく、新文藝の先驅者の手になつた時代を超越した作品であつたればこそ、いつかは光りをはなつ時も來たのではありますまいか。

私等如きつまらぬ婦人を目安として、人氣作家になつてゐられる方の將來はどうなり行くでせう。フロオベル氏や獨歩氏の作品が後の世に重きを置かれたに反して、其時代の人氣作家であると言條讀者におもねるセンチメンタリズムの作家はやがて忘れ葬り去られませう。

作家としてこんな侮辱がありませうか。然しやむを得ない成行きです。罪は私等讀者の頭の低いにあり乍ら罰は作家にし負はせて私等は新らしい物に走るでせう。

で作家である人々も勿論の事讀者の私等も一番大いに自覺しまして（と言ふ中に讀者さへ自覺しますれば作者の方は自とそれに並行して行くのですから）私等小説の愛讀婦人は殊に良い物を信用すべきお方に聞きましてでも本當に良いものを讀む樣に心がけ樣ではありませんか。ほんの通俗的な筋書ばかりの面白い其時限りの作品を讀む爲に、私等が僅の時間を割たり少しの暇でも費す事は誠に無駄な事であります。又無駄を通り越して純粹の感情を汚される樣な惡い結果にもなるでせう。私等の無自覺は作家をあやまらし殿方の汗の金で書物を買つて殿方を苦しめるばかりではありますまいか。最早讀書婦人ののほゝんとすましてゐる時代ではありません。私の自信通りに小説の筋を運んで下さいとねだる時代でもありません。「自信通り」とはそもそもどうした言葉でせう。私の自信通り他人の作家が小説を作るなんて言葉がいつの世に許されたのでせう。すこぶるつきの曖昧な言葉ではありますまいか。

要するに淺薄な感動は私等の弱點です。センチメンタルな事がセンチメンタルな言葉で書いてあるのを實際味つて見ると空虚である事が多くあります。けれ共書く方も讀む方もその弱點からお互に感激し合つて了ふものです。

あのボオドレエルの詩にすらセンチメンタリズムに墮したものが澤山ありセンチメンタリズムの殆どないと言はれたベルレエヌにすら獄中日記や病床日記になると明らかにセンチメンタリズムが流れてゐる位であります。まして二流三流或は四流作家の作品でありそれをよむ私等婦人である以上此弱點のある事は言ふまでもありませんけれ共お互に目覺しあつてせめては小説を讀む時だけは普通世間一般の人間から感情的感傷的な婦人から、藝術的な氣分に立戻つて作品を味ふ事にし樣ではありませんか。文藝を愛しられる婦人の方々に友達としてありふれた事乍ら私の感じた儘を申上げる次第で御座います。

「日本の社會」研究

今までの日本の歴史といふものは、そのすべてが戰爭の歴史であり、政治の歴史であり、外交の歴史であり、忠臣傳であつた。そして日本の庶民社會の發達について說いた歴史は一つもない。これ今までのすべての歴史家が、戰爭とか、偉人とか、政治、外交以外の頭腦のなかつた結果だと見られる。カーライルは「歴史は英傑の傳記である」といつたが、我國の歴史家も彼一流の如き間違つた考への持ち主であつた。

茲に於て社會問題の歴史卽「日本社會史」を、要求したくなる。我國には社會史なるものがないために、大古乃至中古、近代に至るまでの社會組織、社會階級、社會問題の研究に苦しむのだ。しかし、何處の國でも必ずいつも社會問題は介在する。貧富の鬪爭は必然的に介在する。

たとへば上古には氏族制度の社會があり、氏姓を有する氏族と半自由民、非自由民との間に鬪爭があつた。そして土地問題で爭つた、これが社會問題の我國に於ける第一の階級鬪爭であつた。大化改新によりてこの氏族制度は破壞されたが、奈良朝では、奴隷制度的勞働組織の時代であり、そしてその時代には班田制度で呪はしい問題を惹起したのであつた。

平安朝に至りて再び貴族制度が復活されたのであつたが、そこに貴族、僧侶、庶民、奴隷、地方豪族との各階級が對立して、土地所有の問題と、土地兼併との抗爭で白熱的態度を示した。

鎌倉時代では、五階級の間に、土地問題と德政問題とが存在し、室町時代には土一揆があつた。

德川時代に封建制は完成され中央集權の齊擧り九階級軋轢し、米價調節の如き重大なる社會問題が起つた。明治維新でこの九階級は撤廢されたが、しかし重要なる社會問題は却つて煩く持ち上がつてくる一方であつた、殊に大正になると問題が具體化して、各階級が智識的に目醒めて對立の姿いよ〳〵物凄くなつて來た。

その爭端は何れも分配の不公平による貧富問題に歸する。つまり根本は經濟問題である。

我國の經濟史の權威である京大教授本庄經濟學博士は、上古より大正に至るまでの社會組織、社會階級、社會問題を討査して「日本社會史」なる一著を公にした。

我國の社會史として始めての著書である丈け多大の界待をかけられている。われ〳〵は本書によりて我國の歴史の缺陷が補正され得ると信ずると共に、本書の公刋が世界的に重要な結果を齎らし得ることを信ずるものである。敢へて日本を研究する人々へその一讀をすゝめるものである。

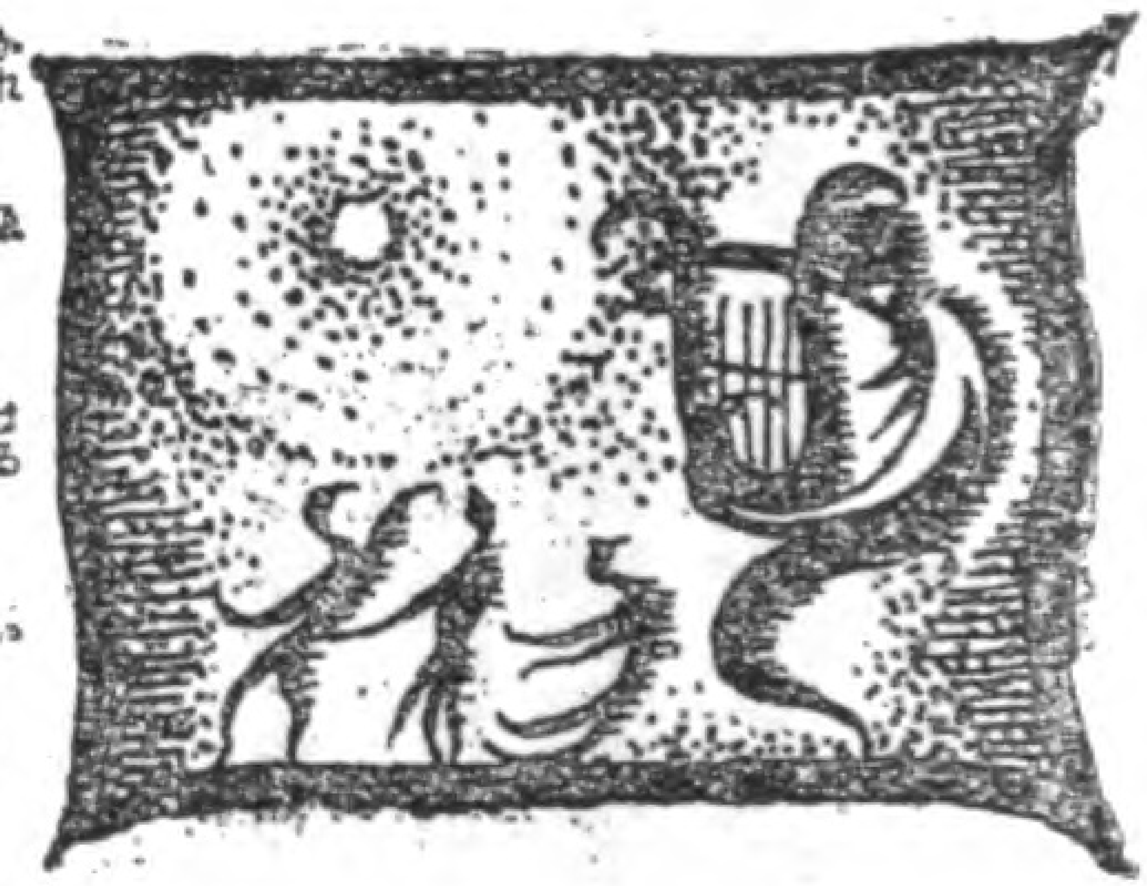
（日本社會史　定價一圓八十錢送料十七錢　本庄榮治郎博士著　改造社發行）



春　ムンク作

異端の畫家ムンク（推選）

吉田八重子



彼の繪に「春」と云ふのがある。

窓の上には小さな鉢が幾つも並べられて居る。而してそれ等の鉢の一つ一つにも春はおとづれて、さゝやかな花が咲いてゐる。薄地のカーテンは半ば開かれて、其處からはうらゝかな光が室一杯に流れ込んで居る。丁度その光に向つて病み上りの若い女は力なく椅子にかけて居る。膝の上におかれた手の間には、白いハンカチーフがふるえて居る。久し振りに彼女は日の光を見るのである。

けれど其の蒼白くほつそりとした顔には、何の喜びも現はれては居ない。半ば閉ざされた眼、うすい眉、尖つた顎には暗い死のかげが漂つて居る。倦怠がどうする事も出來ない程に深く彼女の身體に巣くつて居る。而してそれから抜け出すには恐らく自分の身體から迄も抜け出して了はなければならないだらう程に、その倦怠は彼女の肉體のあらゆる部分に、病氣と一緒に溶け込んで居る。我と我が身を見つめて、幾拾日かを苦悶に又焦燥に費した後の疲勞と諦觀から來る靜けさが、彼女を此處に落ちつかして居るのである。

彼女の横に、彼女の方を見つめて腰かけて居る老婦人も、スツカリやせて骨等が眼立つて見える。手には編物を持つて居るが、それは全く持つたまゝに過ぎない。恐らく老婦人にとつて、そんな事はどうでもいゝ事だらう。

娘の長い〳〵病中のその心勞、それからやつとかうして起される迄に介抱して來たと云ひ乍ら、此のうらゝかな光と娘の顔とが、餘りにもいたましい對象なのに彼女の心は一杯に

なつてゐるのである。而して恰も笑ふ事を忘れて了つた人の様に其の表情を嚴肅にして居る。全くその嚴肅な心の中に、どんなに考へねばならぬ多くの事を持つて居るだらう。娘の事、自分の事、これから先の事や過去の事、生計の事等と、老婦人は世の中の家政上の心配を殘りなくその身に引きうけて居るのである。

誰しも此の繪を見る者は此の娘の命の長くないことを知るであらう。而して春の光も甲斐なく、急に絶望のどん底にぶち込まれて了はなければならぬ老婦人の恨みを想ふであらう。

然し「春」の特色はたゞこれ等の人物の表情やその構圖の上にのみあるのではない。其の繪の一面に溢れて居る、やつと春になつたばかりの光と、その光を吸收し樣とする生命の弱い力が錯綜する所である。悲しいメロデイーである。けれどもそれはたゞ悲しみばかりではない。かうして光を見ると云ふ、此處にも言葉をもつて表現するには餘りある所の歡喜がふるえて居る。而して此の歡喜あるが故に、此の繪のメロデイーは益々悲しく涙ぐましきものに、而して此處に光あるが故に生命の微動はいよいよきやしやに弱くなつて居るのである。

ムンクは諾威の小丘地方の或る醫師の家に生れた。その家は光に乏しい暗い自然を背景にした小さい街であつた。彼は幼い時から彼の兄弟と共に殆んど病氣をし續けて居た。而して子供の體質の弱いと云ふ事が、彼の家庭を陰鬱に非常に嚴肅なるものにして居た。ムンクの藝術は此處に育まれたのである。彼は決して光に滿ちた人生を描かうとはしなかつた。華かな踊子だつたらドガが居る、巴里女の豐饒な肉體だつたらルノアールに委すがいい。ゲランやマチスもそれに劣らず見事な筆致を示すだらう。印象派の畫家ゴーギヤンやゴツホは光を求めて南へ／＼と旅行した。けれどもムンクは一人人生の暗黑面に生活して居る。彼は光を追はうとはしなかつた。與へられた自然の中に、一人一人の人間の魂を見つめて行けば、彼にはそれが十分の話題となるのである。瞑想的な而して象徴主義的傾向は彼の性質と彼の環境とにあつた。

ムンクにとつて、自然は餘りに偉大に、人間は餘りに貧弱であつた。彼は此の感情を子供と風景や「嵐」「叫び」等に立派

に表現し居る。

子供の世界では森がお化になつたり、太陽が笑ひかけたり一本の樹の枝振りが狐の頭の恰好に見えたり、雲が玉座になつたり、それから又知らない男に出合すと、その人の大きな體つきや小さく鋭い眼光から、人買ひだと思ひ込んだりする。幻想的な彼らの頭には或る不圖した瞬間、いつも見なれた風景が、途方もなく大きく不思議な形體に映る事があるものだ。「子供と風景」はこゝを捉へたものである。

ムンクは陰鬱な病的な作家である。それに彼は陰鬱なるもの病的なるものゝ唯一の友達である。彼程人間の心の神秘的な恐怖を強く感じて居る者はないであらう。而して彼程又此の恐怖を美事にカンバスに塗りつけ得たものはないであらう恐らくムンクの繪からムンクの此の神秘的な恐怖を取りのぞいたら、それは一個の空しい形骸たるに過ぎないだらう。

自然の偉大さと人間の弱さをまじ／＼と見つめて居る、其處から彼の「叫び」も産み出され樣し「嵐」も製作されるのである。

我と我が魂をひつしと抱いて、その纎弱さに自らすゝり泣く人々のやる瀬ない戰慄、空洞の中から咆哮する樣な聲をしぼり出し乍ら、それが又空しく虚空に擴がつて行く音波。ムンクは自らの力を持つてこれ等を表現し得た。が彼は自らの力よりも矢張り自然の生命を恐れずには居られなかつたのである。

而して、「病める兒」を描き、「臨終の室」を畫く彼の氣持ちは、全くたとへ樣もなく暗かつた。

戀愛すら彼を救ふことは出來なかつた。それは彼にとつては一つの苦しみだつた。情熱の苦しみだつた。

サロメは「ヨカナーンよ、戀の味は苦い」と慨嘆した。すれば戀は誰にとつても一種の苦痛かも知れない、然しムンクの戀は其處にある特別なやる瀬なさを持つてゐるのである。

「吸血鬼」に於て女はふくよかな肉體の持ち主である。それは彼の作には珍らしい程にいゝ肉づきをして居る。柔かな腕豐かな圓味をもつた肩、而して其處にはフサフサと髪が波うつてゐる。

彼女は男の首にしつかりと接吻してゐる。女の膝に突つ臥

した男のひしやげた顔の半面が見えて居る。窒息する様な瞬間である。けれども、此の戀の此の接吻の中に感じるのは決して〱喜びではない甘さではない。相抱擁する二人の快樂ではない。斯うした鋭い場面にかゝはらず、ムンクの手になつた戀は、ムンクに深い悲しみが泌み出てゐるのである。戀すら救ひ得ぬ人の呪咀の瞥見なのである。

世の中の冷たさに生きる事の辛さが、いやが上にも二人の情熱を高まらせ、いやが上にも二人はしつかりと結合し様と焦るだらう。さうだ焦るだらう。女は男の生血の最後の一滴迄も吸ひ上げて了ふに違ひない。それで居て尚其處に空虚がある。滿たされざる空洞がある。此の空洞を空洞のまゝにムンクは繪面に投げ出したのである。

「黎明」にした所で其處に何等の痛快さがあらう。女は酒を飲んだのである。多分其處には此の女のお氣に入りのお客樣があつたに違ひない。彼女等は飲んで歌つて騒いだであらう。けれども力なくベッドの上に投げ出してゐる彼女の足はどうだ、ベッドから滑りおちて居る彼女の手はどうだ。其處にも尚人生の快樂が殘つて居ると云へ樣か？。

快樂はやがてかうした醜い結末となつて了ふではないか。

けれどもムンクは決して其れ等を戒めの意味で畫いたのではない。藝術は勸善懲惡を目的として居るのではないのだ。

如何に果敢なくとも。それを求めずに居られない人間の快樂でないか。如何に苦しくとも殆で意志とは無關係に煽りたてられる情熱の戀ではないか。其處に人の弱さがあるのだ、意識し乍らも救ひ得ないと云ふ。

ムンクは總てを體驗して居た。彼は此の弱さをも知つて居た。而して彼は弱き人々病める人々、子を失つた人々の苦しみと運命に對する恐怖に面接する毎にたゞ畫かずには居られなかつたのである。

科學の話

若き植物學者の手帳から

京大植物學教室 土居格

一

アンドレエフの小説であつたと思ひます。兵士が疲れ切つて重い銃を下げながら炎天の下をあえぎあえぎ行進するのです。夏の太陽は赫々と頭の眞上に輝いてゐます。風は少しもなく見渡す限り目に入るものは皆この烈日に征服されて、眞晝中であるにかゝはらず物音が變にから響きする樣な靜寂さです。水筒の水はすつかり失くなりました。そして兵士は半ば夢中で歩くのです。ふと兵士の目に、草いきれと共に、焼き付く樣な太陽の下に少し項だれてゐる草叢が目に入りました。ところがそれと同時に彼は急に物怖えのした樣な感じが頭の上から足元まで鋭く傳つたのです。そうすると目に入る草、木、森、皆物恐ろしくなつて來ました。彼は冷汗を額から流しながら、唯だ何となく追ひかけられる樣な思ひでよろよろする足を早めるといふ話があります。

私共もそう云つた樣なことを度々經驗致します。丘をめぐる森、流れを覗く草むら、いづれもなごやかな心持で見るといつも平靜で物なつかしいものであります。ところが、ひよつとすると、この動くことなき植物の姿が物恐しいまでの脅迫を私共の心の上に加へることがあります。それは平生、あまりに植物と云ふものゝ平靜さになれ切つて、かつて彼等の中に生命の動きと云つた樣なものを考へたことのない私共が、何かの機會に偶然、彼等も亦生命と云ふものを持つて、自ら動いたり、話したりこそしないが、やつぱり外界の色々の障害に打勝つて、己の命を延さう、強めやうと犇いてゐるのだと考へ付いた時で、この時には、もう彼等は私共に取つて「動かぬ生物」ではなく何か恐ろしい力を持つて私共に無言に押し迫つてくるかの樣に感ぜられるのであります。

例へば夜更けて誰もとほらない森の中に入つて星空にうつ

る太い幹の黒々とした形や、風の渡る毎にささやく様な小枝の姿をぢつと見てゐて御覧なさい。急に物恐しくなつて逃げ出し度くなるでせう。又製材場に行き、丸鋸にかけられつゝ一千年以上もかゝつて、やつと大きくなつた木の幹が、わけもなく切り刻まれて行く響きをきくと、なんとなく陰慘な心持になつて、その邊に轉つてゐる材木が如何にも「殘骸」だと云ふ感じがするでせう、又ある病人が私にかう云つたことがあります。彼はもう三月以上も病床に横つてゐたのです十一月です。物寂しい日が暮れかゝります。「あゝ今日も暮れるのだな」としみじみ感じてゐますと、枕元でチ――と鋭い然し、深い洞穴の奥の方からでも聞えてくる様な音がしたのだそうです。何だらうと思つて目を上げて見ます、と何もありません、十一月も終りのことですから蟲も鳴きそうな筈がありません。何か空耳だらうと思つて枕にかへりますと又チ――とそれは陰氣な音がするのです。二三回同じ様なことをくりかへした後、彼はふと枕元の藥戸棚の上の花瓶に目をつけました。花瓶にはそのわびしい病室には不似合なほどの立派な菊、そうです、薄黄色の花をつけた菊が活けてあつたそうです。花瓶は死んだ魚の目の様な色をしてゐましたが、どうも音はその中でする様な氣持がしたのです。それで彼はそつとその花瓶を下ろして耳を中ててみると、二三分の後、案の定、チ――と云ふ音がしました。そして彼は、それがこの菊の切枝の力強く水を吸ひ上げる音だと氣が付いた時、急に骨の髓を傳ふ一種の恐怖に襲はれて、そのまゝ大地に引き入れられて行く樣な幻覺に引き入れられて止つたと云ふのであります。

二

私共がかう云ふ感覺を植物から受けることは少くありません。特に自分の心持が沈んでゐるのに、あたりの植物が旺盛に見える時などは全く自分が植物に壓倒される樣な氣持になるのです。

而し今少し立入つて植物を見ると、仲々こんな場合が少くないのであります。私は詩人ではありません。空想と云ふ美しい心の動きをたのしむ權利を奪はれた人間でありますが、時々は冷たい研究室の隅つこで思はぬことに出會すると、この私共の上に加へられた掟をひそかに破つて、溜息をつくことがあります。それは造化の神の神變不思議なトリックに驚くと云つた樣な通り文句の感慨でも何でもありません。唯だ何となく物恐ろしくなるのです。深夜に蠟燭を持つて自分の顔を鏡で見ると云ふ嫌な遊びがありますが、丁度あの時の樣な

感じとでも申しませうか。植物の上に於いて見るいろいろの事實、それは全く「生き物」の生命の現はれでなくて何でせうか。話す、動く、それはたゞ生命の一部の表現にすぎません。そして私共が、この表現のあるなしで、私共と植物との間に先天的に定つた大きな溝があると信じてゐる間は、花が咲いても、實がなつても、それは唯だ風が吹いたり、水が流れたりするのと一寸も變らないかの様に思はれます。然し乍らある一寸の機會にふと、私共とこの「動かぬ生物」との間を結ぶ大きな綱に觸れてみると、私共は急に何者かに襲はれる様な衝動を受けるのであります。

三

野に咲く草の花は心ない散策者の杖の先に、わけもなく散ります。傲りを極めたダリアも一夜の霜に見る影もなくなります。見上げる様な樹木でも樵夫の斧の先に地響打つて、數千年の命を唯だ、一時に失ひます。かうして、いろいろな植物の姿を見ると、植物と云ふものは、まるきり己の命を延さうと云ふことに執着のないものの様に見えるのであります。これをいがみ合ひ、犇き合つてどうしてでも、己より他の者を打ちたふそう、勝たうとしてゐる動物の淺ましい姿に比べて何といふ物優しげなことでせう。

然し乍ら植物だとて決して外見の様ではないのであります。セイロンベンケイソウは枝を切つても、空中に糸で釣るしてをくと、どんどん芽を出し、根を出して來ます。葉を一枚切り取つて釣るして置いても、その葉緣の切れ刻みから、小さな芽木が一本づつ出て來るのであります。また親木の頂芽を摘み取つて生長を止めると、生きやう延びやうとする力は、その出場所を葉の上に見付けて、こゝに親木につき乍ら生活する若木が千手觀音の手の様にぬく〳〵と出て參ります。どんなに迫害されても、生き様とするその力は淺間しい許りに旺盛なものであります。ベコニアの葉を刻んで恰も種子を蒔く様に砂の上に置くとその細片から一本一本の新しい若木が出て參ります。タンポポの根を取つて賽の目の様に刻んで同じ様にして御覧なさい。それは少しも種子を蒔いたのと變らないでせう。またカビなどになりますと、瓶に水を入れて沸騰させても、二三週間たつと必らず中から何かしら生じて來ます。町を歩くとよく軒先の街燈の丸い笠の中に、一杯綠色の水が溜つてゐるのを見掛けます。あれは大低セネデスムスと云ふ小さな種々雜多なかがり細工の様な美しい形をした藻類であります。夏になると御濠の水が眞青になりますが、あれもミクロシステスなどと云ふ小さな植物であります。こ

れ等の植物が、どんなに高いところでも、遠いところでも少しでも己に適當したところがあればすぐそこに、たゞ一個の個體から忽ちの間に繁殖して殆ど他の者の混住を許さない位に榮えるのであります。眞綠になつた丸の内の御濠の水の中には、これ等個體の幾百億がゐることか。而もその到底想像し得られないほどの數の植物がたゞ氣まぐれに空中を風に乘つて飛んでゐた一つの個體からわづか數日の間に繁殖して止ふその力の強大さは、物恐ろしくなるほどではありませんか。殊に私共が、何か、特殊のものを丈け養つて見たいと試みる時に、つくづく此等小さな植物の自己主張のあくどさに嫌になることがあります。注意して瓶と溶液を數百度に熱して置く栓をしても、何時の間にか小さな侵入者は入り込んで來るのであります。それは栓の隙間か、私共の注意の隙間からか恰も惡魔の影の如く入り込みます。そして人の知らない間に勝手に己の家族を尨大に繁殖させて止ふのであります。

春先など、よく庭石を起して見るとその重い石の下に、眞白になつた草の莖がうづくまつてゐることがあります。重い石の下になつて、日の目も見られず乍ら、到底生き延びられないと知るか知らぬか、とにかく育つ丈けは育たうとする姿に恐れを抱かされるのであります。

これ等の力が全く無言の間に行はれるところに、何となく物凄い氣分が添ふのであります。そして私共が活氣よく動いてゐる間は、この無言の力を感ずる樣なことはありませんが例へば深夜すべての物が眠りに歸した時の樣に、靜寂と云ふ背景の上にたゞ植物の姿だけが浮き出されると、私共は急に植物を死物として見ることが出來なくなつて、何となく私共は威嚇されてゐるかの如く感ぜられるのであります。

四

植物の生活は靜かであります。全く平かな曲線を畫いて生び立ちます。でありますからたゞ漫然と延び行く姿を見ても私共は、生き生きした生活の現はれを想像することが出來ないのであります。しかし乍ら一見はげしく活動してゐないかの樣に見えますが、實はそうでなく、根の先から梢の上に至るまで、或は實をむすぶ準備をしたり、或は丈夫な幹を作らうとしたりして、二六四時中休む暇もなく活動をしてゐるのであります。特に、私共の胸の中に絶えざる心臓の鼓動があるかの樣に、その幹の中、莖の中には、あけてもくれても止むことのない動悸があつて。或はキリストの生れる前二千年の昔から今日に至るまで、生きやう、延びやうと犇いたり、或は峻嶺に嵐と戰ひ乍らわづか二ケ月の間に花を咲かせて實

を結ばうとあせる者もあると聞くと、何となくあはれげな心地さへします。

この事は印度のボゼーと云ふ學者が發見したのでありますが、大きな樹でも、小さな草でも皆なこの絶えぬ動悸によつて、水を順々に根から上の方へ送り揚げてゐるのでありますそれは恰も私等の血をめぐらせる心臟の働きに等しいとでも云ひ得ませうか、たゞ植物では、この心臟は體の一部に獨立した器官ではなく、根から莖の頂きまでに順序よく配列された一つの系統となつてゐるのであります。

一體細胞、特に植物の組織を作る細胞は、丁度氷袋に水を充たした樣なものであります。草の樣な柔かな組織のものも、相當しつかりして横たふしにならぬのは、細胞の中に、液體が一杯充ち充ちてゐて、張り切つてゐるからであります。だから植物を炎天に曝して乾かせたり、又は濃い食鹽水に漬けて、細胞内の水を吸出したりすると、丁度氷袋の水がなくなつた樣に細胞が柔かになり、從つて植物全體がしほれて止ふのであります。所がこの水の失ひ方が、體の部分によつて變ると色々な現象が起るのであります。特に面白いのは、甲の部分が乙の部分より餘計に水がある、則はち甲の場所は、張り切つて固くなつてゐるが、乙のところはしなびてゐる樣な時には、常に甲から乙の方へ向つて電流が流れるのであります。例へばオジギソーの葉に手をふれると、忽ち眠つて止ひますが、あれは葉柄の根元にある一寸ふくれてゐる葉枕と申す部分の細胞が平生は水を一杯溜めこんでゐてしつかり固くなつて自分の葉を支へてゐるが、一寸刺戟をうけると忽ち水を失つて柔かくなり、も早葉の重みに耐へられなくなるから所謂眠りの現象を起すのであります。そこで眠りが起り始めると、葉枕の部分の水が他の部分よりよほど少くなるから、もしこの部分と他の場所とを針金でつなげば、一時電流が流れるのであります。ボゼーはこの理を應用して植物の鼓動を測定したのであります。彼は色々な實驗の結果、莖の水を通す部分の細胞は廿五秒毎位に水を失つたり、取り入れたり丁度ポンプの樣な働きをしてゐることを知つたのであります植物の體では、水は恰も私共の血液に等しいものであります血液がいろいろの養分を、體の諸方に運んで、そこの組織を養つてゐる樣に、植物では種々の成分が水の中に溶け込んで

體中を運搬されるのであります。小さな種子が根を下ろして芽を出してから、幾十尺の大木となるまで、命のある限りこの細胞の鼓動は止みません。それは丁度私共の動悸と同じではありませんか。殊に私共の心臟でも心耳と心室との收縮の週期が一囘喰ひ違つてゐるため、私共の右の手の先と、左の足の先とを針金で結ぶと、鼓動に從つて變化する電流の强さを見ることが出來るのでありますが、この變化と、ボゼー氏が植物の鼓動によつて得た電流の記錄とを比較して見ると通切に互に似てゐることに氣が付くのであります。

無心な草を眺めて御覽なさい。あなたの家の庭に生えてゐる御先祖の植ゑられた老木を御覽なさい。そしてその飽くまで靜かな成長も、その中に刻々波打つてゐる動悸の一々のきざみから作りたてられて行くことを御考へになると、どんなに生物と云ふものを作つて行く生命の力の力强くて、普遍的なことに驚かるることでせう。

五

私は再び申上げます。私は詩人ではありません。しかし什ら乾燥無味な仕事をつゞけて行く奇人でもないと思ひます。

白村先生は、植物學者は美しい草花をむしり取つて紙の上にぺちやんこに押しつけて、何の臆面もなく番號を打つて、ラーベルを張りつける男だと罵られたことがあります。けれ共地上に落ちた一片の枯葉にすら、自然と云ふ者の力を感じて怖く若き植物學者もあることを御存知なかつたのであります。吾々の時代の生物學は、たゞ物を採集して名前をつけることが最終であつた時代よりはよほど變つてをります。そして人の稱して穴藏と云ふ研究室の隅つこで溜息をつくだけの境界を持つてゐるのであります。

（終り）

砂

彼は飄然として來り、又飄然として去つた。文豪イバニエスの出世作「血と砂」は彼を記念すべく本日發賣す。

本書は彼の來朝のとき翻譯權を本社が新に獲得せるものです。

定價 金貳圓六拾錢
送料 金拾九錢

刊行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社



桃咲く頃と少女の日

桃の花三題

九條武子

桃山の莊

桓武帝の陵をはじめ、明治大帝の神ながら靜まりいます京の南桃山のあたりは、國民思慕の地であることは申すまでもありませんが、小さく考へて私自身としても、あの宇治川の流れの樣に思ひ出はよどみなくながれてやみません。

比叡おろしの寒さに庭木の霜よけ藁をとりかねてゐる京の町へ、桃の花をまつさきに賣りに出るのは此處からだと云ふことでほんとに名にしおふ桃の花のあるところです。

晩年病みがちであつた父は、此桃山の小だかい丘の上の山莊に暮してをりました。八幡、山崎は見はるかす霞のはてにうす消えて、左手の山は木幡の里、うしろの丘は今も乃木神社から御陵參道にかけて一體の茶畑がつゞいてゐます。暖かいので家のまはり、日あたりの一坪二坪の地には、みんな獨活のもやしをつくつてます。――方言ではウドアカマといふて

ますが――土をもり上げて可愛いゝ小川がいくつもあるのがそれです。そしてその上に三月の陽は陽炎となつてゆら〳〵ともえたつて居ます。全く洛南の氣分をたゞよはせる毎日、明るい暖かな日がつゞくのです。こゝらの女達はみんな器用な指先で鹿の子内職をしてをる家が多く、連翹の花と桃の花瓣金から紅に小さな鳥が終日きて遊ぶ。なんといふ靜かな處であつたでせう。川のながれがひた〳〵と入江の蘆にわかれを告げてゆけば、土手の土筆坊がそろ〳〵よからうかといつた風にぬつくり頭をもちあげて日毎に數がましてゆくのも山荘のたのしみであつたのです。桃山。その名さへ春にふさはしい。京に入る春の女神の最初の一歩をこゝにふれてゆくのでせうか。自分はよく今でもこの山荘をなつかしいものにおもつて歸洛の度毎に訪ねます。ほんとうにそれは桃色のおもひでといつた心地にひきつけられました。

ねたみやごまかし、痲薬や因襲で誤解の環視からすつくりのがれ出てこの思ひ出の地に草の庵をむすび、人を感化する慾の無い自分ならばせめて自分自身を冒瀆することもなく、そしてこの圓満な自然の愛に調和した自分の愛といふものをほんとうに目覺めて見たいと。

桃の花傘

九州の南熊本縣と鹿兒島縣の境を一週間ばかり旅行したことがありました。

村から村へ寺から寺へとたくさんな人が私をまつてゝ下さいました。藪陰に鶯がないて、眞赤な椿の花がいくつも流れてくる小川に添つた小徑を車やる日やら、ひろ〳〵した麥の畑の眞中を自動車馳せさすることゝろよさ、何にしても春は爛熟の頃とて櫻も咲いてをりました。木蓮も海棠も、それよりも私の眼を引きつけたのは美しい桃の花で、京都ではあまり此種の大きな木を見たことがありませんが、それはもう、ゆく道先に目のさめるやうな八重の桃の花、しかも枝が柳の樣にしだれて白と桃色のさきわけなのです、ことに宿りました寺の書院の軒には、おほひかぶさる樣な此しだれ桃が右を白、左を紅といつた風に咲きわけて、花がたわゝにと云ひたい程見事に咲いてをりました。其日の用事がはてゝから夕日のおちるまで其椽側にあかずながめてをりました。寺門の方からづつと土地がひくゝなつて豆畑でつゞいてをるので、夕雲雀がさへづりつゞけてをり、すぐ下の道を閑法の人達が打つれて歸つてゆきますのもよう見えました。丁度この人達の

心の様な美しいたそがれです。功利、打算、僞瞞と技巧、の巷をふとおもひますと心がふるへます。さうしたなかの文化に住み馴れては敢てかへり見る心地さへ痲痺しがちな私はほんとうに繁閙の繫縛にかゝつて居るのであらうもしれぬ、都へは歸り度くない、ほんとうに歸りたくない、こゝにこのまゝせめて春の逝くまでなりとも純な人たちにまもられて、自然の恵みにひたつてゐたいと思はずにをれませんでした。而してこの桃の花のやうにやさしい村の少女達の上に春の愛護を祈つたことでした。

西王母

私が十一か十二の春の頃、ある日祖母や母達がよつて振袖模様の品さだめにあれやこれやと選んでくれました。これにも美しい桃の思ひ出がうかびます。祖母は文政生れの、その頃でもう八十近かつたとおもひます。お祖母さんのお好みなんかいやだなあと小供心にひそかに不平を抱きはじめました。私はそれでもおとなしうだまつて居ました。祖母はむかしの御所文庫から幾枚もの下繪をとりだしました。そしてこれが着せて見たいとひろげました圖は今思ひますと西王母なのでせう肩から袖にかけて「三千とせに」と御家流に文字をかき流し肩には松の縫に、源氏雲は金糸でとりあはせ、裾が一面の桃林だつたとおぼえてます。地色は鴇色なのでした、あんまりうつくしいので私の小さな不平はたちまち消え去りました。ほんとうに今でも眼にのこつてます程美しい着ものでした。まうひとつは肩がやはり松と藤とで、裾だけがこれは又櫻の縫に衿下のあたりから瀧が染め上りとなつてをりました。つまの處に鼓がそれに配されてありまして、地色は上が紫で下が桃色のぼかしの事など朱描さへ入れてありました。母もそばにゐる人達もその一層はで〳〵しい方にといふことになつてしまつて、ひとり祖母は心のこりさうに私のすきな西王母をたゝみはじめました。私は泣き度い程をしいとおもひましたけれども、我まゝをいふことはあとで恐ろしく叱られるこわさから。おとなしう見てをりましたが桃の着ものはどうしても着せてもらへませんでした。今もとき〴〵おもひます。あんな着ものをふさはしい少女に着せて見たいと。しかし西洋人形の様なおつむりではどうかとおもはれますが。

雛壇の毬

小川靜枝

春風にこかすな雛の駕籠の衆。

とやら言つて、元祿の始頃までは、雛の使といふ事が行はれ、草餅を行器に入れ、醴を錫に入れ、小蛤も澤山に節句の禮とて、雛を乘物にのせ、樽行器を釣臺に乘せて、親類へつかはしたさうですが、いかに古風な土地でも、今頃こんな雛の使なんぞを出すところはないでせう。あの燃ゆるやうな緋毛氈の雛壇の上に並ぶ白酒や菱餅の姿は、大抵どこの地方に行つても見られることで、その外それ〲ところによつて土地の習慣の特種なものが見られるのも珍らしくはありません。雛祭りといふと、何かしら少女達の心はときめいて、お互ひに招いたり招かれたりするのが、樂しみなものです。私が十四の年、鹿兒島で、親しいお友達の家の雛祭に招かれたことがございました。そのお家では、別だん外にお客を招いたわけではなく、私一人だけを「お遊びに。」と言つて呼んで下さつたのでして、舊いどこのお家でもよくある、代々傳はつて來たところ〲蝕ばんだ古雛樣を見せて下さるおつもりなのでありました。親しいお友達の名は春子さんと言ひました。

春子さんのお家は昔氣質な士族で、お父さまはもう世を去られてお母樣だけが詫しくお子たちを育てゝ居られました。十年の戰ひに西鄕隆盛が討死した城山續きの山の中段に春子さんのお家がありました。さうして、いかにも武士の家の構へらしい古風な門が開かれて居りました。私は學校から歸るといそ〲してこの門の前へ來たのです。もう其の頃鹿兒島は陽氣がずつと暖いので、地面に陽炎が燃えて、崖の石垣の間には可愛らしいすみれが咲いてゐました。下駄の赤い鼻緒を見つめながら石段を上つて行きますと、春子さんが玄關の方から出て來ました。二人は直ぐにお庭へ入つて、お小座（離れ座敷のやうな部屋）の方へまゐりました。「お上んなさい。」といふ優しいお母樣の仰せに導かれて、私は春子さんと雛壇の間近に座を占めました。それからは木立を透して、錦江灣が靑く光つてみえ、櫻島が心地よい春の日にのんびりと眠さうな姿を横たへてゐました。私はこの土地へ來て始めて招かれた雛祭りの嬉しさに、先づ雛壇を仰いだのでした。

「これはお祖母樣の、これはお母樣の。」と春子さんが指して下さる古雅なお雛樣には、なんとも言へぬ懷しい氣持がいたしました。ずつと小さい時に東京の十軒店で見た出來合ひのお雛樣などと違つて、遠い南の國の古い歴史が、このお雛樣の背景になつてゐるのであらうと、乙女心にも思つたのでありました。その時、お雛樣と同時に私の心を捉へたのは、幔幕の前に四つも五つも下つてゐる大きなそれは〲綺麗な毬で

した、「まあなんていゝ毬だらう。」私は思はずさう言つて、その毬を下からぽんと突き上げたいやうな氣持ちになつて、へッと手を引ッ込めました。毬は年數が經つてゐたと見えて、だいぶ埃をつけてゐましたが、虹のやうな絹絲で十重廿重にかゞつてある精巧さは實に美事なものでした。これが一つ一つ違つた際立つた色で配合よく配置されてゐるので、一層美しく見えるのでした、私も小さい時にはかゞつた毬をみないことはありませんでしたが、これほど大きな美事なものは嘗て見たことがありませんでした。

「ほほ……そげん好しござすか。」私があまり感心してゐるので春子さんのお母さまは、眉の跡青く、もう大分色艶の褪せたお顏に笑を浮べられました。さうして、お手づから料理されたお膳や、打ち菓子と言つて、麥こがしを櫻や貝の形した型に入れて打つたお菓子や、お藥といふ羊羹のやうな土地名物のお菓子を御馳走して下さるのでした。私はそれから春子さんと琴なぞを彈いて、樂しい一日を過して歸りましたが、あの雛壇の上にふら〳〵と下つてゐた美しい毬のことが、寢てからも忘れられませんでした。毬は地の上でつくものと決つてゐるのに、それが宙に吊り下つて、ふら〳〵してゐるのにも興味は惹きつけられました。あくる日、私は春子さんの家に古くから使はれてゐた女で、其頃私の家のことも手傳つてくれるお光といふ女の家に遊びに行きました時、早速あの毬のことをきいてみました。「ねえお光つあん、あゝいふ毬はどこに賣つてゐるの。私今まであんな綺麗な毬見たことがないのよ。」するとお光は、「何處に賣つてゐるものですか。」と言ひたげな顏をして、日頃の口重にも似ず、よく話して聞かせて呉れました。あの毬の名は余助毬といふのださうです。いつ頃から傳はつたものか、兎に角古くから薩摩武士の妻女の優しい手によつてかゞられた毬なのです。明治の初め士族が祿を離れた時、常には衣食に事缺かしたことのない薩摩藩士でも、流石に家の内は火の消えたやうで、今更に時勢の推移を歎かないわけにはゆきませんでした。其の時です、健氣な士族の一人の妻は、何かの術をもつて、その生計のたしに充てたいものだと、思ひついたのが余助毬でした。あの毬ならば町へ持つていつても決して恥かしくない、子供たちの立派な玩具にならうと、すぐにそれを拵へて、下女達に町に持つていつて賣らせました。それが忽ち士族の妻たちの間に傳はつて、そのうちには毬ばかりでも面白くなからうと、押繪を添へて賣り歩く人も出て來ました。春子さんのお母様もそれを拵へ、晝は人目が多いので夜になると、先きに立つて、下

女やお光と一緒に町へ賣りに歩きました。
『金助毬わあい――押繪わあい。』
と呼ばゝる聲が町の辻々に聞えました。
「あの時分な奥様もお若くてな……。」と語り終つたお光は昔の夢を追ふのでした。成る程あの毬にはそんな挿話もあるのかと、私はいまも時々あの美しい毬のことを思ひ出します。

雲母片

中條百合子

わかい、氣のやさしい春は
庭園に美しい着物を着せ
――明るい時――

林町の家の、古風な縁側にぱつと麗らかな春の白い光が漲り、部屋の障子は開け放たれて居る。室内の暗い長押にちらちらする日影。時計の眩ゆい振子の金色。縁側に背を向け、小さな御飯臺に片肱をかけ、頭をまげ、私は一心に墨を磨つた。

時計のカチ、カチ、カチカチ云ふ音、涼しいやうな黒い墨の匂ひ。日はまあ何と暖かなのだらう。

「ああちやま、まだ濃くない？」

母は、障子の傍、縁側の方に横顔を向け、うつむいて弟の縫物をして居た。顔をあげず、

「もう少し」

丸八の墨を握つたまゝ、私はぴしや、ぴしや硯を叩いて見た。自分の顔は寫らないかと黒い美しい艶のある水を覗いたそして又磨り始める。

何處かで微かな小鳥の聲。

見えないところに咲いて居る花の匂ひが、ぼか／＼した。眠くなる春の光に溶けて流れて來るやうだ。

彼方側の襖の日かげがゆれて陽炎が立つて來た。

「もういゝだらう？」

私は、墨で硯の池の水を粘らせて見た。

「どろ／＼でなくつていゝの？」

「この墨は、灰墨ぢやあないから、そんなにどろ／＼にはならないよ。半紙は？」

「こゝ。」

私は、七歳で、眞白い紙の端に墨の拇印をつけ乍ら、抓んで半紙を御飯臺の上に展げた。母は、傍から椎の實筆を執り池

にぽつとりした！圓でくる〱轉して穗を揃へた。その筆を持つて、小さく坐つて居る私の背後に廻つた。

「さあ筆を持つて。――さうぢやあなく、その次の指も掛けて、斯う」

「斯う？」

「さうよ。いゝかえ。一番先にいろはと書いて見よう、ね。よく見て居て、次には一人で書くんだよ。」

母は、生れて始めて筆を握つた私の手を上から持ちそへ、

「ほら、點。ズーツと少しまげて、ちよん。これで片方。此方は、矢張り始めに力を入れて、外へふくらがして――ちよん。」口で云ひ乍ら、三寸四角位の中に一つの字を書いた。

指の覺えもなく、息を殺して白い、春の光に特に白い紙の面を見つめて居た私は、上から自分の手を捕まへた母の力がゆるむと、溜息をついた。

默つて字を眺め、首をねぢ向けて後に中腰をして居る母の顏を仰見た。

母は、私のおかつぱの頭越しに矢張り字を見

「――變な形に出來たこと」と獨言した。

「さあ　今度は百合ちやんの番。書いて御覽。下手でもいゝのよ。」

私は、體ぢゆう恥に熱くなり、途方に暮れ乍ら、被布の房を揺すつて坐りなほした。筆を握つたが、先の方が變にくたくた他愛がなくどんな風に動かしていゝかわからない。正直に云へば、母が、何方から、どう書き出したかも、餘り珍しく熱心に氣をとられて居るので判らない。

暫く躊躇した後、私は思ひ切つて力を入れ、硯に近い右の方から、ぐつと棒を引いて先をはね、穗先もなほさず左側に向ひ合つてもう一本の棒を引いた。

ひどく力を入れた上に、墨がつきすぎて居たので、見る間に紙ににぢみ、折角書いたところは、一面眞黑な墨のぬかるみになつて仕舞つた。――部屋にさす日の光は愈々明るい。

母は、

「まあいやだ！」と云つて、樂しさうに笑つた。

「どうしたの？　これは字ぢやあない。たどんぢやあないのたどんやさん！　さあ、もう一遍。今間違つたよ。そつちからではなく、こつちから。この棒の方から。さあ始めて」

半紙の下には、六つに仕切つた罫の下敷があつた。筆を掴つて瞬きもせずそのはつきりした四角な區切りを見つめて居ると、ひとりでに手が動いてどうしても右から先に落ちる。はつとする間もなく、私は次の一字も右側から先に書き出して仕舞つた。

後から覗いて居た母は、默つて私の手を肩越しに掴んだ。

そして、力を入れ、先刻の言葉が又聞えるやうに思ふ程、はつきりはつきり定りどころをきめて、もう一度、いの字を書いた。そして、たつた一言云つた。「さあ。」

私は、すつかり上氣せあがり、胸がどき／＼してよく眼が見えないやうになつた。母の心持が押しかぶさるやうに可恐く、苦しく、重く迫つて來た。母が心の中で怒り、何故書けないのか、馬鹿さん。と思つて居るのはよくわかる。上手に書きたく、褒められたいのだけれども、筆と云ふものは、何と云ふ手に負へないものか。その上、私の心には字と云ふものゝ感じがはつきり寫らず、母の書いて呉れるいの字も、いと云ふ音には相違ないのだけれど、眼で見れば、少し眞中で曲つた蟹の鋏形の二本の棒としか見えない。それが、どうして、私共の喋る言葉のいなのか。大切な、間違へてはいけない字だと、凝つと見れば見る程不可解な、間誤付く、奇怪な二本の棒になつて來る。而も、私がこんなものさへ上手に書けなくては、學校へなど到底行けないと仰言つたではないかあゝ彼那にいゝ袴や草履が出來たのに！

私は、涙を出しがむしやらになつて、この變ないを組伏せさうと、ぐつ、ぐつと筆をこぢつた。今度も矢張り我知らず右の方から。母は、背後から傍に來、坐つてじつと私の顏を眺めた。見ると、母の眼も、明るい日の中であやしく閃いて居る。

「どうしたの？ 百合ちやん。お前そんなに馬鹿なの？ どうしてちやんといの字位が書けないのだらう。」

母の沈んだ、恥しさうな情けなささうな聲をきくと、私は堪らなくなつた。私は、筆を紙の上に放り出し、始めはしくしく、やがて聲を出して泣き出した。

私は、馬鹿と乞食とが世の中で一番いやな、恥しいものだと思つて居た。もうじき學校に行くその下稽古に書く字が、どうしてだか書けない。字の書けないのはきつと馬鹿だらう。自分もその馬鹿であつたのかと、絶望しきつて涙の止め途がなかつたのであつた。

明治三十九年の春、兒童心理學をまるで知らない若い感情家の母と、幼い未開人めいたその娘とは、暖い十疊の日だまりで、神の微笑さうな涙を切に流した。

霜のない地面から長閑な陽炎が立つ。

雀が植ゑ込みの椿の葉を搖るさゝやかな音。程なく私は縁側に出、兩脚をぶら下げて腰をかけた。膝には赤い木皿に丸い小さいビスケツトが卅入つて居る。

柱に頭をもたせかけ、私は草臥れうつとりとし、ぼんやり幸福で、そのビスケツトを一つ一つ、前歯の間で丹念に二つにわつて行つた。

虹の仙女

リッチー・エム・ハッドレー

二つの小さな雲がある夏の日
空を飛んで行つた。
あんまり早く行つたので鉢合せをした、
そして両方とも泣き出した。

太陽の小父さんが顔を出して云つた、
（オ・心配おしでない子供達、
うちの小さい仙女達をやつて、
お前達の落ちる涙をかはかしてあげよう。）

一人の仙女は紫の着物を着てきた
そして一人は藍を着て、
青、緑、黄、香橙、赤の着物をきて
仙女達は美しい一列になつた。

仙女達は雲の涙を拭ひ去り
そして空から、
光線がこしらえた綱の上に
上衣をかけてかはかした。

外國

ロバート ルイズ・ステイーヴンソン

櫻の木に
僕でなくて誰が上らうか？
僕は兩手で幹につかまり、
はる〴〵と外國を見渡した。
僕は自分の眼の前に、
花で飾られたお隣の庭を見、
また、今迄見たことのなかつた澤山の
氣持のよい場所を見た。
僕は、堀をつくつて居る川が流れ、
お日様の青い鏡になつて居るのを見、

埃つぽい道があちこちに通じ、
人々が其處を町の方へと行くのを見た。

もつと高い木がみつけられたら、
もつと〳〵向ふを見ることが出來よう、
大きく伸びきつた川が船の間を通り、
お日様の中へ滑り込む所までも。

兩手の道がズツと續いて、
子供が五時に御飯を食べ、
おもちやがみんな生きて居る、
お伽噺の國へ行く所までも。

（英吉利の童謡集より）

家庭のためのページ

想像性の教育

倉橋惣三

一

子供の教育は子供のあらゆる性能を發達させなければならない。正しく考へる力、確り知る力、強く行ふ力、皆何れも大切なものである。しかしそれらの正確とか、堅固とかいふことの外に、心の自由な飛躍といふことも缺くべからざる一性能であつて、それも充分に養ひ育ててやらねばならない。

子供が裕かな想像生活をする者であるといふことは、心理學者の說くところであるが、實際に於ては、近頃の多くの子供が、極めて貧弱な想像性しか具へてゐない事實を見てしば〱遺憾に思ふことがある。この事實は一面から云へば、無理もないことであつて、子供がその自然性に於て、如何に想像的であるにしても、今日の子供を取圍む世界は、その想像の當然の發達をさまたげるやうなものばかりが多い。殊に近代的な都會生活をしてゐる者には

この忙しい實務の慌しさ、この機械的な味のない几帳面さ、その中に追はれてをる、或は追ひつめられてをる大人の餘裕のない心、さういふものゝ中に生ひ立たされて、尚かつうるほひのある暢びやかな想像性が、正しく成長してゆくやうにとはかなり難しい話である。殊に、子供の爲めにつくしてくれるといふあらゆる教育が、甚だしきは役に立つ力を養ふといふこと以上に一歩も出なかつたり、たかだか、間違ひのない正しい生活を教へるといふ處に止つてゐるのであつては、自由と自在とを本質にする想像性は何時のまにか萎微せられずにはおられない。併しかういふ世界におかれてゐてもある種類の子供は、容易にその想像性の要求を踏み躙られないで、抑へられれば抑へられる程強くなるその要求を、低級な滿足によつて辛うじて滿してゆかうと

する者がある。此頃の都會の子供達が、飢ゑるやうにして見にゆく低級な活動寫眞や、隠れてまで讀まうとしてゐる卑俗な探偵小説や、講談本の類は、つまり正常に、上品に満たされることを知らない子供の想像性の要求のあやまちに外ならない。或人々はそれらの低級な繪畫や、讀物が持つてゐる色々の罪惡性が子供を喜ばすものと思つてゐるが、子供はまたその内容についての要求を持つて是等に赴く程のものを決して持つてゐない。何處かで自由な想像の奔放を樂しみたいといふ心に他ならない。勿論それらの娯樂になれてくれば内容が與へる惡魔的興味を味ふやうにもなるであらうが、少くともその初めに於いて求むるところは、想像の自由な活躍である。事實家庭、社會、學校、その何れの世界にも子供のために正常な想像性の満足の機會を與へてくれないとすれば、活動寫眞や講談本にでも、その自然の要求に赴かざるを得なくなるのは、見方によつてはいぢらしい位のものである。

つまり、今日の人間の想像性はその芽生のうちにこれが踏み躙られて、機械のやうな心持に育てられてゆくか、又はせつかくの想像性が陽の光を避けるやうな邪惡な方面へ發育をあやまられてゐる。即ちその二つの種類の子供が多いのである。

二

子供が裕かなる想像性の持主であるといふことは親も教師もこれを知らないのではないが、唯その想像性が、人間生活に於て如何なる價値を持つものであるかを知らないのである。之は親自身、教師自身子供の時分から想像性の正しい發達を味つてゐない時代の人間として無理もないことであるが、それにしても想像と云へは、唯徒らな誤謬、くだらない架空、といふ風に考へてをる者が少くない。然も人間の生活に、生きて役に立つてゆくといふこと以外に、一歩高い生活、深い生活、廣い生活を與へるものは、その基礎的力として、想像性の裕かさによるものであつて、いはゞ今こゝに生きて働くといふこと以上の人間らしさは、人間が唯想像性を持つ爲めであると云つてもよい。幼稚な説明のやうであるが、犬や馬などと人間と比べて何處が一番本質的に違つてゐるかと云へば、想像性の有無にあると云つてもよからう。生活に間に合してゆく力とか、生活を間違ひなくしてゆく力とかいふ程のものは、固より人間に於て非常に優れた發達をしてはゐるが、ある見方を持つてすれば、動物に於てもそれ相應のこと

は具つてをるものといふことは出來る。心理學的の言葉で云へば、動物は本能によつて生活し、人間は理性によつて生活するといふのであるが、その理性はいはゞ本能から經驗によつて發達したある程度以上のものに過ぎない。ところが想像になると、眞に人間丈けが持つところの本質的に獨得な性能である。その意味から云へば、人間としての獨得の尊さが想像性にあると云つてもよい位である。この想像性の非凡に發達した者が所謂天才であるが、平凡人の生活としても、その想像によつてどの位人間らしく生命づけられてゐるか分らない。そしてこの貴重な想像性は、子供が生れながらにして持つといふあの自然的な想像性に放任しておいて養はれるものではないのである。所謂正確なる思想、堅固なる意志といふやうなものを養ふに劣らない、大きな苦心もいるし努力も必要である。

三

此頃流行の藝術教育は、つまりこの方面の教育上大いに有益なものである。たゞ今日實際行はれてゐる傾向を見れば、子供が持つ想像性をあらはしてやるといふ丈けに止つて、之を高め、深めてゆくといふ方面に於ては未だ甚だかけてゐると思ふ。子供の想像を子供らしく現す機會を與へるといふことも、子供の想像性の教育として缺くべからざることであるのは云ふまでもないが、高さと深さとの底知らないはるけさは想像の有つ大切な特色であつてそれを子供に經驗させる必要があるのである。子供には小さくていいといふ抑鬱から庭の池の傍にのみ立たせたのでは、子供の想像の視野も視界も廣げられてゆく機會がない。子供にはよし充分の眺望は樂しまれないとしても、限り知らぬ大洋の岸に立たせれば、子供相當の力によつてまだ、まだとその想像はひき延されてゆくのである。この意味に於て、吾々の持つ偉大なる音樂、偉大なる藝術、みな子供のためにこの大洋の岸に、立たせられるやうな働きをするものである。外國の子供にとつては、あの日曜毎の教會の音樂、その尊い壁畫、どこまでとゞくか分らないやうな高い塔といふやうなものだけでも、かなりの奥行を持つた想像性の滿足を與へてゐる。子供に宗教の教育を與へる問題についてはまた別に細い考究を要するとしても、宗教に現れた、或は宗教により添ふて發達した大きな想像性の教育効果としては、そこに見遁すべからざる物がある。宗教に次いで、社會的に自由に交渉す

ることの出來る多くの貴重なる藝術品も、外國の子供達の想像性をどの位滿足させ、又陶冶してゐることとことか分らない。子供が、ルーベンスの宗敎畫の前に立つて、もとよりその意味が分る筈はない。又ロダンの、例へば「考へる男」といふやうな大きな彫刻の前に立つて、その內容がはつきりと子供に捕捉せられる筈のものでもない。然もあのルーベンスの畫中にある渦き渦く點の雲の描寫は子供の心にも、今の自分の小さな眼が、行き屆くことの出來ない高さといふものゝある想像的感じを起さずにはおかない。ロダンの彫刻のあの思ひに沈む男の額を見ては、理智と、科學的判斷とで決定することの出來ない奥知れぬ深さといふものの想像的感じを印象されずにはおかない。勿論その感じといへども、印象と雖も、いはば影のよぎるが如く淡いものしか子供には殘らないのであらうが、その淡さの中からも、知らず識らずに養はれてゆく想像性が、子供の將來の性格の上に、どれだけの奥深さをつくるものか計り知れないものである。

四

私は我國の今日の子供の生活狀態の中に是等の想像的要素を育むものが餘りに缺けてをることを遺憾に思ふ。子供の道德敎育としての働きのほかに、宗敎から子供が與へられる深さ、高さといふやうなものが殆どないと云つてよい。近頃行はれる所謂藝術敎育は、子供の美に對する樂しみを與へるといふこと以上に、想像性を本當に引上げるといふことについては、甚だ微力なるものにすぎない。かくの如くして、役に立つ人間、間にあふ人間、たかく正しい人間は養はるゝとしても、自分でも計り知れない、行きつまることのない廣い、高い、深い世界にのびやかに息をつくことの出來るやうな、眞に人間だけが持つ幸福な生活を與へることは出來難いことであると思ふ。

想像性の多い生活は、暇の多い過去の時代のものとして考へられることがあるが、それは惰け者が、日向ぼつこをして見るところの晝の夢のやうな想像をさすのである。私の云ふ想像性は今日の現實的な、科學的な、一寸の隙もなく引緊められてゐる生活に於て、慰安としてゞなく、娛樂としてゞはなく、その現實の重さと、科學の精密さとを人間的に生活しながら、其中に捕虜とならない爲めに、今日の生活にこそより必要なより偉大な想像性を云ふのである。それはあの微かなる如き子供の想像性に出發して、これを敎養することによつてのみ得られるものである。

最も合理的な嬰兒服一揃ひ

（生後六ヶ月以後のはい〳〵着）

佐賀ふさ

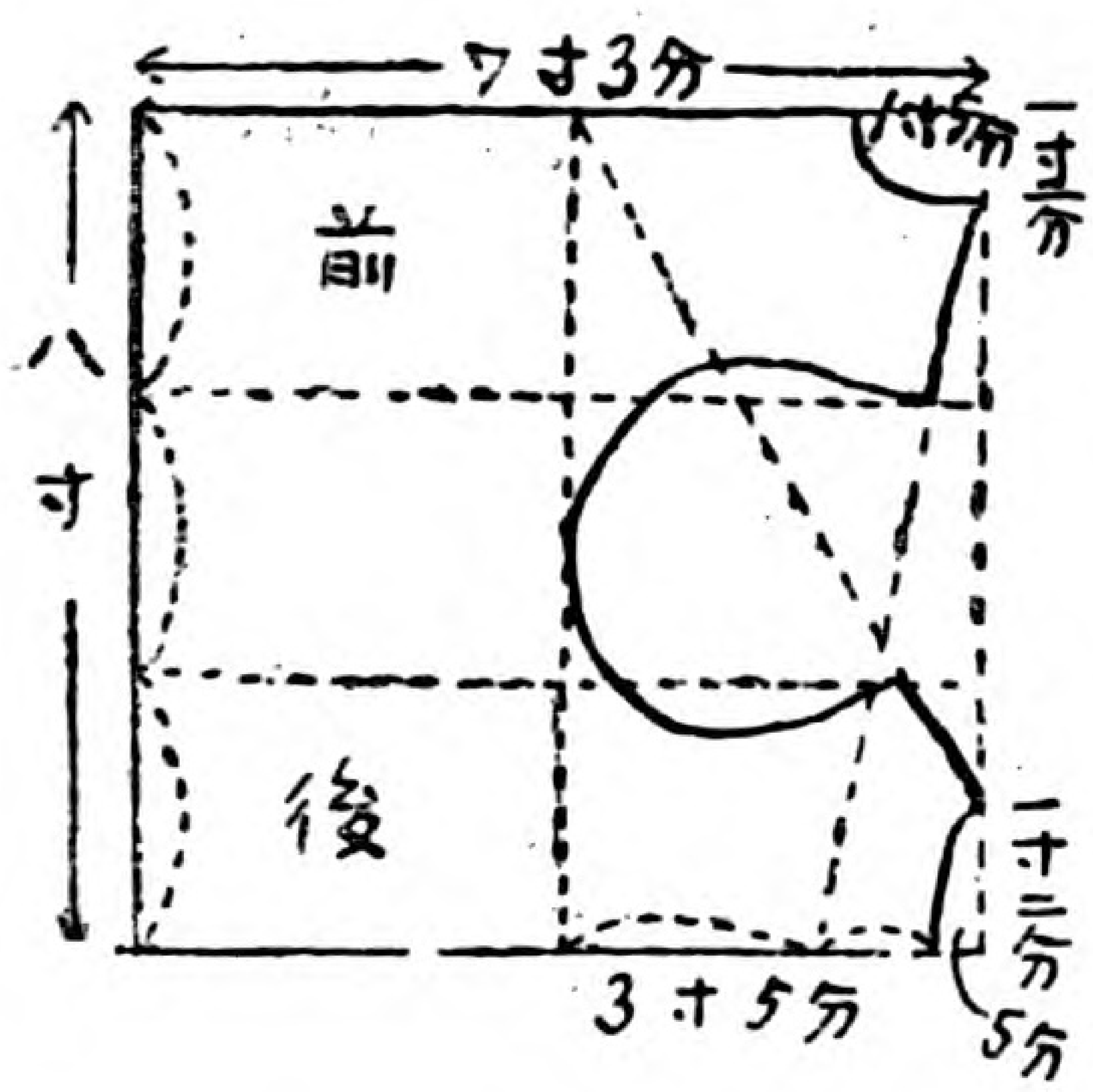
生後六七ヶ月頃からそろ〳〵ハイ〳〵が初まり次第にヨチ〳〵と歩き初める可愛盛りの嬰兒の冬の着物はよほど考へねばならぬものだと思ひます。どんなにはげしく動いても、足や腰が充分に包まれて居てしかも着せたり脱がせたりする事が樂で、用便の時には手早く開ける事の出來るやうに工夫されねばならないのであります。



（肩襦袢）

それで着せ方の容易な事は和服から利用し、いくら活動しても足や腰のあらはにならぬやうに充分包まれるやうな方法は洋服から工夫して、且つ裁縫も簡單に、價格もお安く出來上つて衛生上の價値の充分なやうに形の上に又地質の選み方に裁縫の仕方に色々工夫を加へて見ました。

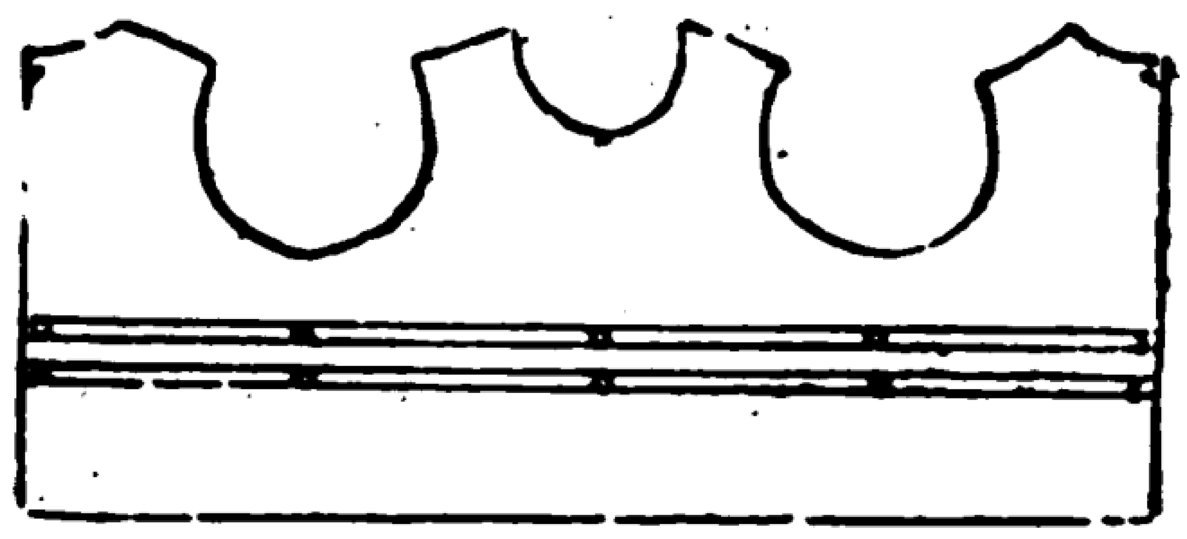
肩襦袢



「用布」白綿ネル大巾七寸五分。白テープ半吋巾八尺。價格二十錢。

「型紙の取り方」型紙のワナを布のワナにあてゝ裁ちます。

縫ひ方



(1) 後開きは左右とも縫代を二分折返し其上にテープを當てゝ両側にミシンをかけます。

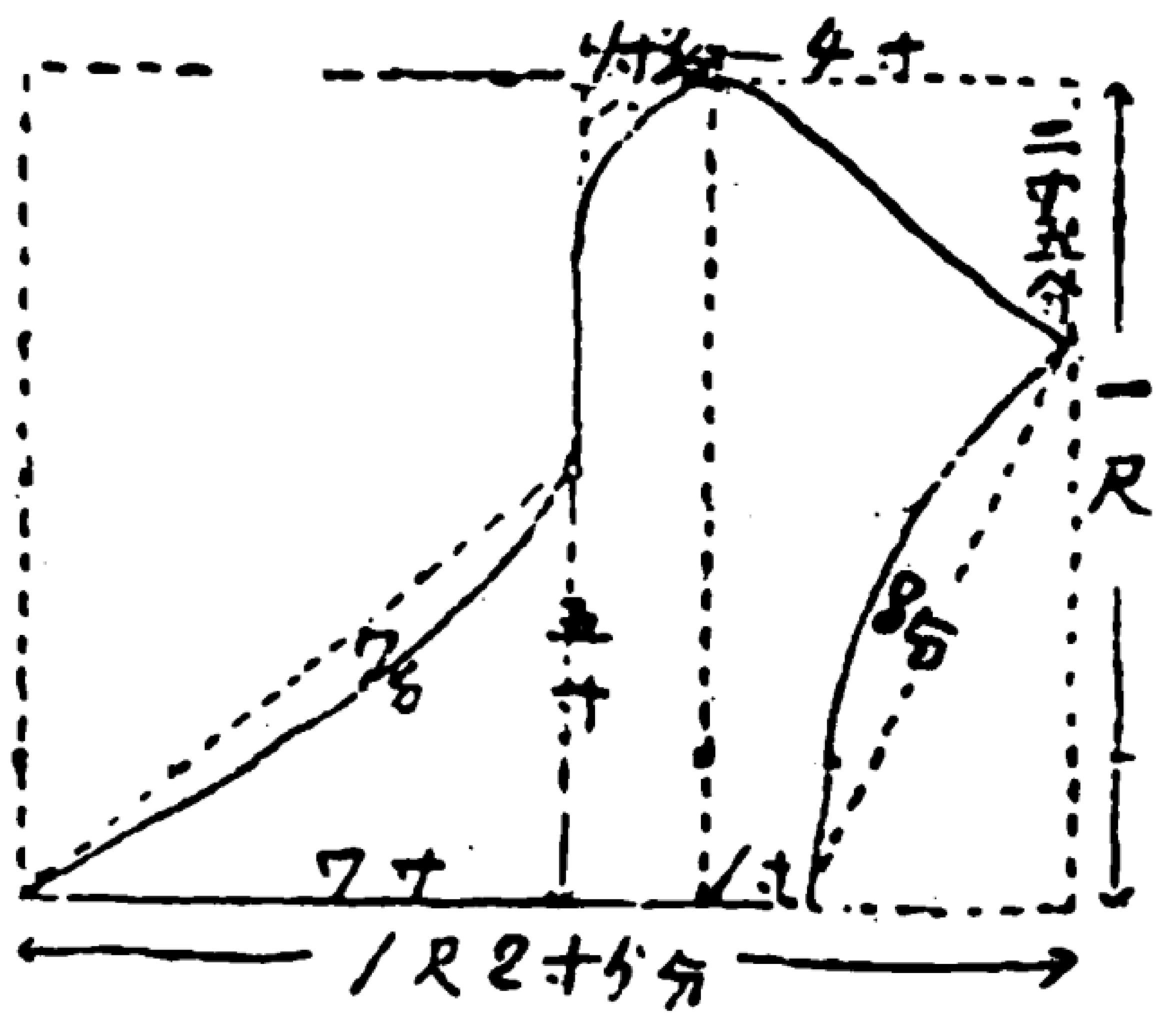
(2) 上圖のやうに上から五寸の所と六寸の所に二本テープを當て、両側をミシンで押へます。上の帯にはヅロースを、下の帯にはお襁褓を釣しますから、圖のやうに前後と両脇とにボタンを付けておきます。次に裾を三つ折にしてミシンをかけます。

(3) 前後の肩を縫ひ合せ縫代は開かせてテープで押へます。次に衿周りと袖周りとをテープで包みミシンをかけます。

襁褓

用布

白綿ネル大巾一尺二寸五分。白テープ半吋巾六尺。價格二十五錢。

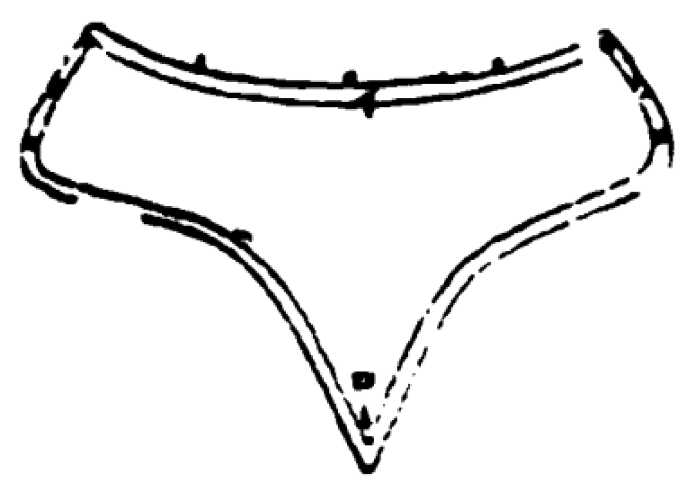


型紙の取り方

型紙のワナとある所を布のワナにあてゝ裁ちます。

縫ひ方

(1) イのテープを附ける時に五分の長さに切つた極く細いテープを輪にして、前中央と両脇後上前とに挟んで附けます。此チ、を肌襦袢の下の帯のボタンに掛けるのであります。



(2) 残りの周囲をテープで包み、ミシンを掛け上前の上から七八分下つた所に、ボタン穴を作り、ずつと下と一ばん上とにスナップを附けます。次に下前も上下はスナップを、上から七八分下つた所にはボタンを附けます。此ボタンに上前とロの部分のボタン穴とを掛けるのであります。

ヅロース

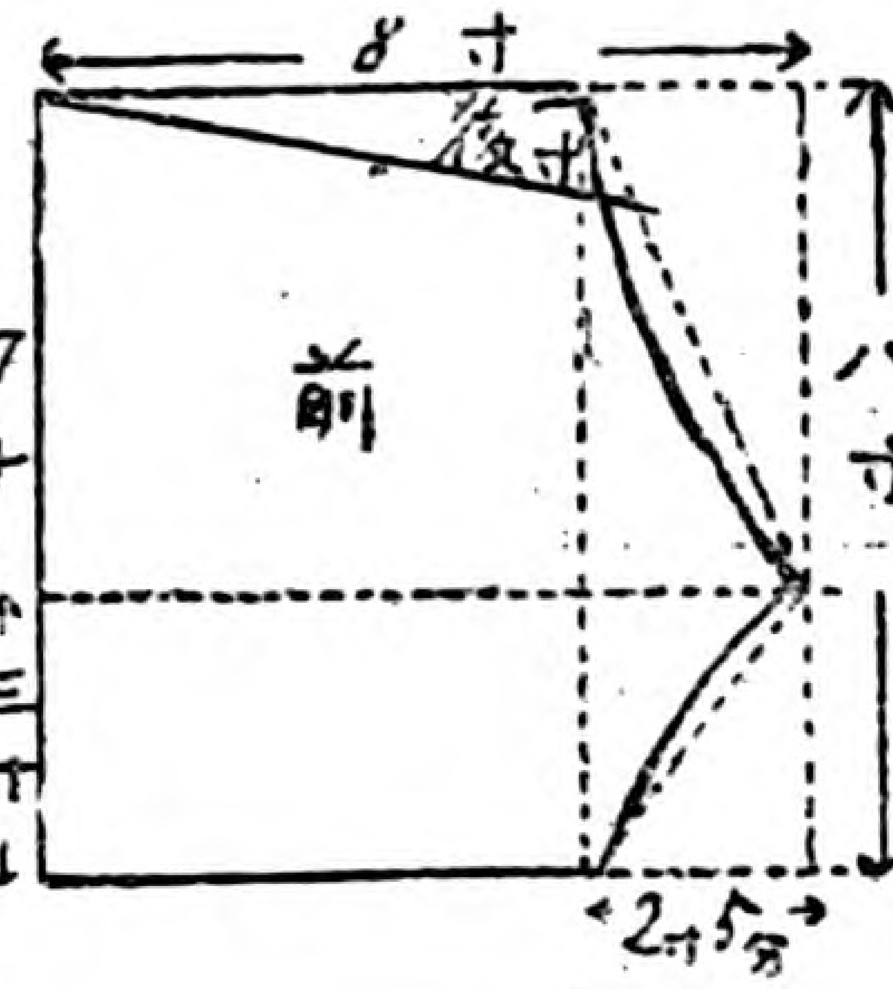


(ブロースの圖)

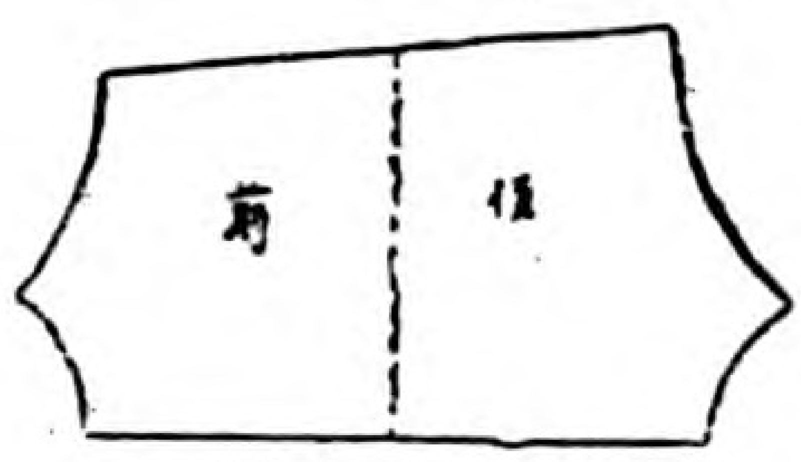
用布　白綿ネル大巾一尺六寸。白テープ半吋巾三尺。ゴムテープ二尺五寸。價格三十五錢

型紙の取り方

(甲圖)



(乙圖)



甲圖のやうに圖を引きましたら、ワナとある所を紙をワナにして先づ後の型を切り下の半分をはねて上だけを前の型通りに切りますと、乙圖のやうに出來ます。乙圖通りの形のものを布では二枚裁ちます。

縫ひ方



(1) 股下を縫ひ合せ縫代を開かせてテープで押へておきます。次に股上の縫代を二分折り返しテープをあて、兩側にミシンを掛けます。

(2) 裾口を三分巾の三つ折にし、ミシンをかけ股の圍りと同じ長さのゴムテープを通します。

(3) 左右共同じやうに出來ましたなら前も後も左右を一寸程重ね合し裾口と同じ位の巾の三ツ折にし、ミシンを掛け、胴圍りと同じ長さのゴムテープを通します。最後に極く細いゴムテープを五分に切つて輪にし、前後と兩脇とに附け、此のチヽをウエストの上の帶のボタンに掛けるのであります。



(袖無しの圖)

袖無し

用布　ガーゼ八尺。白テープ一吋巾六尺。綿價格五十錢。

型紙の取り方

型紙は肌襦袢のを使ひます。布を裁つ時には横切で取つた方が便利です。同じ形のものを四枚取りまして、二枚づつを一枚と見て表裏に使ひます。近頃赤坊の湯揚としてガーゼで出來て居りますものを利用してもよいと思ひます。

縫ひ方

表と裏の間に綿（眞綿ならば尚よし）を挾み周圍を假縫し、縦横の格子に刺しておきますと洗濯の時綿がかたまりません。眞綿ですと日光に出せば直にふつくらと温かさうになります。周圍はテープで包みミシンを掛けます。

いたづら着

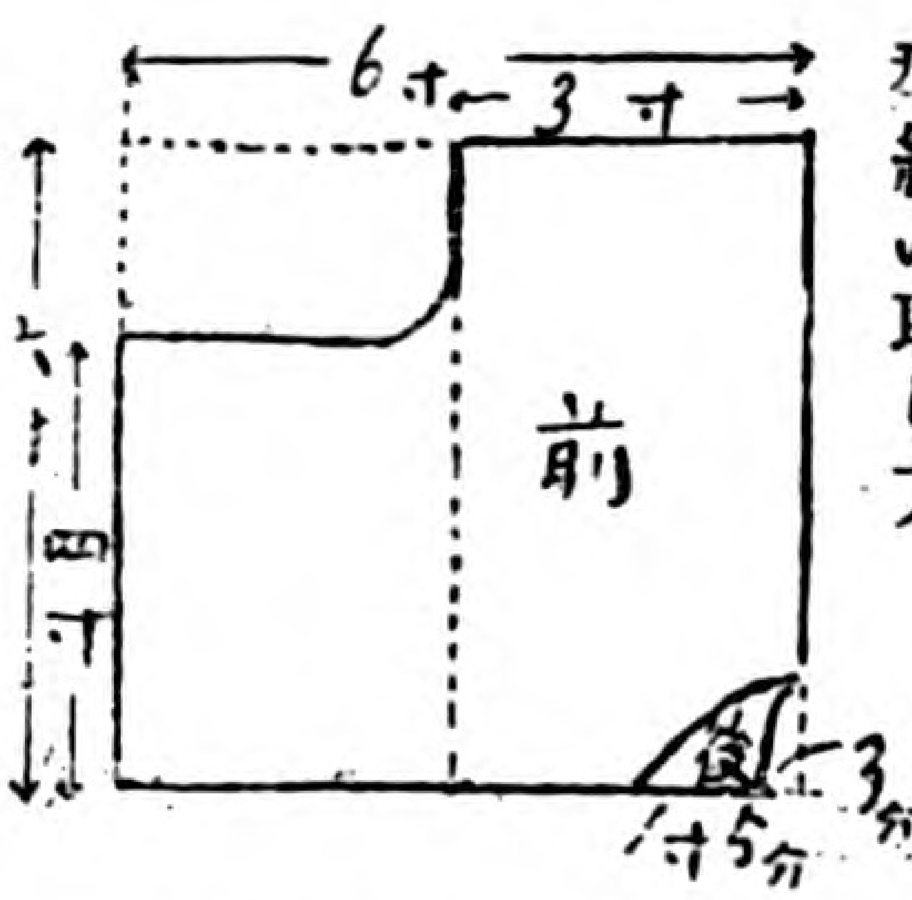

（いたづら着）

用布

白綿ネル大巾二尺八寸。白テープ半吋巾七尺。白ゴムテープ一尺。

價格六十錢。

型紙の取り方



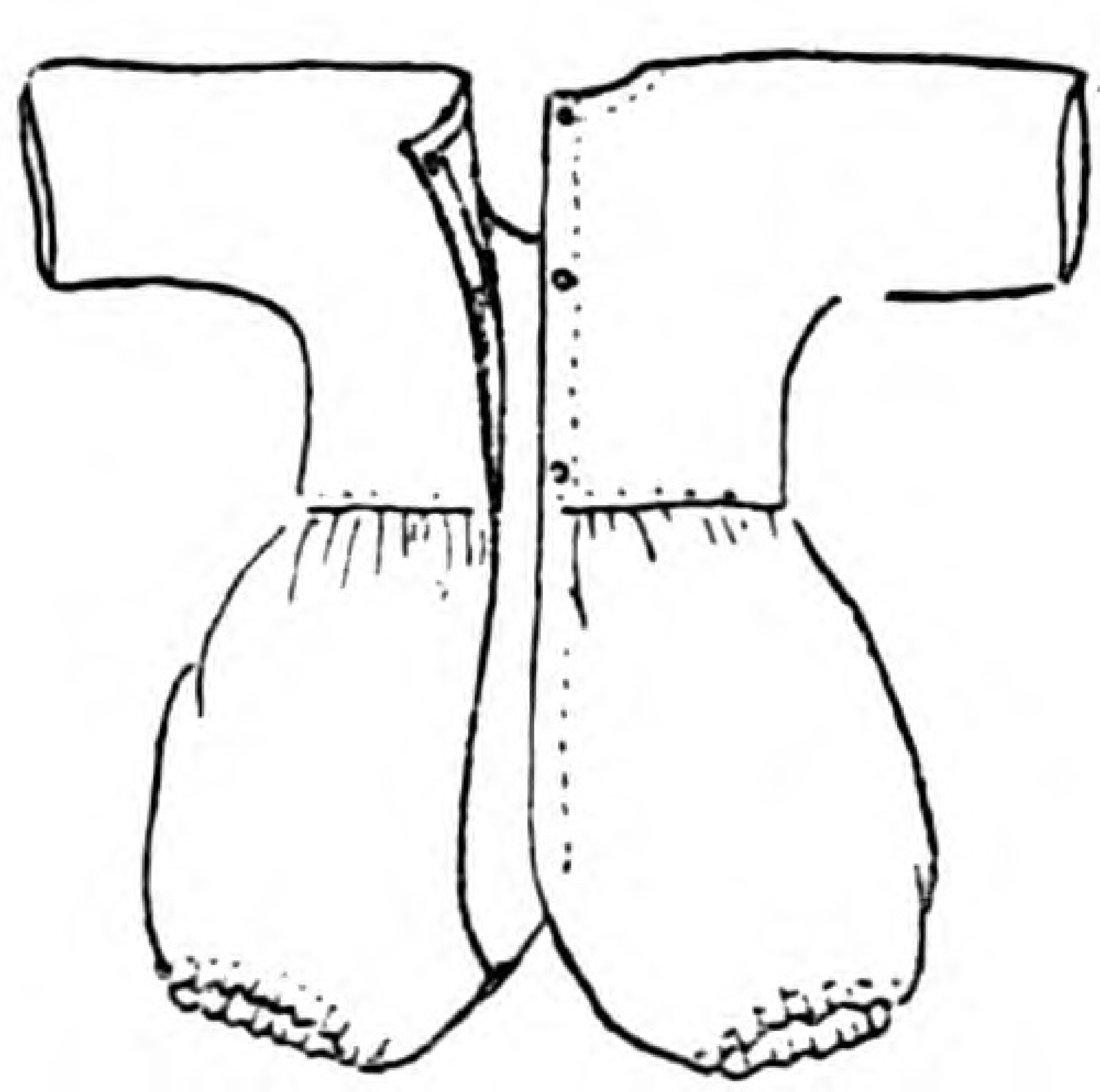
上半身は此型紙を使ひます。上圖のやうに書きましたら肩の所で紙をワナにし先づ後の型紙通りに切り、下の紙をはねて前の衿ぐりを切ります。

下半身は前のヅロースの型紙を使ひます。但し布を裁つ時には巾を五分廣くして裁ちます。

裁ち方



縫ひ方



(1)下半身の縫ひ方はヅロースの縫ひ方の(2)と(1)とを同じにすればよいので、前の左右を一寸重ねかけて躾をかけておきます。

(2)上半身は襦袢の仕立方とよく似て居ります。即ち初めに後開きの縫代を二分折りテープをあてゝ兩側にミシンを掛けます。

次に袖口と衿圍りとをテープで包み、ミシンを掛けます。次に袖下から脇を袋縫にします。

(3)下半身の上部が上半身の下部と同じになる迄縫ひ縮めて上下縫ひ合せ、縫代をテープで包みます。スナツプは後開に三つ位附ければよいと思ひます。

附言、

暖い時には之を上着にしますから若し汚れ易いとお思ひになる時には、色のあるもの又は縞や模樣物を使ふと可愛らしく出來上ります。

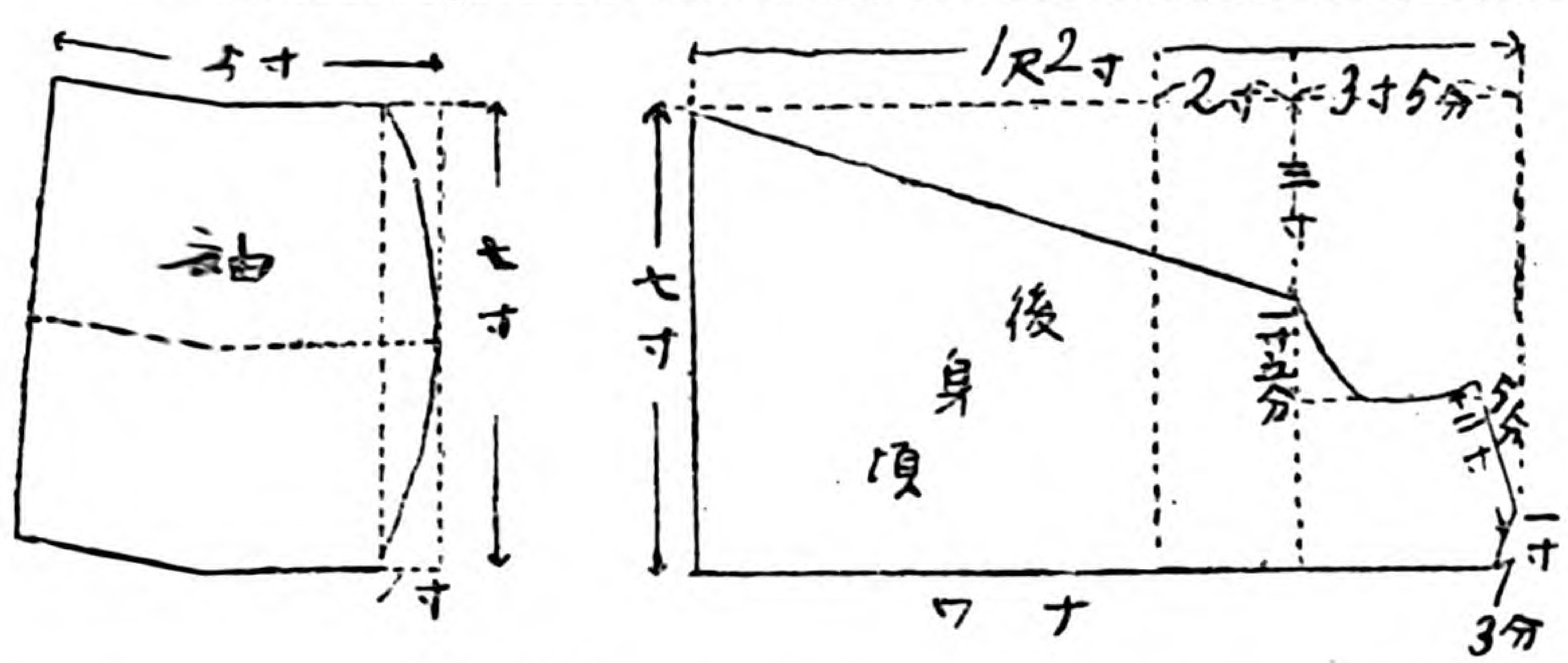


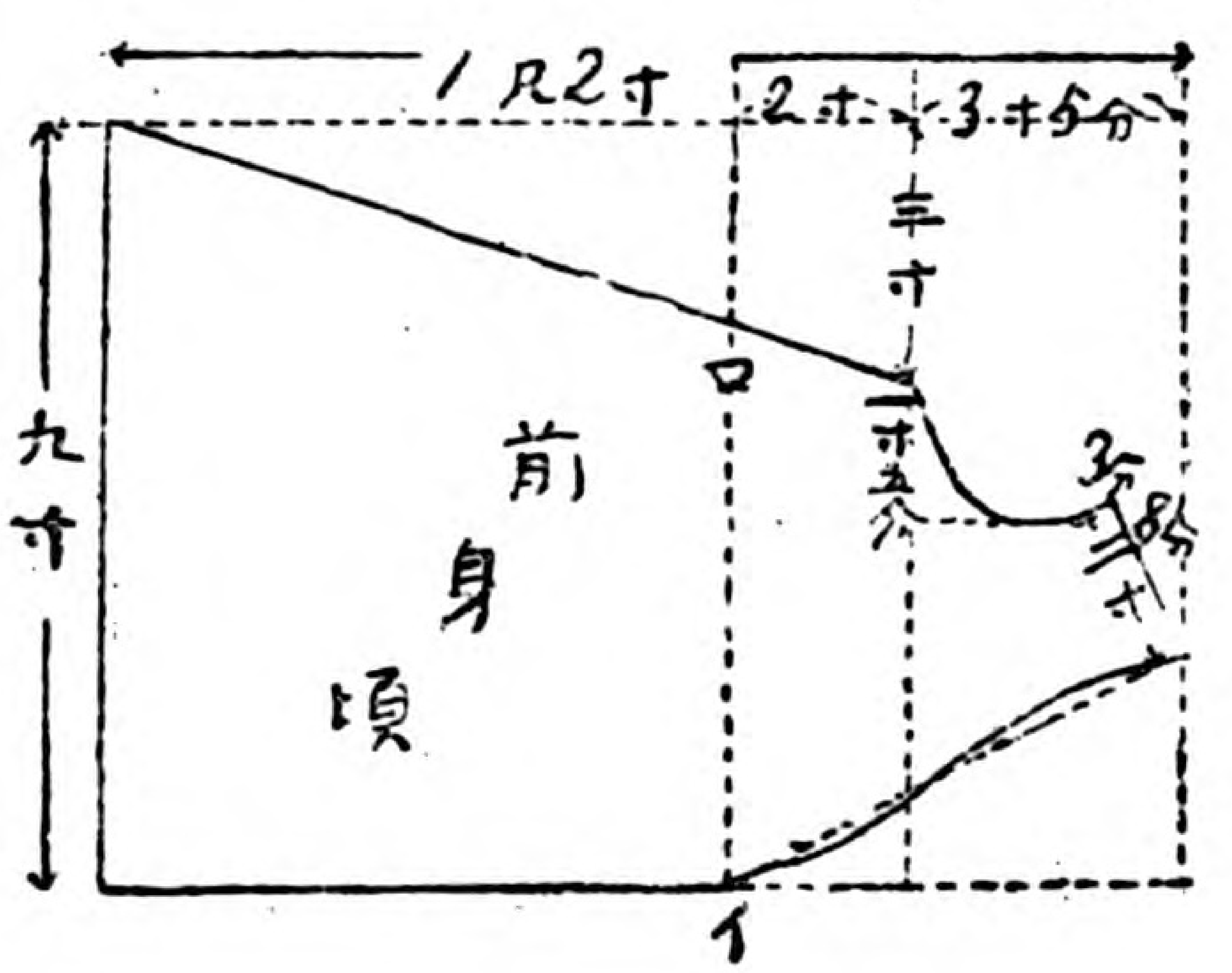
（上着の圖）

上着

用布、白フランネル大巾二尺五寸。水色又はとき色毛糸一オンス。價格三圓三十錢。

型紙の取り方

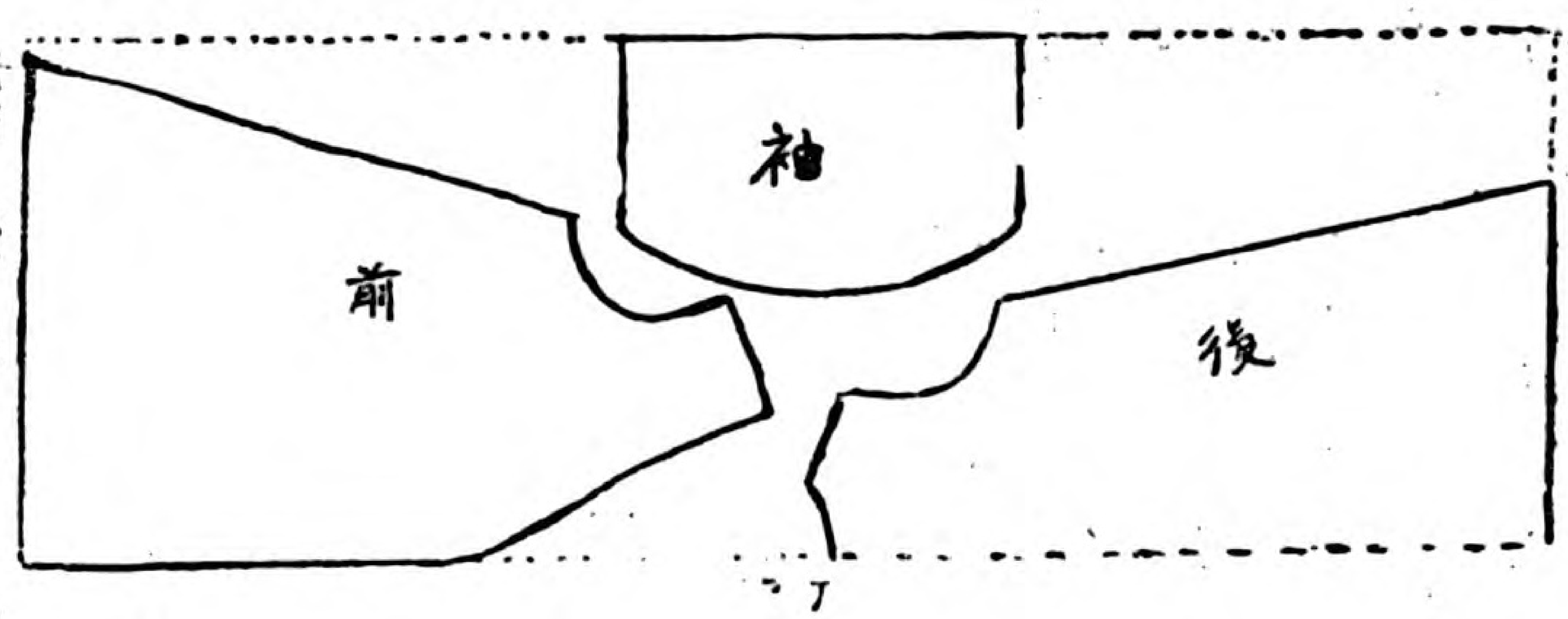




縫ひ方

(1)肩及脇を縫ひ開きしてテープで押へ、ミシンを掛けておきます。次に袖下を縫ひ、縫代をテープで押へ袖を附けます。袖附の縫代は開かせて、

裁ち方



細かくまつり附けておきます。

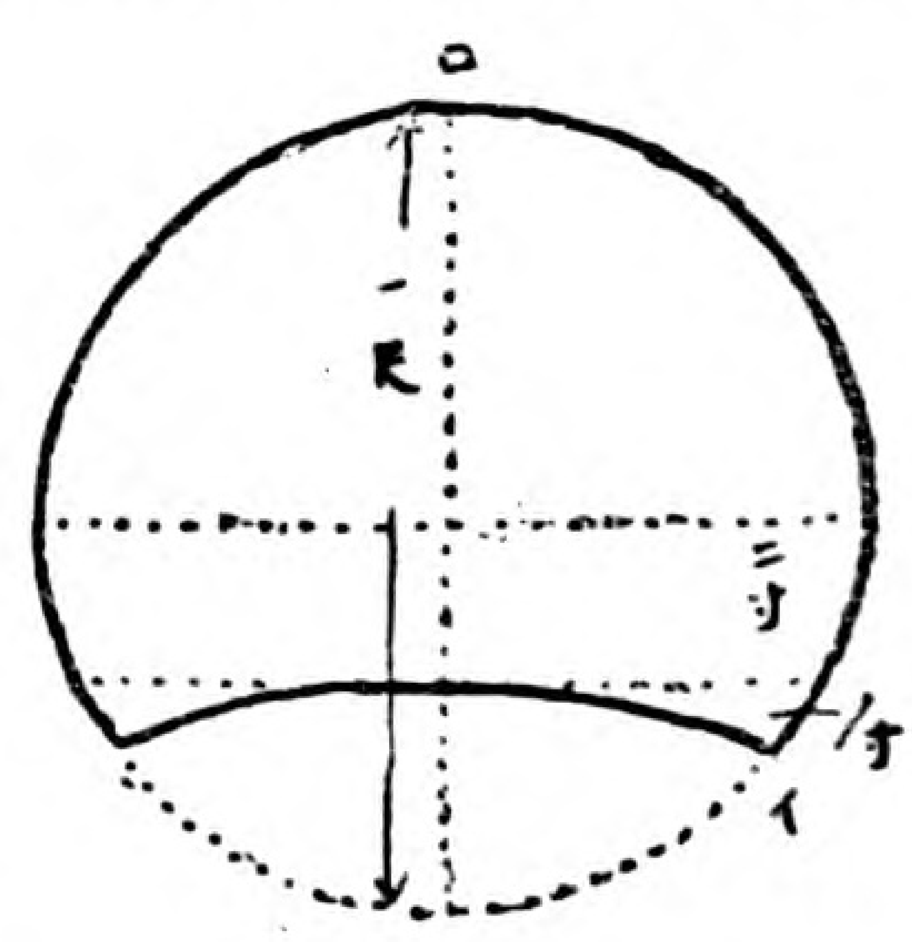
(2)衿ぐりから前及裾を毛糸で細編をし若し毛糸の残りがありましたら、上前に簡單な刺繍をすると可愛らしくなります

(3)紐は巾廣のテープでも有合せのメリンスでもよいと思ひます。後で結べる位の長さに作り、型紙のイ印の部分に附け、ロ印の部分に紐通しの穴を明けて穴かゞりをしておきます

帽子

用布　白メリンス並巾一尺。ガーゼ並巾三尺・白リボン三尺。價格五十錢。

型紙の取り方



メリンスで一枚、ガーゼで三枚型紙通りのものを取つておきます。

縫ひ方

(1)メリンスを表にガーゼを裏にして四枚の周圍を假とぢし、イ印からロ印を經てハ印に至る迄をハンカチの縁のやうなスカラ縫にします。

(2)イ印からロ印を經て、ハ印に至る迄の周圍から五六分入つた所を頭圍と同寸になる迄縫ひ縮めます、次にイ印からハ印迄を頭圍の半分に縫ひ縮めて縫代をリボンで包み、兩端を顎で結んで重せる丈殘しておきます。

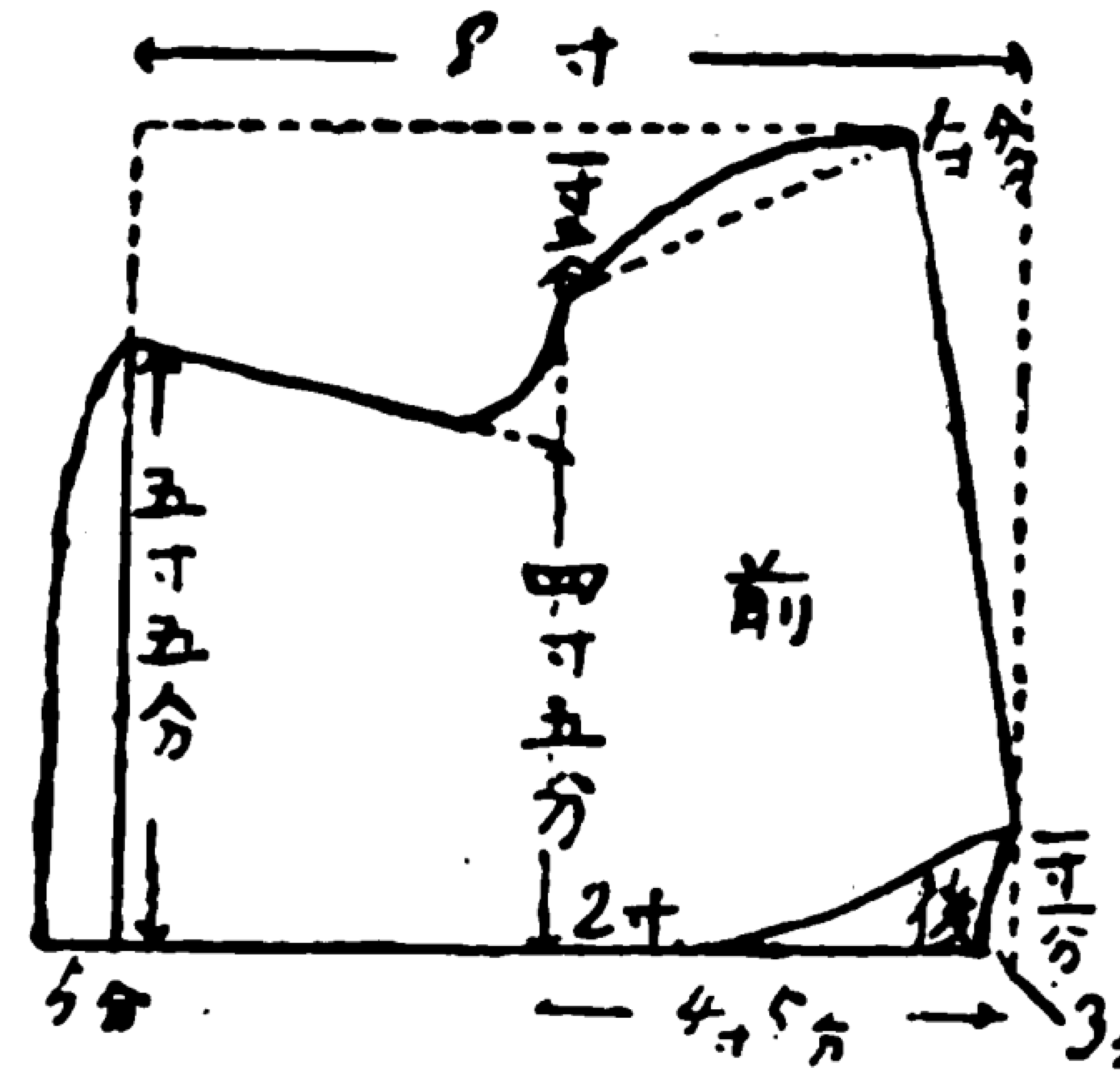
サックコート

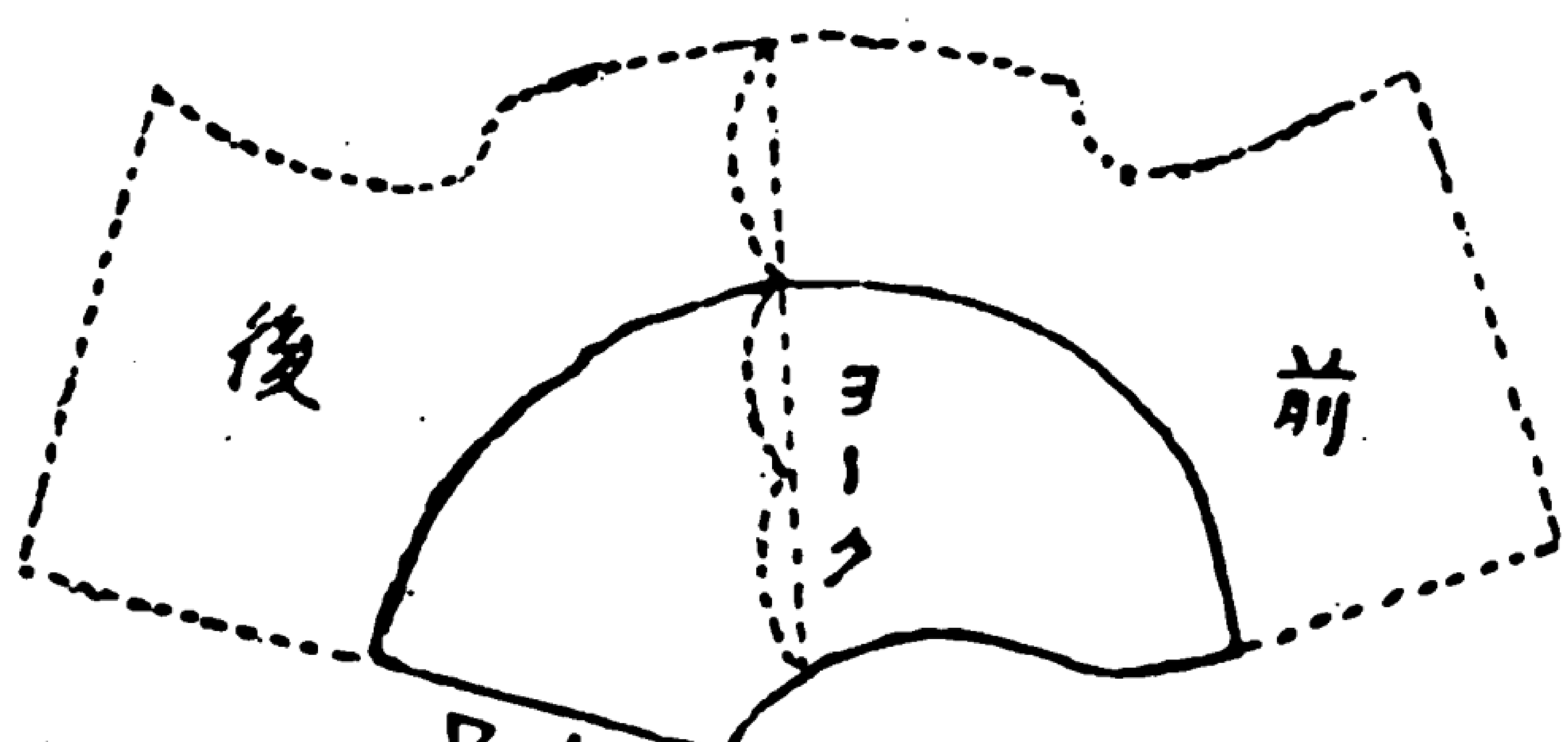
用布　赤ん坊用の毛布一枚。毛糸少し。價格一圓。



(サックコート)

型紙の取り方





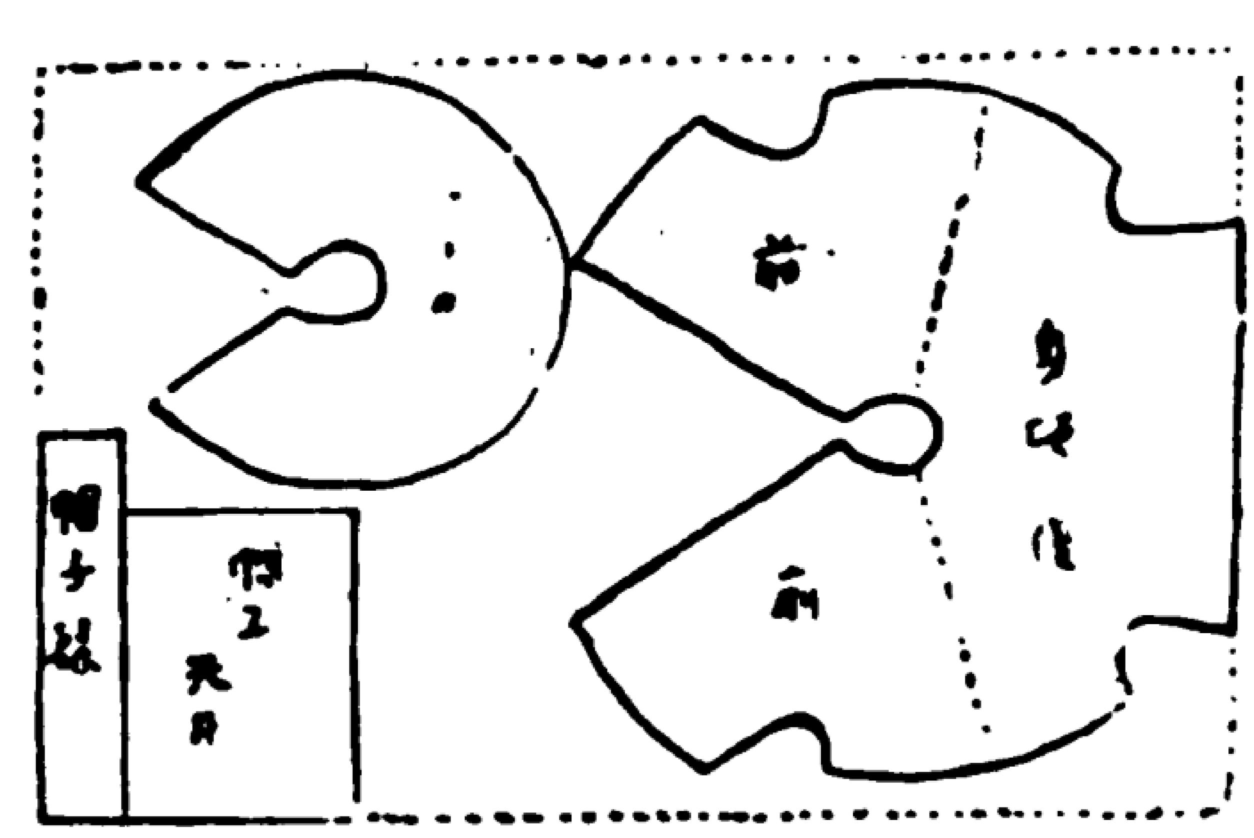
型紙を切る時肩をワナにして切り取り線の外側を切ります。次に上側の紙に前の衿ぐりを切り、下側の紙の裾の下りを切り落します。

(1) ヨークを衿廻りを除く外毛布の縁縫ひと同じやうに毛糸で縫ひます。次に身頃の衿廻りとヨークの衿廻りとを合せてしつけをかけ、身頃の周囲全部を縫ひます。

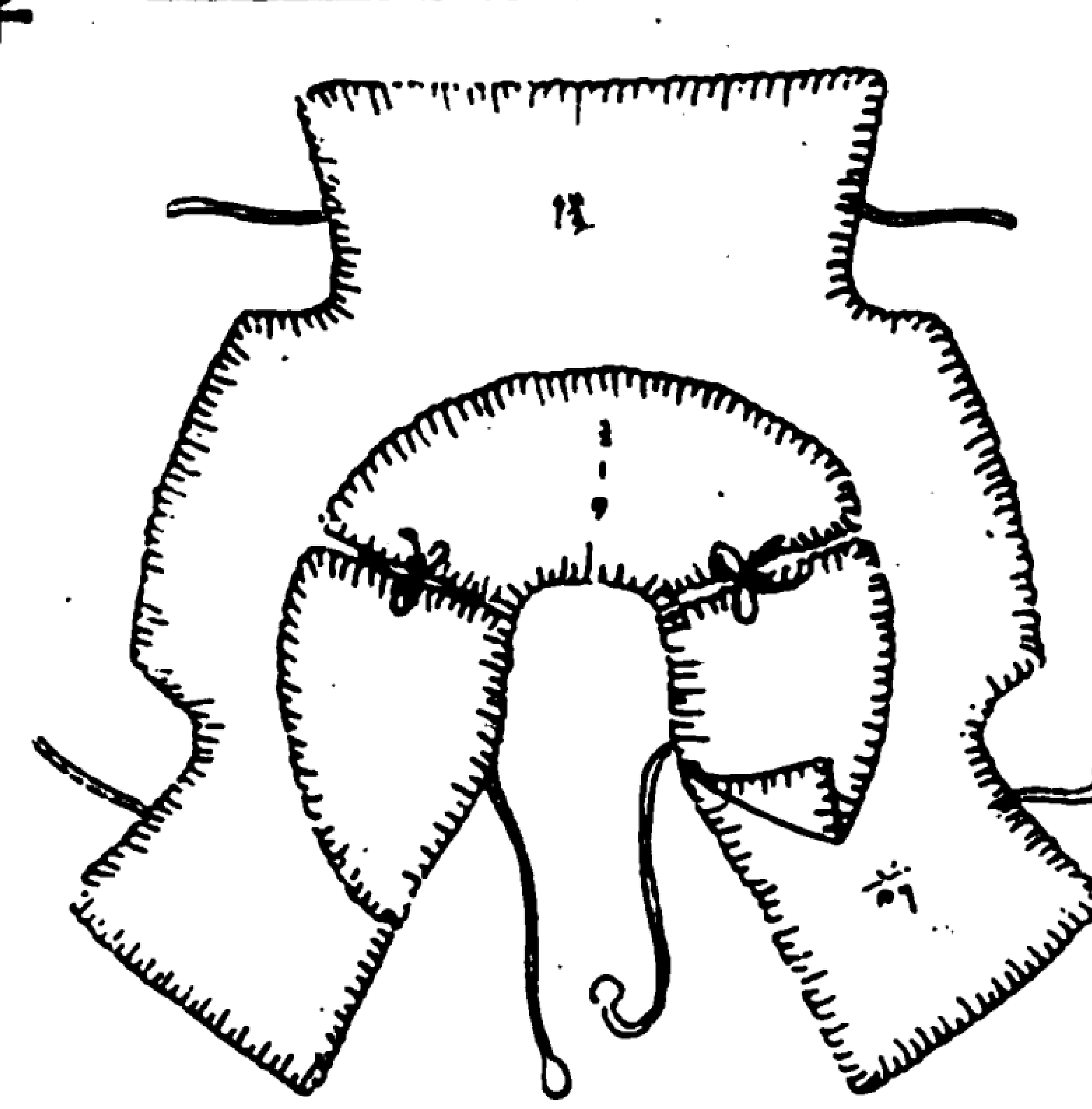
(2) 半吋巾のリボンか又は毛糸を鎖り編にした紐を脇、袖下、ヨークの肩、衿周の端に附けて結んでおきます。

帽子

裁ち方



縫ひ方



サックコートを作つて毛布の端が残りましたから、それを利用して帽子を一つ作つてみました。

裁ち方

サックコートの裁方圖の中に示してあります。

縫ひ方

(1) 天井を四角な袋のやうに二つ折にして、両側を縫ひます。縫代は開かせて細くまつります。

(2)縁は一方が毛布の縁縫を其まゝ取り入れてある時はそのまゝそれを利用しますし、兩方共に裁ち目の時には一方はスカラ繍にしておき、輪に縫つて裁ち目の方を天井に縫ひ附けます。其時縫目は表に出るやうにしておき、縫目のやゝ下の所から縁を天井の方に折り返します。次に天井の兩角を三角にして恰好よく下に折り一寸とぢ附けておきます。

(3)毛糸を鎖り編にしたものを二本一所にして、縁をあらく縫ふやうに通し、片一方の耳の所で結び、玉房を二つ程附けておきます。

附言　赤ん坊用の毛布(價格九十五錢位)は手觸りが非常に柔かくふく／＼として嬰兒用としては大變によいものであると思ひました。そして嬰孺袢からサックコート、帽子全部を計算して價格合計四圓五十錢になります。(上着をフランネルにすれば六圓七十錢)

從つてメリンスの單衣一枚の價で下から上まですつかりが出來上るのであります。可愛お子様方をのび／＼とお育てになり度いお母樣方はぜひ一度お試しなさることゝお勸めします。

錆びなくてよく切れる　大華製の庖刀

錆びなくてよく切れる庖刀が日本に發明されました。これまで問題になつてゐた不錆鋼といふのは、無炭素クロームを多量に含んでゐる鐵のことです、ところが炭素の含有量が多くなければ眞鋼にならず、(即ち切れず)多ければ不錆鋼とならず、この理由により不錆刃物としてある在來の外國品や內地品は、切れのにぶい缺點を持つてゐました。

然るに最近發明された大華製といふのは炭素の代用として、他の元素、即ちモリアデン、バナシーム、チタニームを用ゐてあるために、永久不錆であつて、且つ正宗の切れ味を有するのを特徴としてゐます。

(尙、鋼とは炭素〇五、パーセント以上を含有するもので、それ以上なければ燒が入らぬ)大華製庖刀は日本、支那到る處の金物店にあると思ひますが、東京市本郷春木町の櫻楓會販賣部でも購賣してゐます。



春着の配色

齋藤久瀰子

春夏秋冬の衣服に就いてよく其季節に合ふ色彩や、色調のおたづねを受けますけれども、色彩とか色調の感じといふものは其人々の習慣、傳統、趣味、環境、或は其地方々々の言ひ傳へ、又其時折の變動などによつてちがひます。仔細かくいへば其日〳〵の人々の氣分や感じによつて異ふものですから、おしなべて春の色はかくあるべきであると申しますことは僭越ですし、危險な言葉です。何故なら色の刺戟によつて感動し、感情を發する事は全く論理的又は智識的なものではなくて其人限りの無理屈な感情によつて定められるからでございます。然しほんの大體即ち統計的な言ひ方をしてみますと、例へば赤色は十中の八九まで人の感情を興奮させる色で靑色は、十中の八九まで人の感情を沈靜させる素質を持つて居るやうであります。

白色は神聖、潔白を、黑色は、恐怖、消滅、或は嚴肅の感じを、黃色は希望や光明を、綠色は、平和や、健全を、紫色は妍麗、高貴といつたやうに色からくる感じは個々であります。そして其色と色との配合へ即ち白色を混じて明調となし、黑色を混じて暗調となすに從つて、又特殊の感じを與へ、而も明調暗調ともに何無數の階調が出る譯ですから、いち〳〵之に名稱を與へたり、其感じを定める事は洵に困難な事です。

右の例は草色の例ですけれども、若し之に種々の色のコンビネーションをいたし、そして混和された色のいち〳〵に明調、暗調を作つて、之に名稱と感じを定めたり、又そうして出來た色を色々に配列した時の感じを言葉で表す事は全く不可能といつても過言ではございますまい。

たゞ私としての好みや感じだけを申上げれば、春は何といつても凡てのものゝ蘇る季であり、萌え出る季であり、又成長するときでありますから、今迄で眠つてゐた草木が俄かに活氣づき、隱れて居た小鳥が急に歌ひ出したり、蟲や胡蝶が愉快に舞ひ出す季節でありますから、其周圍を考へて、自然に尤もよく調和する氣もちを以つて僞らない自分の心持と趣味によつて色調を撰びたいと思ひます。

私が若し春着の主色としてグラスグリーンの暗色を着物とした場合には藤色の袢襟を撰み、袖口にもふりにも、裾廻しにも同色をとりたいと思ひます。そして帶には赤紫の低暗調のものを撰びます。

又若しも濃紫を主色として作つた着物の場合には、銀ねず色で袢襟から袖口、ふり裾廻

しまでも、とも色にしたいと思ひます。そして帶を〻〻〻茶色にして、帶〆や衿の模樣に陪調のグリーンや、珊瑚色を少しばかり配するやうにしますと心地よい調和を現すことが出來ます。又此上に羽織を着ますには、主色と類似色の濃淡によるか、或は主色と反對最調和色の濃淡を主にしますと、美しい調子となる事は受合ひでござゐます。

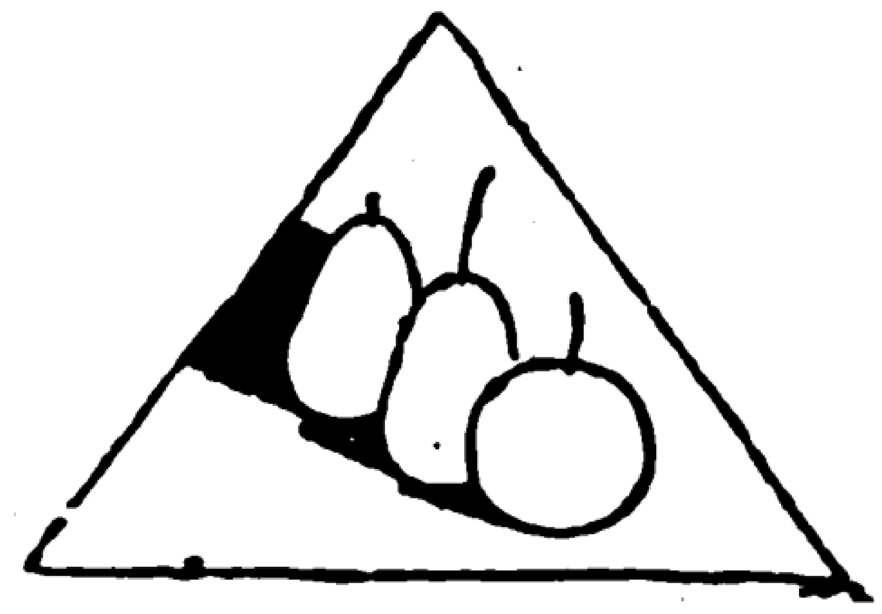
今迄の習慣として袖口とふりを同色にしないのは着物の配色上から見て面白くないと思ひまして、私は習慣を脱し數年來之に裾廻し或は袢襟をも加へて凡て同色にする事にいたして居ります。

前にも申上げました通り色は其人〳〵の趣味や年頃によつて異ふものですからいち〳〵を申上ぐる事は出來ませんが、若しお好みの方があつて其主色となさらうとする色を見本でも添へてお知らせ下されば、私の考へだけは腹藏なく申上げたいと存じます。

家庭欄の懸賞募集

今月號には皆樣からお知らせ頂いた郷土料理の一部を紹介しましたが、郷土手藝には期待してゐたほど面白い物が集りませんでした。それをもつて家庭の副業にするやうな大したものでなくても、皆さんが子供の時分に草の葉や、木の實や、粘土、小切れ、紙ぎれなどで何か珍らしい手工細工をなすつたことがおありでせう。その中から一般的に家庭とか子供とかに紹介したいと思はれるものがあつたらお知らせ下さい。それから、私共の家庭生活を向上させる意味で、新らしい家庭の知識や改善案をお持ちの方は振つて御寄稿を願ひます。

宛名は女性改造家庭部、掲載のものには相當の謝禮をお送りします。



お自慢の郷土料理（其の一）

南瓜のおほうとう

山梨縣　手塚　鶴代

「うまいものなら南瓜のほうとう。」

かうした地方の民謡にまで唄はれてゐます私の郷土のおほうとうの御料理を御紹介致します。

一體私の國は山國ではありますが土地が適してゐるのでございませうか、桃だの栗だの葡萄だのと云ふ果物や、野菜にしても四季折々のものが絶えず豐富に實ります、大抵農家では夏の初めに庭に南瓜棚を設けましてそれに南瓜をはひ上らせます。それは酷暑の際の日よけにもなりますし、さうして作りましたゝの方が南瓜の味がよいと申されてゐます。

花が咲きやがて實がなりますと、それが次第に大きくなつて來ます。さうしますと自然から南瓜の重みで落ちる虞がありますので藁で袋樣の物をつくりましてそれで支へたり縄で吊つたり致します。中には直徑一尺もの大きいのもあります。秋の初めになつて南瓜の充分實ります頃、そのよく實りましたものから順に切りとつてそのまゝ物置の隅などに吊して置きます。勿論煮付けにしましたり揚物にしましたりしますが、中でも大きい色のよいものは冬中のおほうとうの爲に藏つて置かれます。

さて秋も終り、甲斐連山の頂きから雪が次第に見え初めて八ケ嶽下しが肌をさす頃になりますと、農家での夜の御馳走――それがこれから申上げ度いおほうとうなので御ざいます。

先づ第一に御釜に（何故か御釜のみ用ゐられてゐます。）味噌汁を少しうすめにこしらへます。それからそれの煮立ちました所へ出しを入れ、南瓜の亂切りにしたもの、葱だの芋だの大根だのをやはり亂切りに致しましたものを入れます。野菜が半ば煮えました所へ前から用意して置きましたおほうとう（手製うどんの太くて巾の廣いもの）と呼ばれてゐますものを入れるのです。

おほうとうは小麥粉を練りましてうどんの樣に少し厚目に延し、二分位の廣さに切ります。丈はうどんの樣に長くせずに四五寸に切ります。おほうとうを入れましてからは煮立ちますとすぐこぼれますから充分氣をつけまして火加減をよくします。おほうとうの心まで煮えが通りました時、かまどから下しまして十分間位蒸します。さうして出來上りました南瓜のおほうとうは野菜の味がよく出まして且あたゝかく、冬の農家の晩食としては此上ない御馳走と喜ばれてゐます。なほ南瓜を入れないと決して甘いおいしい味が出來ぬ事は爭はれぬ事實です。小學校の家事擔任の

先生が、おほうとうの煉り方南瓜の切り方入れ方などを研究して發表されたものも、ござゐます。おほうとうを頂きました夜は老人なども非常に腹工合がよく温まりまして寢心地がよいと申されますのは消化が非常によく、野菜スープが多量で、酸化作用が非常によく行はれる爲だらうと存じます。

名物の五平餅

長野縣　夜詩子

五平餅は私の地方伊那郡の名物です。秋、新米か取れるとこしらへますし、春、木の芽が出るやうになるとこしらへます。珍らしいお客様でも見えた時には、きつとこれを燒いて御馳走します。

五平餅は此の地方唯一の御馳走なのです。冬の寒い日など、火鉢を圍んで燒き作ら、五平餅の熱いのを食べるのは、ほんとにいゝものです。何時の頃か、下伊那郡飯田町の近在の村に、五平と云ふ百姓がありました。或る冬の寒い日、いつもの通り山へ行つて、木を伐つてゐました。

お晝頃になつたので、持つて來たお握りを食べやうとすると、コチコチに凍つてゐます仕方がないので、木の枝へさして、焚火で燒き作ら、持つて來たお味噌を塗つて食べました、それが非常においしかつたのでした。これが五平餅の名の、おこりです。

まづいつもより少し軟かめに、御飯を炊いて、よく蒸らしておきます。御飯の蒸れてゐる間に、くるみ醤油をこしらへて下さい。

胡桃を温湯に浸して薄皮をむき、少量の水を加へてよく擂り、水でのばして砂糖と醤油でからめに味を付け、どろりとしたものにしておきます。中へ木の芽、卸し生姜を入れると風味がよくなります。

御飯がよく蒸れましたら、擂木でつぶして直徑一寸位のお握りにして、お盆の上へ並べていきを拔きます。それからお箸位な長さの平に削つた竹串に、（雨傘の古いのを紙をはがして、骨だけ用ひてもかまひません。）二つ宛さし、よくおこつた炭火にかざして、兩面こんがりと、少しこげめの付く位に燒きくるみ醤油をかけてもう一度火にかざして乾し、温いうちに頂きます。

胡桃の代りに、胡麻や落花生を使つても、おいしいものが、出來ます。又、お醤油でなく、お味噌にしたのも、變つていゝものです。

朝鮮漬

日向國　和子

お料理ではありませんが珍らしい漬物ですから御紹介いたします。大根は色々の方法で漬物にされますが、これは當地方特有の漬方で、美味であり且貯藏も易いので他の地方へ送りますと、非常に喜ばれます。（當地方を郷土とする方々へ送りますと殊に喜ばれます。）この漬物は何時頃から當地方で造られたのかそれは詳かでありませんが、古老の話では豐太公朝鮮征伐の折に時の城主有馬公が軍に從つた際、軍用品として携帶したので此名が起つたといふ話でありますから、此漬物はかなり古い歴史を持つてゐるわけであります。

まづ宮重、練馬のやうな長形の大根を（それは出來上つた時の體裁がよいからです）細いものはそのまゝ太いものは縦にわり、澤庵漬のやうに樽の底から並べては鹽をふりして、上に壓石をおきますと（樽は屋内に置きます）三四日位で水があがりますから、漬けてから一週以内に大根を取り出して乾します。（通常、四斗樽に宮重で百本乃至百二三十本、鹽二升の割）これは生のまゝの大根ですから水の昇り方は早く、一週間以上も漬けておきますと乾燥後の色艶が悪くなり味も亦、幾分損せられるやうであります。

乾し方は樽から取出した大根の一端に糸を通し、竿にかけ列べ、毎日陽に乾しつけ、夜は屋内に入れ、堅くなつた時に貯へます。繁雑と手数を除く爲に雨露のあたらぬ日當りよき軒下で乾したりしますと色艶のわるいものが出來ます。乾し終つたなら瓶又は桶に入れ、又は鹽俵の空いたのに入れてかたくとぢ、濕氣のない處に貯へますと二三年はおいしく頂けます。長く貯へたものほど軟かくなり、少し色が黒くなりますが。調理法は小口から、うすく切り、微温湯にて未だ鹽分の少し殘つてゐる位に洗ひ、堅くしぼつて醤油をかけて食べるのです。又はこれに醤油と味醂砂糖少々を加へて頂きますと、一層おいしく一度これを食べるときは永久に其味を忘れられないとまで言はれて居ります。

菊の花とその葉を

信州　森島千代子

秋の中旬頃川岸の垣根や、町裏の畑のわきなどによく見うける黄色の花の菊でございます。千輪菊と云ふのでなくて澤山に咲く花で俗に信濃などでは黄菊と言つて居ります。

滿開の花弁は花冠のもげる憂ひがありますからなるべく早く、そろ／＼滿開になりかけやうとする頃萼の根もとから摘取ります。

よほど澤山摘み取りましても漬けますと少くなりますから御漬にならうと思ふ甕なり瓶になり、ふさわしいほど摘みましたら、よく水で洗ひ笊にあげて水をきります。

水がきれましたら鉢に移して、上から煮湯をかけ、三四十分湯に浸して置き、湯が冷えましたら、少し水に浸して二十分間位後に揚げて、露をしつかり取るのでございます。布に包んで絞つても手で握つても笊に揚げておさへてもそれは隨意なのです。

露がきれましたら良くほぐしてばら／＼とほんの少しの食鹽を振りかけるのでございます。

尤も花の多少により、鹽加減は異ひますが、一輪の花にほんの鹽氣のあると思ふほどで結構です。食鹽の散る様によくかきまはして、こんどは三盆砂糖を振り掛けるのでございます。砂糖は少しは量が多くもさほど苦にはなりませんが、それでも霜の降つた位の程度で止めて丁度でございます。矢張り鹽の時と同じによくかへしまして瓶なり甕なりへ移しておさへるのでございます。そうして味醂をかけて置くのですが、一升瓶に一合位の割合の味醂を御使になれば適當でございます。

倘味醂のかはりに酢でも宜しくございますが酢の場合は砂糖を眞白になるほど「味醂

の時の肴」御使ひ下さいませ。香のよい、色のよい、珍らしい漬物になり茶菓にも酒の肴にもなります。

尚この葉はフライの材料にもなるのでございます。フライを御揚げになる時この葉を摘んで來て、葉の裏面にのみ材料粉のといたのをつけましても裏表とも包みましても結構でございます。大變に珍らしい上品なフライが出來ますので、魚のフライなどに添へるのに結構でございます。

鮭のしし漬

北海道　かつら

御存知の通り北海道は魚類の豐富な土地ですから、昔から色々な魚ヶ料理が工夫されてゐます。その中で北國獨特の面白いお料理を一つ御紹介いたしませう。それは鮭のしし漬と云つて、鰤とか鰊とかで漬けましても宜しうございますが、鮭で作りますと一番上品で美味しいものでございます。先づ石狩鮭（石狩川で捕れるもの）の生鮭を三日ばかり水につけておきます。これを三枚に下し適宜の大きさ、大てい二寸に一寸位の大きさに切り、頭や骨も同じに切ります。この切身を樽の中に入れ壓石をして一二日おきますと水がずつと上りますから樽を倒にして水切りをいたします。水を切つて居ります中に白米を鮭一本に付き、二合五勺の割にして少々硬めに煮きます。この米飯に麴三十匁から四十匁位（一本に付）酒少量と鹽を混じます。鹽加減は混ぜ物を口に入れて辛い程にいたします。それから胡蘿蔔と生姜とを短冊形或ひは梅形に切つておきます。鮭は水が切れてをりますから樽をよく拭いてこの中に飯と鮭とを交互に入れその間々に胡蘿蔔と生姜を入れて飾りますす。すつかりつめをして二三日其の儘にしておきますと、鹽が溶けて軟らかく水つぽくなつて居りますから蓋をきつちり一壓石を強くします、さらしますと一度に水が上つてしまひます。その儘かまはずに四十日程おきましてから口を切ります。まづ水をざつと捨ててから樽を倒にしますがその下で蓋を支へる物（他の少さい樽等が宜しうございます）を置き、倒にした樽の底には壓石を置きます。かうして一日一度は水切りをいたします。そしてすつかり水がきれましてから口を切るのですが、鮭のローズ色と米飯の白色、生姜のクリーム色の斑點胡蘿蔔の暗色とは本當に美しい配合で、北海にあらはれるオーロラもかくやとばかり思はれます。その上お味も大變に輕く上品で宜しうございます。尚丁寧にいたしますにはこれに鮭の「はら子」を入れますと、大變軟らかく御老人にも子供衆にも喜こばれて北海道ではお正月になくてはならぬ物になつてをります。これは生鮭でなくとも鹽鮭でも宜しうございますが、鹽鮭なら鹽加減をずつと少くし、日數も三十日程で足ります。私共では内地からいらつしつた方に差上げたり東京仙臺の身類にも配りますが大變珍らしがつて毎年時節になりますと注文が參ります。評判が宜しいので毎年かゝさずに漬けますが皆樣も是非一度おためし下さい。

不良少年と家庭

關　寛之

兒童期の犯罪は再現する

近世社會生活や產業生活が複雜になつてきてから、道德的に未成熟な兒童等は、それに順應しきれなくなつて、不良少年問題といふ社會問題を惹起するやうになりました。茲に要ふべきことは、兒童期の犯罪は成人期になつて再現する傾向のあることであります。諺に『三つ子の魂百まで』と申しますが、成人犯罪者の多くは其の兒童時代に罪過を犯してをります。凡そ十代の中頃と二十乃至三十歲の間とは生涯の中に二度だけ犯罪の最も多い時期でありますが、十代に罪を犯さなかつた者で二十乃至三十代に初めて罪を犯す者は少いのであります。故に犯罪問題は兒童の問題であり、法治の問題は教育問題であります。不良少年問題の輕忽に附せられないのは其の爲であります。

不良少年の典型

今までに現はれた種々の不良少年及び少女を平均してみますと、模型的不良少年を假說することが出來ます。模型的兒童犯罪者は男兒で、約十五歲で、同年の正常兒童よりも體重や身長は僅かに劣つてゐます。普通の子供よりも著しい身體上の缺陷がある譯ではありませぬが、學校は中途で止してをり、智力は正常兒童中の最下の者に匹敵し兎に角正常であります。何かしら街頭に於ける商賣又は他の職業を有し、不良少年團の一員であり、家庭は甚だ貧困な階級と安樂な勞働階級との中間にあります、片親をもたず、或は酒呑の親をもつてゐることが多く、同胞があるならば其の中に多くは犯罪者があります。多くは一以上の罪を犯してをり、其の嫌疑の中には必ず窃盜があります。而して其の狀態の四分の一は家庭的遺傳から來てをり、四分の三は環境的原因から來てをり、殊に其の屬する團體の影響が主要な原因となつてゐます。それを改善せしめるには、其の現在の環境から遠ざけるか、それを根本から變ずるか、正しい習慣と理想とのよく確立するまで嚴重な監督の下に

規則正しい生活を送らしめるかすれば改善の見込ある者であります。多くの不良少年は今述べたやうな通有點をもつてをります。隨つて之に類似した子供をもする親は注意しなければなりませぬ。

兒童に最も多い犯罪は何か

犯罪の内容は年齢及び男女性によつて異つてをり、季節・氣候・種族・文明の程度等の爲に幾分か異つてゐます。兒童は體力や心力の制限を受け、成人と異つた種類の誘惑に與味を有し、衝動や本能も亦年齢によつて一樣でありませぬので、特有の犯罪を示してゐます。男女は生來の差異があり、社會の取扱も異つてゐますので、犯罪の種類も同じでありませぬ。個人の氣質・特性・性能も亦犯罪に特色を帶ばしめるもので、同一犯罪者は同一の特風を示してゐます。春には遊惰・浮浪・性的の犯罪が多く、冬には賭博の如き室内の犯罪が多くあります。特殊の社會事情も犯罪の性質に影響し、鐵道の初めて開通した地方には鐵道法違反が多く近頃は『地震ごつこ』の流行で親父の自轉車修繕材料を投出してしまつた三面材料もあります。

兒童の犯罪の第一歩は九〇%までは窃盗に始まるもので兒童の犯罪には之が最も多くあります。女兒には賣春猥褻が最も多い。普通に兒童の犯罪に最も多い種類を、次に擧げますと、窃盗・賣春・浮浪・遊惰・強盗・秩序紊亂・毆打等であります。殊に遊惰は十三歳に於て最も多く、惡戯は十四歳、浮浪・秩序紊亂・毆打は十五歳、窃盗強盗は十六歳、賣春は思春期にはひつた當初の頃が最も多くあります。總體に人身に對する犯罪の多い年齢は、財貨に對するそれよりも數年遲れる傾向があります。兒童には窃盗が多く、青年には毆打が多いといふ譯です。

不良少年の原因

不良少年の原因に就いては、イタリーのロムブロゾー及びイタリー學派の人々は、犯罪者には生來の身體的特徴があつて、其等の特徴は犯罪の性質さへも表示してゐると唱へました。而して額の削上つた者、顴骨の突出してゐる者、後頭の扁平な者等を數へてゐます。併し現今の研究では、斯る特性を有する正常者もあるので、精神薄弱即ち低能の犯罪者を除けば普通人と異る所はなく、隨つて生來の犯罪人型などいふものは無いといふことになつてゐます。精神薄弱者とても皆犯罪者となる譯ではないのでありますから

此の説は成立致しませぬ。犯罪の遺傳的原因を力説するあまり、精神薄弱・心身の隔世遺傳・神經病・酒精中毒等の或る一つを指して主要な原因とする人も少くありませぬが、如何なる罪過も個人問題でありまして、個々に研究しなければ明かになりませぬ。不良少年の二五乃至三〇%以上は低能者であり、また兒童は原始人や未開人と同一程度に本能に支配されてゐますので、遺傳が犯罪の一因を爲すことは確かであります。併し數の上から見ると寧ろ環境的原因の方が優勢であります。されば今日では在來ほどに遺傳的原因を重く見ないで、缺陷ある家庭・惡い環境・社會的及び經濟的狀態等の如き環境的原因を重く見てゐます。殊に家庭の缺陷は其の中の主なるものと考へられてゐます。

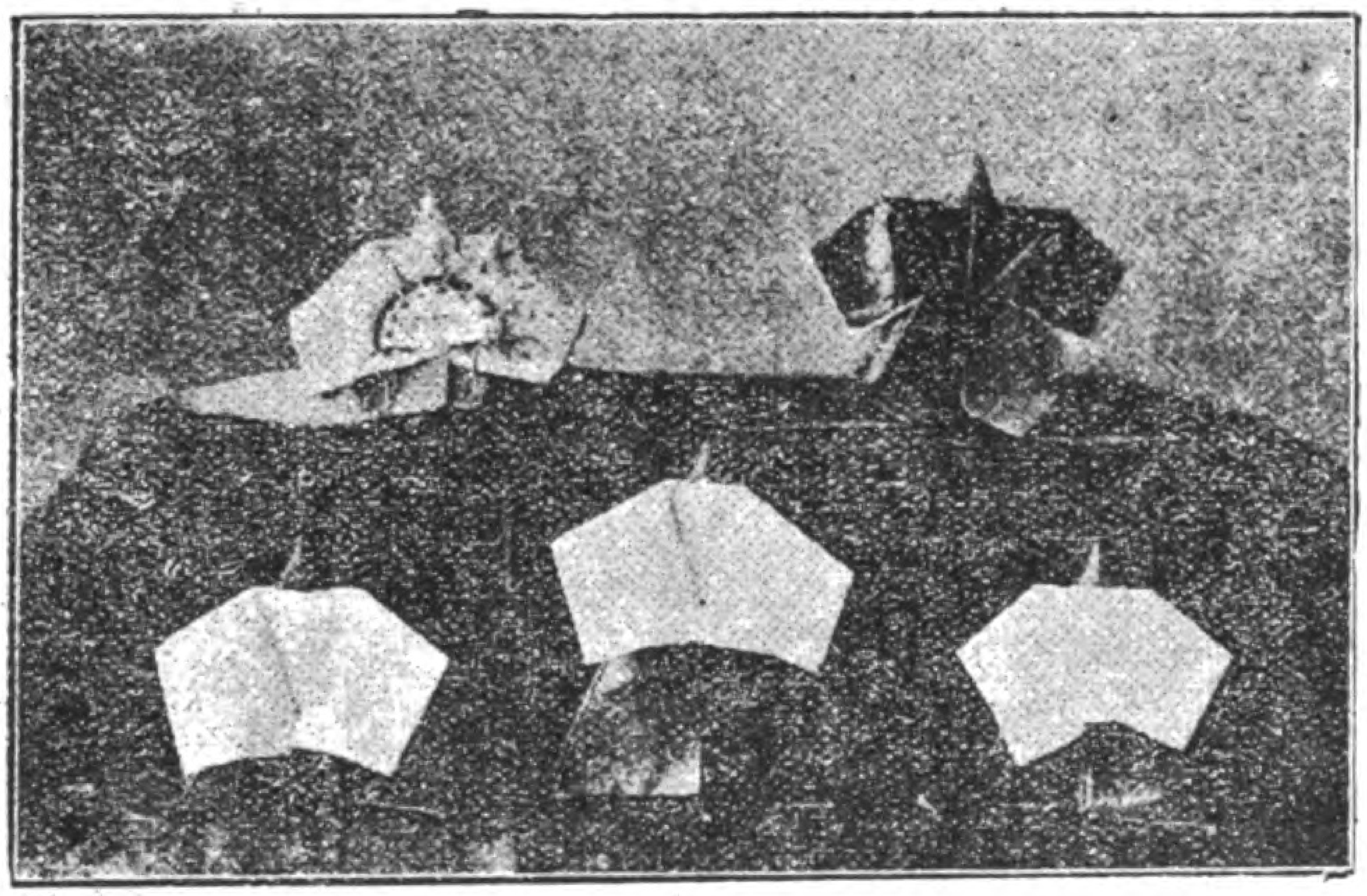
家庭の缺陷と不良少年

家庭が貧困であれば兒童の勞働を强ひることになり、商賣に從事せしめると金錢上の犯罪に導くこととなり、職工になれば、未熟な頃から惡い仲間の感化を受けて犯罪に親しむこととなります。兒童勞働者の犯罪は六乃至十六歳の兒童の全犯罪の六二%以上を占めてゐます。勞働に伴ふ轉職と遊戯の不足とは此の弊を益々大にする傾があります

怠惰は罪惡の母でありまして、父兄の眼を晦まして學校を怠り、殊に活動寫眞に入りびたりになることは既に犯罪に半ばはひつてゐるのであります。斯る生活の間に不良少年團に參加することになります。不良少年團にはひると、多衆の力を以て兒童には思ひがけなき大なる犯罪を遂行し、縱令改心しても其の壓迫の爲に遂に脫しきれなくなります。斯る團體の影響は甚だ大でありますから、有名な判事リンドセイ氏は其の團體に參加して改造を企てた程であります。片親を有しないとか、父親が酒呑で始終母を虐待するとか、繼母が虐待するとかするやうな缺陷ある家庭の兒童は、模倣と愛の缺乏による自暴自棄とで不知不識の裡に犯罪に向つてゆく。金錢に緩やかな家庭も其の嚴格に過ぎる家庭も共に可けませぬ。賢母ある家庭からは不良少年は出ませぬ。併し或る教育ある母が、子供に砂糖分を餘計に與へると胃腸を破壞するといふので大いに之を制限した結果、其の子が學校で糖分に富む他人の辨當を盜食した實例もありますから、『角を矯めて牛を殺さぬやう』注意すべきであります。要するに不良少年の主因は家庭の缺陷にあるのでありますから、人の母たるものは大なる警戒と注意とを拂はねばなりませぬ。

折紙で出來る智惠雛さま

白井その子



(出來上り圖)

今年も待ちに待つた樂しい桃の節句が參りました。今年は特に目出度い雛の節句でございますが、又一方には昨年の災厄にお會ひに成つた御家庭では、何となく淋しい御節句の樣であらうかと存じます。

雛樣は種類にも澤山御座いますが、とにかく雛壇を飾つて其日を迎へますのは、娘達の心持の上にも善い效果を與へると思ひます。併し態々高價な品を購つて陳列致すのは此際の簡易生活には不似合とも思はれますので、茲に簡便なお雛樣を御紹介致しませう。

宅でも粗末ながら年々飾ります處から、賑やかにする爲め、紙で一對の雛樣を折つて加へましたら、これは珍らしいからとて折り方をお聞きになる方が多いので、私も夫れから夫れへと工夫をこらして、ドウヤラ可愛らしい雛樣が出來上りました。此際を利用して皆樣にも折つて頂いて、猶ほよいお考へを附けて頂いたら一層可愛らしい物が出來ることゝ存じます。

雛樣初めてのお方には一寸面倒の處もありますが、出來る丈詳しく圖解を揭げて置きましたから、一度折る度にそれと比べてなされたなら大體は直きに出來ますので、其には皆樣の御工夫次第ゆえかりに智惠雛と名付て見ましたが、それは私が勝手に名付ましたので、復興雛でも、又勿體ない話ですが御成婚雛などゝ申してもよろしいでせう。

先づ材料に付て一寸御話して、次に折り方に移りませう。

厚紙 紙折りのことですから、此紙だけは十分に選びたいのです。一番良いのは政といふ紙で之れには地政と本政とありますが、地政では甘く參りません。尤も本政の色紙が少し大きい紙店にはあります。若しなければ模造紙(手工用の)でも宜しいで

色紙は一雛に二色づゝで二枚の色紙を張合せに重ねて折ります。又女雛には袴と上着と同色が出るといけませんから、四方の切口から(それは次頁の圖

解を見れば分ります）中斜に向つて他の色紙を附けて折ればいいのです。(例へば赤い色紙を下にして折れば袴を緋にして上を他の色で出す事が出來ます）又白紙で折りましたなら、繪具か色鉛筆で彩色を加へても結構です。

檜扇　雛樣の檜扇は反物の包紙か薄い白ボールか又奉書紙などで造ります。

先づ紙を末廣形に、上を廣く下を狹く扇の一片の形に切り、幾枚か重ねまして柄の方は一束にして結び玉で止め、廣い方は五色の糸で各片の中央へ針で通し、それを廣げて兩側へ長く房の樣に下げますと扇の形になります。之れに一寸雲形に花鳥でも認めて頂けば十分です。

頭　指圖の樣に其まゝ折り上げてゆきますと雛樣の頭は下へ出る色と同色のものになりますので、白紙で折る場合なら差支ないのですが、若し色紙で折る節には後で頭に被せる物を折つて、お顏やおつむを造ります。

次には折り方です。之れは折る順序から申せば官女から始めた方が分り易いですが、先づ男雛から申しませう。

一　男雛の折り方

紙の大きさは別に定りはありませんが、眞四角に切つたものでなくてはなりません。

先づ第一圖の(ホ)から(リ)、(ヘ)から(リ)、(ト)から(リ)、(チ)から(リ)へといふ樣に四方へ鋏を入れます。

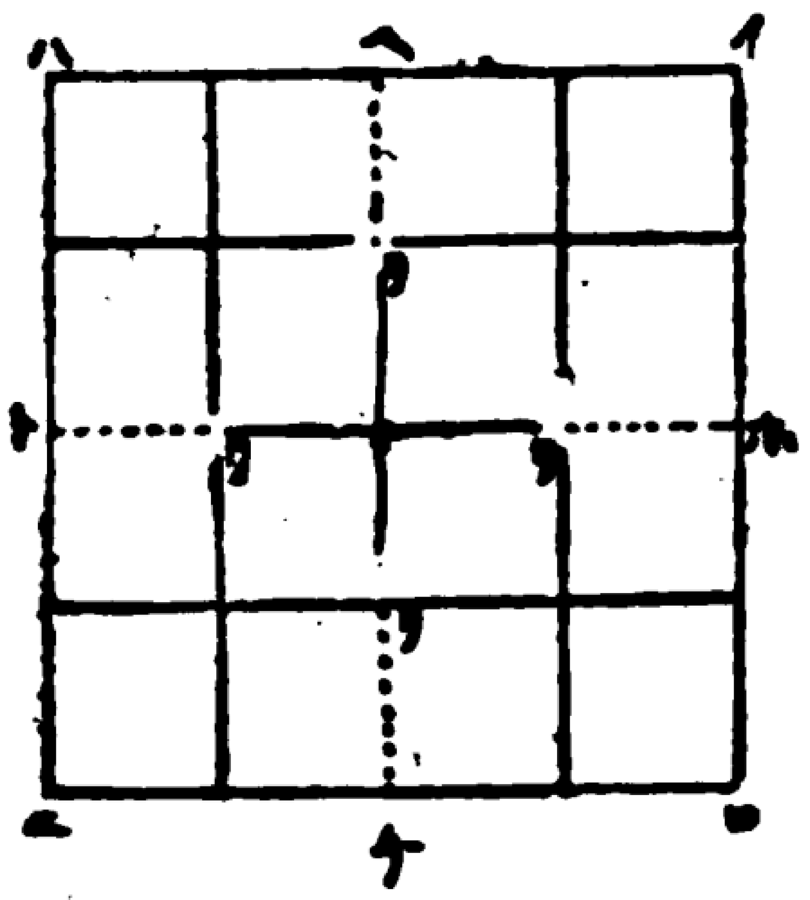
次に第一圖の(イ)から(ニ)にまでと、(ハ)から(ロ)へまでとに斜線に折り目をつけて。

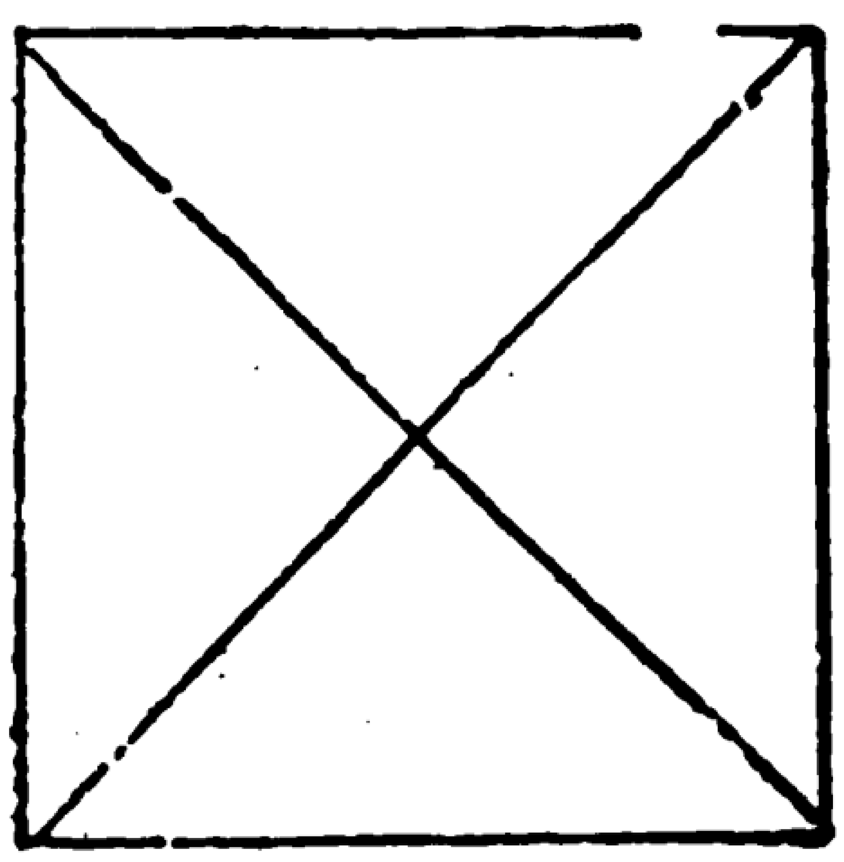
次に第三圖の(イ)の尖と(ロ)の尖とを突き付ける樣に點線×の處へまで折り、(ホ)(ヘ)もそれと同じ樣に折りますと第四圖になります。

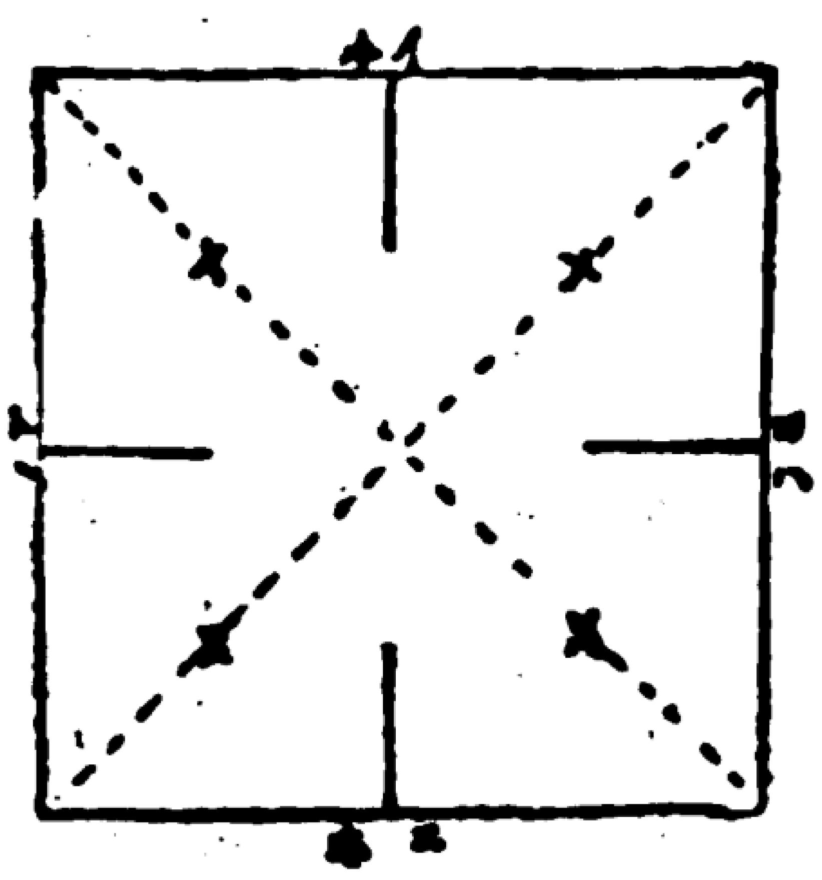
第四圖を裏返して(ハ)(ニ)と(ト)(チ)とを前の樣に折りますと第五圖になります。

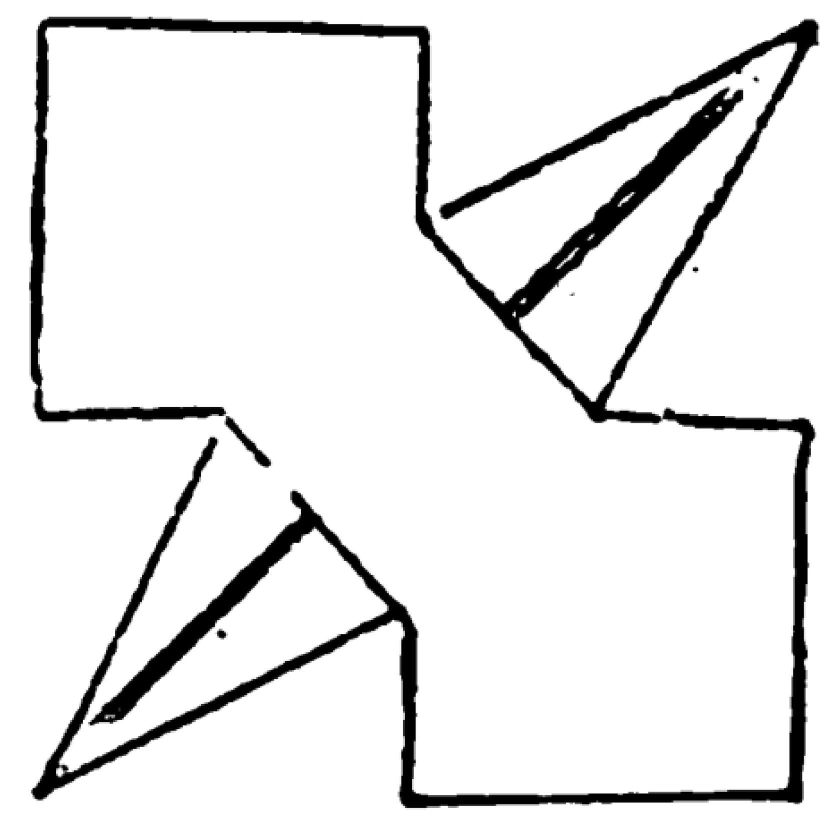
第五圖の點線を中にして、(イ)を(ロ)に合せて折りますと第六圖になります。

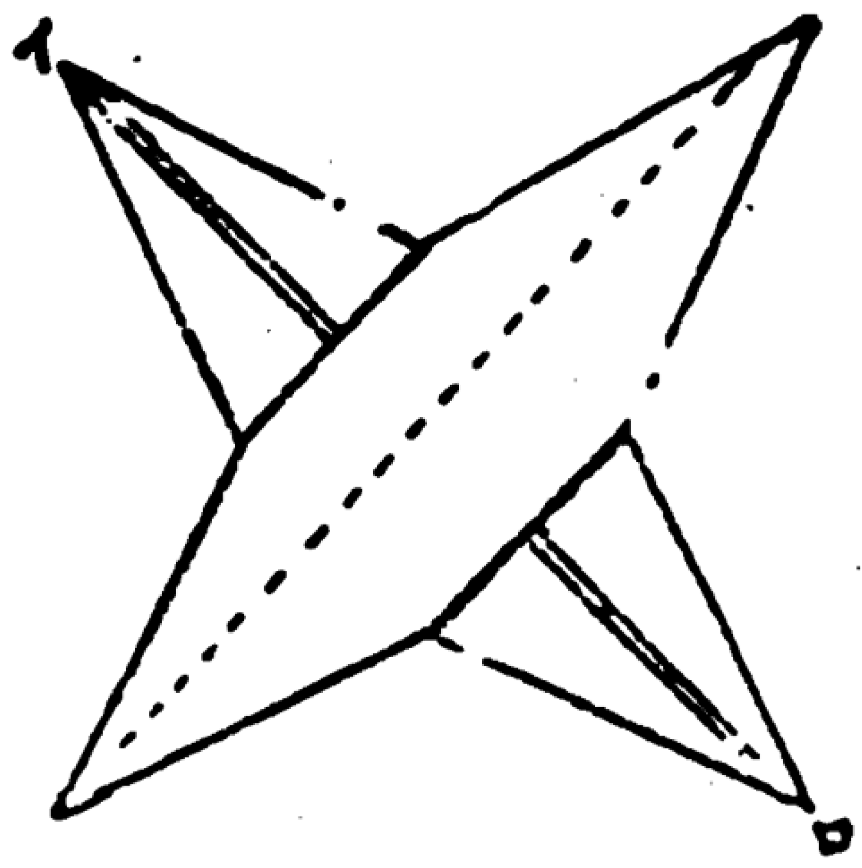
第六圖の點線を中にして(ロ)を(イ)に合せて折ますと第七圖となります。

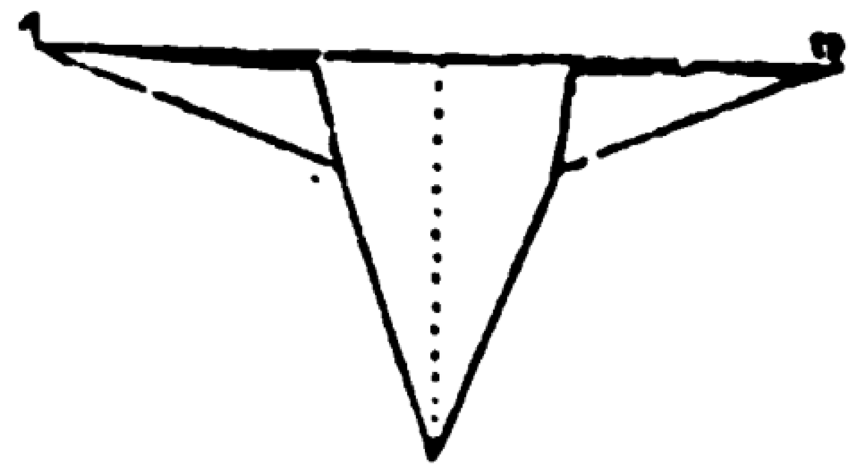

(第一圖)

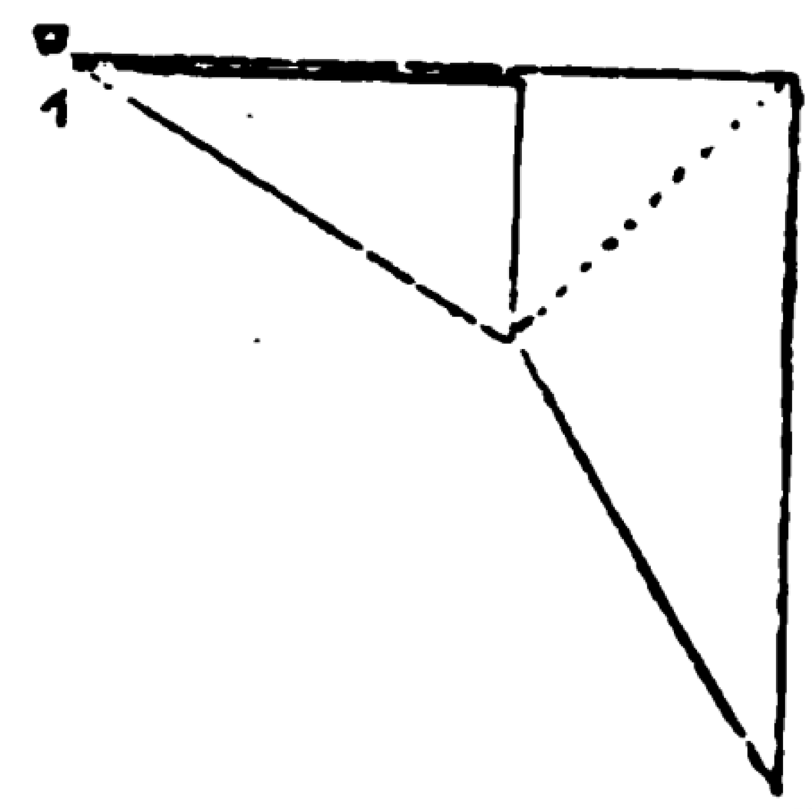

(第二圖)

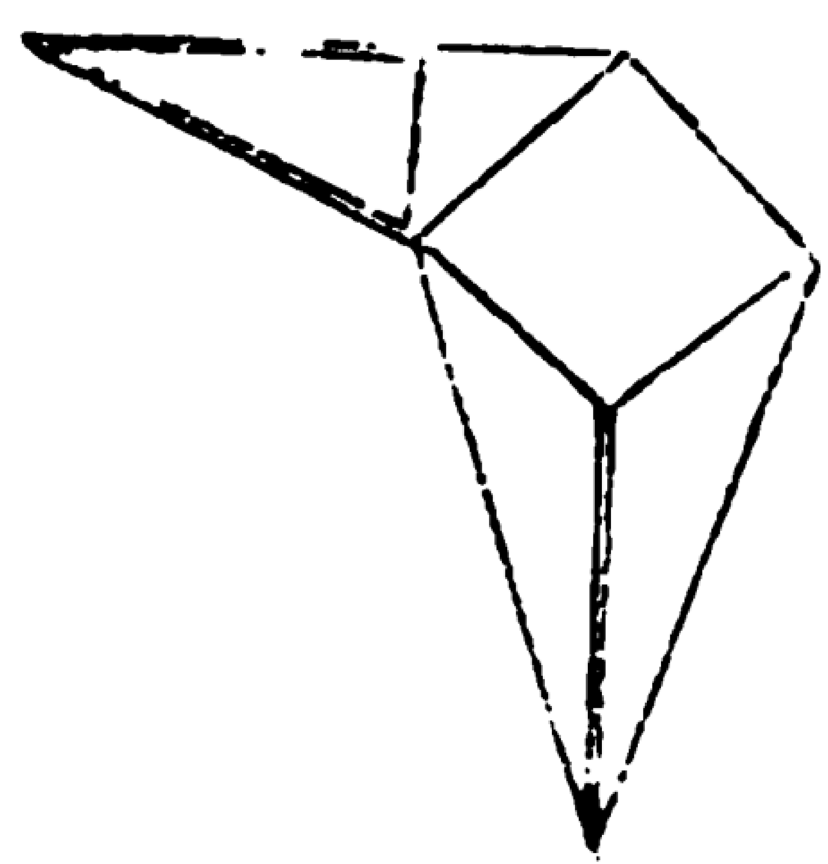

(第三圖)

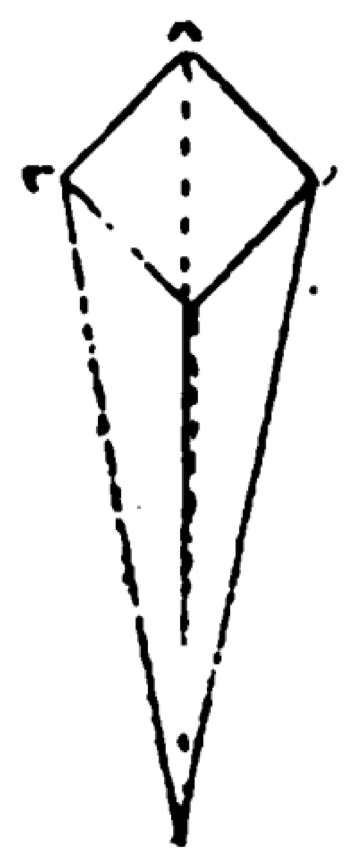

第四圖

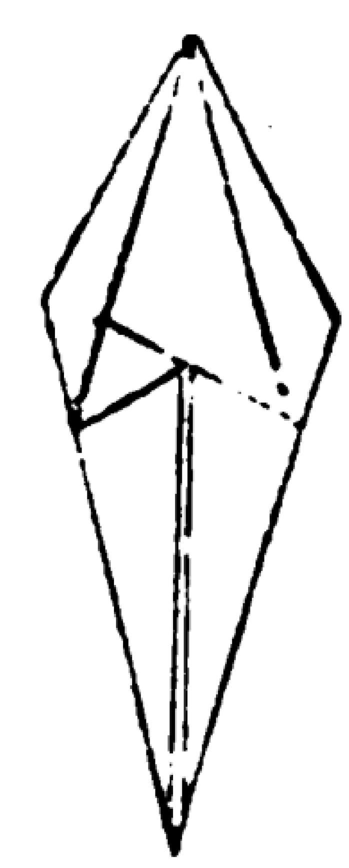

第五圖


第六圖


第七圖

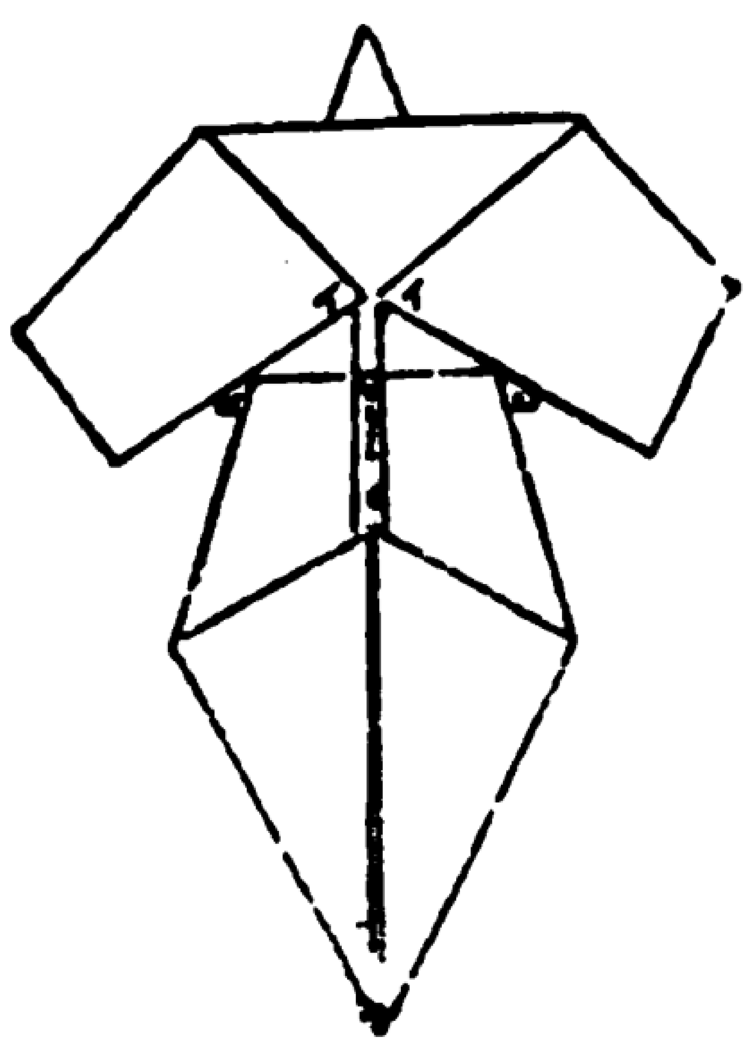

第八圖


第九圖


第十圖


第十一圖


第十二圖


第十三圖

第七圖の點線を外にして、(イ)の尖を(ハ)に合せて折りますと第八圖になります。

第八圖を裏返して前の通りに(ロ)を(ハ)に合せて折りますと第九圖になります。

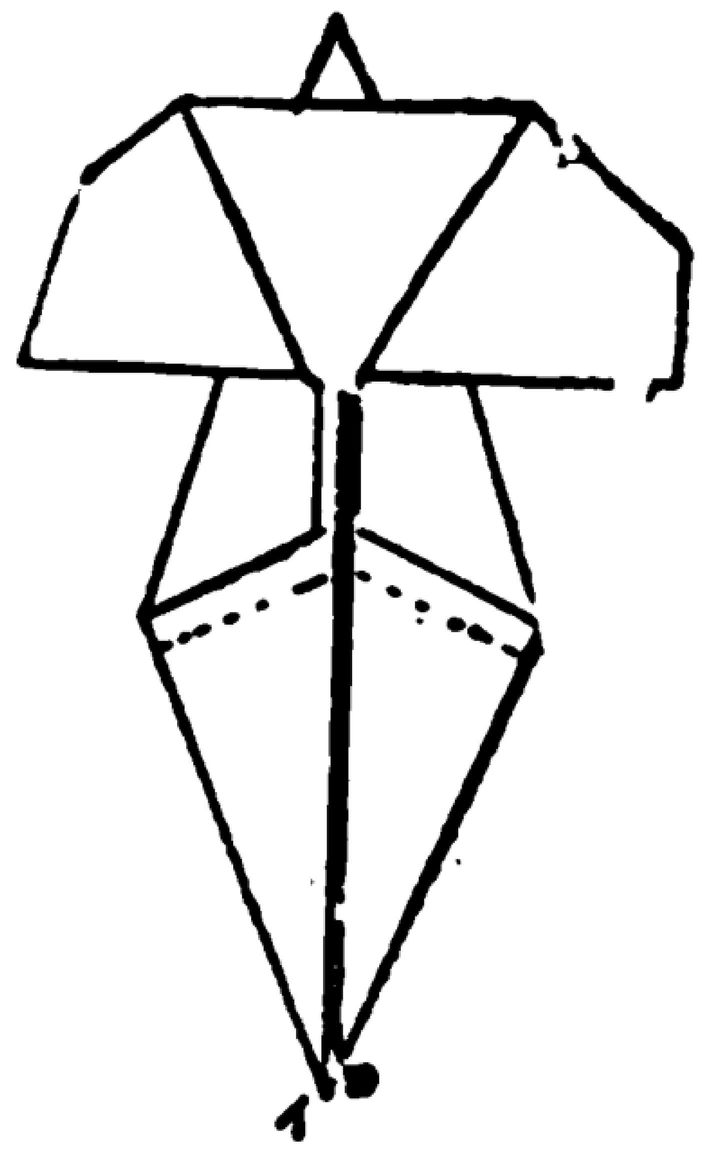
第九圖の點線を中にして、(イ)の角を開きながら折りますと第十圖になります。

他の三ケ處も之れと同樣の仕方で折り出すと第十一圖になります。

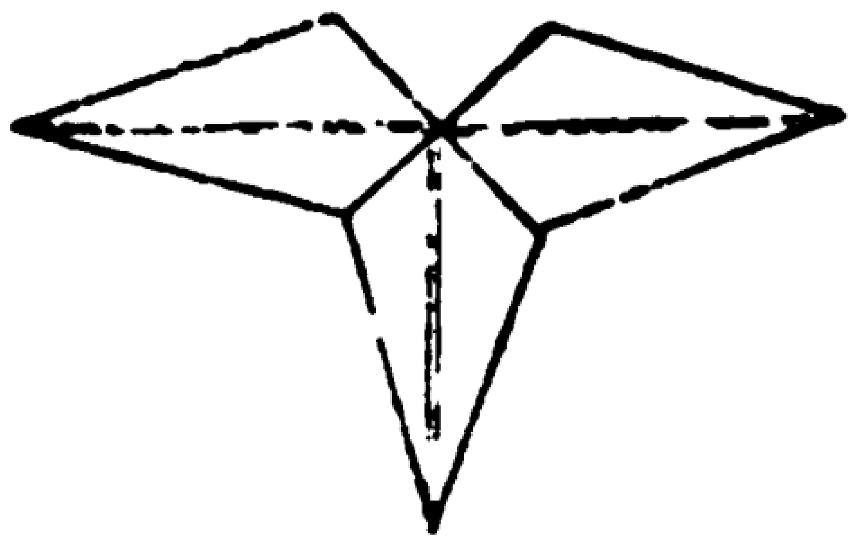
第十一圖の點線を中にして、(ニ)を上に折り上げますと第十二圖になります。

第十二圖の(ハ)の處へロ印の樣に小孔を明けて、次に(イ)(ロ)を開きながら、第十一圖の(ハ)なる尖を此孔に通して折れば第十三圖になります。

次に第十三圖の(イ)を(ロ)の角まで引き延ばせば第十四圖になりま…

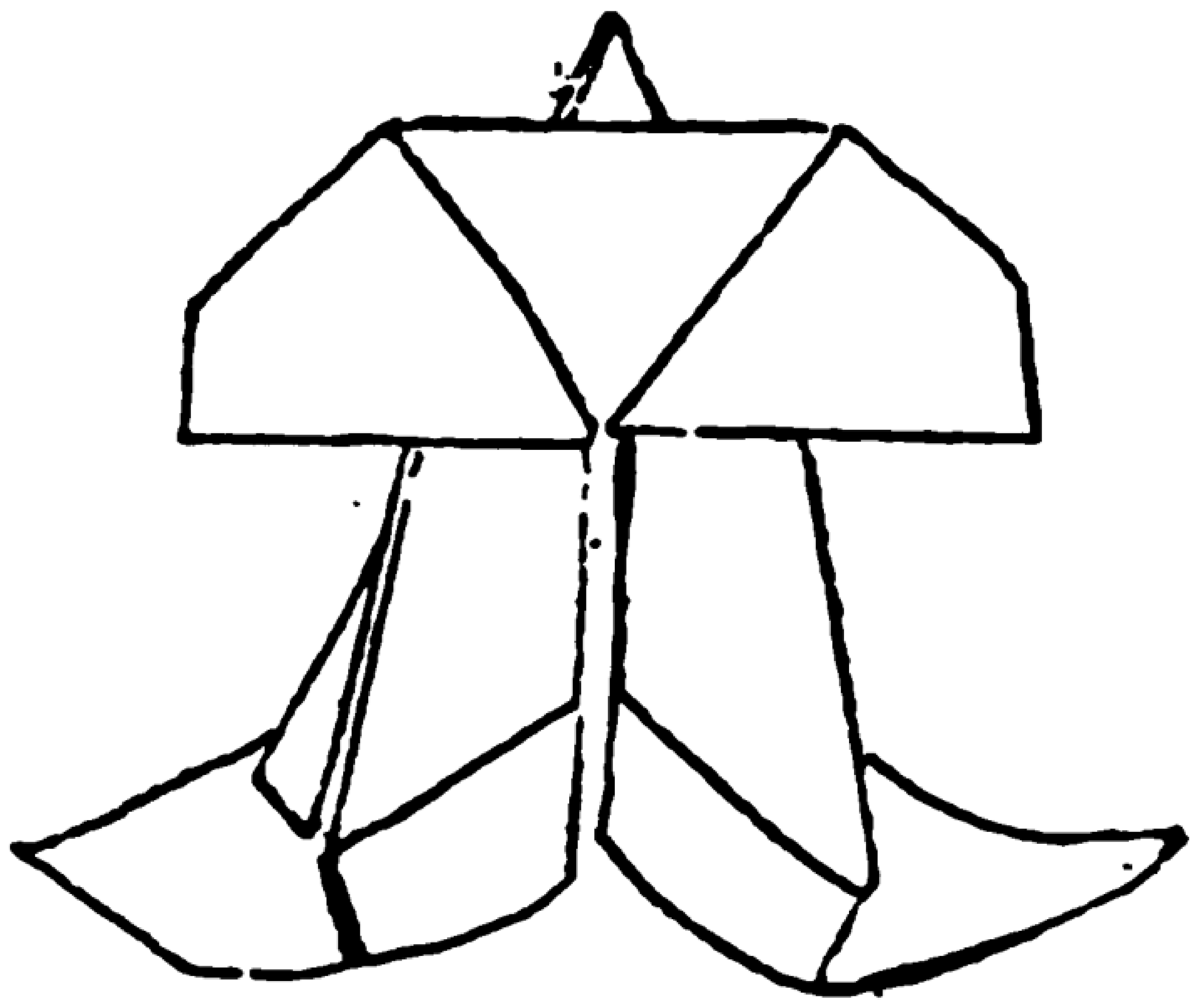


（第十四圖）



（第十五圖）

第十四圖の點線を外にして、(イ)の角を開きながら外へ折り、(ロ)も同樣に外へ折り、後もそれに從つて坐りよい樣にする、之を逆さにして見れば第十五圖のやうになります。



（男雛の圖）

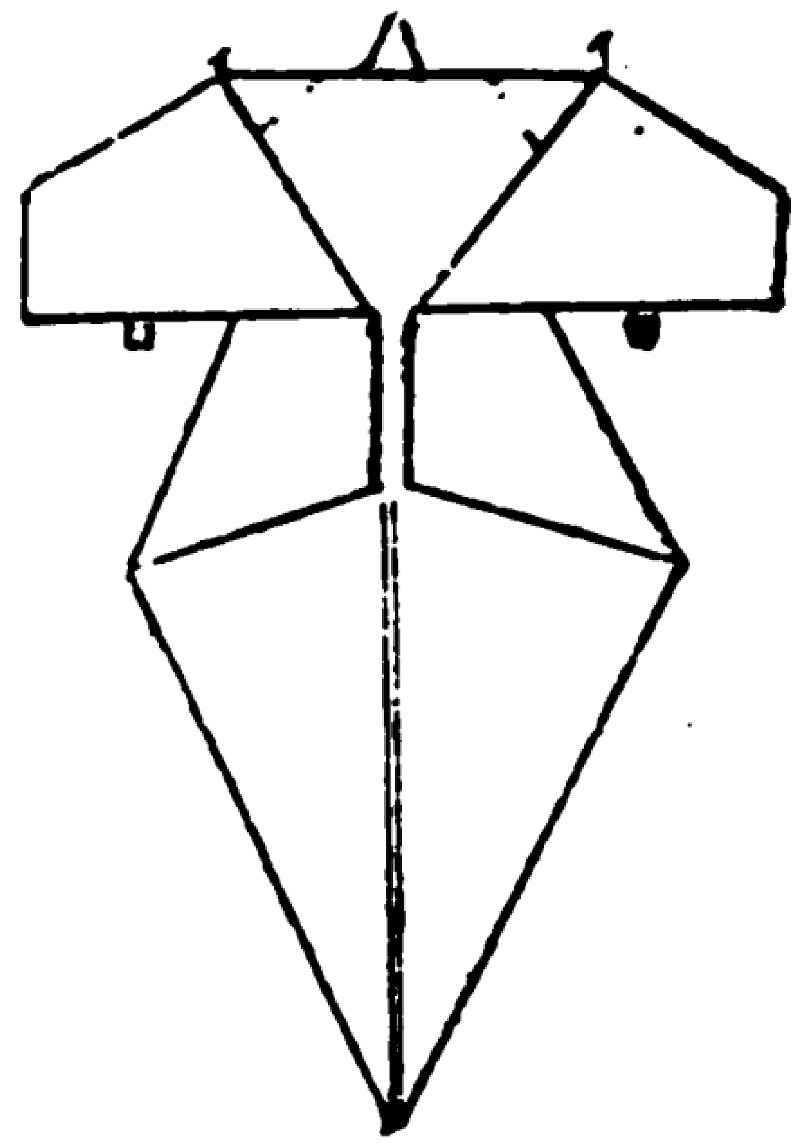
二　女雛の折り方

女雛の折り方は男雛と同じ順序で第十三圖まで折ります、第十七圖は第十三圖と同じものであります。この第十七圖の(ロ)の處を押へ開きながら、點線を中にする樣にして(イ)を點線の處までよこせば第十八圖となります。

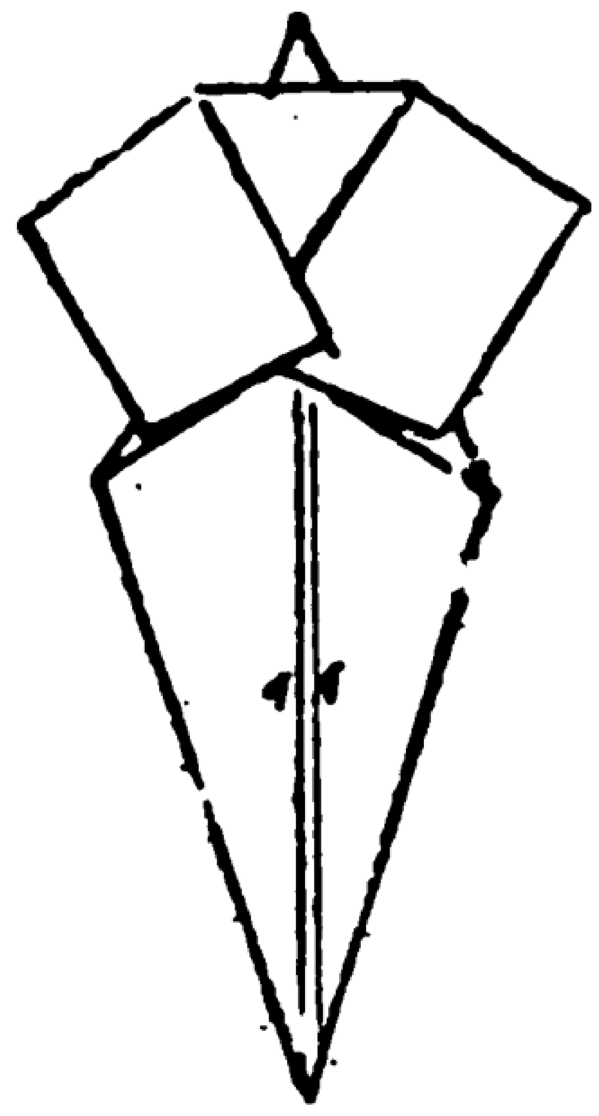
第十八圖の(イ)を左右とも下へ引き下げ、(イ)の裏側も同樣に引下げれば第十九圖となります。

第十九圖の點線を中にして袂を左右へ開いて上げ、ふつくりと袴で坐れる形にします。

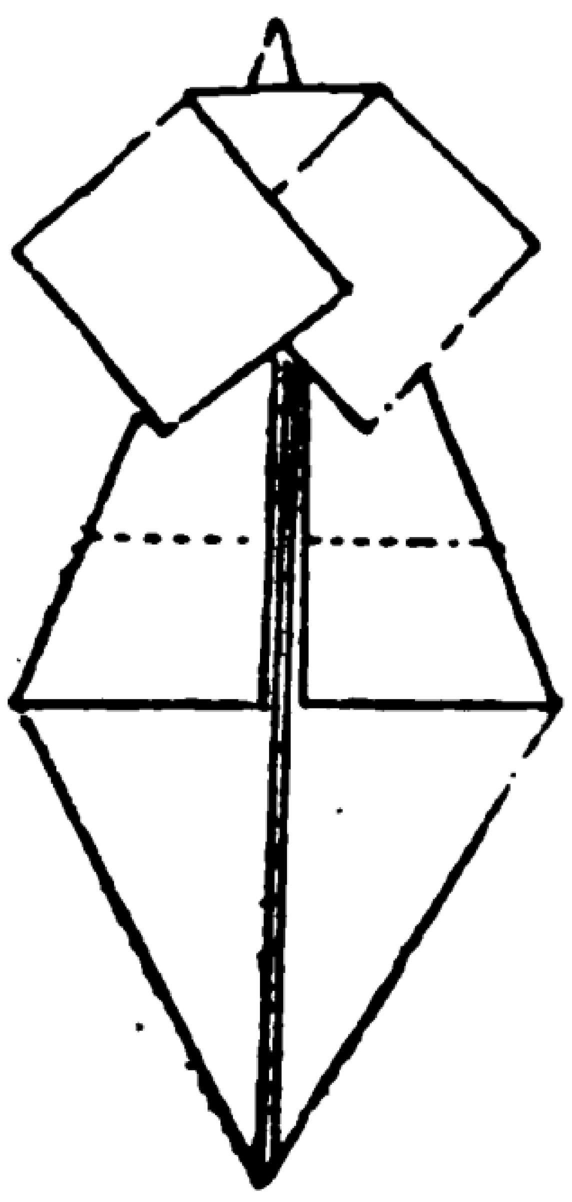
女雛の袴の處が六ケ敷しく折惡くなりますなら、後に掲げました坐つた官女の下の袴の樣にお折りになつても差支ありませんが、成るべく角口をふつくりと折ることが第一です。



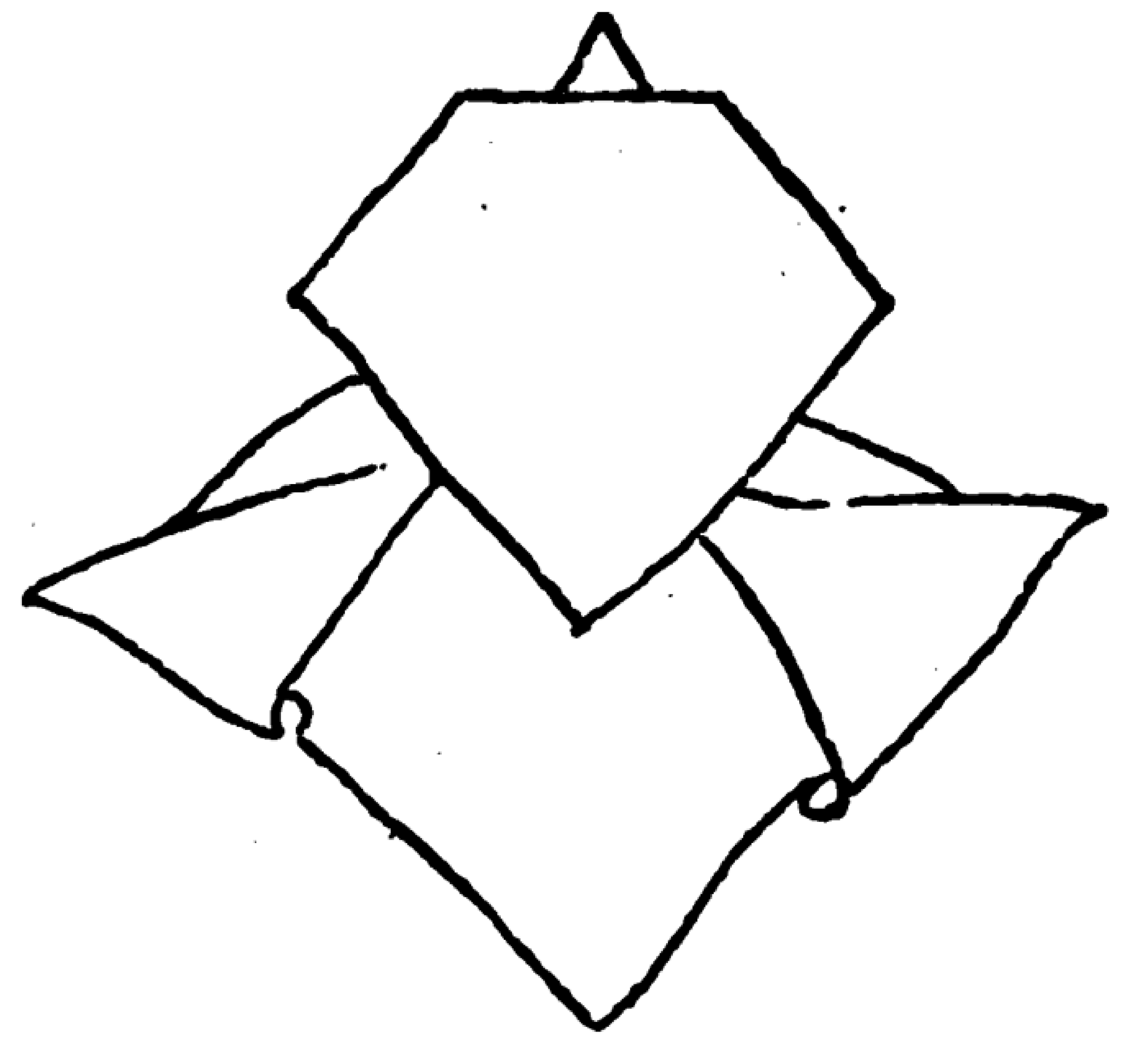
（第十七圖）



（第十八圖）



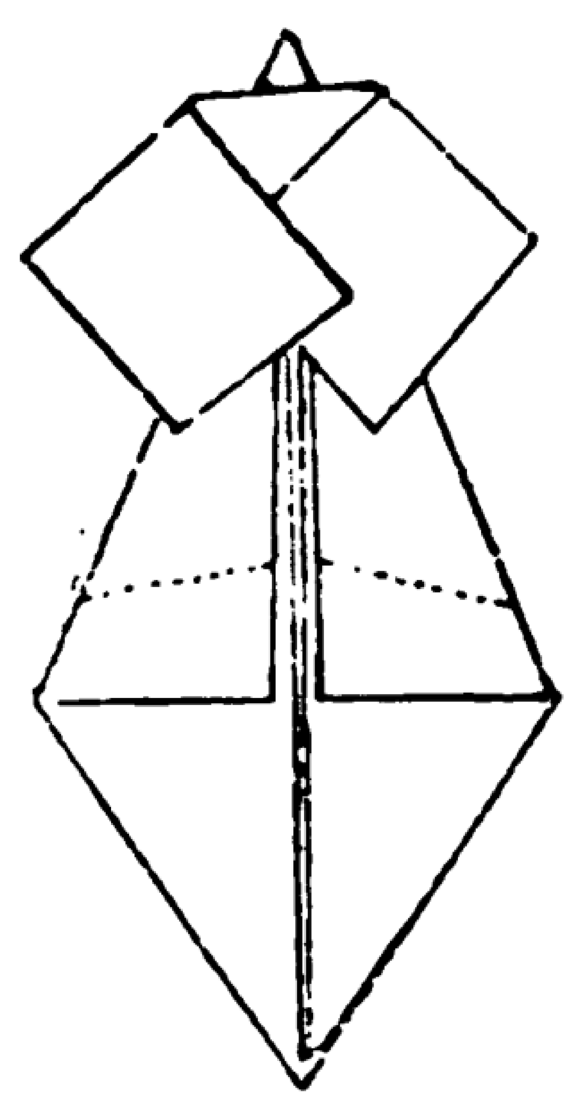
（第十九圖）

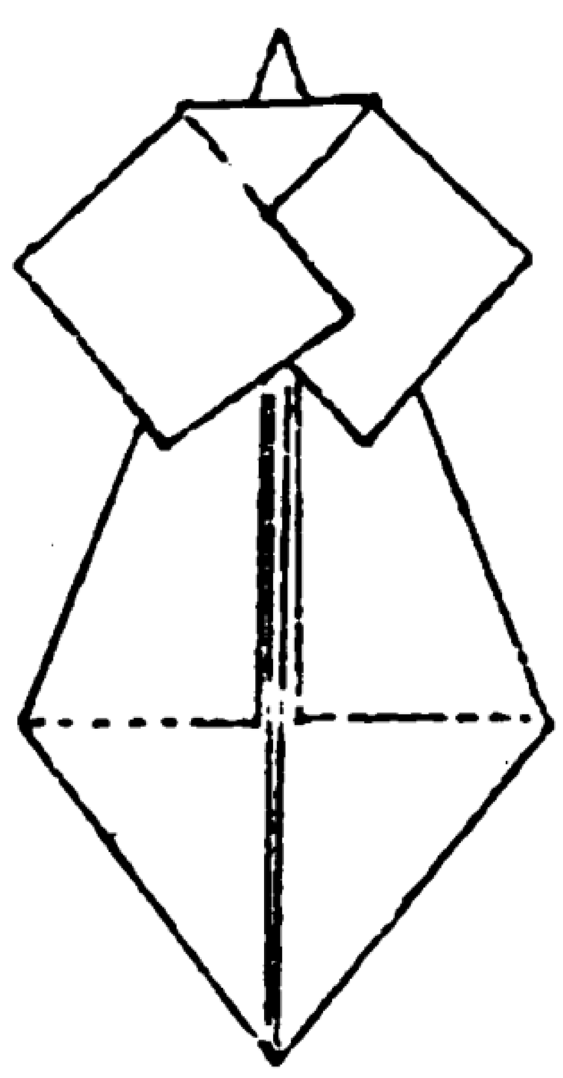

（女雛の後姿）

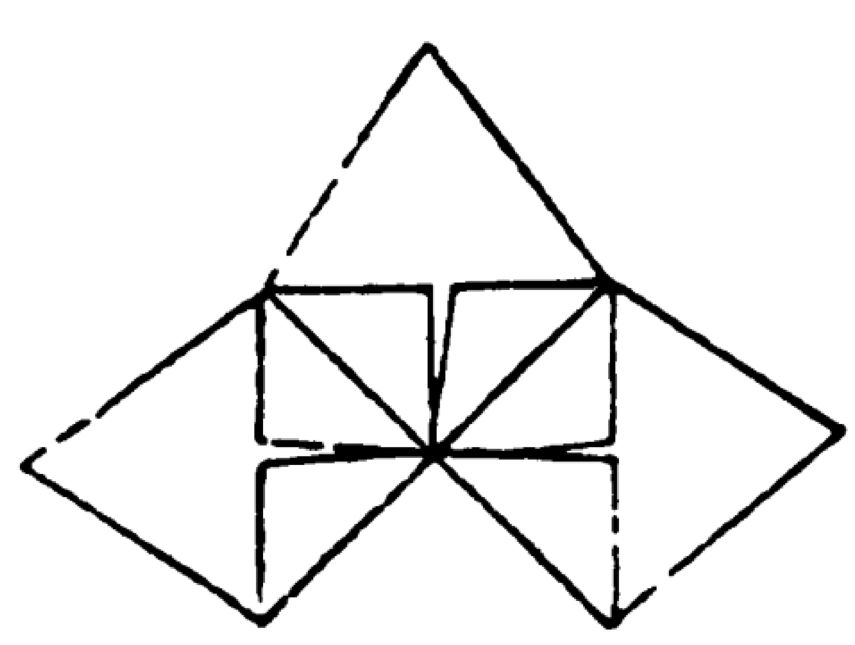
三　官女の折り方

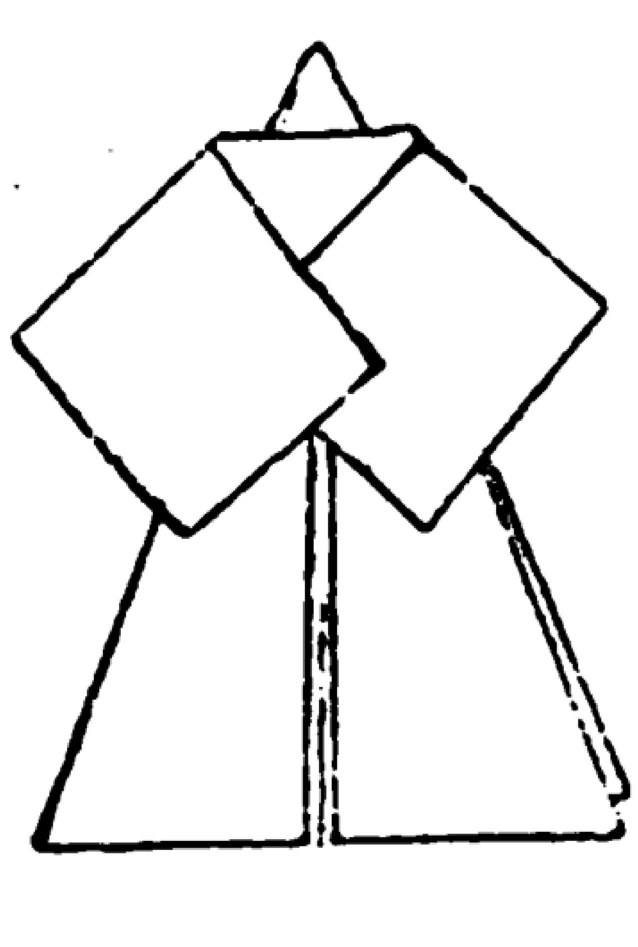
官女は女雛の第十九圖までと同樣に折りまして、第二十一圖の點線の如く左右共線を外にして、左右の外側に開き、男雛の如くに折れば、恰も靜坐したやうな形になります。後は其まゝ前に揃つて坐りのよい様に折り、それを裏返して見た時に第二十二圖の様になれば宜いのです。

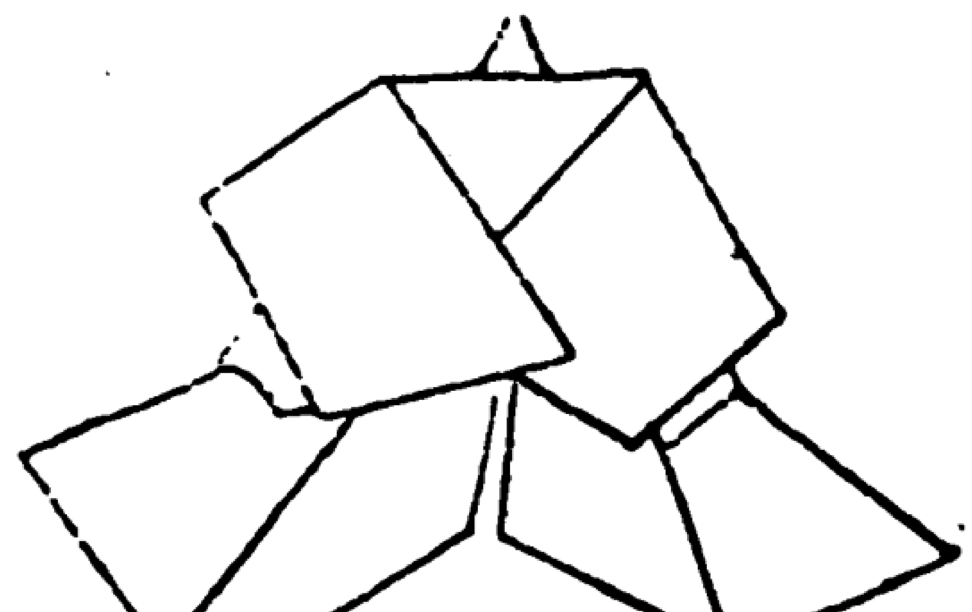
立官女もまた十九圖まで女雛と同じに折つて第廿四圖の如く點線以下の三角形を後へ折れば第廿五圖の如く立ち姿になります。四角い色紙だけあればお子様方にも容易に出來ると思ひますから是非一度おためし下さい。


（第廿一圖）


（第廿四圖）


（第廿二圖）


（立官女の圖）


（坐つた官女）

臺所の配置をどうしませう

(文化住宅を新築なさる方の爲めに)

森谷延雄

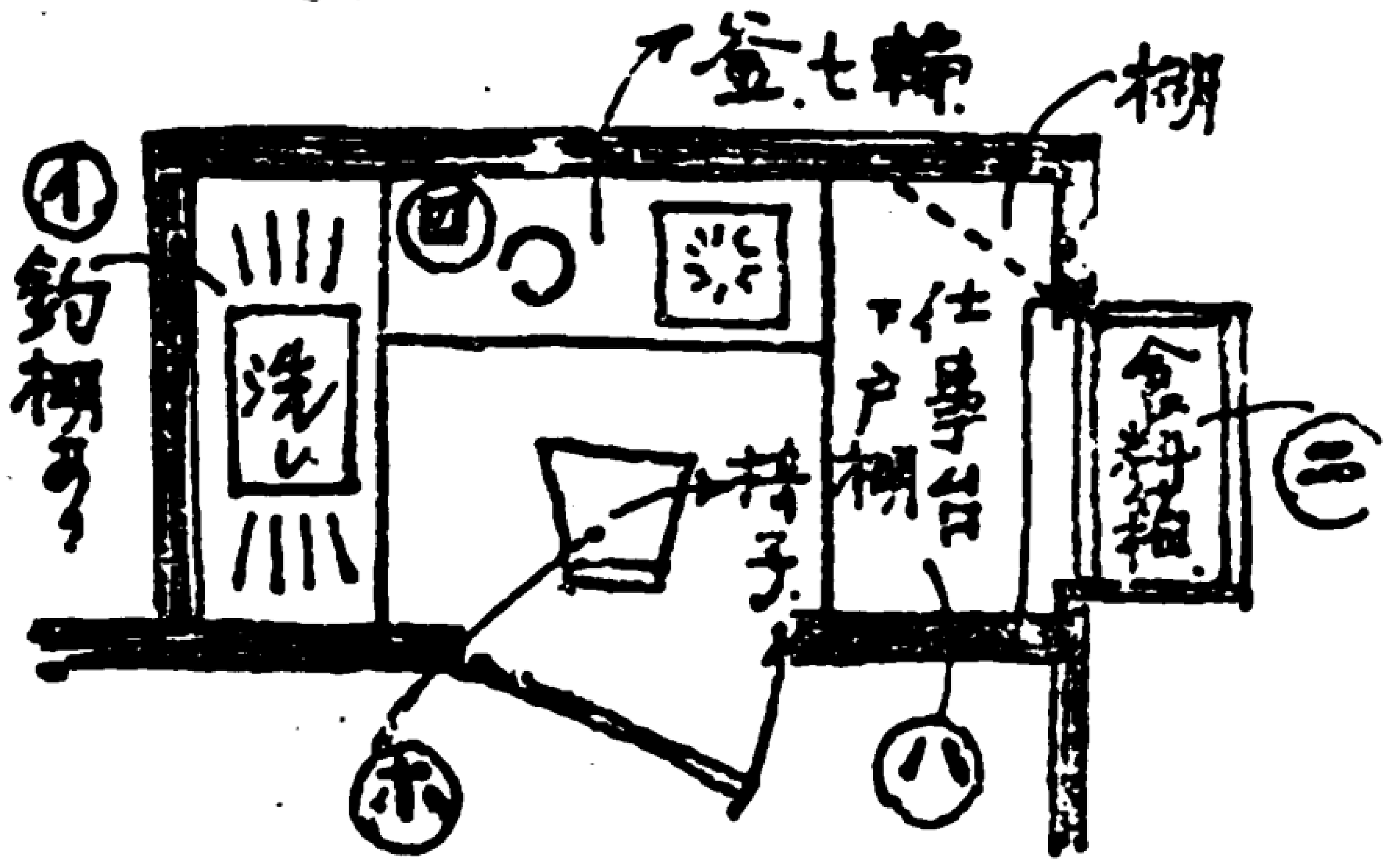
前號で大體如何なる點に注意して臺所を計畫すべきか、如何なる方針で其の室內の諸設備の配置を定むべきかと云ふ事に就ていさゝか其の根幹となる要點を御話し致しました、本號では然らば如何に之れを實際化さうかと云ふ點を主として申上げ度いと存じます。

旣に述べたやうに先づ食料と、水洗と、そして釜との三つに分けてそれを如何に配置したらよろしいかと云ふ問題を先決として常に臺所の家具其の他諸設備を考へるのがよろしいのです、事實この三つが兎も角揃へば簡單に自炊等をなさる方等の爲めには適當な臺所が立派に出來上るのです。

最少限度の臺所

第二圖に示す例は佛國に見る一例

fig. 2.



で、三尺に五尺位の大いさの臺所です。大いさから行けば日本の戸棚の內で之れが出來る位のものですが或は近頃のバラック家屋の臺所等を作る時の參考になるかも知れません。

室の正面に(ロ)に示す釜がありますが、之の上部は拭布を掛けたり小形の煮物用の小器具を掛けます。右の(イ)は流しで野菜や魚等を洗つたり用事の濟んだ食器類を洗つたり致します。そして其の上部は壁から壁へ一文字の棚を釣つてこゝに鹽とか砂糖又はパン粉のやうな調味料や乾物類又は皿類を乘せます。流しの下には鍋類から大形の皿等を入れておきます。

(ハ)の仕事臺は配膳臺の意味やらパン粉を練る爲めやら或は材料を取り揃へる爲め等に使用致します。そしてその下が戸棚に成つてをりまして、メリケン粉等を藏つておきます。日本食なれ

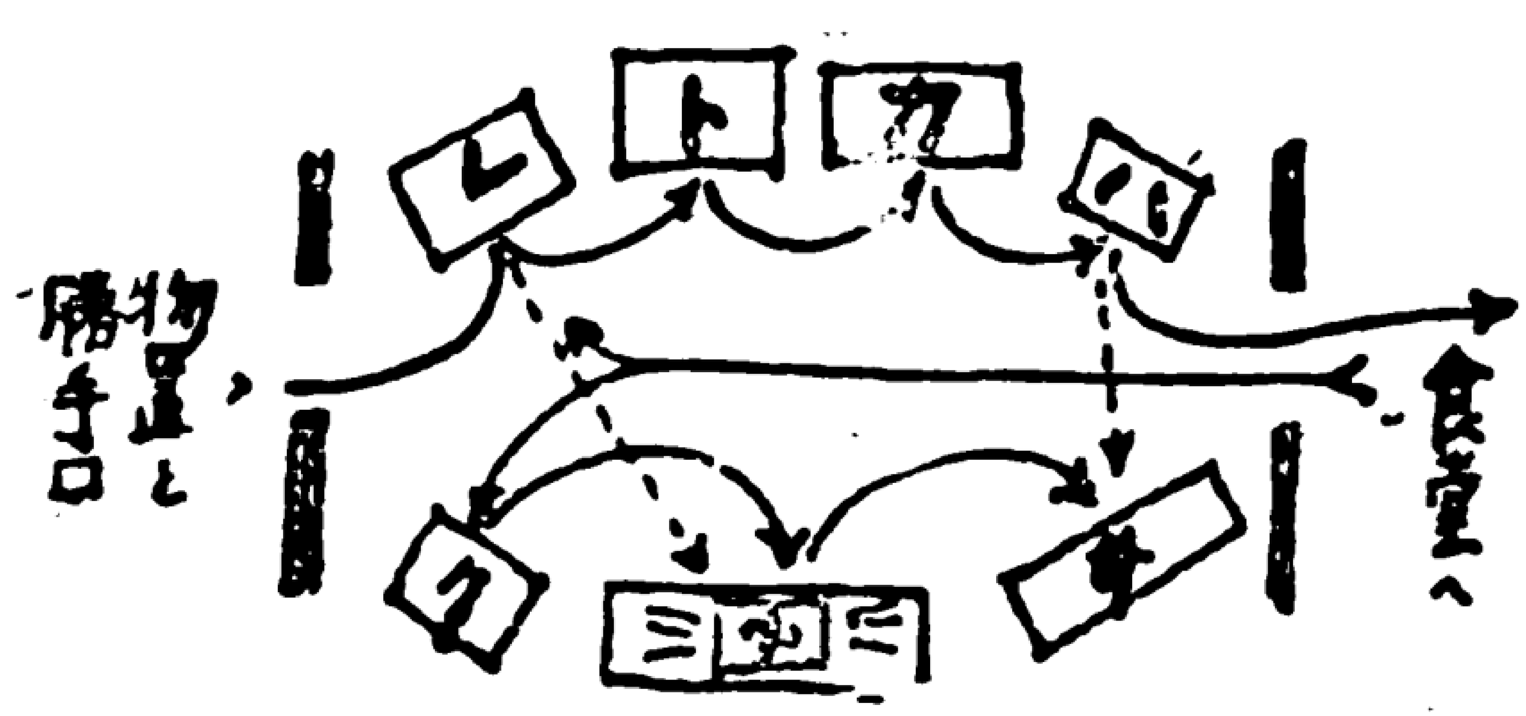
ば本棚にすれば良い所です。この一部へはスプーンやナイフ等の食器等も入れておくやうに成つてをります。(二)と記してあるのは室の外へ出して取り付けた箱で、内側が金網張になつてをります。両方内部が濡れない爲めに適當な用意がしてあるのですが、之れに外國では良く牛肉等や鑵詰の口を切つた餘り物等を入れておきます。室の内部と異り全く外部の氣候と等しく保つ事が出來る爲めに、之れが最も簡單な冷藏庫の役目を致すのです。隅にある棚はグラス、コーヒーセット等を入れる爲めに用意されました。そしてその外には椅子が一脚あるばかりで、全くあつちこつちと歩き廻らないで一ヶ所に立つたまゝ三方何れの方向へも手が出せて全く之れ程最少限の臺所は他に無いと云つても良い位です。

配置の根本要素

之れは人數が一人か二人せいぐ三人位迄の食料を作る爲めのものですが、今少しく人數を増して普通の住宅の臺所を考へて見ませう。食料と流しと釜と云ふ三つの度々申上げる單位を今一歩進めて使用勝手の方から其の順序を研究して見ますと第一圖のやうに分解して考へる事が出來ます。圖の

レ、は冷藏庫(レフリヂレーター)
カ、は釜(ストーブ)
ク、は屑入れ(ガーベーヂ)
サ、は皿棚(デッシカップボード)
ト、は戸棚(キャビネット)
ハ、は配膳臺(サービングテーブル)
ナ、は流し(シンク)

fig. 1.



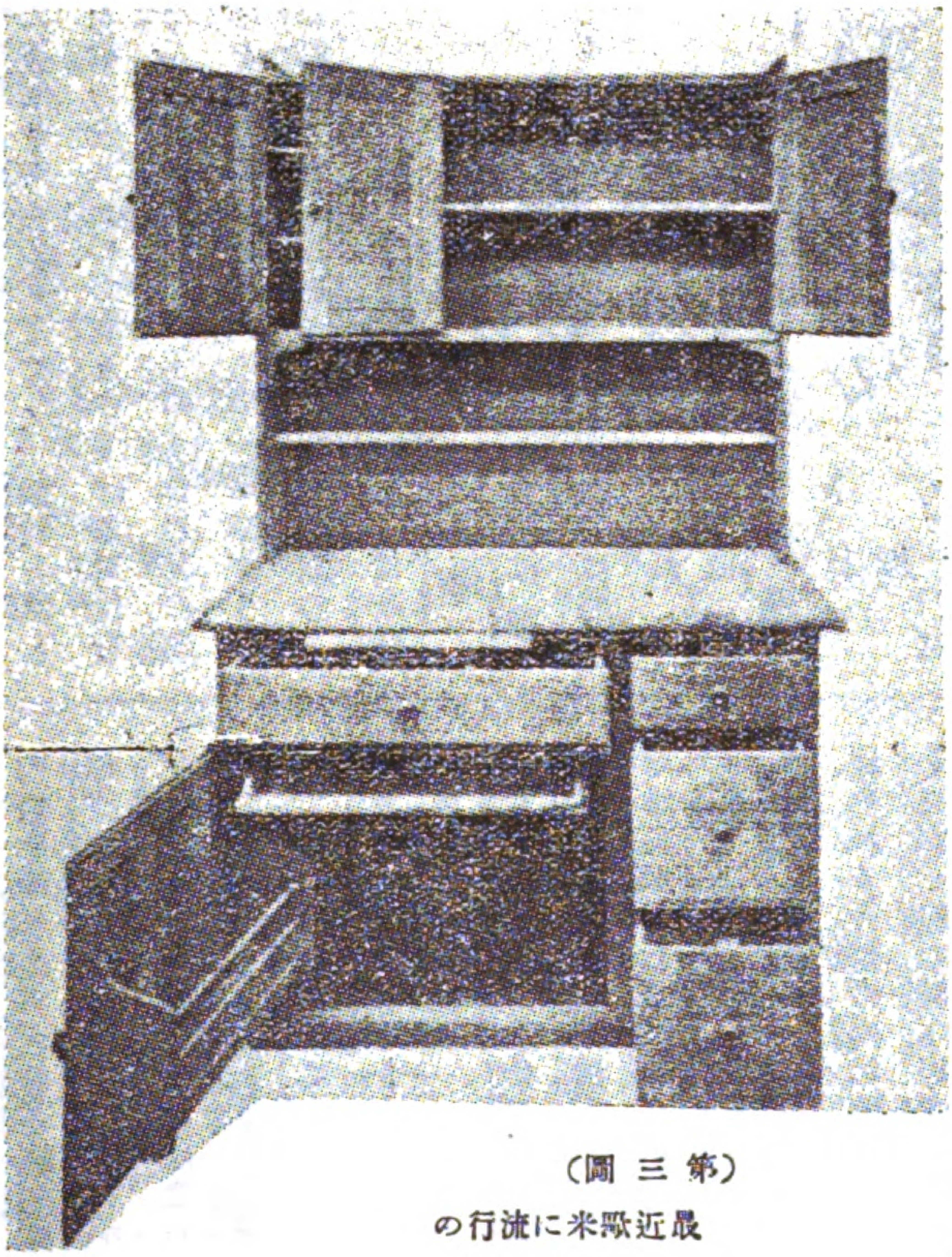
です。料理を作る順序は圖の左の方から線の順序に從つて、物置又は冷藏庫から材料を取り出し、戸棚から鍋其の他の器具を取り出し釜で煮焼き其の他を致します。魚や野菜は二度洗はねば成りませんから點線で示したやうに流しを二度使用せねばなりません。料理が出來たら配膳臺で豫め釜の餘熱で暖められた皿に盛るのですが、場合に依つては皿棚から不足の食器を補ひます。

食堂から返つた食器類は線で示すやうに次ぎの食膳に廻す必要のあるものだけ(主として肉類)は別に冷藏庫に入れ、他の餘り物は屑入れに入れ皿だけを流しに廻し、洗滌が濟んだら食器はそれぐ棚の内に整理するのです。それが一般の順序に成つてをります。之の順序に依つてそれぐ配置を考へて見ませう。

小住宅用臺所の一例

●●●第三圖は普通住宅用の臺所の配置を示したものです(そ)は箒やはたき等の掃除用の器具を入れておく押入れの小さいもので其の隣りの(く)は屑入れの箱を入れておく場所です。屑箱は板金で作つて外部からは汚物が見えぬやうに喰ひ違いの二枚蓋を有し、內部の一方の入口からは常に屑物を投げ込む事が出來るやうにし外の勝手口に近い方の入口はこの屑入れの箱を取り出して芥溜に送つて屑を取り出すに便利に考へられたものです。

この(く)の內部に向つた處が少しく凹形に壁が造られ之れに火熨斗を使用する火熨斗板を入れておきます。この板はズボンやスカートに適合するやうに五尺位の長さで巾が平均七八寸位の楔形のものが壁面に蝶番で取りつけてあつて使用の時は二尺七八寸位の高さにおろし既に用意せられた脚に適合するやうに考へられてをります。(れ)の箱は普通の氷で冷す冷藏庫ですが、勝手口の方に氷を入れる口を設け氷の供給は常にこの口から致します。(と)は器具、食器等を入れる爲めの臺所用戸棚です、この戸棚は最近英國でも米國でも非常に色々の型が出來て一種の流行のやうな感があります、第三圖の附圖がそれを示してをります。



(第三圖)

最近歐米に流行の

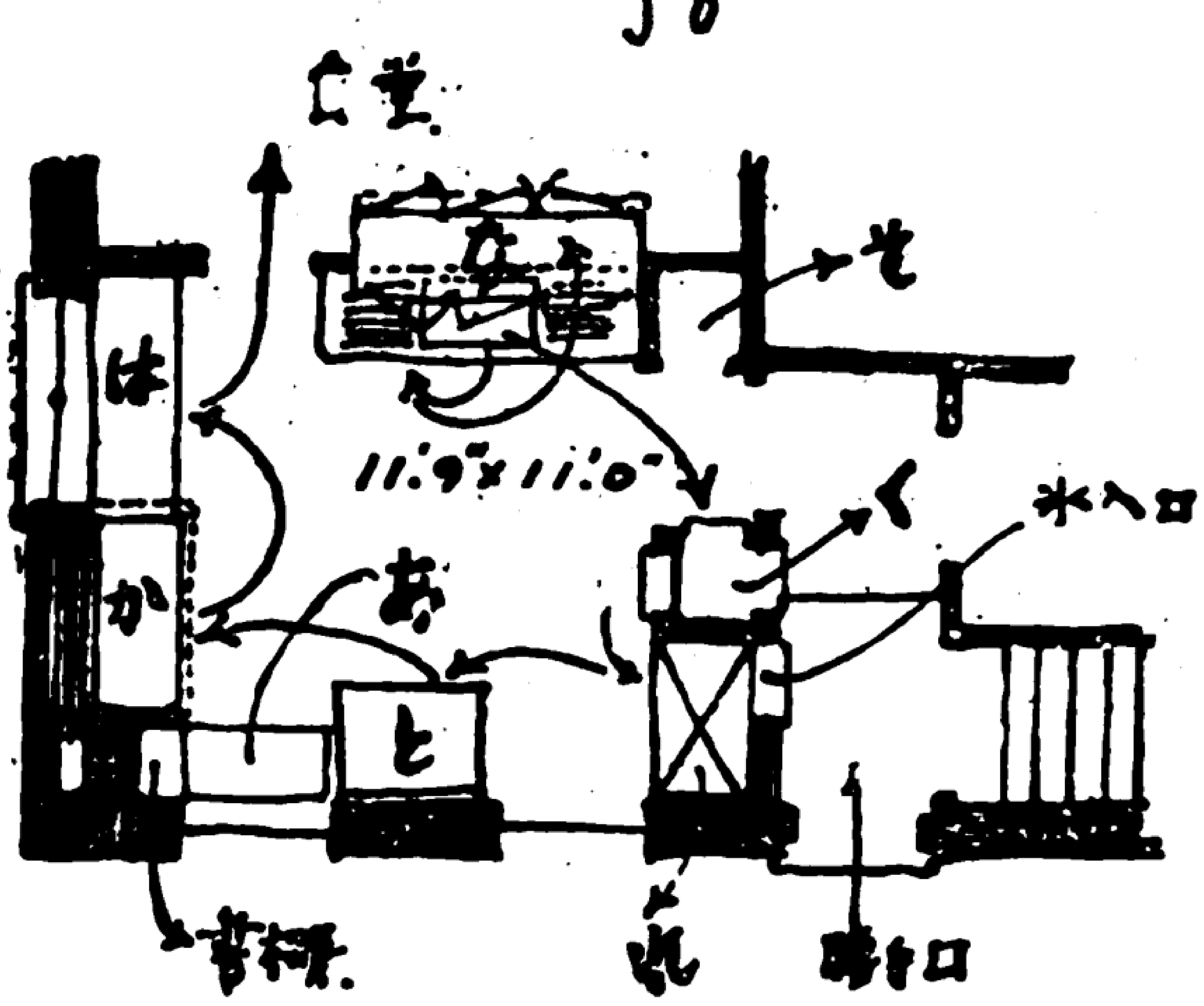
臺所用戸棚

上部の戸棚は主として食料や小形の食器を入れ下部の戸棚は釜類や料理用の器具等を入れます。仕事をする甲板の一部分は圖の如く手前に引き出す事が出來、其のすぐ下の一番巾の廣い抽斗しはナイフやフォークを入れ其の直下の前板のない棚板のやうになつてゐる抽斗しはパン粉を入れる所です。猶その最下部の一番深い抽斗しはメリケン粉を入れる所で日本なれば此處に適合せる米櫃を考ふべきでありませう。

(あ)は壁に蝶番で取り付けられた上げ下げ自由の卓子です。場合に依つては食料を取り揃へる爲めの用意、主婦が料理の書物等を見る時、料理日誌をつける時等の用意に其のすぐ際に書棚が造り付けてあります。

(か)は竈(ストーブ又はレーンヂと申します)で煮炊きを至します處、其の形や取扱方は皆様方のよく御存じの筈のものですが、點線で示したやうに其の上に金屬板で作つた四角い漏斗型の蓋をストーブの上部から大體四尺位の所に作りつけて、之れに依つて煮炊きの香ある暖められた輕い空氣を吹き出す烟突に導きます。

Fig. 3.



それは何よりも大切な事で之れがないと室中香が滿ちるばかりでまた他の室へも導かれて來客の時等一寸閉口するやうな事になるのです。

(は)は配膳用の卓子でありますが料理を皿に盛る時に皿が冷えてゐると料理が半面冷えてまづく成る恐れがあります爲めに、この桌の下に皿類を暖める爲めの箱を置いて竈から釜の餘熱を導くやうに考へました。

(な)の流しは食堂に接した壁に取り付けてあつて、水切り板が左右二枚付いてをります、この板は木で作つたのや銅や亞鉛板等で被せたもの等があります。仕事をする時に餘り音をたてゝやかましいのはいけません。さう云ふ恐れがある場合には、竹や檜又は杉等で簀の子を作つてこの上に乘せて使用すればよろしいのです。

この流しの高さは洗面所の流しと異なり物を立つて洗ふだけですから二尺

六寸位に致しますと丁度適度だと存じます。

總べて流しは水を使用する爲めに汚れた洗ひ水が附近に飛んで床や壁面を特に汚す事が多いですから、之れに面した壁には適當な考慮を必要と致します。

油布地を張つたり木板や板金にペンキを塗つたものを取り付けたりする事等は一番簡單な方法です。圖に示した流しの上部は一尺ばかり上つて食器棚に成つて居て臺所の方からも食堂の方からもどちらからでも使用する事が出來るやうに扉が兩面に付いております。其の一尺ばかり上げた爲めに出來た壁面の空きは、木の鏡板に成つて居て其の中央が左右に引き違いが出來るやうに出來てをります。そしてこゝを食料の一部を食堂へ出したり汚れた皿等をこの流しの方へ送つたりする爲めの一尺五寸角位の出し入れ口と致しませう。

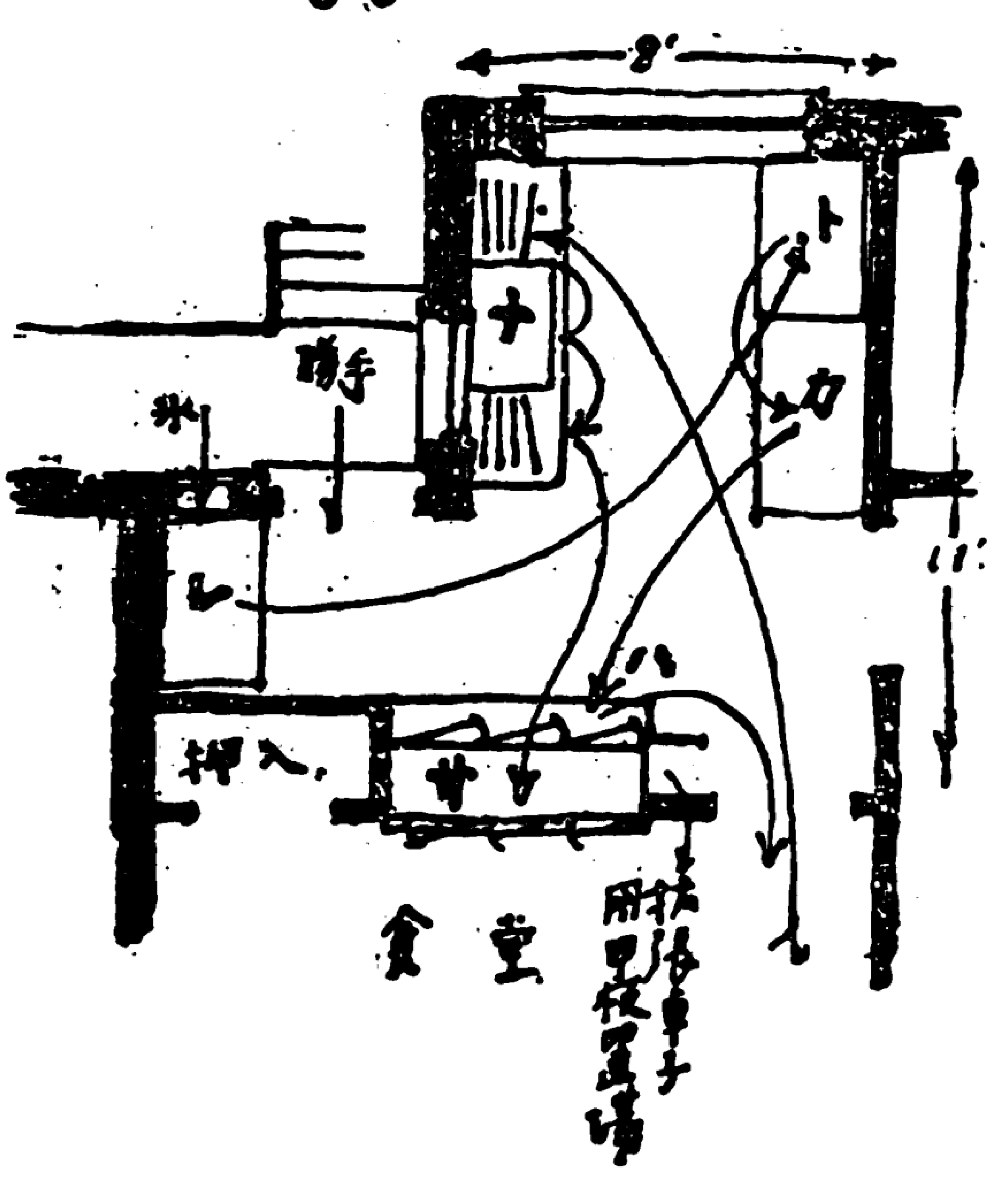
之れで大體の説明が出來たので料理を作る仕事の順序は大體矢に依つて示しておきました。

良く第三圖の圖面を見て下さい、最初(れ)の冷藏庫から肉なら肉を取出し、魚や野菜のやうな洗はなければならないものは一寸(な)の流しで洗ひ、鍋等を(と)の戸棚から出して(か)の竈で煮たり燒いたりの仕事を致します。そして出來た料理は既に暖められた大皿に盛つて食用皿と共に食堂に運び、いよいよ美味しい食事が取れる事に成るのです。

食事が濟んだら前に述べた(な)の部のハッチを開いて其のまゝ流し臺へ總て汚れものを差し出します。そしてすつかり清潔に成つたら一時右又は左の水切臺におき水を切つてから布裂で拭き其の上部の棚を整理し這入らない大形のものは(と)の戸棚にも入れても差支ないと云ふ具合になつて居ります。

アパートメント向の臺所の一例

fig. 4.



第四圖は前者とは少しく違いまして、成る共同貸屋の臺所を示したものです。至つて簡單に出來てをります。圖の矢と線で御解りに成るやうに狹い割合に餘計身體を働かせなければならないと云ふ點と、配置の關係から仕事の順序が思つた程研究されておらぬ爲めに前者に比して少しく成績が惡るい結果を見出します。

しかし竈(カ)を夏、窓を開けた時に其處から吹き込む風の流れに依つて瓦斯の火が消えたり焰が動いたりする事のないやうに、窓から離してしかも竈の廻りを開くとその內部まで良く見えてパンやプッデイングを作る時燒き過ぎをせないやうにとの光線に對する注意も出來ておりますが、其の隣りの戶棚(ト)の位置を何とか考へを變へれば窓下に流し(ナ)をやつて食料置場の冷藏庫が(ナ)の位置を取る事が出來、氷の出し入れ口も窓の下から出來ませう。

そしてもし北處に空いた場所が出來たら窓に近い方に戶棚(ト)を置く事も出來ませう。そして別の話ですが(レ)の場所へは洗濯槽でも置けば大變場所の經濟にもなります。

前者第三圖と同じやうに、食堂へのハッチを有しておる(サ)の食器棚の位置は小形の食器等を入れる爲めに其の儘に致しておきませう、

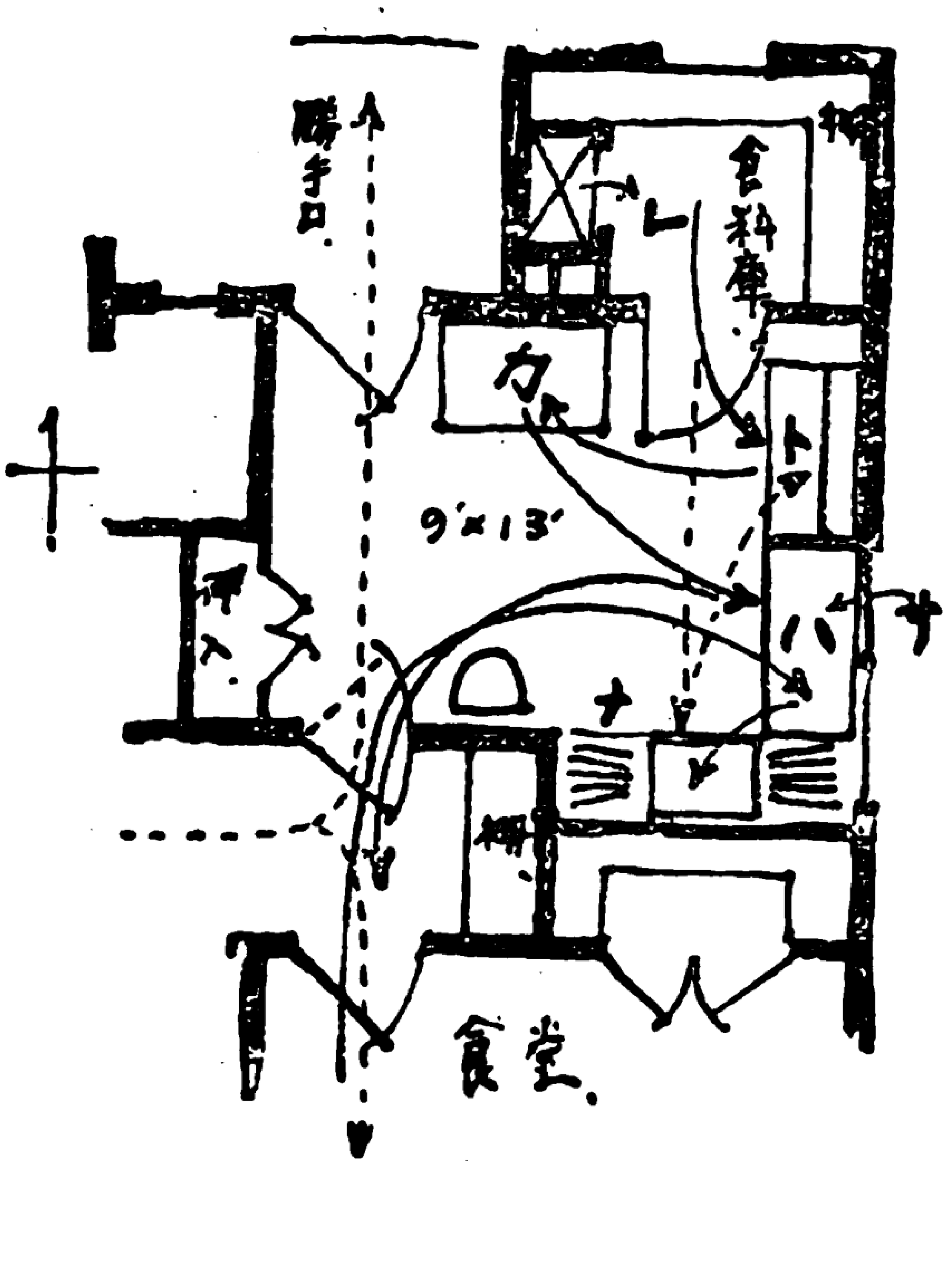
(サ)の右擴張卓子用甲板置場と書いておきました所は良く食堂の卓子が來客の多い時に五尺も六尺も或はそれ以上にも延ばして使用する時がありますが、さう云ふ時甲板を別に擴張せられただけ足して使用せねばなりません。

この用意に甲板を藏つておく場所が別に室內裝飾家が大秤考へに入れておかない爲めに遠方の物置等に入れておかねばならぬ時がよくあります。之れは其の用意の場所です、

缺點のある臺所の一例

第五圖は相等の廣さを有し、相等配置等を考へてあるやうに見られます

fig.5



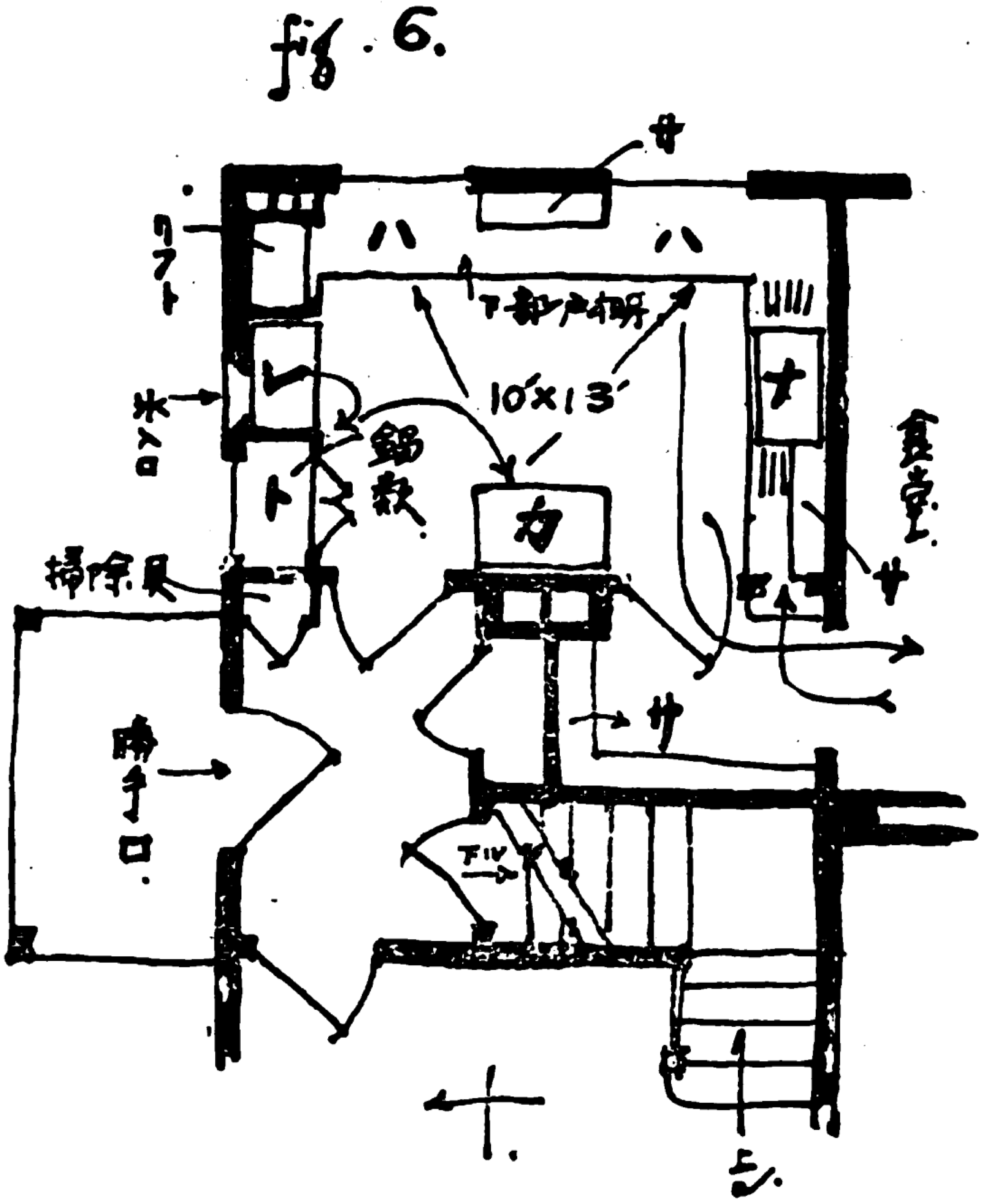
が、仕事の順序が悪いばかりでなく、扉が圖のやうに取り付けられてある爲めに、實際に使用する臺所の廣さは約三分の一を減じ、圖の左下に押入れを開く時も其の手前の扉に衝突する恐れがありますから安心して其處に立つてをる事が出來ません。

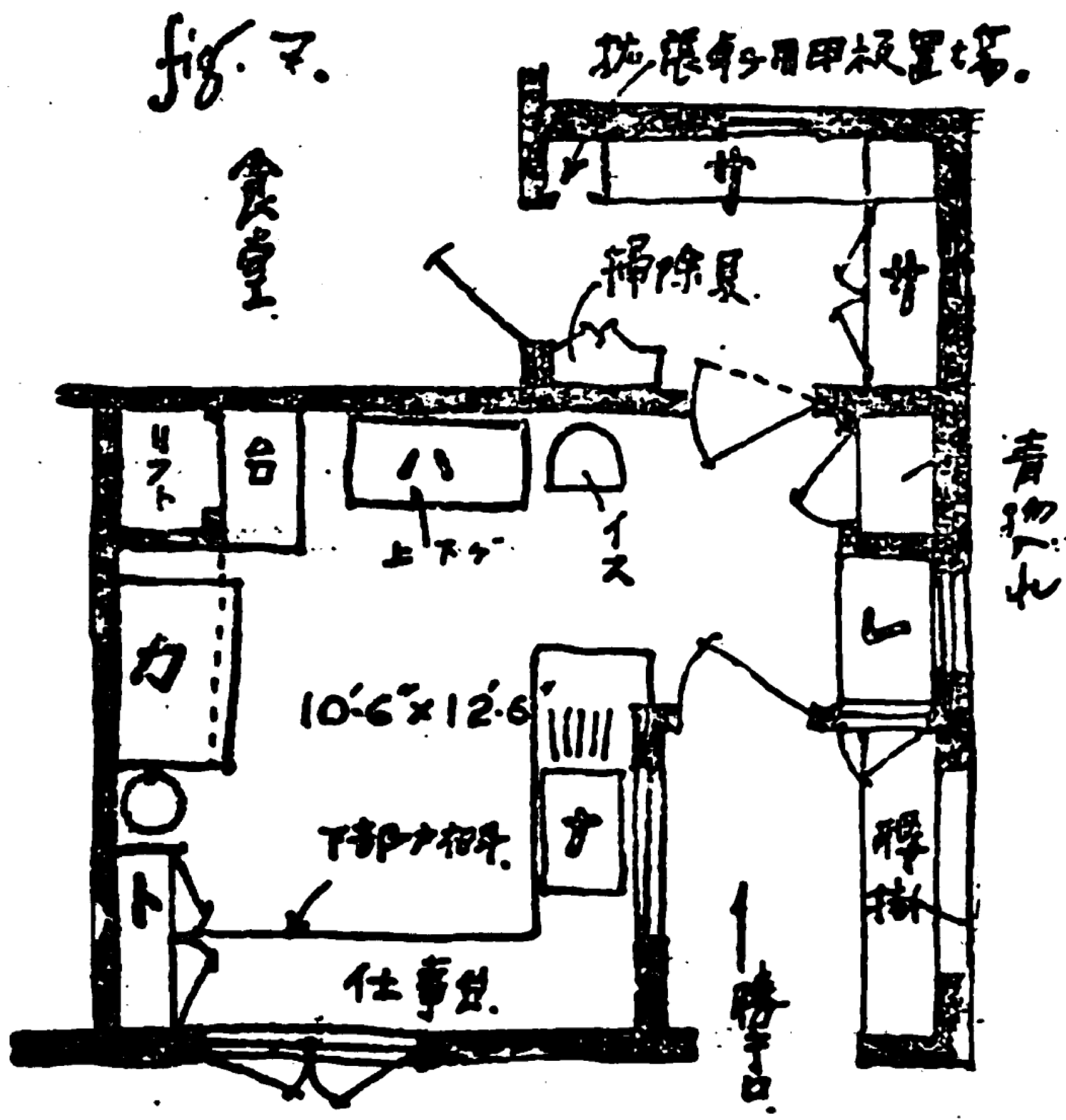
(カ)の釜も勝手口に近くて戸の開け立ての節焔が動くばかりでなく勝手口に近いために來訪者にも一寸面白くない事に成るでせう。流しの位置も少しく離れすぎた感があつて汚れた皿等を持ち込む時等を考へると特に良くないのです。

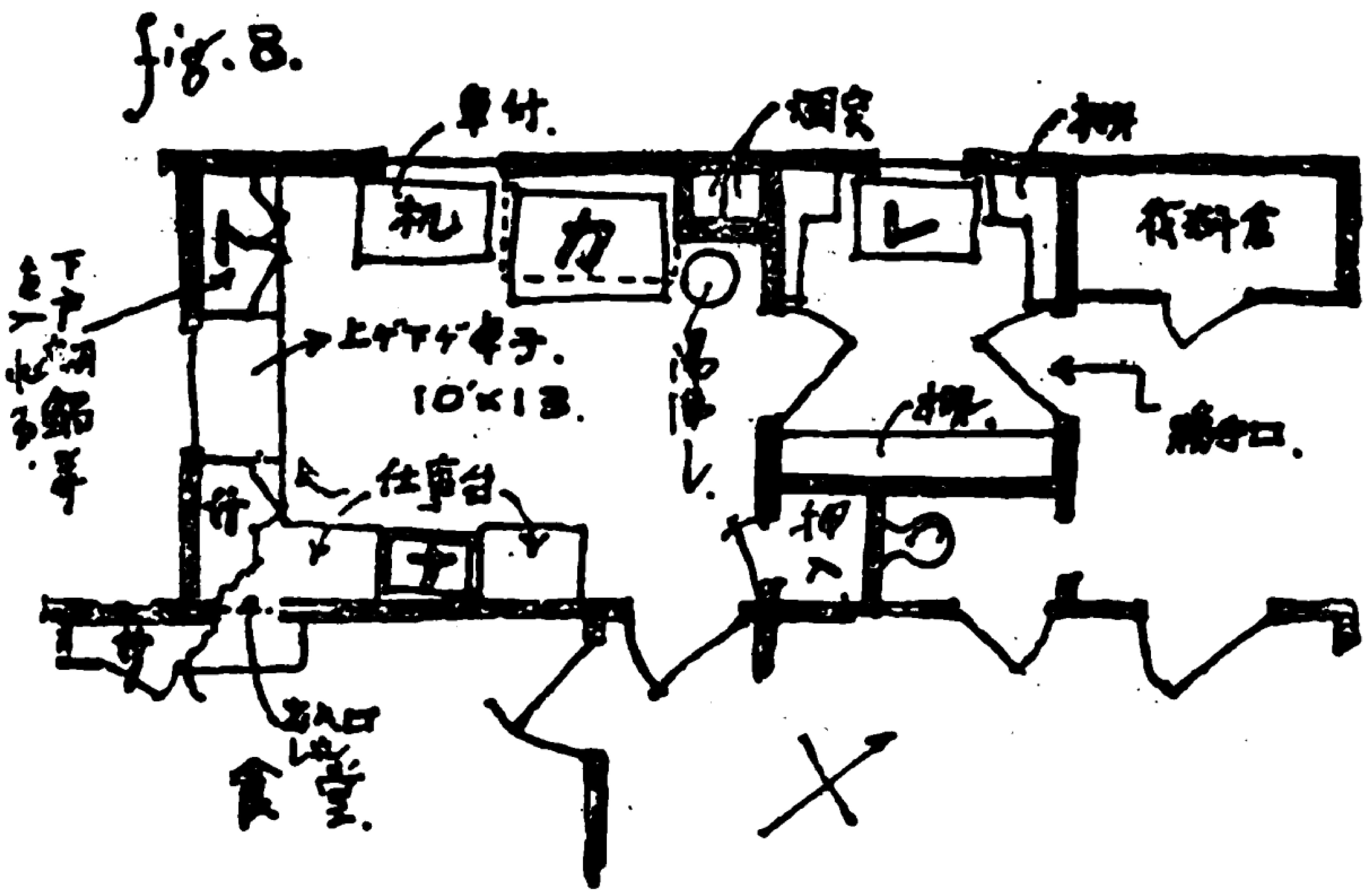
惡い例として一ツ御目に掛けた理です。

(レ)は冷藏庫、(ト)は戸棚、(ハ)は配膳臺である事は他の圖と共に等しいと御承知下さい。

良く配置された臺所の研究







第六圖は之れと反對に第七・第八圖と共に良く配置された郊外住宅の臺所を示したものです、其何れも十尺に十二尺から十三尺位の大いさのものですがここに共通な、しかも注意して置く必要のある點を少しく擧げて見ませう。

(カ)釜の位置は常に流しと反對の位置してゐる事、

これは水が釜に飛ぶと時には危險な事にも成るばかりでなく仕事中誤つて鍋の把手等其の他に觸れて之れを倒す事さへ出來ぬとも限らない。

(レ)冷藏庫は勝手口に近い所に置きます。

之れは氷の供給を受ける時の便宜と勝手口に近い位置、云ひ變へると比較的涼しい所を選ぶ爲です。

(サ)配膳臺は食堂に最も近い所に選びます。

配膳すれば其の次ぎは食堂に運ぶだけですから自然この位置が良いのです。

(ト)戸棚は比較的釜に近い所に置きます。

之れは其の内に入れる者が主として調味料や大形の配食皿や鍋等であればこのやうに考へて差支ないが小形の食器なれば配膳臺の近くに置くのも良い、

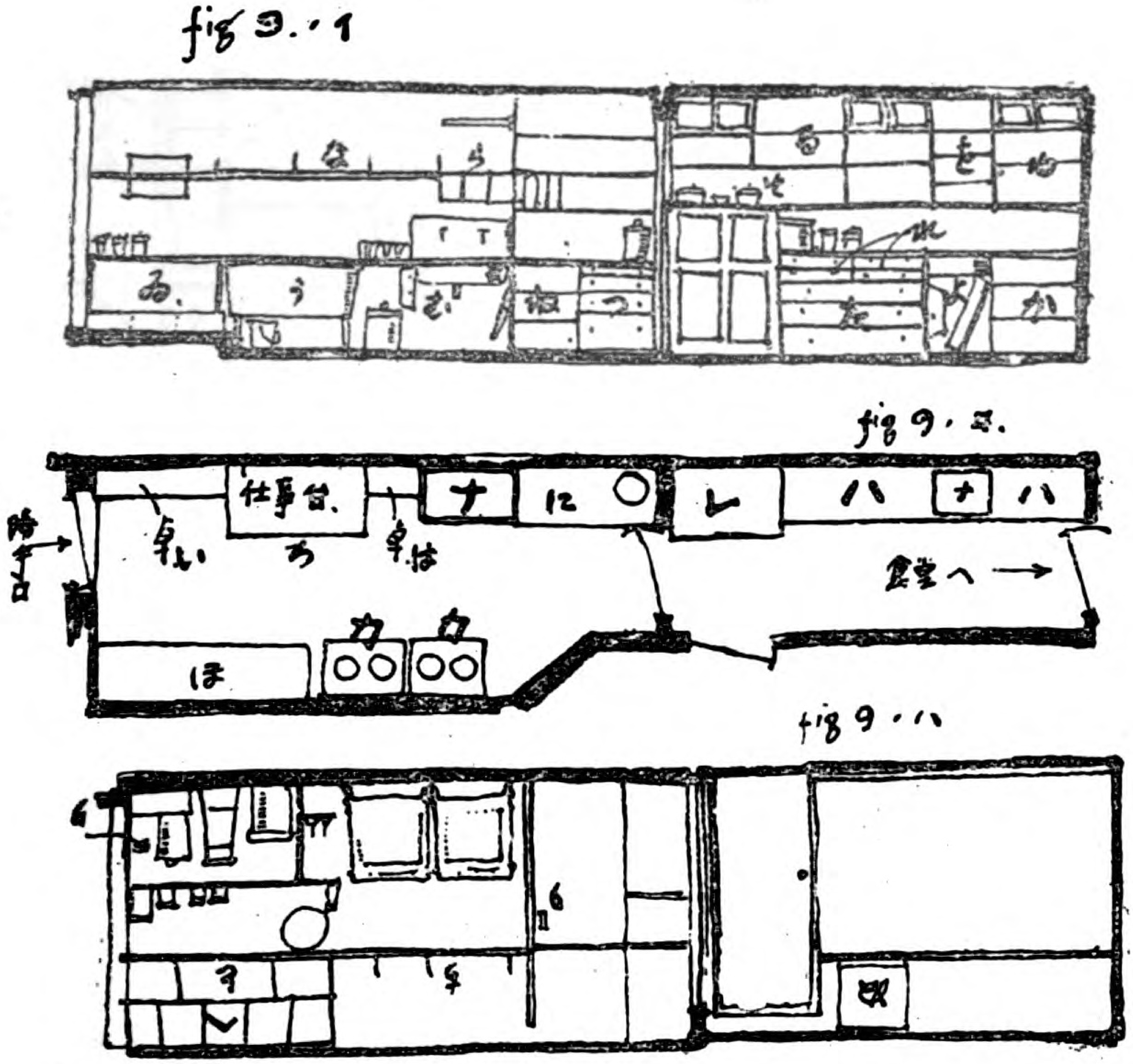
(ナ)流しは釜の反對の位置で比較的獨立的である。

(ナ)と相互關係になり戸棚と親しい關係を有しております。

之れ等は配置を別の方面から考へたものであつて配置の時の簡單な約束と考へてもよろしい。

模範的な臺所の一例

第九圖はニューヨーク市にある家庭相談合が最近發表した理想的の臺所です。米國では近頃ステップ、セーピングと申しまして臺所内部の仕事をする場合出來るだけ歩む歩數を少な



くせやうと云ふ主旨が宣傳せられてをります、

この主旨から立案せられたもので、圖の中央が其の平面圖、上部下部がそれ〲其の室の兩側面を內部から見た樣子を示しました、之れは前に述べたやうな中流家庭の物ではなく少しく多人數の家庭のものと見なければなりません、

片假名で記したのは他の圖と同じ物と考へ平假名の點に就てだけ說明を致して見ませう、

(い)は料理材料を用意する臺。

(ろ)は仕事臺ですが其の下に洗濯槽があつて洗濯をする時には其の際の(い)、等は衣服を置く臺にもなります。

(は)は砂糖、鹽、コーヒー、其の他の調味料を置く臺で其の向ひ合ひの釜に關係が深い。

(に)は砂糖の大形の入れ物や粉等を用意し食料を運ぶ爲めに考へておきます。

(ほ)は仕事臺で甲板の上には種々な材料器具を置き其の下にはアイスクリームを作る機械や、仕事用の腰掛、洗濯用の石鹼からアイロン等もこゝにおきます。

(へ)は粉をまぜる入れ物やパン燒の皿等を入れておきます。

(と)は大形のスプーン或はロール等を載せておく棚です。

(ち)釜に使用する鍋や湯沸し其の他釜に附屬の道具類を載せる棚。

(り)は電燈のスウッチですこの室には天井を四つに分けて其の中央に一個づつ都合四個だけ取り付けてあります。

(ぬ)料理豫定表をこゝに大きく記します。

(る)皿類の棚。

(を)グラス(コップ)類並に流しに使用する小器具用棚。

(わ)大形食器並にディンナー及スープ皿用棚。

(か)電熱でトース燒く卓上用の器具。又は食堂に關係のある物を入れる棚。

(よ)踏臺や水切り用皿槽等を入れ其の上部は小流しに成つてゐる。

(た)食卓用リネン其の外の布地類を入れる抽出し。

(れ)ナイフ、スプーン等金屬器を入れる抽出し。

(そ)食パンや菓子類を入れた箱を置く棚。

(つ)前記以外のナイフ、タオル、包紙類用の抽出し。

(ね)一般の煮物用鍋を主として入れる棚。

(な)アルミニユム器具、錫其の他大形グラス等の器具を載せる棚。

(ら)クリーニング用器具材料其の他用棚。其の上部はタオル掛。

(む)塵取りバケツ其の他床掃除用器具材料を置く。

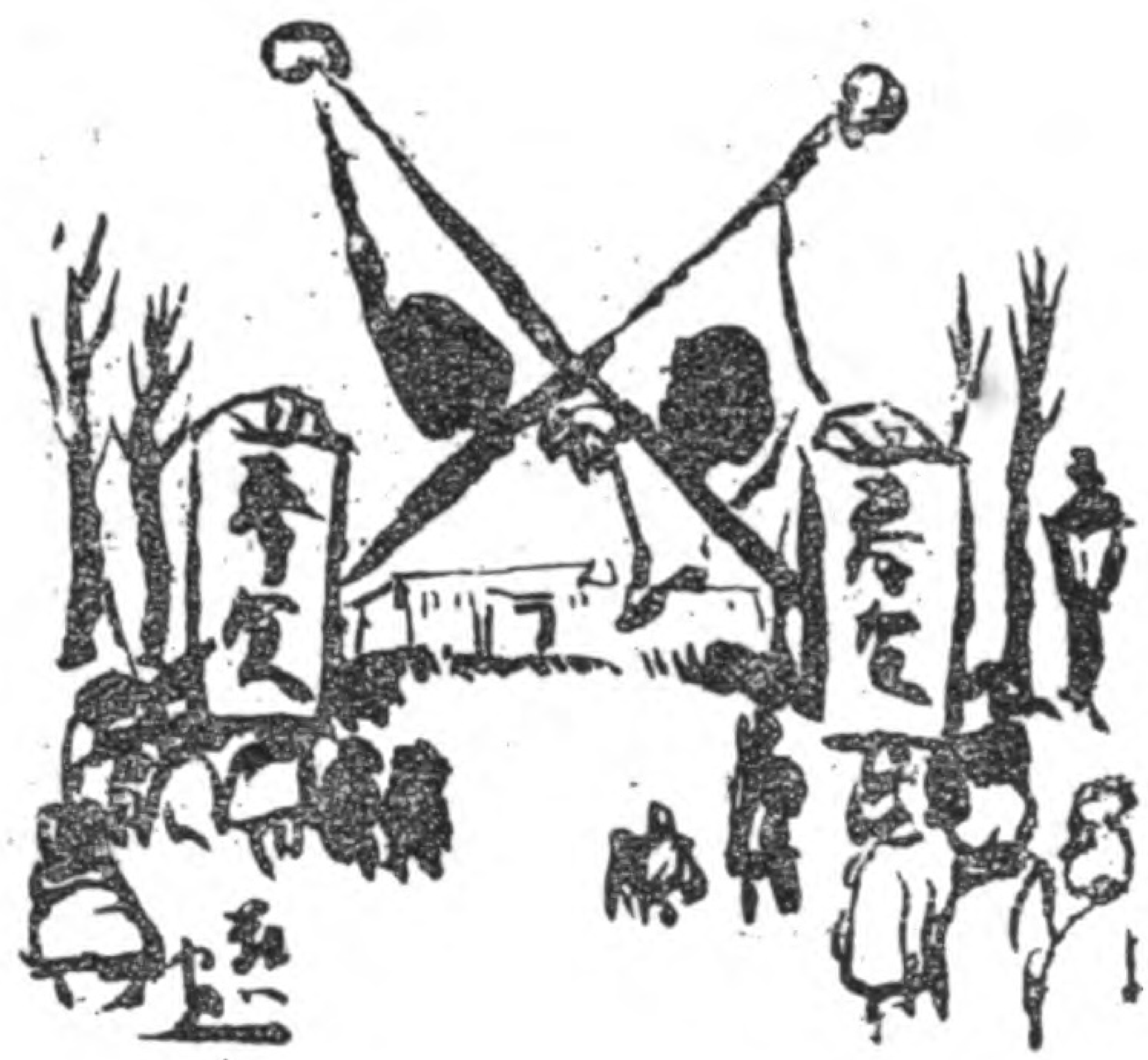
(う)洗濯槽で其の蓋が蝶番で取り付いてゐる。

(ゐ)水菓子や野菜類を入れる箱。

今迄申し上げた事を詳細に御理解下さつたら立派に新しい文化住宅に相應はしい臺所が出來やうと存じます。前號にも申上げたやうに例を洋食中心に執りましたから和食には其のまゝ差し向ける事は出來ません。

この點は御互に之れから後の問題になつておるのですから、最も關係の深いあなた方御婦人の手でより良い結果を早く拜見致し度いものと存じます。

(一九二四、一、雜司ケ谷にて)



鹵簿を拜觀する記

木村莊八

私は子供の時一度明治天皇を拜觀したことがあつたが學校から先生に連れられて行つて、お道筋に並んで僅かに拜觀した。陛下はたしか無蓋の馬車に載られて居つたと思ふが、恐れ多い印象ながら、軍帽を大變前のめりに被られて、後頭部が澤山に見えてゐた。それから顏色が非常にお白かつた。それまで御眞影で見るといかめしく、顏色もおくろく思へたのに、親しく拜んで見ると御やさしくお白いので、子供心に、陛下とはかう云ふ御方かと思つた。——その時の一瞬のお姿はその後おかくれの時に何かの新聞へお横向きの一寸首をかしげられた、一寸見ると陛下ではない樣な然しよく見ると如何にもそれが又陛下の樣な、さう云ふ御寫眞があつたが、その御顏と交つて、私には明治天皇はこの御姿で無蓋の馬車に乘られて、顏色はお白く、さう云ふ風に、子供の時に一度拜觀したことがあつたと今は思ひ出になつてゐる。

それから小松宮親王の御葬列をぼんやりとおぼへてゐる。兵士が銃をさかさまに吊つて行つたことゝ、故親王の御肖像の胸に、大きな黑のリボンのあつたことゝを思ひ出すが、このリボンのことは多分新聞か雜誌に載つた御肖像からおぼへてゐるのである。しかし肅々とした御葬列はたしかに私の家のそばの通りを通られたかに思ふ。——又、それは兄壯太の記憶が私にいつか交さつて、今では恰も自分が親しく見たかの樣に、まざ／＼と心に描くのだが、北白川宮の御葬列に一隊の兵士が出征の時そのまゝの血だらけなのや、泥だらけの服で、何でも負傷兵も交るか如何かして、それが儀仗兵となつて行つたと云ふ。兄キはそれを見てから、その頃よく「倒れし兵の顏色は、野邊の草葉にさも似たり」と云ふ軍歌がうたはれた。この野邊のと云ふところをのうべのと延ばして歌ふのだが、それを歌ふと、ぼろ／＼涙がこぼれたと云ふ。血だらけの兵士の行列を思ひ出してぼろ／＼と涙が流れたと云ふのである。

妙なもので、私はこのことを極く／＼小さい頃からつい兄キにあり／＼と聞いた爲め、兄キが泣いたのか、私も泣いたのか、そこの所がはつきりとしない一つの云はゞ夢に織り込まれて了つて、今此所を書くに矢張り私自身のことの樣だ。

皇室に就てのことはかう云ふ些々たる私の記憶でも、それを輕々しく記すのは恐れ多い樣だ。私は心して記してはゐるが、今それを書いたのは、それが私の今迄の御皇室に就ての親しき記憶だと云ふことである。雲の上の高貴を親しく拜觀した記憶であり、雲の上の行事を親しく目睹した記憶である。——私は一身に忙しく、殊に繪の學生となつてからは餘りに私事のみに心をとられて營々としてゐた爲めに、恐れ多いことながら、先帝の御大葬も奉送の機を有たなかつた。今帝の御大典の儀も拜觀の折りを持たなかつた。陛下や御皇室の方々は御盛榮にされる。誠に欣ばしいことである。我々民はそれ故に各々のところに安閑として居られる。私は難事にいそしんで居られる。上御皇室では御大葬儀を悲しみの極みを體して成される。御大典儀は又虹の樣に美しく成される。御代は平和だ。我々は安んじて居られる。誠にありがたいことである。

私は御大葬の時には今日は御大葬であると思ひ、御大典の

時には今日は御大典であると思つて、之よりその日には門には何かしら旗か、悲しみには黑布がある。欣びにはアーチや提灯がある。大砲の音がきこえる。往來はその或るところは自由には通れなくなる。──常とは違つて、我々の樣な自己一身世界の小さな者にも何か物を思はせる。思へども及ばぬ皇室のことをも思はす筈である。──御大葬儀の時には、私は子供の時祖母と天皇陛下とが亡くなられたら自分はどうしやうかと幾度も困つて考へたことがあつた。それを思ひ出して、陛下は今おかくれになり、祖母は老いてゐる。で自分は大きくなつてかうしてゐるが……いろ〳〵のことをつい考へた。今帝の御大典には大變町が賑はしく、樣々の飾りものが出來たと思つたが、私はそれも子供の時に今帝の御成婚祝賀に出來た、紫色の表紙の、たしか横を絹糸で二個所綴ぢた、綺麗な本を家で見たことがある。「東宮」と云ふ字はその時教はつておぼへたが、多分、此度の攝政殿下の御慶事にも、若し私にあの日何事も無かつたならば、家に居て、昔のその紫色の本のことなど思ひ出してゐたことだらう。その本にあつた、今上陛下が皇子の時代の前のめりの帽を被られた(恐れ多いが子供心にそれが大好きであつた)懷しい御寫眞など思ひ出してゐたことだらう。

私は下々の者で、世事に遠いもので、夜ひるの暮し方などお背迎ではないし、何かしら考へる事や爲る事があつてついうつけてゐる。中々御慶事の御車を拜觀に宮城前の廣場へ出かけると云ふ風の、みんなはそれを欣喜して爲る。しかしさう云ふみんなの爲る事は、私にはつい出來難い。私は矢張り陋居に閉ぢ込もつて、既に御慶事の目出度くおすみの頃にやつと起き出で、我れながら愚かしく、今日は御慶事であつたか、と、それからぽつ〳〵と昔の本のことなど今更に思ひ出したであらうと思ふわけだが、──一月二十五日のことだ突然改造社から使ひの方が來られて、明日の御成婚儀に就き祝儀の繪を描いてくれないかと云ふ。

就ては此の事を聞いて私の頭をチラとかすめたものは、かねて私の手元に季光書とある「上野公園博覽會場、美術館猩々噴水器の圖」がある。上つ方が官女を從へて──今の博物館本館の前──猩々の噴水器を觀覽する三枚續きだ。空は紅く、猩々の瓶は青く、水は濃藍で、官女は豐滿に、上つ方は金

モールの大禮服を着てゐる。建物は濃茶だ。で材料のきらびやかなせいもあるが、横幅に大量の華麗な色彩がどつぷりと息づいてゐて、胸に響き、美しい。

その繪の味やその繪の素材を念頭に浮べたのである。

その他、楊洲の畫「鹿兒島賊徒鎭靜依諸將天盃戴頂之圖」と云ふのがある。黑と紫と紅と草、褪紅色。そこを引き通す物々しい素描で妙に美しい。山田君、三浦君、高橋君大山君、三好君、野津君、川路君、谷干城君と云ふ種の人達が宮中で天盃を頂き、みすの前では宮女の舞を舞ふてゐるそれも三枚續きだ。明治十年九月二十日御盃とある。——その他、養蠶天覽之圖、梅壽國利筆。新皇居紅葉之圖、御代春惠の梅園等。肉筆のものでは餘り見ないが、たしか床次さんの先代が描かれたと思ふ宮中儀式の圖などあるわけだ。

議論は除く。先づ人は如何云ふかは知らないけれど、之等の愛惜のある畫因は今も昔ながらに美しいものである。殊に宮中の諸式は美しい特殊のものだ。濃い色のカーテン。敷布豪華の建物。白ズボンに金モールのついた黑服の人々。宮女の風。靜肅。諸人の列。——之等の材料からねつちりと出來上つて來る、餘り普通には見られぬ状景は、繪には美しいものである。少くとも一風の美しさを編み立てゝ世間にもかなり一般に親しまれてゐた、或る年代の間の一つの素材だ。

「もしも賢所お前の儀と云ふ樣なところが拜觀出來ればさぞ美しいでせうが一改造社の記者の方になどとぼんやり云ひながら、チラとさう云ふ有り得る畫面など頭に浮べ、そこで前に云つた樣に、私はつい緣因を朧ろにして今迄に曾てさう云ふ何にも見てゐない。路傍の列も見ない。昔の繪ではいろいろと見てゐるが目前の實際では何にも見てゐない。之れは見ない方が見るよりは愚なことだ。一つ明日は之れを機に、拜觀に行つて來やうかと考へた。——「何を描けばいゝのです?」「御慶事の感じのあるものを描いて頂ければいゝのです」と云はれる。すると私の頭に浮ぶものは、畫面一杯の綠門と、兩側の群集と、家並みの國旗、小學生の手旗など眞中の明けひろげた往來は遠見に素描をきかせて、遙か向ふから何かチラチラやつて來るものがある。——このハンドスケッチは一寸面白い。今描いても何とか行き想に思はれる。

若ししくじれば之れを行ればいゝのである。と云ふのが、實

は前夜か新聞の寫眞でさう云ふやうな面白い町の一角の構圖を見て、却つて刷りが不鮮明の爲めにゴチヤ〳〵とかたまつた片側の群集の列などかなり部厚な色どりに見えた。「あれを一つ描くかな」、さう背水の陣に一つ考へた上で、笑ひながら「何か描いて見ませう」と約束をした。——雜誌社の方は滿足して歸られたが、私は描くことはまあ描けやうと考へた。只盛儀が見られるか見られないかは甚だ疑問と考へたわけだ。何れにせよ明日は出かける。何か感じがあるだらう、と。

二十五日は翌朝が心許ない爲め、夕方にねたが、夜の一時彼是には眼がさめて了つた——と云ふと變にきこえるかも知れないが、「私」にとつてはそれはいつもの事で、それから夜中をずつと起きてゐれば先づ朝早い約束事は何に依らず一安全である。そのいつもの傳だ。春陽會のポスターなど描いて見てゐる間に時間は樂に經つた。その、五時、六時、七時となつて來るとそろ〳〵氣になる。前夜私のねてゐる間に、弟がすつかり關係の新聞記事や寫眞は切りぬいてくれて手元にある。それを見るに、兩殿下は朝九時御出門。それから順路を御通りになつて宮城へ入られる。先づこの御行列を拜觀しなければならぬわけである。——それには先づ二重橋の廣場がいゝ樣だが、バックの關係などもあるから或ひは櫻田門のところなど却つていゝかも知れない。

それから改めて午後二時には兩宮御同車で宮城を御出門になるが、この時の順路はさぞ盛觀のことであらう。——然し一時となると、九時から四五時間間がある。自分はまあ待つのは如何かなる事としても、その時刻には一方眠くなつて來るから、それは先づ駄目だ。だが若し九時の御行列を拜觀出來ないとしたら？　うむ、いゝ事がある。永田町の好古堂か三菱の岡田かの所へ出かけて、二時間ばかり途中ねやうと考へた。——兎に角七時には先方の人ばかりがどうも氣になる。で、一所に行く筈の弟を起し、東京驛行の電車で一本道に不取敢市役所前まで出かけることゝした。

○

あの市役所前から宮城の方へと見渡すと、丁度中央一角のお城には陽光が當つて輝かしく、暫く空はどんよりと沈んでゐたがいつか雲目が切れて、晴れて來た。つき當りの凱旋道路から一帶の廣場にはもう一列或ひは二列にすらりと遙か向ふ

ふに黑い人垣が出來てゐて、猶そこに連なる心の者は三々五々廣場をこつちから向ふへとバラ蒔いた樣に點々歩いて行く。それが增へつゝある。インバネスを着てカッチとした素描の形がある。かと思ふと色どりの多い女の人の姿がある子供がある。洋服、和服、大きいの、小さいの、犬もゐる、それがバラバラに蒔かれて、てんでに動いて同方向へ向ひ、更に遙か向ふの二重橋のところはそこだけ地面の傾斜が心持爪先上りの爲め、遠くからも三角形に空いて見える。この空地を人垣の一線がきちつと黑く劃してゐるのである。「×めたぞ。之れでもう立派な材料ぢやないか。」

私がその景を眺めて暫く立止まつてゐるので、先きへ急ぐ弟が氣にして「如何したのか」と聞く。「なにここの所の景色でもう繪にはいゝから見てゐるのだ」。――「行列はどうするんだ」と聞く。私はをかしくなつたが「見て見ろ、あんなに遠いぢやないか。赤や黑のポツポツをあの明るくあいたところへちよつ〳〵と打てばすぐ感じが出て、却つて面白い。」さう云ふ樣なわけで、やがて私もあすこの廣場の中のぽつぽつ蒔き散らされた小さな影繪に交り、で、二重橋ももうすぐ目の前の人垣の列のとこへと着いた。

私は一寸の間そこの第三列目あたりに立つてゐたが、見るのに刻々と人は集まるばかり、それに直き手前の所を自働車が行つたり來たりして、さわ〳〵していけない。之れは今の間に場所を變へるに如かずと思ひ、「おい、ここは止さう、今に苦しくなる」、弟を促してぐるりと楠公銅像のところから、植込の中をはすにつつ切り、その一端へ出て見ると、丁度一中の前から大幅に二重橋へと打渡す凱旋道路の出口のところだ。そこにも人はもうずらりと並んでゐたが　しかし矢庭に駈け付けたので或る人垣の切れ目のうまい工合のところへわり込めた。

だが何と人出の盛んなことだらう。刻々と出て來る。若し私達はもう一分間おくれたら、既でに後ろの植込みからこつちへは出られなかつたかもしれぬ。と云ふのが植込みの中の所に、小屋がけの救護班が出來てゐる。そこから何時か巡査が三人ばかり出て來て、殆んど命令とばかりに、あとからあとからと繰り出す銅像の方からの人々を、人垣のうしろへ、人垣のうしろへと容赦なく追ひやつてゐるのを見た。

私の立つたところから右手を見るとそこにはずらりと人々が通路に對して並んで、大方大手門の方もこのまゝつゞいてゐることだらう。更に左手を見ると、すぐ二十間ばかり向ふが凱旋道路の一角の石垣で、そこは誰もゐず、空いてゐる。然し足ごしらへのきびしい警官がチラホラ立つてゐるので、誰もその空地へ敢て行く者はない。――私は先づ今日二重橋へと思つた。然しなんなら櫻田門か、裁判所のところかと思つたが、今ここでかう成つて見ると、もう何所も動くは愚か或ひはここを無闇と突切つてその邊をうろ／＼でもしたら巡查か憲兵かに捕まりでもし想な物々しい工合である。否、此處で一方充分に場所はよし、運よく列の前側へ入れもした。もう動くのはうそだ。「此所で立つてゐることにしやう」と弟と話した。時間を見ると、八時を少し過ぎた時刻である。

○

就ては今その時の新聞切拔きがないので詳しい順序は記せないが、私はかくしてその切拔きをその一寸は持つてゐたので見るに、何でも東宮殿下の使ひが先づ久邇宮邸へ參向するとある。で、東宮殿下がお出ましになる。間をおいて女王殿下がお出ましになる。行列は私のこの眼の前を、五六間のところを、何れお通りになるわけである。九時にお行列が遠くの御所を御出門になるとして、それがここへおかへりになるのは九時半か。――すると時間はあと一時間半、間がある。

私はその長い間、ここにかうして之れから立つてゐるわけだが「初め時計と見比べた時には長いと思つた。然し今になつて見るに、たしかに一時間半、約二時間は、足は靴の中でかたい砂利道の上に冷たく、痛くなる。ぢつとしてゐるので動きたくなる。話をしたいが怖いから話せないので、かう、生つばきが湧く氣になる。何にせよ當り前の心ではなかつた。然し一方には又その間斷へず何事かあり氣な、眼は始終何か奇異のものを見てゐるし、感じは面白い、又は珍らしいものを感じる。耳には常ならぬ音をきゝ、心理狀態はすつかりグッド・ユーモアーの子供つぽく、もの珍らしくなつてゐて、――かう書くのが一番早いが、私は時間を忘れてゐた。

さく／＼と砂利を踏む兵士の足並みが近づいて來てやがて私の前にはずらりと步兵が列を作つて了つた。私は少し此の經驗があるのでつい懷かしく（？）見物して了ふが、嚮導三

步前へ、それから髭を生やした白手袋の將校が列の向ふへ立つて、右へ習へ、と命じる。さわ〳〵とカーキー色の一隊が動いて、段々と奇麗に並ぶ。二番前、三番、四番、その邊少し前、ようし、過ぎた〳〵、などと甚だ、面白いものだ。私は昔一聯隊で此の右翼嚮導をちよいとつとめてゐたが——

然し大いに背の高い垣に出逢つて弱つたと思つたが、その間際にどう云ふ都合か切角並べた歩兵の列はそのまゝぞろ〳〵左へと移動して、變つて其の前には今度は幼年校の小さな若い一隊が來た。——この兵士は銃を持たず、二番前と云はず谷鐡前、山口前などと教官が名で指圖をして、先の兵士よりも整頓はまづいが、然しその後ろにゐるには此方が安氣である。

と、雲間に物音がして來て、飛行機がやつて來た。三臺づつ三角形に各々進路を保つてあとから〳〵と四十八臺がやつて來た。遠くから上空へ現はれて來るその列は丸で雲から湧いて來る羽虫の樣に見える。と思ふ間に先登は又反對の遥かの方角へ小さく飛んで行つて了つて、みんながずらりと頭上の空へ並ぶと何か不思議の金おみか何かゞ天へかゝつた樣な氣がする。時に大變面白い。

ポツンと空に妙なものがある。何だらう？と思ふと、それは紅色のもので、成程小さな風船で、風のまに〳〵舞ひ、然し段々と地上へ近くなる。益々近くなり、大きくなる。あれよ〳〵と見る間に一つは丁度二重橋の方角の人の並んだところへ下ちた。一つはふんわりと石垣のそばの芝生の上へとおちたが洋服の男が拾ひに出かけた。もう一つは我々の列のうしろの救護班のかたへに落ちたが、一時人垣はなだれをなして崩れ、人足風の男が逸早く驅けぬけてつかまへた。之れも大變に面白い見ものだ。

我々の列の前には、そこの打ち開いた大道をさつきから斷へず撒水車が行き返りして扇形に大きく水を打つてゐる。白つぽい砂利は青ぐろく水づいて來て、綺には此の道の方が白い道よりはいゝ。——相續いて參内の人々が通る。悠々と一人で自動車に乘つて行く者がある。又三人位ゐ大禮服の人がおも合ひのもある。さし曳きの腕車で禮服の上に古風にインバネスを羽織つた品のいゝ老人もある。又は見るからに海軍大將と云ふ樣にでん〳〵したのもゐる。大島公使の被つた昔

ながらの帽子だ。
私の列の前には一間おき位ゐにくまなく巡査がゐて、それと所々に「憲兵」と腕章にある補助の兵士が嚴重にかまへてゐる。巡査はあごひもをきつちりメめつけて斷へず人垣の方をじろ〳〵にらんでゐるが、それと、列の後ろに、又何となくもぞ〳〵してゐる異樣の風の者がある。或る者は黑地の上下揃つた銘仙に袴をきちんとつけて、然し木ぜつたをはいてゐる。或る者は又大變手首のところへオーバスエッターをはみ出させて、邪險につまんだ中折れを被り、大變立派な着物を着てゐる。――それ等の者は所在なさ想に此處にゐたり、又彼所にゐたり、何となく離れてはゐるが見てゐると何處かしらで逢つて、立話しをしてゐる。大抵懷ろ手だが、間違ひなく、刑事だ。――

――と云ふ樣な、それ等の景致を見てゐる間に、何となくあたりに氣合ひがあつて兵士は銃をとり、巡査はその邊を整し初め、……私は時計を見たが九時何分かであつた。と、一發大砲の音がして、それはたしかに殿下の御出門を報ずる號報に違ない。

みんなあたりの人が帽をとり、襟卷をとり、手袋をぬぎ、外套をぬぐ者もある。私もそゝくさとさうした。外套は如何しやうかと迷つたがその間に櫻田門の方から二臺、赤いオートバイの巡査(?)がやつて來て、大變除行してゐる。云はずとも之れが先驅と分り、よくその邊の模樣を見ながら起立してゐる間に、氣を付け！と云ふ遙かの聲がきこえ、一隊の兵士の物音がする。萬歲――それに交ざつて何とも云ひ樣のない一種の遠くの怒濤を聞く樣な人聲がして來たが、その聲それ自身が濤ばたを廻つてこつちへ來想な感がする。忽ちすぐ前の列の兵士がしやんとして、捧げ銃をした。幼年校の生徒は頭左を命ぜられ、將校は一齊に手を上げて敬禮した。肅然として、全く肅然として、この邊には何の物音さへないかの樣に、金筋の帽を被つた警視が馬で來た。つゞいて、何ともつつりとしたいゝ味ひの色味の一隊であらう。それが變に音もなく　然し氣合ひは充分に緊張し切つて馬を並べて群まつて肅々と通り過ぎる。子供の時の事をそのまゝ一群りで空中に彩られた樣な工合にである。――赤い肋骨の胸へてその後は忘れてゐた、懷しい騎兵が、旗を立て、並んで誰も

顏さへ動かさず、嚴かに、然し云ひ樣なく愉快に、乘り入れて來る。

それから自動車である。そのあとに旗がある。騎兵の捧げる一流の旗があるが赤地で中に白く四角のわくをとり、金の御紋章が眞中に打つてある。東宮旗である。つゞく又も騎兵の馬は大てい深い鳶色で、白の流星や、足だけ白く拔き出たものもある。それ〲旗は竿の中程を革ひもにからんでそこの所を手に持ち、上には鎗が光つてゐる。旗竿の下は長靴の何處かへついてゐて、三角に切れ込んだ小旗は非常にチーヤフルにひらめく。兵士は紅色の兀とした帽子をかぶつて、白い鳥毛立がついてゐる。――鞍は紅に紺、櫻の模樣がたつくりと入れてあるが、誰が考へた服裝と色どりであらう。誠に美しく、温かく、愛情がある。

殿下はその次ぎの自動車で來られた。純白の手袋で擧手をなすつて居られたが、あなやと見る間に過ぎ去られた。

次いで更に一かたまりの騎兵、紅い自動車。黑い自動車。警部……この御通御の間は先づざつと一分間か、二分間とはさうゆつくり拜觀出來なかつたかにおぼへてゐるが、視野は左右ともに兵士の厚い人垣に遮られてゐる爲め、一瞬、すぐ眼の前の狹い角度のところへ影像のおちない限りは、私には何ものも拜せない。だがいざ視野の屆く限りは御通りが映じたとなると、突如としてそこには騎兵が、又騎兵が、又騎兵が過ぎ去り、自動車を點綴し、偶々はつと思ふ間に殿下が載つておられる。ほんのシルエットの樣に凡てを見るのだが、然し何か神經のそつくりが通御を拜すると見え、一旦拜したとなると、その趣きと云ふか、目出度さと云ふか、それは中々眼の中から消え去らない。殿下は擧手の禮をされた。兵士は腰を浮かせたり着けたりして馬をためてゐた。物音は殆んど何にもない樣に感じたが、氣合ひは生き〲として胸一杯のものがあつた。第一美しかつた。……若し私感の極く隅のところだけを切り離して云ふ事を許して頂けば大變氣に入つた。

○

私はそれから猶久邇宮殿下の通御を見た。つゞいて女王殿下の儀衞を揃へたお美しい通御を拜した。女王はうつむかれて、髮は極くお黑く、はつきりした朱衣に何か大きなお模樣があつたが、向ひ合ひに官女が御陪乘してゐた。官女は大變

強さうに、女王は全くお美しく、お欣びの爲めにお困りになつてゐる樣に拜されたが女王殿下萬歲と感じた。何かかう胸へ泌みて來る樣なものがあつた。女王の騎兵は特別の旗を持つてゐなかつたが、それ〴〵列の先頭には若い逞しい忠義らしい將校が長劍を拔いて胸にかまへて行く。お召自動車は黑と濃紅の如何にもじんわりとした善い塗り分けに出來てゐて、所々に調和よく金の光るのを見た。凡て私の思ふ「宮廷の色」である。好ましい昔ながらの色である。明治の色。

私は此の盛儀を拜して、で親しく鹵簿を拜して見ると他の町の材料や、遠見の二重橋の材料は、騎兵に圍まれた御車の美しさ、重々しさに比べては、比較にならない、全く別のものである事をはつきりと感じた。と云ふのは前者はいつでも見るものだが、後者は親しく——一生にも何度か——拜さずには、眼に生きて來ない。乃至、想像でもかう充適確には出て來ないし、一體我國には維新この方此の奥床しい愛情の豐かな鹵簿の儀禮があるのである。しかし今も猶あらうとは、そこの所は矢張り見ずには考へない。

昔の圖繪では見る。しかし親しく目で見ずには、描けない畫因である。

私はそれで、此の字は恐れ多いかしかし繪に云ふ材料にはすつかり滿悅を感じて、同時にかう云ふ盛儀が世の中にあるとは、大變善いことだと思ふ。御婚儀の慶事に元より大いに祝す可きところと壽き奉る。——だがかなり疲れて、ひる頃家へ歸つて來た。

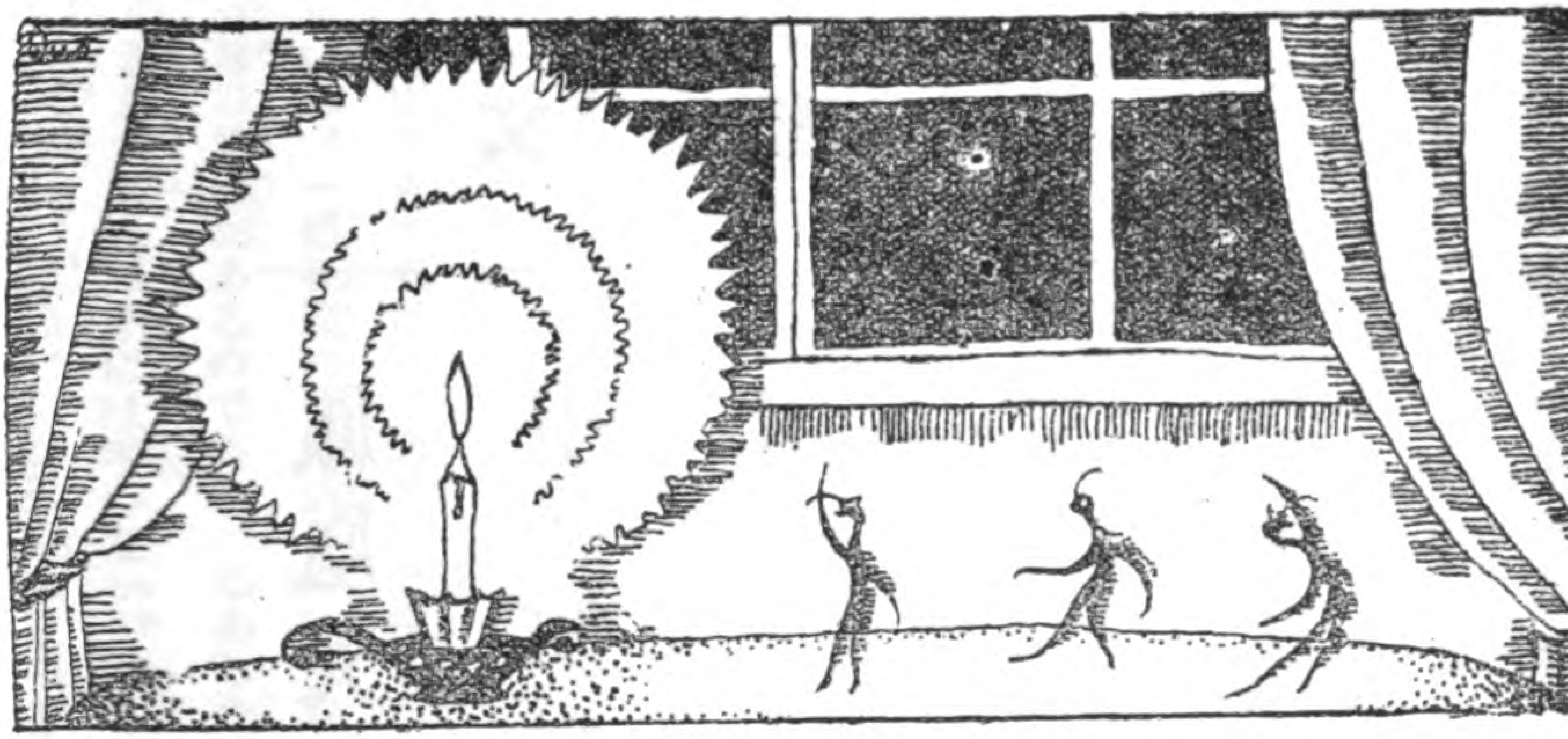
それからその日は寢た。

○

その日のあくる日か又あくる日かに都合三枚騎兵と御車の景致を油彩に描いて見て、本誌の口繪に揭げた一つは、ほんの見取圖ながら猶他の二枚の、これよりもう少し細かく描いたものよりは感じはあらうと思はれる圖だ、が、いつか又私は此の榮ある拜觀を記念に、昔の繪かきはよく取扱つたことのあるこの美しい材料をもう一度ちやんと、念の行く迄、描いて見たいと考へてゐる。

で、この文はその後望みに任せて早々ながらその日の次第を記した、多分はあらずもがなのものであらう。拜觀拜寫のしほりに以上二月四日草す。

文藝欄



鳳凰天に搏つ

柳原白蓮

□

其頃、唐の國は先帝太宗皇帝が崩御あつて、皇太子の晋王治が、位に即いてから、もう幾度か年を重ねた。

新帝即位の後も、世の中は常に騒がしくて、突厥の背叛や、沙鉢羅汗の入寇など次々に起る戰亂の噂も、いつも新帝に幸したが爲めに、國内に住む人民等の上には、大した災ともならなかつた。夫れ等の世の取り沙汰を、ほのかに聞き流しつゝ何の怖れも不安もなく、こゝ感業寺の比丘尼寺の尼達は、至極穏かに、靜かに其日〳〵を送るのであつた。

逝く春の暮は、殊に秋の夕よりも一層物あはれに、あまつさへ風に誘はれて散る花の一片にも、見る目によりては、身も世もあられぬ思ひをするものを、まして淋しい庭の片隅に、さつきから唯一人佇んで居る若い尼があつた。

日あしが漸く傾きかけた庭には他に誰も出てゐなかつた。寺内の庭の大きな樹を

巣としてゐる小鳥らの群が、今の時刻になると、又いつもの通り何かせわしなくしやべりながら歸つて來た。其の囀もやがてひつそり止んでしまふと、いつの間にかまだ明るい空に白い月がほんのりと浮んでゐた。彼の若い尼はそれと氣が付くと御堂の方へ入らうかと身を起しかけたけれども、遥か御堂に續く廻廊にはそこを通つてゆく人影もなかつたので、彼女は又元の位置に坐り込んだ。大勢の尼達は皆夫れ〳〵の部屋に入つて居た。彼女達はもう疾くに現世の思ひ煩ひといふことを忘れてしまつてゐるのであつたが、其の將來世には可なり大きな希望や、持ち切れない程の仕合せといふものをあれかこれかと想像して見た。そして淨土への憧憬に浸つてはゐるものゝ彼女達はまだその來世の幸ひといふものをしつかり掴み得ては居ないのに、ひとつにはもうその幸を受けた場合の御禮心から、ふたつにはその未來に來るべき幸のなほも大きかれとの願ひからして、他人や隣人に對する奉仕を寧ろ競爭的にまでし度いといふ氣持ちになつてゐた。そして默つてゐてもやがて死の使が迎ひに來るであろうと同じく、斯うして居れば自分は進んで何一つ努力しなくども、必ず天然自然に持つて來て與へられる何ものかゞあるとの、不精な、併しながら虫のいゝ考へを持つてゐる者もあつた。さればそこには無理から作られたのではない平和があり、尼寺にふさはしい穩かさも、品のよさも自ら備はるのであつた。彼女は誰にいふともなく、

「私にも未來があるのかしらん、斯うして諦めの中に安全に暮してはゐるものゝ。でもまだ何だか私には……」

と云ひかけて邊を見廻した。今彼女が呟いた未來とは、來世のことを指してゐるのか、但しは現世に於ける未來の事をいふのか、彼女自身にも餘りはつきりしたものでは無かつたけれども、唯このまゝに生涯を、世にも人にも離れ切つてしまふものとは思はれなかつた。現在穩かに朝夕を倶にしてゐる次い多くの尼僧達の行き屆いた親切さは、報いるとしたならば、此世ばかりでは背負ひ切れないほど澤山あつた。もしもこの親切に報いる事なく、そのまゝ彼の世へでも持つて行つたならば、彼女には多分の借りが殘るだらうと思はれた。そしてこの報ひ切れない程の親切さ、背負ひ切れない程の人

の情は時としては彼女をして屈托させる迄に足り過ぎてゐた。夫れ故彼女は其日〳〵を不滿に思ふ事は少しもなかつたけれど、と云つてこの滿足さがこれでよいものとは何うしても思へなかつた。刺激のない安樂、惱みの雜らぬ幸ひ、それは生きた人間の棲む所には餘りに彩りが無さ過ぎた。

彼女は生れながらに不思議な内面の葛藤を抱いてゐた。それは彼女自身の心の戰ひと和合とであつた。そして一つは彼女の魂に繋がれた己れであり、一つは彼女の肉體に繋がれた己れである。或は一つは男で、一つは女であつたかもしれない、一つは强く、一つは極めて弱かつた。それがふだん互ひに仲が惡くいつも睨み合つて居るか、又は背き合ふかして居るのであつた。夫れ等の心の戰ひを、彼女の肉體は時折もて剩す事もあつた。たま〳〵それが仲良く睦み合ふた時は、大なる善をなすか、或はひどい惡事を行ふ時かにあるらしかつた。何れにしても大なる榮えを來らせるか、又は恐ろしい災を招くのか、そのどちらかであつた。丁度それは人間同志の男と女とによくあるそれと同じ如うに、

「私は何だつてこんな所へ來てしまつたのだらう」

此度は小さな聲で彼女は囁く様に云つた。すると自分で云つた自分の言葉が、ふと身につまされて、つひ面を曇らせるのであつた。そも〳〵彼女が此の寺に來たのは、彼女が先帝太宗皇帝の才人（女官の役の名）であつたが爲めに、帝の崩御の後、幾人かの朋輩と同じくこの寺に來たのであつた。とは云へそも才人となるその初め、自分が好んで宮中に仕官を求めたのではなかつた。まだ十四であつた彼女は、親や親に代る我身の保護者達が、甘く娘が出世すれば、自然自分等も結構な事になるからといふ、我身勝手の都合から割り出された事であつたらしい。けれども餘りに澤山の女に圍まれて居たが爲めに、女の價といふものをまるで知らなかつた帝は、特に女の親共まで喜ばせて女の機嫌を取らなければならぬほどの必要も愛もなかつた。おそろしく華やかな宮殿の中は、女同志の妬みや、自分の身の不安さや疑ひやらに滿され、そこに起き伏す多くの女達は、互ひに心の刄を磨ぎ合つて居るのであつた。このやる瀬ない戰ひの中にあつて彼女は、身も心

もすつかり擦り滅くされてしまつて、せめて親共を有難くして頂けたなら、どんな辛抱も悦んでしよう、勤めもしようとの、初めの頃のしほらしい心も遂には影を消してしまつて居た。そして年をとるにつれ、段々と大きくなつて來る胸の慾望、それは凡ての女が生きてゆくのには、是非なくてはならない愛といふものだと知つたのは、ずつと後の事であつた。すさじきものは宮仕へだと、しみ〴〵考へる度、たとへ小さくとも他の女達の様に、眞に我家といふものがあつて、そこに小さいながらも己が王國を建て、狹い中の隅々までも、自分の趣味や自分の望みといふものを、形の上にも目に見えて行き渡らせる事の出來得る身の上が、わけもなしに羨ましかつた。

谷川の水を慕うてあえぐやさしい小鹿も、充されぬ心の餓えては、やがて猛り立つ獅子となつて怒る。彼女の胸の奥に潜む強い〳〵魂が、遂に打ち叫んだ。「何だ！ 小いつぽけな！ この唐の國をみんな奪つてしまへ！ お前の智慧で！お前の美しさで！」 彼女は怖ろしい自分の心の叫びに喫驚して震へ上るのであつた。 成程彼女の智慧は、時の宰相と比べて見て優るとも劣るものとは思はれなかつた。その美しさは異性があらゆる生命を賭けての情けをひくにも充分であつたのだ。或る時は太子でさへ父君の才人である彼女に秘かに云ひ寄られた事もあつた。そしてそれは一度ばかりではなくその後幾度か彼女の影を追はれたかしれない。 しかしそれも彼女には眞實心といふものではなくほんの御氣まぐれの一としか思へなかつた。 其他の大臣や侍從達の焰えるやうな流眼の下を潜りぬけては、ほつとして自分の寢間に歸つて來ることも屢々あつた。 受けてならない人の情には、怖ろしい赤い血を見る罪の影のみが從いてゐる。 そして榮えの涸となるべき愛には何の心の憩ひもない。 ましてそこには折ふしのあの淫な肉慾の外には何物も見出せなかつた。 女の優しい胸を踏みにじつて次から次へと移り氣な帝も 彼女にとつては一國の王といふよりも寧ろ唯一人の戀しかるべき異性であつたのに、求めても〳〵充されることのなかつた愛や恨めしい數々の思出に彼女は今は此世にない帝をなほ憎しむのであつた。 何うかすると皇后や、 他の妃達のその時折にかはる寵幸と一緒になつて、 夫れ等の人々の嫉妬をとり度いばかりに、帝は大勢

の人中で彼女をいぢめて、それを一つの見えにして誇るのかと思はれることもあつた。これ等は正しく彼女にとつては恐怖に價するものでありその屈辱の忍苦は、鞭打たれるよりももつと悲しい苦難であつた。傷ついた胸を抱いて此の寺に入つてからかなりの年月は過ぎたけれどもまだ本當に癒え切らない心の痛手は折りにふれ事につけてその痛みをいや增すのみであつた。その帝が亡なつて却つて彼女の胸の落ち付きは出來たやうなもの丶、昔の追憶に浮んで來る帝の俤には怨めしさ悲しさが付纒つてゐた。抑自分が現在こゝに斯うしてゐるといふ譯は、つまりあの薄情な帝の才人であつたが爲めだと思ふと、幽明所を異にしてまでも猶まだ本當に束縛を放たれてゐないのかと、又しても口惜しい恨みが湧いてるのであつた。同じ所に居るにしても、なつかしい思出のいくつかを胸に抱きながら、此の清淨な地に居るのであつたなら自分もあの庵主の尼の樣に、心から感謝の安らひに浸つても居られ樣なものをと、彼女には淋しくもあり、悲しくも思はれた。

さつきから物を考へながら眺めてゐる寺内の庭は、どこが境といふ所もわからぬ程に廣くて、つひ足下には大きな池があつて、其の水は湧いて滿る音はしても、何所からどこへ溢れ出づるものとも分らぬ程であつた。其の鏡の如うな面は、もうさつきから何度となくかはつて居た。濃碧になつたり、銀色をしたり、黄金の光りをもつて小さい波を立てゝ見たり眞白になつたと思つて大空を仰ぐと、丁度それと同じ形の雲が早足に彼方の木立の方へと歩み去る處であつた。彼女は自分の過去が丁度あんな風に、自分自らの本來の面目といふものは、我身自身にすら分らなくなつてしまひ、喜怒哀樂共に皆他から持つて來たものばかりで、生き長らへてゐた事を考へる時、果してこれが女といふものだろうかと、今更こし方の樣々の思出を、流れの音や、木や草や、雲の姿にまで見るかのように、聞くかのように、又してもいやあな氣持ちになつて默つて一人佇んで居た。

そこへ足音も輕くとぼ／＼と一人の老尼が彼女の側らに近づいて來た。それは珍らしく年をとつた九十いくつにも餘る

といふ庵主の尼であつた。

□

昔六朝の時代には亂世がうち續いた。其處も此處にも惡政が行はれ、後魏の末期には人民に苛酷な賦役をさへ强いるに至り、多くの不平な人民がこの重荷から逃れようと僧院にのがれる者が數知れなかつた。夫れ故これ等僧房に潜む人々の中には、偉れた人材も多かつた。智能の士も居た。盛德限りない聖者も居た。此の感業寺の比丘尼寺も其頃から出來た僧院の一つであつた。されば女でこそあれ歷代奇傑の尼も現れ、先帝太宗の頃以來可なり名ある寺の一つに數へられてゐたのである。こんな理から此寺に只の世棄人ばかりでなく色々の人が集つた。從つて此所には菩提供養のみに建立した他の寺と異り特別な氣風が見られ、庵主として一世の奇傑とでも云はうか、高德達見の人が次々に主宰して來た。そして唐の帝室の方々も時折り此の寺に駕を枉げ教へを乞ひに來られる事さへあつたのである。現住たる庵主は、學識も修行も先住の訓陶の下に殆ど缺くことなく研かれてゐて、國中の人々から一世の傑れた人として崇められてゐた。今しも彼女の方へ近寄つて來た庵主の姿を見た彼女はいと徐々しく行儀よく其所に跪づいて禮をした。老尼は彼女の顔をしげ／＼と見守りながらにこやかに

「曌や！　そなたはまた何か考へ出しましたね」

「いゝえ、御師匠樣！　別段なんにも」

と彼女は少しうろたへたように答へた。老尼の微笑はやゝ戯談氣味に

「今しがた愚痴なことを考へて居ましたとそなたの顔の下瞼が云つてゐます」

「えゝつ？」

と云ひながら彼女は一寸恥しそうに片手で半分顔を隠くしながら指先で下唇を押へた。そして老尼の顔を不思議さうにじつと見つめて居た。老尼は優しく、

「何もそんなに驚ろく事はないよ」

と、あとは厳格な顔つきになつて

「わたしの師匠は大層偉い人で、不思議な事をしたり、見えないものが見えたり、人に聞えないものが聞えたりしたのです。この天體の相をしる術さへも知つて居ました。天地間のあらゆるもの何でも知らぬものは無いのでした」

「と仰しるとどんな事でも?」

と彼女は問ふた。

「あゝさうとも小鳥らの囀づる聲で何を話してゐるかといふ事も聞き分けました。花と花とが頷づき合ふのは何の意と覺るのです。葉末の上におく露がもしもみ空の星の影を宿したなら、そのあしたの朝にすべての露と諸共に消え失せるにしても、それは大きな恵みなのぢやと申されるのです。明月の夜は大和田津海の底、龍宮の庭に遊ぶ貝の群れが、波間に寫るその月影のうるはしさに憧憬れて、ふと情けをうけて身胎つた時、美しい眞珠の玉も生れるのぢやと」

「まあ何といふ不思議な御話なので御座いませうね、御師匠様!」

「わたしも若い頃はこんな話を聞いても、何の事ぢやらちつとも面白くもなく、譯もわからず、其頃は妙な事をいふ御師匠様だとばかり思つてゐましたが、今はその師匠にも別れ、いろ〱の悩みの果てに來る若い娘達や、世の移り變りなど見てゐるうちに、遠い〱國の夢物語か何ぞのように聞き流してゐたこんな話しも、今では段々と解りかけたやうな氣がします。白露のあまりに微やかな脆い生命と名づけるやうなものがあるか無いかさへもわからぬ秘かすかなものをすら、たゞ徒らには見逃がさぬ旅でしたもの、人の心を讀みとる位、何でもありはしませんでした」

「どうしてそんなに何でも御解りになつたのでせうね」

「天變地異といふ如うな事だつて、ちやんと前から知つて居ました」

「まあ！　何うしてそんな事が？」

と彼女は眼を見張つた。老尼は靜かにこの若い弟子の爲めに說くのであつた。

「わたしの師匠の云はれるには、天變地變といふものは、つまり萬民の心が天に映るからぢやと云つてゐました、萬民に悩みや苦しみがあると、天もその通りに歎げいたり苦しんだりする、人間の爲めに樂しかれと創られたものも、それがやがて人の涙や怨みに汚がされるとそこに天災や地妖が襲つて來る。人々が騷ぎ立つその前に、わたしの師匠はちやんとその變異を知つて居るのでした。天體の相はつまり人間の相です。己れの相をよく觀れば、天體の心を計る事が出來るし、天の實相を悟れば己れの運命をも悟るのです」

と聞いて彼女は飛び付くように、

「御師匠樣！　私にもそれを敎へて下さいませな、私知り度いので御座いますもの」

彼女はつひ今さつき一人して考へぬいた、自分のこし方や行末の事どもが、斯ういふ風にわけもなしに解けていつたならどんなによからうと思つた。昔から多くの女達は自分の大事な運命の鍵を、いつも親や目上の人達の手に任せきりにして、その人達のはからひが、必らずこの身の幸となることに定め、一日片時もそれ等保護者達の恩を忘るなよとの敎へを忠實に守つてゐるのであつた。しかもまかり違へばどんな無理をも、無情をも、諦らめといふ都合のよい道理によつて强いられてゐることに氣付かなかつた。萬一身を打ち碎く程の大事が降りかゝつて來た時でも、夫れ等の人々はそしらぬ顏で横を向いてしまふ。だがこの人々の上に、もしほんの少し災の餘波でも及ぼすものがあつたとしたら、この人々はこれをどんなにか怒り、どれ程か咎めることであらう。のみならず彼等は本當の責任が自分達の上にあることを忘れて

そこに何の思ひやりも、少しの同情も注がうとはしないのであつた。この哀れな弱者の立場、強いものはいやが上にも弱いものを虐げるに都合よく出來てゐる世の中といふものを彼女は疑はずにはゐられなかつた。

「御師匠様！　此の世は強い者、身分の高い者、年上の人、富める人々などの爲めばかりに造られてゐるので御座いませうか？」

「どうしてそんなことをいふのです」

「でも御師匠様！　此の世中では弱い者、ことに女などは初めから悪い運命に置かれてゐるので御座いませうか？もつと怖ろしいことには悪人の榮えるためしさへありますのよ、御師匠様！」

呪ひに滿ちた彼女のこの虐げられた心の叫びを聞いて、老尼はいとしい氣持ちになつた。

「……輪廻の道は險しくても人間にはそれ等に打ち克つ事の出來る力が與へられてある筈です」

然し彼女は尙人間には運命といふ不可抗力が付き纏つてゐて、初めから終りまで誰もが定められた經緯を織り出してゆくに過ぎぬものだといふ事を忘れるわけには行かなかつた。彼女はこれまであまりに人間のか弱さを見せつけられて來た。そして今何となく權威のあるこの老尼の言葉を聞いても、そこにはまだ多くの疑問が殘されて居た。

「お師匠様！　人の運命は定つたものなので御座いますか？」

「さうらしいね、大部分は」

「御師匠様は現在の人の心を讀みとるばかりでなく、其の人の未來の事でも知らうとなされればお解りになるので御座いますか？」

「たいがいの事はねえ」

「まあ、御存じ？」

彼女はこれで自分の謎も解けるのだと思つたから、嬉しくて胸も踊るようであつた。それでやゝ甘へるような氣持ちになつて。

「御師匠様はまあ、ずゐ分ですわねえ。そんな事までちやんと御存じなのに、此の間も村の娘が嫁入り話で甲か乙かに迷つてゐるその母親が來て御師匠様に御相談申上ましたら、わたしは占ひぢやないから解らないよ なんて仰いましたわね。この天が下の一大事から、果敢ない露の生命の象まで、疎かには思ふまいと遊ばしながら、あの娘の縁談だつて、右か左か定めよいように教へておやり遊ばせばおよろしいのに。御師匠様はまあ、何もかもよく御存じのくせして」

「おゝそうだつた！ あの娘のこと！ 蜀や！ 人の一生の出來事といふものは、知り易くして仲々定め難いものなのだよ。人は皆定められた宿命を擔つてゐる。それは隨分の重荷なのぢや。弱い人、力の足りない者で此の重荷の下に亡びてしまふものはどれ程あるかしれない。然し蜀や！ 尊いことには人間には此の恐ろしい宿命の外に運命といふものが與へられてある。これは自分の心で、考へで、望みで、自らの宿命を切り開いてゆく事の出來うる不思議な力なのぢや。宿命の重荷も、この運命の車に乘せて行けば、さほどに重いとは感じない。また宿命が右へ行かうとするのを、運命の力で左へ向けることも出來るのぢや。あの村の娘は本當によい子だ。あの美しさ優しさが示してゐるように、あの子はいゝ宿命を持つて生れて來てゐる。でもあのあまりに弱い心が惡い運命を作つて行きはしまいか。わたしにはそれが氣づかはれる。あの子はもつと強くならねばいけない。でもあの無智な惡い親達の爲めに、あの娘の弱い心はとても強い息を吹くことは出來まい。わたしはあの子の一生のことを心配してゐる。しかしそれは云つても詮ないことであらう」

彼女はこの老尼の言葉がまだ充分に腑に落ちなかつた。でもあの村の娘が弱い心故に暗い運命に陷いつて行くと聞いて我身のことのように恐怖を覺えた。

「まあ、御師匠樣、ほんとにあの娘は氣の毒な子で御座いますこと。それにしても恐ろしいのは、人の運命とやら、宿命とやら。私共もあの娘のように、この恐ろしい掟に縛られてゐるので御座いませうか御師匠樣！」

老尼は彼女の異樣に見張つた眼眸をのぞきこむようにして、また言葉をつぐのであつた。

「嬰や！　それは誰にでも運命と宿命とはあるものなのです。今までは宿命も運命も共に同じく動かすことの出來ない天の固い掟だとされてゐました。だがこの二つはもと〳〵別物なのだよ。宿命といふのは「過去世で斯く行つた故に現世ではかうなるぞ」といふ法則なのぢや。また運命といふのは「現世で斯くすれば來世ではかうなるぞ」と示された法則たのぢや。因と果とはしじう斯うして廻りめぐつてゐる。それで過去の緣が現在の自分を作つてゐるので、これを宿命といふが、未來の己れは現在の自分のやり方で因を作つて行くのです。宿命は過去の出來ごとだけに動かす事は出來ない。でも運命の力はこれから先の事だから自分でどんなにでも作りなほせる。村の娘にした處で、前世の因緣で弱い心を持つたのだらうが、しかし心の持ちようで强くもなれる。强い心になれば良い報いも得られるであらう」

老尼の長い話の間も彼女はしじう考へ深い顏をして一つ〳〵に肯づきながら靜かに聞いてゐるのであつた。

「御師匠樣！　そんならたとへどんなに惡い宿命に繋がれて居ても、それを征服してしまふだけの心の强さがあればよいので御座いますか？　でもあの村の娘が、そんなに强い心を持ちましたならば、彼女の親達は困りませうものを」

「嬰や！　御前だからいふが、村の娘の何もかも人任せにするあの素直な優しい心はまことによいが、その自分自身をあまりに知らない心が、やがて娘のとりかへしのつかない不幸ともなれば、親共を失望させる因ともなるに違ひあるまい。嬰や！　人は先づ己れを救はなければならぬ。自分が助つてゐないのに何うして他人を助ける事が出來よう。私共の多くの姉妹は自分たちの魂をあまりに粗末にしすぎてゐる。災はその爲めに廻つて來るのぢや」

「あの美しい娘にそんな暗い未來が待つてゐようとは何うして思へませう」

「それはあの娘の顔の相が何もかも語つてゐるのだもの」

「御師匠樣にはそんなに未來が御見えになるので御座いますか。私は今まで御師匠樣がこんな事まで御存じだといふことを知りませんでした」

「わたしが今迄知つてゐることをわざと隱してゐたといふ譯でもないのだけれども、それはいろはを讀むと同じようにたやすくは說き難い道理なのぢや。わたしはわたしの師匠から色々天地の秘密を敎へられ、不思議の力を授けられました。それ故わたしには見合ふたばかりで口をきく事のない程に係はりの薄い人でも、あの人は今何を考へてゐて、いまにあゝなる斯うなると思つてゐると、きつとさうなるのです。終には、餘りよく解り過ぎてもういやになつてしまいました。どんなに偉い人でも愚に見えたり、又はその人の未來が見え透く爲めに、現在の榮華の有樣が、可愛想でならなかつたり。やつぱり人は他人の事でも先のことは知らぬ方がよいのだと悟りました。人間の未來が封じられてしまつてゐるのは大きな惠みなのだよ。だからそなたも隱された神秘を覗くものではおりません。一度神秘の扉の鍵を持つた者は、その開け方まで忘れてしまはぬ限り、それが却つて不便でならない。人世は隱れた處によいものがある。凡てが裸になつてしまつては彩といふものがなくなつてしまつて、つまらなく淋しくなる。いゝえそればかりではない人間の生命は破られてしまふものぢや」

この老尼のいつもの癖で、話の終りの方は老尼自身に云つて聞かすかのように話すのであつた。この老尼が一人居の時も何うかするとひとりして大きな聲で話をしてゐる事がある「まあお一方で何を仰つてゐらつしやいますの?」とでもいへば「なあに、わたし一人ではないのだよ、今わたしはそなた達の目には見えない不思議な影とお話をしてゐる處なのだよ」とすましていふ。全くこんな時は自分の考へよりももつと大きな智惠が老尼を支配してゐるのである。されば逝つた別々の人の聲がこの老尼の一つの口からして語り合はされるのであつた。この不思議な老尼の樣子や言葉も、弟子達に

は常住見馴れ聞き馴らされて、今は誰も不思議とも何とも思はなかつた。彼女はさつきからの話が外の方へそれてしまつたのを やう〳〵にまた追ひ縋つて、

「それで御師匠様！ さつき私が一人して色々考へて居ました事は、よくないと仰つたので御座いますか？」

「それはつまり、役にも立ぬことを思つたり考へたりすると、そなたの顔の相が亂れるからと、注意したまでの事なのです」

「相が亂れると仰るのは？」

「相が亂れると、結局運命も亂れる。そなたは過去の事をまだ忘れてゐない。過去を忘れて未來に努めなければなりませぬ。過去の宿命の重荷を忘れて運命の車を潔く走らせたらよいではないか」

彼女は恥かしさうにさつと顔を紅くした。そしていくらか言葉を亂しながら、

「え！ さつき、あの私、つい獨り言を申して居りましたの、お聞き遊ばしたか？」

「聲を聞いたのではありませぬ。そなたの顔が語つてゐるのです。そら！ 今だつて！」

「あれまあ、私の顔のどれが？」

と彼女は思はず袖で顔を蔽ふのであつた。

「人間が意志を現はすのは、聲でいふ言葉ばかりではありません。目も眉も、その色艶も生へ際だつて、髪の毛一本にも皆言葉があり思ひが現れてゐます。例へば苦勞や心配や愚痴やをいふにしても、唇がいふのはつひ今しがた、或はゆふべの心、顔に現れてくるものはもう長い間の惱み、といふ風に、その語る處に依つて思ひと時とが傳るのです」

「まあ！」

と彼女は呆れた顔をした、老尼は猶も言ひ續けて、

「さつきからも話すとほり、わたしが若い頃師匠と仰いでゐたその偉い御方が、わたし共にお教へなさるには、人間の出來事といふものは、天然の現象と同じようなものだと仰るのです。例へば春夏秋冬と同じように、先天的に定められたものではあるけれども、冬にも暖かい日があり、夏にも涼しい時があるように、自分の心持ちからもそれを變へることが出來るものぢや。それには第一に氣質を變化させて相貌を變へれば、自ら運命までも轉換し得るものだ。だから愁の相に愁が來、歡びの眼に喜びが來るものだと──

「だつて御師匠樣！　心配のある時、心配らしい顏をするのはあたり前ではないでせうか？　氣質を替へよと仰いましてもねえ。例へば私の過去を哀れ深くしましたのは、私では御座いませんの、御師匠樣！　今の苦勞性だつて、私の周圍が強いて私に塗りつけたものなので御座います。もしか今私に悲哀の影が宿つてゐるとしますれば……」

「それはさうぢや。併しその惱みや憂ひや樣々のものは、皆そなたの相が先に出て、待ち受けてゐたからぢや。お天氣だつてさうではないか。空に降りさうな黒雲が在るから雨が降るのぢや、晴天の蒼空はまあ降らぬものぢやわ」

「御師匠樣！　それは無理で御座いませう、雨雲の方でやつて來るのですもの」

「何のお前！　空が雲を呼ぶからぢや、雲が自ら雨を降らすからぢや」

「でも御師匠樣！」

「風よ吹け！　といふから風が吹くのぢや」

「でも御師匠樣！」

「水氣が凍るから雪にもなる」

「でも御師匠樣！」

「暴れよ！　怒れよ！　地に落ちよ！　といふから……」

「まあ、待つて下さいまし御師匠様！　私には何が何だかさつぱり解らなくなりました」

「そなたが固い〳〵信念を持つて、「斯うだ」と云へば何でもさうなるのぢや。己れの信念の前には、雲も、風も、波もそなたのことばのまゝに働くであらう」

庵主のこの強い言葉にも、まだ彼女のくづをれた魂は躊躇ふものがあつた。

「でも御師匠様！　以前の私はさうは参りませんでした。いくら逃れ度い〳〵とあせつても、逃れられないものがありました。思ふ事もよう得云はずに、物を云へばいふ側から〳〵打ち砕かれ、願ひはいつも退けられるのでした。お冷水が欲しいといへば熱湯をくれました。もつと恐ろしかつたことは、手も足も縛り付けて置きながら、さあ、歩けと申しました。私が歩かぬのを見ていましめをときました。私は歩きました。すると、さつきは歩かぬと云つたのになぜ歩くかこの嘘つき奴！　と罵りました。御師匠様！　これでも私の心柄が招いた運命でしたらうか、御師匠様！」

「それは何でも無かつたのぢや。氣の毒な事をしたものぢや。自分が　うと思つた事は云ひ通してよかつたのぢや。餘りに遠慮が過ぎたからぢや。己れの氣を知つて勇氣を出さねばならぬ。そなたは王者の相を持ちながら、それを不如意にするほどのかよわい氣兼ねと、臆病な相が邪魔をしたのぢや」

「それでは御師匠様、これからは何のような事でも心のまゝに人にもいふてよいので御座りまするか？」

「あゝさうぢやとも。まだその氣が殘つてゐる爲めに、折ふし障げられる事はあつても、その氣を川はなかつたら、自然そなたの相からぬけてしまふのぢや。けれどもそれには勇氣が入る。これからは何でもかでも心のまゝにするがよい自らの運命を、暗くするような種は一粒も胸に置いてはならぬ。昔の愁を忘れずにいつまでも持つてゐたならば、又しても同じような運がもどつて來るぞえ。怒りも、恨みも、呪ひも胸に置かず、晴天の心で居たらよいのぢや、曇らせたならきつと雨が降る」

「まあ嬉しいこと御師匠様！」

と彼女の目ははれ〴〵しく輝いた。

「それが解つたならこれからは、まゝならぬといふ言葉は恥なければなりませぬ。此世は誠である。この誠を忘れさへしなければ、まゝならぬ浮世といふ筈がない。まゝになるのがあたりまへなのぢや。さうすれば苦も災も自然と逃れてしまふものぢや。あの鼠が三日前に火事を知つてゐるといふのは、何となしに穴を出度くなつて出るまでの事なのぢや。この何となしに感じるといふことが案外大切な事がある。人が誠を籠めて祈るところに何とはなしに災は逃れ、何とはなしに幸が來るものぢや。わしはこの年になる迄世の中がまゝにならぬと思つた事がない。わたしの世の中はいつも儘になるのぢやもの」

老尼のこの言葉には何となく底力が籠つてゐた。その語氣は丁度彼女の閉ざれた胸を強く打ち叩くかのように響いた。そして今までくづをれてゐた彼女の魂は暗から明るみへ呼び出され、永い間萎れ切つてゐた彼女の心は生き〴〵と蘇生るのであつた。重苦しい雲に蔽はれて其の姿を見せなかつた彼女の將來の強い意力が新らしく息を吹いた。老尼の最後の言葉の餘韻がまだ終らぬ中に彼女の胸の奥から斯う叫ぶものがあつた。

「さうだ。私に未來があるか無いかを心配する必要はない。私に未來があるもないもそれはみんな私の信仰に依つて定まるのだ。昔或國に救世主があつて、人間の信仰といふものを說き明すときに、あの山に向つて「此所からあの湖の彼方に移れ！」と云つたら山は直ちに移るだらう」と其の人は云つたさうだ。成程さうに違ひない。さうだ私には未來がある。しかも大きな未來がある。それは、それがよしや普通人間の常識から考へて見て、あり得べからざる事であつても私の信仰がそれを創るのだ。私の思ひがすべての邪魔になるものを押しのけて、私の通り道をこしらへるのだ。山よ！ 動け！ と云つたら山は動くのだ。さうだ私は自然の力さへも征服してしまはなければならない。又私にはそれ

が出來るのだ、きつと……」

彼女は自分の胸に自分で呟いた聲ならぬ言葉に驚ろいて邊りを顧みた時、嫦娥尼が庵主の尼を尋ねて足早に近づいて來た。

「御二人共何をそんなに面白さうに御話を遊ばしてお出になりますの？ 御師匠樣、夕方の風が冷くなりました。さあ中へお入り遊ばしませ。おかぜを召しますといけませぬ」

彼女は嫦娥尼の側へ寄つて、

「嫦娥さん！ いま私は御師匠樣から、それは〳〵面白い御話を伺つて居ましたの、どれ！ 貴女は？」

と相手の顏を覗き込む。何をするのやら譯のわからない嫦娥尼は、

「まあ何で御座いますね、今更珍らしさうにひとの顏など御覧になつて」

と笑ひながら顏をそむけてしまつた。彼女は僅にこの神秘の扉の開かれた隙間をそつと窺ふやうに、

「御師匠樣！ この力は何とで御座ります？ 私ほどの歎きをしらぬ、罪も汚れもない御方、何とで御座ります！ やつぱり強い勇氣をもつて、そして御心のまゝに何でも仰れればよいので御座りまするか？」

「いゝえ、それは違ひます、誰も同じにはゆかない。さうぢや、嫦娥は云ひ度いまゝをいふたなら、其の身を破るといふ相ぢや」

「それは又何うしてゞ御座りますか？」

「天から受けた氣といふものが、一人〳〵に相違してゐるからぢや。初めて此の世に生を受けた時の父と母との氣と、丁度その時廻り〳〵つてゐる天地の氣とが合體して人間になるのぢやもの。その生命の流れを汲む時に依つて、人の凡ては定まるものぢやと聞いた。早い話が同じことをしても、甲のした事は善であり、乙がすれば惡になる。昔の慈悲は

今の無情、今の不義は未來の正義かもしれない。一切の逆はぬ言葉でもいふ人に依つて愛ともなり、憎みともなる。斯ういふためしはそなた達もいや程知つてゐやうもの」

嫦娥尼はすぐ引きとつて。

「はい〳〵それはもう御師匠樣、御座いますどころか、それでこの嫦娥など、いつもさう存じます。所詮世の中といふものは不公平に作られてゐる筈のものではないかと」

「それがあたりまへではあるまいか。毎日ひにち天と地とは同じでも、めぐりあふ日の思ひが違ふ。愛と憎も數々あれど、ひとつとして同じ性と魂の生れよう筈がない。天の惠みは平等でも、自然と差別の出來るに不思議はあるまい。嫦娥はいひ度い言葉をよく謹む事に依つて幸を得るであらうし、惡は思ひを外に表はすことによつて天の惠みを受けるであらう。だから元々善惡のといふ尺度はないのぢや。人と時との組合せさへ良ければそれでよいのぢや」

老尼は一段と聲を落して、此度は誰にいふともなく

「わたしが師匠からきいたのぢや。本當は世の中にはこうしてはならぬ、何をしては惡いなどといふことは一つもなかつたのぢやそうな。人が勝手にこしらへて置いて、やれ律法ぢや道德ぢや習慣ぢやと此世を地獄にしておいて、さんざ人を苦しめる。これが人間の道だらうなどゝ、あはゝゝゝゝゝ」

老尼は何か幻の影を見つめてゞもゐるかのようであつた。そこにはもう彼女も嫦娥も目には入らぬ樣子であつた。老尼の言葉はまだ續いた。

「おゝ、お師匠樣！　あなたから聞いた不思議な話が、みんな本當になつて參りました」

すると此度ははつとしたやうに、耳に手をあてゝ何物にか聞き入るように、

「あゝさう〳〵大變なことが……」

其時はもう今までの老尼の聲ではなくなつてゐた。

「貯のない小鳥でさへ、餓えることなく暮すとき　人間の子は餒え死をしなければならない。野邊の草木は其美しい花冠に身を裝ふとき、若い娘は垢ついた衣を恥ぢなければならない。野山の獸に寢床はあつても、人の子は枕する所さへない。おゝそのとき！　天に日月の光りを失ひ、大地は震ふであらう！　地からは火の雨が降り、天上には妖星しきりに現れ、國と國とは戰ひ、人と人とは爭ふ、生血は流れ、髑髏は横はる。おゝ恐ろしき妖魔の喚聲が響き渡るとき、文明の華も一度に凋んでしまふであらう！……」

この時いつしか日はもう全く暮れはてゝしまつてゐた。物凄いやうな老尼の聲が、邊りの暗の中を馳け廻るかと思ふばかりに響き渡つた。嫦娥尼は極く穩やかな聲で丁度眠つてゐる人でも呼び醒ますかのやうなしづかさで、

「御師匠樣！　もう日がくれました、さあ、お入り遊ばしませ」

老尼はまだ幻の影を追うてゐる。

「えゝ、まあそれは……この地上に……さながらの極樂が……………」

二人の若い弟子の尼は今この老尼が不思議な見えないものとの物語を邪魔しまい、かき亂すまいと、兩方から目で相圖をした。そして二人は互ひに頷づき合つてそのまゝそつと庵主に寄り添ひながら手をとつて靜かに歩みを運ばせる。やがて百壽にも近いこの老尼、童顏の優しい。しかも磊落なこの人を上もない尊いものに侍りつゝ、そろり〳〵と家の方へあゆみを移すのであつた。

□

或日僅な供人を召連れた女乘物が、いとしのびやかにこの尼僧寺に入つて來た。やんごとなき方の微行の訪問とは只な

らぬ供人の様子でもしらるゝ。突然の事とて寺内は何となしに上を下へと混雑を來した。それは皇后の御使者の女官が火急の御用でといふ取次への觸れ込みであつたけれども、庵主の尼が出迎へて見たのは、まさしく皇后それ自身であつた。これには何か深い仔細のある事と察して庵主はわざとそこら邊りにゐる多くの弟子の尼達への手前は、やはりどこ迄も御使者であるといふ態度を執つて、客殿へと請じ入れ、御内談と稱して人々を皆遠ざけてしまつた。御使者なる貴婦人と尼とが二人切りになつたとき、やをら口を開いて庵主の尼は、

「誠に存じがけもない斯らしてまあ、御使者だと仰せになつて、共貴御自身に御出頂きまするなどとは、恐れ多い事で御座りまする何ぞ尼へ御用で御座りましたなら、御召を頂きませば、何時なりと參内致しまするのに。これはまたあまりに恐れ多いことで御座りまする」

と何か思ひに打ち沈むらしい貴人の肩の邊りを見上げながらいふのであつた。その貴人はやうやく被り物をとつてそこら邊りを見廻しながら、さて何から先に云はうやらと暫らく思案にくれては物もとみには云ひ得ぬ樣子であつたが。

「尼！　わしはそなたが羨ましい」

と云つてもう涙を泌ませた目を横にそらすのであつた。幼い頃から乳母とも母とも慕ふて居たこの庵主の尼、今は萬上の君の妃、殊に皇后の位にまで昇つては、我生みの親さへ色々の嚴かめしい儀式や習慣に隔てられたなかに、親らしい氣分も段々と薄いでしまつた中にこの老尼ばかりには、昔ながらに時としては、自分の今の地位も忘れて甘へて見てもよいような心地さへするのであつた。

名香のかほりたゞよふ廣間の裡には、殊更に裝飾は無く、たゞ瓶に挿された牡丹が、いつもの艶めく姿にも似ず、こゝでは何となく愁はしげな色を投げて居た。折しも床に崩れ落ちた一片のためにいよ〳〵哀れ深く見えて、丁度このまろうどと同じく華やぐ姿の此所にあつては、一入淋しさを添へるばかりであつた。庵主の尼は先の言葉のつゞきを促すかのよ

うに、しづかにそれを待つてゐる。ややあつて、その人は深いためいきのうちに語をついだ。

「尼！　何うしやう？」

「…………」

「尼！　わしの胸のうちを知つてかへ？」

「大方は御察し申上げて居りますなれど」

「尼に相談して見たらと思つて、今日はもうよく／＼の思ひで、斯うして來たのぢや」

「…………」

「知つてかへ？　尼！」

「何をで御座りまするか？」

「あの淑妃のことを」

しみ／＼と老尼が見上げれば、面窶れのしたこの貴人のいたはしさ、これも女の一番辛い悲しい憂目を、よそ人には見せまい覺られまいとのつゝしみから、今はこんなに迄なつてしまはれたのかと庵主の尼は、

「ほんにおいたはしう存じ上げて居りまする」

とかくに云ひ淀んでゐた客人は、やがてこの庵主の尼に何もかも打ち明けて賴み聞えたいばかりに、何事も云つてしまはねばならぬと決心して、何のかくしだてもなく、あるだけの胸の思ひを吐き出すやうにいふのであつた。

「それはこの大國の王ぢやもの、帝ぢやもの、妃の幾人はあたりまへの事ぢやとも覺悟はしてゐる。けれどもあの淑妃ばかりは、もう我慢がならぬ。わしの位までも踏みつけられて……。何につけても淑妃の事を一寸でも惡くいふ者があれば、お上はもう御正體もなう御怒りになるのぢや。あの愛嬌のないしんねり者が、どこがよくてお氣に召すのやら、

それが第一不思議でならぬ。わしは見ただけでも身の毛がよだつ。聲を聞いたばかりで氣が狂ひさうなのぢや。そのくせ見た處は如何にもしとやかで、おとなしさうで、めつたと笑つた事さへないのぢや。それがたま〳〵笑へば泣き笑ひなのぢや。ほんに氣のしれぬ。怖ろしい冷い〳〵女子ではある。唯虚榮心ばかりが人並はづれて强いばかりに、あの位置にしがみ付いてゐるのぢや。親切氣のないはわしにばかりではない。下々の者にもそれは〳〵心の冷い人ぢや。誰にでも優しうしたのをついぞ見た事がない、聞いた事がない。自分さへよけりや、人は何うでもよいのぢやもの。餘りの腹立しさに、これがひよつとお上に知れたなら、又何のようなこわい目見ようも知れぬ。此身の危さもつひ忘れて、思ひ餘つて、叩き付けるようにいふてもとんと空吹く風ぢや。叱られたなら泣きなとしたらまだしもしほらしう、可哀想にもあらうもの、涙一滴みせぬのぢや。せめて心配らしい顔でもすることか、けろりとしてゐるのぢや。それが人を馬鹿にし切つてゐるように思へてならぬのぢや。その態度がさも「お上は自分のもの、自分はわしが家來ではない」といふように見えて、その高慢らしい樣子は思ふても口惜しうて夜の目も眠らぬ事さへある。なんぼ謹み深いが女子の道ぢやとて、あの人のように喜怒哀樂を全く表に出さぬ女子はわしは初めてなのぢや。いつそ怖ろしうてならぬ。わしは大嫌ひなのぢや。大勢の女子も見たがあのような人はめつたとない。わしはあの女を見ると窮屈で息がつまりさうになつて苦しうてならぬ。大勢のおなご共が面白さうにしてゐる中に、ふと彼女が入つて來ると急にそこら邊りは眞暗に日がくれたように淋しくなつてしまふのぢや。若い女子といふものはそんなものではあるまいになう尼！　それに何でやらお上はあれの事と云へば毛筋ほどのことを云ふてもお氣色に障るのぢや。それが又一入わしには辛いのぢや。妬ましいのぢや。例へ一言でも「ほんにさうぢや、そちの申す通り愛嬌のない女子だなう、そちも嘸困るであらう」とでもわしの言葉を共々に合せて頂けたなら、斯うまでも思ふまいなれど……。それ故わしの胸の晴れる日とてはない。一年二年とたつうちに、いよ〳〵苦しさはいや增すばかり、もう堪へ兼ねたのぢや。尼！　何うしよう？　あの女子故にお上の

御機色も恐うなり、宮の裡もいよ〳〵淋しうなりゆくかと思ふと、それもこれも皆あの女子故とおもふにつけて氣も狂ひそうなのぢや。何うしたものであらうなう尼！」

長い御話の間も尼は一々頷きながら、斯うして御氣兼もなく御心のまゝにいへば、少しでも晴れる御胸のうちかと、哀れがりながら聞くのであつた。云ひ終つて貴人は、そつと目頭を拭ふた。

「それは魂の性來とか申すものでゝも御座りませう。愛と憎みは表と裏、魂に緣が深ければなんぼ憎いことと申されてもそれ程腹の立たぬもの、でなければ少しの事にも腹が立つ。大した譯も理由もない解け難い憎しみを生れぬ先から持つてゐるものさへ御座りまする。性來和合し難い魂同志は何うしようも御座りませぬ。御辛いは御もつとも、尼も御いたはしうてなりませぬ」

「それでなう尼！ わしさへ辛抱すりや、と思ふてもう金輪際お上にあの女の事は云はぬことゝ定めて苦しい思ひをしのびつめてゐたら、とう〳〵病氣をしてしまふて、生死の程も覺束ない處まで至つたのぢや。こんな思ひをする程なりや、寧そ……となんぼ思ふたやらしらねど、生命ある身は是非ないものぢや。此頃やう〳〵いたづきも衰へ、見や！ この通り瘠せてしまふて、昔の俤もあるまいがなあ。尼！ 女といふものはいづれ何かに前世の罪の穢はつぐのはねばならぬものかや。むしの好かぬといふ事はなんぼう辛い事ぢややら、これも大方前世から持つて來たわしの罪故なのぢやらう。わしさへ死ぬる氣で辛抱したら……。どんな犠牲も是非ないことゝ……」

老尼は遮つて、

「それは思召違ひでは御座りませぬか？ 何もかも御自身の前生から持つて御生れ遊ばした惡い因緣ぢや罪ぢやとばかり諦めておしまひ遊ばす、それが第一御卑怯と申すもの。犠牲はよい事だと申すからとて、愛から出た犠牲でない辛い悲しい辛抱の犠牲が何になりませう。口惜しいの、妬ましいのとそれを堪へた心が何で正しう御座りませう。諦めなど

とは淺墓な、上つ方でも下々でも其日〳〵を悦び勇んで暮してこそ、まことの道にかなふもの」
「諦めとは惡いことかや尼？」
「尼は辛い苦しい諦らめは大嫌いひで御座りまする」
「それでなあ尼！　これはわしの考へなのぢや。誰ぞ新らしいお人をお上の御側にこのわしから差上たなりや、あの珍らしもの好きの御上ぢや、淑妃の事もつひ御忘れ遊ばさうもしれず、第一このわしへの思召もきつとよいに相違あるまいと思ふのぢやが、…………」
「誰ぞ新らしいお人を差上て、それに依つてお上の御心を淑妃殿から御離し申し上げ、別の人に向けさせ申す。それはいとたやすい事のやうにも存じますれど、御方様の御辛いは又只今と同じことになりは致しませぬかと……」
「成程お上の御心をわし唯一人の上にと、それは尼！　望んでも無いことぢや。世が逆さまになつてもまあ無いことぢや。せめてあの女子を見ないでもすむ事なら、此の身は死んでも嬉しいほどなのぢや。ほんにそれ位までに辛いのぢや程に、なう尼！　わしを助けると思ふてなう！」
「それほどまでの思召なりや。と申してさしあたり……誰を……」
と思案に打ち沈む老尼の顔を覗き込むやうにしていくらか云ひ憎さうに、頼むやうに、
「で尼への頼みがある、たつての頼みなのぢや。あの御弟子の嬰をわしに出してくれまいか？　これは何うでも聞き入れてもらはねばならぬ」
「あの先帝様にお仕へ申してゐた彼女をで御座りまするか？　これは又存じもよらぬ仰せ。第一、人々の思はくも何う御座りませうやら」
「それはわしもよう知つてぢや。なれど實はなあ尼、女達の噂なのぢやが、先帝御在世の頃からして御上には一方なら

ぬ思召のあつた御様子であつたらしいとの事、それもまん更嘘の取り沙汰とも思はれぬ節もある。それで彼女ならきつと御上とわしとの仲に立つてよいように取りなしてもくれようかと、そう思ふたからたつて頼むのぢや。もうよく〱の思案ならこそ斯うして使にも頼まず自身に來たのぢや」

「ほんに思ひがけない事になりましたもの、人事は仲々計られませぬ。悪いようでもよいかもしれず、人の心によいと思ふてした事でもともすれば悪い結果を生むこともある。なるがまゝに任せ申す、これが一番良い道理かもしれませぬ。ともかくも本人ともとつくりと談合して見ませねば、尼の一存では何とも確かな御答を申上兼ねまする」

「そこの處をなあ尼！ 曲げてもたのみ度いのぢや、わしが一生の願ひないのぢや、よいかえ？」

「思召はよく心得て居りまする」

「それではまたあまり暇どらぬうち歸らねばならぬ。尼も近いうちに來たがよい。待つてゐるぞえ」

「有難う存じまする」

「必ずよい返事を持つてなう尼！」

「心得まして御座ります。わざ〱御自身に寺へ御成りを頂きましたのは、何とも恐れ多いことで御座りまする」

「なんの尼！ 御使者ぢやわな」

と初めてにつこりと尼を顧ると、尼も同じく笑ひながら、

「ほんに左様で御座りました。御使者の御方御役目御苦勞様に存じます、では御供揃ひを申付けまする間、少々御待ち頂かされ」

と庵主は立つて次の間の方へ向ひ、

「誰ぞ！ 御使者の御立ち、御供の人々にさう申しや」

撒々しく尼が捧げる被りものを取つて貴人は面を隠した。老尼は後から呼びかけて、

「御歸りなされましたら御方様によろしう御披露願ひ上まする。いづれ近いうちには尼も御奥へ上りませうほどに、餘りくよ〳〵と遊ばさぬよう、何よりはまづ御身が大切、御胸廣う御持ち遊ばして頂きまするとこの尼が願ひ上ましたと御前態よろしく御傳へ下さいませ」

被り物に面を包んだ貴婦人は御使者がするように丁寧に小腰をかゞめ。

「左様申上ませう、御方様も嘸かし御満足様に思召ませう。では庵主様―　さやうなら御機嫌よう」

御使者なる客人はひそかに女乗物へと姿をかくした。質素な供人の列がしづかに夕暗の中に消え去つてしまふ迄、庵主の老尼を始め大勢の尼達は見送つてゐるのであつた。

其夜庵主の尼は嬰女一人を客殿に呼んだ。そしてさつきの貴婦人にしたと同じように同じ場所におなじ姿で座に就かせて老尼自らはやはりさつきと同じように下座につきながら。彼女の顔を見上げて、暫らくは物も云はずにしげ〳〵と見入るのであつた。彼女は云はれるまゝにされるまゝに老尼のするのを唯黙つて見て居たが、とう〳〵堪へ切れなく笑しくなつて。

「まあ御師匠様、何を遊ばしますの？　私はまるでさつきの御使者のようで御座いますね」

「ほんになあ、やつぱりなあ。」

彼女の言葉には答へないで老尼は何か勝手にひとり問答をしてゐるのであつた。そして彼女の顔から手、膝、足、と上から下まで見上げ見下ろして一人何か考へ込んで居る、その只ならぬ老尼の様子を彼女は奇しみながら、

「御師匠様！　何うなさいましたの？　私もうこれでよろしう御座いませう？」

と座から辷り下りて師匠の下座にと就いた。」

「蜀や！」

「はい……」

「そなたに話がある」

「はい……」

彼女は初め庵主が自分に對して妙なことをするのを、戯談のように思つてゐたけれども いつにない師匠の重々しい様子が不思議になつて、何を云ひ出すのかと默つて老尼の顔を見てゐた。暫く二人の間に重い沈默が續いたあと、やうやうに師の尼は話かけるのであつた。

「蜀や！ 改まつて聞くのではないけれども、つい昨日のように思つて居たが、そなたが此の寺に來てからもう何年になるだらうねえ？ 折にふれては世の中が戀しいとは思はないかえ？ そなたはあゝゆう風にして落飾をして此の寺に來はしたものゝ、一體どんな氣持ちがしましたかへ？ わたしなんかは子供の時からであるから、よくその氣持ちは解らないけれども、蜀や！ そなたの本當の心持ちを、僞らない處をけふはゆつくりしみ〲と落ち付いた氣分になつて話て見てはくれまいか！」

「御師匠樣！ 別段どうつて、斯うして御師匠樣も御優しいし、友達の尼樣等も皆親切なよい人ばかり、此所ならこそ斯うして何の煩ひもなく暮して居られるので御座いますもの。私喜んで居りますわ、御師匠樣！」

「それを聞くのではありません。若い女が一番大切にしてゐた飾を下ろすと惡いわるい氣持ちがするといふではないか？」

「あゝその事で御座いますか、それなら本當の事を申上ませう。其の當座は飾りを下ろしたが爲めに、その苦しみが何より辛う御座いました。心がちつとも落ち付きませんでした。そしてあてもなく人が戀しう御座いました。あれは煩惱

心を絶つ爲めのものではなくて、却つて煩惱心を強くするものではないかと思ひました。私でさへさうでしたもの、これがもしや思ふ人でもありましたなら、どんなでしたらう。十倍百倍にしてその人が戀しくなるに相違ありません。私はさう思ひました。自分はとにかく他人には例へどんな理由がありませうとも、女の黒髪を如何に頼まれたからとて自らは手を下すまいと誓ひました。第一これに刄物をあてるのが嫌になりました。そつと先を揃へてやるのも恐ろしいような氣が致します。もしやあの黒髪には女の生命が潜んでゐるのでは御座いますまいか。なぜか私は切らせる者よりも刄物を持つ人の手が怖ろしい氣がいたします。斯ういふ役目に廻り合せた人を憐れまずにはゐられませぬ。それは丁度死刑囚の首切役人と同じ不淨な役目だと思ひました。私はもう黒髪と云へば男の頭にも刄物をあてようとは思ひませぬ。どうしてこんな氣持ちになるので御座いませう。でもこんな恐ろしさと苦しさが私から去らうとはしないので御座いますもの。なぜで御座いませうねえ御師匠樣！」

彼女は自分の言葉の中にふと呼び醒まされた過去の痛ましい追憶のために暗い心持になつた。そしてこの尼寺の靜かな生活の間から得てゐた心の平安さへ何とはなしに呪はしいもののやうに思はれるのであつた。老尼はこの年若い尼の胸に崩した動搖を讀みとつたかのやうに、

「それはおまへ！　自然に逆らつてする事だからです。お前はこゝに斯うしてゐることが許されないのかもしれない」

老尼の返事は彼女の胸を刺した。でも彼女は強いて自分の心の動搖を押しかくすかのやうに、

「いゝえ御師匠樣！　私の申上る事を誤解あそばさないで下さいまし。私はここに來て初めて今迄にない安らひを見出したので御座いますから」

「それはさうでせうとも。此所は淸淨な地だもの、住み心地の惡い筈はない。だけども[illegible]や！　そなたは又世の中に出なければなりません」

「えゝつ？　それはまた何うしてゞ御座りますか御師匠様！　私はもう御側に置いて頂けないので御座いますか？」

「なんのおまへわたしが何う斯ういふのではありません。實はさつき御出になつた宮中からの御使ひ……」

「あゝあのお使者で御座いますか？　御師匠様、あれは本當の御使ひの人だつたので御座いますか？　私に何うやら御後姿を見覺えのあるように見上げましたが。ひよつとするともしや皇后様では在らつしやらなかつたかと。それにしても御供の人數もあまり少くそれに御微行でしかも御使者と僞つて何うして此寺へ？」

「そなたの見上げた通りの御方様であつたのだよ。嬰や！　上つ方でも御苦勞はあると見えてのう」

「それはもうある處では御座いませんわ、御師匠様！　私斯う申しては恐れ多う御座いますけど、あゝゆう所ほどねえ御師匠様、私もう御宮仕へはこり〳〵致して居ますの、」

「困りましたねえ、これから話さうと思つて居るのに」

「何をで御座りますか御師匠様」

「實はさつきの御方様が、そなたにもう一度是非御宮仕へをするようにしてくれいとこの尼にたつての仰せであつたのだが」

「えゝ私に又もう一度御宮仕へをさせよと仰せがあつたので御座いますか。それで御師匠様は何と御返事を遊ばしましたの？　勿論御受け遊ばしはしませんでしたらうねえ」

「それはもう一たん斯うして世を離れて先帝の御靈に御仕へ申してゐるもの、今更またの御奉公も可愛想だと思つて再三御辭退申上げたのですよ。他にいくらもお人もありさうなものだとも思つたりしてね。だけどもたつた一つ困つたことがあつて……」

「ひとつの困つた事つて何で御座います？」

「あの淑妃の事なのです。彼の人の爲めにはずゐ分お辛い事があるらしい、伺つて見れば御無理もない。わたしもほんにおいたはしうてなりませぬ。それであのお方様の仰るには、そこの處をうまく取りなしてくれる人は先づ囑より外にはあるまい。あの人なら今のお上の御氣質もよく知つてもゐやうし、又どんな事でも出來るに違ひないからと、この尼にたつての御頼み。御自身にあゝしてわざ〱御出頂いて折入つてのお話は、よつぽど御思案にあまつたものと見える」

「おゝあの不安な人達ばかりが寄り合つて居るところ、ほんに世の中に何がいやと申して妬み程こわい怖ろしいものは御座いませぬ。妬まるゝ身も悲しう御座いますれど妬みする身はなほの事、御師匠様！女は嫉妬をしつた時はもう我を忘れて地獄に墮ちて居りまする。顔にも胸にも黒血が流れて、それが音を立てゝ漲る、其時はもう惡鬼となつてゐるので御座います。思ひあまつて吐息をつけばあの小さい口から焔を吐かぬが不思議な位、あゝ思つてもいや〱。それから見れば今の身は何といふ仕合せで御座いませう。皆この御寺の中の人達は、清い優しい人ばつかり。斯ういふ中に護られて互ひに愛しあふなどと、こゝならこそで御座います御師匠様！」

「それはわたしにだつて大抵はわかつて居ります。だけでもあの御方様がおしのびであゝしてわざ〱御自身に御出頂いて何もかもこの尼へ打ち明けて御話遊ばした。それはよく〱の思召ならこそとおもへばおいとしうてなりません。是非にそなたをと御名指しになつたのだもの。おゝさう〱まだこんな事も仰せであつた。實は國王様は兼てそなたを御執心、それを今だにお忘れ遊ばさぬと見えて、折々の御宴の時など、御言葉の端々にそなたの名が出るらしい。それでなほ更あの御方様もさう思召たのであらう」

何氣なくいふ庵主の言葉に、ふと彼女に或思出と共に別の事が胸に浮んで來た。そしてそれが次から次へと果てしもなく思ひ續けられるのであつた。

「それにわたしはそなたの爲めにも本當の事を考へてやらねばならぬと思つたのだよ。さつきからも唯一人してこゝで

そのことばかりを思案してゐたのですよ。どうもそなたは一生この尼寺に安穩に送られる人ではないように考へられる實は今日もあの御方樣に一應は御斷りを申上げた時、これはまたあまり思ひがけもない事で、と申上げてはゐたものの、其實斯うしたことも或はありはしないかといふ氣持ちは何となしに疾くの前から豫想して居た事なのです。だから別に心から驚きもしませんでした。とう〳〵その來るべき時節が來たのです。そなたは何うしたつて此處に落ち付いて居たくも居られない人なのだもの。それが斯ういふ形で現れて來ようとはわたしも思ひがけなかつたのだけれどもね、ひよつとするとこれはそなた一人への特別の配在なのかもしれない。與へられる試錬の禍は、よしそれが自分の身にはつらいことであらうと忍ぶのが道といふものです。ここの處をよく考へてね嬰や！　そなたの幼い時からの樣々な上もない不幸な幸福、それが十人百人千人幾萬人の幸とならなければなりませんよ嬰や！」

彼女はさつきから外の事を考へてゐて、心が別の方向に行つてしまつてゐたものだから師匠の話も大方は耳に入つて居なかつた。師の尼が終りの方で力强く嬰や！　と自分の名を呼ばれたのではつとして我に歸つた「そなたの上もない不幸な幸福。それが十人百人千人幾萬人の幸とならなければ……」といふ處で彼女の思ひと老尼の言葉とがかつちりと結び合つてしまつた。それで何がなしに心が決してしまつて、

「それでは御師匠樣、私御受けをいたします」

と晴れ〴〵した顔で彼女は言つた。老尼はほつとして

「お丶やつと承知をしてくれましたかへ。それでわたしも安心しました。嬰や！　もう一度念を押しておくが、此度そなたの宮中にあがるのはつまり御方樣の思召故なのだからねえ。如才はあるまいがこの處を決して忘れるのではありませんよ、いゝかへ？」

「それはもう仰る迄も御座いません。私はきつと御方樣の御爲めになりますわ御師匠樣！」

「そなたがそのつもりで勤めて上げたなら、御方様も今よりはいくらかお仕合せになるであらう」

と云ひながら此の人の顔から樣子から默つて見てゐた老尼は、遂に何を見出したのか涙をはら〳〵と床に落したそして

「年をとつてからの別れといふものは、どんな遠い別れにならうもしれないからね。さう思ふとわたしは本當に淋しくなるのだよ」

と云つたけれどもこの庵主の尼には言葉の外に何か感ずるものがあつたに違ひないといふことは、後の後に思ひ當る節が澤山あつた。

□

大きな白銀の鏡はその兩緣の昇り龍降り龍の彫刻ばかりが鮮かに浮いて、秋はほのかに暮れてゆく。うす暗い狹霧の中から、禁園の花のかほりがそこはかとなく、何の花の匂ひともなしに漂ふのであつた。鏡の前に立つて、姿を寫して居られる皇后のみぐしの冠からは、色樣々な高貴な寶玉が垂れ下がり、それが皆柔らかな銀燭の光りを受けると一樣に、み空の星の煌きとなり、それが搖れる度毎に何か互ひに物を云ひかはしてゐるように微かな音を立てながら、邊りの人々の目を射るのであつた。皇后は思ひ出したように、

「燭の仕度はまだかしらん。誰ぞ彼女の部屋まで行つて見て來ておくれ」

侍女に云ひつけながら、なほ腕に懸くべき寶石の聯珠をあれかこれかと、侍女が捧げてゐる翡翠の筥の中から選ぶのであつた。

此宵綺瀾殿に年毎の嘉例なる重陽の宴を兼ねて盛大な祝宴を催されるのであつた。それは新羅のために高麗を伐ち、遂に平壤を下して凱旋して歸つた將軍李勣の爲めに開かれるといふのである。先年來新羅は高麗と百濟とに侵されて、援け

を唐に求めて來た。それで帝は幾度か新羅の爲めに戰つた。顯慶五年には程名振を遣はして高麗の兵を破り、後百濟又新羅を侵した故、蘇定方を遣つ之を平げ、今又李勣は大功を納めて、其國を分て九都督府とし、平壤に安東都護府を置いて、歸國したのであつた。

皇后はもう長い間斷うした折を待つてゐた。此宵こそ初めて嬰女を自分の側らに侍らせて、帝を驚かせようとの考へであつた。その幾月もの前からの計畫が、いよ〳〵今日こそと思ふにつけて、皇后は心も忽にそは〳〵と浮き立つ思ひに誘はれるのであつた。「いよ〳〵自分の命がけの戰ひは今日から初まるのだ。今まで隱忍に隱忍を重ねて來た年頃の恨！　くづをれきつたこの淑！　あゝ思へば久しい事であつた。でも今この嬰女をしてあの蕭淑妃から首尾よく帝を奪はしめるのだ」と樣々な想像やら怨みやら悦びやらが次々に湧いて來て、押へても押へ切れない物すごい微笑がその唇に上るのであつた。此宵は自らも出來るだけ美しう化粧に心を配つてゐる。斯うしてゐる間ももう胸がそのことで一杯なので、つひかくし切れないほゝ笑が又しても鏡の中を覗くのであつた。そこへ嬰女の姿が見えた。

「はい誠におそなはりまして御待たせ申上げました。只今はわざ〳〵御迎ひのお人をいたゞきまして誠に恐れ入りまして御座いまする」

いま召されて入つて來た彼女は、鏡の前をまだ離れきらぬ皇后の立姿に、後影ながら敬ひの形を少しも崩さず、慇懃に申しのべるのであつた。彼女の聲と共に振りかへつた皇后は笑ましげに彼女の化粧の出來榮えをとみかうみしながら、

「いゝえまだそんなに遲くはないのだよ。時間は余程早いのだけれども、そなたの身じまひがどんな風に出來たかと、それが氣になつて早く見度かつたものだから。今日は出來るだけ美しうして見せておくれと、わたしが頼んだからねえどれ！　もう少しそちらを向いてお見せー」

彼女は俯せのまゝに立つて後を向いて見せると、

「おゝ髪もよく上つたし、それにまあ大層似合ふこと！」
他の侍女達も皆目を見張つて今更ながら彼女の美しさに見とれるのであつた。その翠翹金雀の髪飾の下から稀にも見られぬ活々とした美しい額、眉、目、鼻、口と見上げ見下ろしてそのどこかに備はる此人の力ある威敬に打たれたように並居る人々はみな沈黙してゐた。皇后は何か思ひ付いたように、
「さう〳〵他にもつと似合の着物が、そうだ、彼品が丁度よからう。誰か呉服所の係りの者をお呼び」
「はい、何ぞ御用で」
といふ聲の下に年老いた女がそこに平伏してゐた。
「おまへ、御苦労だけれども、先日蜀の國から献上した錦の着物を覺えてゐるだらう？　彼品を出して來ておくれ」
「あの見事な蜀江の錦で作られた召物の事で御座りまするか？」
「あゝさうだよ。彼品ならきつと嬰に着せたら良く似合ふであらうから」
嬰にきせたら似合ふであらう、と聞いて、老女はいさゝか驚いた。
「御言葉では御座りまするが、彼品は特別もつて織られた高貴な御品だとやら申すことで、御方様と淑妃殿とたゞこのお二人様だけの召料にとゝのへられた結構な御物とか承りまして御座りまする。それに……」
それに此の女、しかも歸り新参の者などに、何だつておやり遊ばすか、とは流石に老女は口に出してまでは云はなかつたけれども、その心は表に現れて何となく躊躇うと見てとつた皇后は、
「何をぐづ〳〵してゐるのだえ。わたしの命令ではないか」
ちよつと劔を含んだ言葉に老女は一堪りもなく恐れ入つて、
「はい……はい……只今……」

と云ひ捨てゝあたふたと立ち去つた。彼女はこの呉服所の老女の軽き嫉妬に似た。又はひとを見下げた風な様子を見逃がさなかつた。何事も彼女にとつてはこれからといふ今の身に、僅この年寄一人でも軽々しく無視するわけには行かなかつた。下手に出て睦み親しむか、または上手から出て怖れに依つて威壓させてしまふか二つにひとつだと考へた。こんな呉服所の老女位が氣になるようでは仕方がない。斯うした人は先づ己れ下手から出る方が近道だと咄嗟の間に考へ定めた。

そこへいまの老女が重さうに抱へてくる包みを見るなり彼女は驅けよつて手を持ち添へながら老女の勞を助けようとするのであつた。皇后は見てあわてゝそれを押し止めた。

「嬰や！　そなたは今日は立ち働きをしてはなりませぬ。折角美しう出來上つたのに化粧くづれがするではないか」

「仰せでは御座りまするが、年寄に重いものを持たせましてはすみませぬ。特にこれが私の爲めと御座りましては、猶更どうもすまぬやうな心地がいたしましたので」

と親しげに老女の顔を見て笑ひかけたとき、年寄りのかたくなの心は脆くも折れて、老女はもう心の底から嬰女は若いに似ぬ、心掛けの優しい人だと思ひ込んでしまつた。そしてこんな美しい女性をたつた今さつき自分等と同じ朋輩衆のように思つたのが惡かつたといふ氣がして來た。そして眞實いまこの嬰女に賜つた蜀江の錦の御衣を纏はせて、出來るだけ美しう飾らせ、けふを晴れの御宴の席に供奉させる事が、自分にも嬉しいような氣がして來た。

「ほんに左様で御座いますとも、嬰さんや！　御方様の思召で御座いますぞえ。有難うこの召物を拜領して、きれいになつて、今宵はあの萬座の人々を驚かせておやりなさいませ。おゝさう／＼それよりも淑妃の方の侍女達が瞼をつぶして羨ましがるその顔がこの婆も見てやり度う御座います」

と老女がつひ調子に乗つて、大勢の若い女達も居並んでゐる中を、別けて皇后様の御前だといふこともつひ忘れて、端たない口のきゝようを皇后は流石にそれとしづかに追ひしりぞけて話をそらすのであつた。

「嬖や！　構はないから、私の目の前でそれを着て御らん」

皇后の命に依つて側の侍女達は彼女の着かへを手傳ひ、取り分けて親切な老女は念入りに彼女の後に廻り前に廻りして衣紋を直してやるのであつた。高貴な蜀江の錦は其の人を得ていよ〳〵榮えまさつた。仕度が出來上つて、

「おゝまあ御美しい」

第一に感歎の聲を上げた者は、彼の呉服所の老女であつた。皇后はなほその上にもあれかこれかと小さい處にまで氣を配りながら、身じまひの全く出來上つた彼女の姿を又更にしみ〴〵と見なほした。ふと淑妃とこの人と比べて見たらどちらが美しからうと邊の人々にも問ふて見度い氣がして、皇后は言葉まで出さうになつたのをさすがにそれとは云ひ得なかつた。そして獨りでそつと胸の中で敵に帝の寵愛を獨占させて置くよりは、せめて身方の者へ迄なりと、それを取り戻す事が出來さへしたら、それだけでも既に〳〵大きな悦びだと思つたりした。

凱旋の將軍李勣は部下の重なる將士と共に今宵第一の賓客として、帝王の御招きを受けるの光榮を忝なうした。それ等を初め陪席を許された數多の人々も歡樂の醉は早半廻つて居た。宴は先づ文武の樂たる七徳九功の舞を以つて初まり、管絃の樂が中に一きわ傑れて聲の美しい樂人に依つて歌ひ初められた。その曲もやがて終りに近い頃、皇后は嬖女を初め、今宵は分けて美しう飾らせた。數人の侍女を從へて現れ、帝の隣りに玉座を並べて席に就いた。いつもならば淑妃の出て居る席には成るべく出まいとする皇后が今宵に限り身繕ひさへ晴れやかに、供に從ふ次々までが、いつもとは違つて生々としてゐる樣子が帝を始め常々の事を知つてゐる人々にとつては物珍らしかつた。これには何か皇后に趣向があるのだなと頷きながら淑妃との間に挾まれた帝は機嫌よく盃を重ねるのであつた。

大勢の中にあつては誰が誰やらわからぬ。まして彼女の美しさを一度は皆にはつきりと見せて置かねばならず、第一には帝への初見參を最も美しく引立たゝしめねばたらぬ。こんなことこそが長い間皇后の頭を惱ましてゐた事柄であつた。

そして結句彼女をして舞はせるに限ると思つて居た皇后は兼て云ひつけてあつた通りに、今の曲が終ると、秋風樂を彼女に舞はせた。曾ては馴れない女が立つて舞ふので、皆は物珍らしさに驚きながら見てゐたが、やがてその振舞の麗はしさそのみめの美しさに、宴に列る百官卿相等はどよめき渡るのであつた。分けて皇后は帝の樣子を初めからそれとなしにちつと氣をつけて見てゐた。帝は最初舞妓の女を誰ぞ見覺えのあるような、つい思出せぬといふ風に、幾度か首を傾けなどしてゐられたがやがて、

「うんそうだ、あの女だ、併し……」

と獨り口の中に呟きながら側の皇后に對つてその舞妓の女を指さしながら、

「彼女は武の嬰ではないかへ？」

この問ひに皇后は胸を躍らしながらさりげなく、

「はい、左樣で御座います」

「でも武嬰はたしか尼寺に入つて居た筈ぢやつたのに」

「はい尼寺に入つて居りましたのを、私が庵主から貰ひうけましたので」

「何？　庵主から貰ひ受けた？　うん、そして今そちの侍女にしたのか？」

「はい、只今私の手許に召使つて居ますので御座います、御上」

「ふうむ」

帝はこれ等の話の間も舞樂の方から少しも目を離さなかつた。淑妃がもう空になつた帝の御盃に酒を滿さうとして、帝に寄り添ひながら手にとつた瓶子にも心付かず、顧もしなかつた。此時皇后の口許には微かな嘲笑が浮んでゐた。でらされて遣り場を失つた瓶子を抱へたまゝ暫らくもて餘してゐた淑妃のこの時の樣子、一瞬間のその束の間の此の極く小

さい出來事でも、皇后にとつてはさつき嬰女に與へた世にも尊い錦の衣裳など物の數とも思へない程高價なものであつた。

舞伎が終ると帝自ら嬰女に御盃を賜るとあつて、彼女を召したので、近侍の童子が嬰女の側に來て宣旨を傳へたけれども、彼女は直ちに立つて來さうな樣子が無かつた。帝は又第二の童子を使はした。それでも遙か彼方に見える嬰女の體は動かうとしなかつた。帝は皇后に、

「あの女を招んでくれまいか、盃をとらせたいのだから」

直ちに侍女が皇后の旨を傳へに彼女の側に近寄ると、その美しい人は立つて此方へと靜かに歩みを運んで來るのであつた。これを見た帝は笑ひながら、

「ほう、そちは偉い者ぢやのう、この唐の國王の言葉よりも、そちの言葉の方が重いとは、大した威勢ぢやわ、あはゝゝゝゝ」

高聲に笑ひながら、帝が戲談まじりに物優しく話かけられたのは、皇后にとつては珍らしい事であつた。皇后は此宵幾年振りかで斯うした打ち解けた帝を見るにつけ、胸も躍る程の悦びに滿されるのであつた。そして彼女をどんなに可愛がつてやつても良いといふ思ひがするまでに皇后は勞はるように、

「嬰や！ お上がそなたに御盃を下されるのぢや、有難うお受けをおしや！」

帝手づからの御盃を彼女は敬々しく謹んで御受けをした。帝はます〳〵機嫌よく、

「嬰！ 久し振りぢやのう、此宵斯うしてそちに會うとは思ひがけなかつた。實に珍らしい事ぢやのう。そちの無事な樣子を見てわしも滿足に思ふぞ」

彼女はつゝましく平伏した。帝は側に居る李勣を顧て、

「斯うした目出度い凱旋の悦びに加へて、今日は又珍らしい人の昔よりなほ美しい姿を見た。李勣！　これもそちの戦勝の功名の中に加へようぞ」

思はぬ喜びに満されて帝は、つひあるまじき軽口さへ漏された。武骨者の李勣が何と御答へのしようもなくてたゞ「はつ〳〵」と恐れ入つてゐる様子の笑しさに、皇后もつひ声立てゝ笑ふのであつた。

「いや、今日は実によい日ぢや、皆も遠慮なく寛いで心から祝つてくれ」

御機嫌のよい帝の言葉に宴はいよ〳〵華かに晴れ〳〵しくなつた。嬉しさうな帝が彼女に、

「こりや、そちのその盃をそのまゝ返してくれ！」

「次の者が口つけましたものを、このまゝ返上致しまするは、あまりに恐れ多い事で御座りまする。この御盃は有難う嬰が頂戴いたしまする」

とさつさとその御盃を懐中してしまつた。そして近侍の人々に新なる御盃をと目配せをすると、心得て直ちに代りのを持つてくる。彼女がそれを受けとつて恭々しく帝に捧げた。そして帝はしかたなくその新なのを受けて盃を上げられるのであつた。斯うした中にも猶幾度か帝は彼女に打ち解けようとされても、彼女はそれに同ずる様子は少しもなかつた。臣下の身として分に過ぎた御様子だからとて帝のこのお親しみを彼女はたいして有難さうにもしなかつた。たゞ一点の落度を見せぬ行儀作法が寧ろ帝をして窮屈がらせ、軽い圧迫をさへ感じさせるのであつた。斯ういふ中にも時折彼女が淑妃の方へ投げる流し目によつて、「嬰女が其實淑妃の嫉妬を怖れてゐるのだな」と見てとつた帝は淑妃をこの席に置かないが良いとさへ思はれたけれども差當つて何ともしようが無かつた。帝はしかたなしに皇后に話すようにして彼女への話をするのであつた。

「あゝさう〳〵思ひ出した。まだ先帝御在世の頃、桃李園の御遊に柳華苑を舞つたのはさうだ、嬰！　たしかそちであ

つたね？」

「左様で御座いました」

帝は皇后に對つて甘へるような口調で、

「どうだらう嬰に柳華苑を舞はせてはくれまいか」

その時さつきから默つてゐたしんねり者の淑妃は、今日ばかりは帝がいつもと違つて初めから自分といふものゝ存在を全く眼中に置かれず、この新しく來た嬰女と皇后とハ間にばかり會話を交されるのが流石に妬ましく、座に堪へ兼ねて初めて口を開らいた。

「御上、柳華苑は春の歌で御座います」

例のおとなしさうなねちくした小さい聲で云つた。此宵この月見を兼ねた御宴にはふさはしう御座いますまいとは、言葉に出さなくとも、いつもの帝なら後はそれぞと悟られる筈である。まして皇后の前だと殊更に淑妃のいふ事であつたら何でもよく賛成したものなのに、帝は、

「まあそちは默つて居い、そちの知つたことではないわ、わしは皇后に所望してゐるのぢや。喃！　これ」

と又彼女の顔を覗き込むようにして、

「柳華苑は春の調だけれども、あの時の思出がなつかしいから」

と意味ありげに彼女を見やつた。けれども彼女はあの事はもう疾の昔に何もかもみんな忘れてしまひました、といふ風にとぼけて帝の射透すような目をはずしながらついと横を向いてしまつた。

（以外次號につゞく）



杢兵衛の立往生（童話）

上司小劍

一

長吉は杢兵衛と久しく散步の約束をしてゐた。長吉も杢兵衛も散步が好きであつた。しかし二人とも忙しい身體なので、ともに散步するといふ機會はなか〱來なかつた。

それは十二月も末の末の、もう二つ寢たらお正月といふ日の午後、長吉は漸く閑を得たので、杢兵衛を散步に誘つた。杢兵衛はすぐ賛成して、師走の冷たい空氣の中へ、外套も着ない二人が、威勢よく飛び出した。長吉は帽子を冠つてゐるが、杢兵衛のオールバックの頭には帽子がない。袷せに袷せ羽織の輕裝、足には桐の薩摩下駄。

家を出ると、杢兵衛の娘が追つかけて來て、『パパさん、一緒に連れてッ下ちやい。』とせがむ。娘と言つてもまだ四つ、血氣の男の散步の連れにはならない。『駄目です、綾子さんは。今日は駄目です。』と、杢兵衛は娘をすかして追ひかへすのに苦

勞してゐる。娘はどうしてもきかない。たうたうママさんが家から驅け出して來て、泣きわめく娘を引つかゝへて連れ込んだので、漸くこの場の杢兵衛子別れの段了る。杢兵衛はほつとした顔。

それから、四五丁、郊外の野路を行くうちにも、杢兵衛のもく〳〵とした顔には、阿母さんに抱きかゝへられて行つた娘の悲鳴が耳についてゐるらしく、氣のりのしない色が、あり〳〵と現はれてゐた。

『どこへ行かうか。』と、長吉はこの邊の地理に明るい杢兵衛に問ふた。

『どこへでも。』と、杢兵衛は氣のない返辭をした。おれはこの邊の地理に明るいぞ、といふことを、鼻のさきにぶらさげないではゐられなかつた。さうして、世田ケ谷の原がよからうと、獨りできめた。

赭土の野原の端に、馬の蹄の痕を見るところまで行つた。それが世田ケ谷の原であつた。足痕ばかりで、馬も人も居なかつた。鳥も犬もゐない。生きてゐるものとては、長吉と杢兵衛と、二人きりであつた。風はなくとも、空氣の冷たさが、ひし〳〵と肌を刺す。

『冬としては珍らしく、散歩にいゝ日だよ、今日はね。』と、杢兵衛は負け惜しみらしくもなく言つた。日はあか〳〵と西の空に傾いて、暖かい光を惜し氣もなく投げかけてくれるのだが、どうも其の力が弱くて、ともすれば、『おゝう、寒。』と言ひたくなる。

こんもりと、なだらかな丘に包まれた其の廣い原のまん中へ、二人は赭土のねば〳〵したのを、おびたゞしく下駄の裏にくつ付けて歩いて行つた。散歩好きの杢兵衛は、やうやく、耳の底に殘つてゐた娘の泣き聲も忘れて、重くなつた下駄も輕々と、興に乘つて、勢ひよく歩いた。

原を突ききると、杉の木立のあなたに村が見えて、藁葺きの家の緣側に、お婆アさんが、日なたぼつこをしながら、針仕事をしてゐた。細いながらも、固く滑らかな道が南から北へ通じて、明るい、暖かい、いつも春のやうないゝ村であつ

た。家は藁葺きに瓦葺がまじつて、どれもこれも、靜かに平和に、さうして樂し氣に、雞と犬と子供とが、一緒になつて遊んでゐた。

この明るい村を、ぐるりと一と廻りした頃には、もう太陽が、西の森に沈みかけて、遠く富士の山が、白い姿を、枯野のあなたに現はしてゐた。それにつゞく、足柄や秩父の連山も、くつきりと鮮かに、蒼空の下に輝いて見えた。

この日の散歩も、もうこれかぎりであつた。いくら歩いても歩き足らぬ長吉と李兵衛とであるけれど、日が暮れてはたまらなかつた。またこの次ぎのいゝ天氣の日に、といふ約束をして、二人はおの〳〵の家への路を右と左とに別れた。別れてから、長吉はまた一丁ばかり李兵衛の後を追ふて、

『君、この次ぎの散歩には、一つあの散歩ぎらひの順作を誘はうぢやないか。そして、いやだと言つても無理に引つ張り出すんだね。』と、熱心に說き立てるやうに言つた。

『よからう、面白いね。』と、李兵衛は、一も二もなく贊成した。

二

次ぎの散歩は、一月の末の雪の降つた翌日であつた。矢張り長吉の方から、李兵衛を誘ひ出しに行つた。朝の九時頃。李兵衛はまだ寢てゐた。揺り起されて眼をさましたのだが、散歩と聞くと、忽ちハツキリ正氣づいた。この日も寒い日で、先頃の散歩の時よりは、またズツと空氣が冷たかつた。晴れてはゐても、冬の空のどんよりと、天へ薄絹を張つたやうで、輝く太陽も其のまゝ凍りついて動かなくなるのではあるまいかと思はるゝほどであつた。

この日も娘の綾ちやんが後を追はうとするので、李兵衛はそれを避けるのに困つてゐたが、きてんのきいたママさんが、

『それ地震だ。』と不意に叫んだので、綾ちやんは忽ち顏の色を變へて、ママさんの背中にしがみ付いた。いつかの大地震

の時も、綾ちやんはかうやつて、あの世田ケ谷の原まで逃げたのだ。綾ちやんがママさんに負んぶされて、裏口から逃げ出した際に、杢兵衛は表から、長吉と丶もに家を出た。『は丶丶丶。』と笑つた杢兵衛の口からは、白い息が烟りのやうに、冷たい空氣の中へ舞ひ込んだ。今日は杢兵衛も綾ちやんを振り棄て丶出たことを、さほど氣にもしてゐなかつた。

たゞ困つたのは、杢兵衛の足もとであつた。前の日に二寸ばかり積つた雪が、あらかた解けて、道がだいぶわるかつた。ところによるとカラカラに乾いた土も見えるが、どうかすると、泥田のやうな中を、蹈んで行かねばならなかつた。長吉は日和下駄を穿いてゐた。時々爪革の先きで泥を掬ひ上げるやうなこともあるが、まあ〱どうにか歩けた。杢兵衛の足には、ママさんの高足駄がある。まだ新らしいのだけれど、何分にも女物で、新らしいだけに鼻緒が固いから、わり合ひに大きな杢兵衛の足は半分たらずも下駄から食み出して、痛い〱と顔をしかめてゐる。綾ちやんをおんぶして逃げ出すとき、ママさんが杢兵衛の足駄をまちがへて穿いたのであつた。さうして杢兵衛の足にはママさんの青い爪革のが引つかけられた。

『痛い、痛い。足が痛い。』と、杢兵衛は二三丁と行かぬうちに、泣き聲を出した。八丁ばかりある順作の家まで、杢兵衛をば引つ立てるやうにして、長吉は漸くほつとしながら辿り着いた。丁度十時半であつたが、朝寢坊の順は、起きたばかりで、まだ朝飯も食べてゐなかつた。

『君、今日は散歩するんだ。一緒に行きたまへ。』と、杢兵衛は座敷へ上り込むなり、命令するやうに言つた。小さい足駄さへ脱いでしまへば、いつもの通り元氣な杢兵衛で、大きな聲で、いろ〱のことをよく喋舌り立てた。

『さア、行かう。今日はどんなことがあつても、君を連れ出すつもりで來たんだ。』と、長吉が傍から口を添へた。散歩は嫌ひであるが、しかし、人附き合ひのよい、おとなしい順作は、『いやだ、僕はいやだ。止さう。』とも言ひ得ないで、素なほに、『行かう。』と頷づいて、長い顎を撫でた。

『それぢや出かけよう。』と、氣の早い長吉の立ちかゝるのを、『まア待ちたまへ。』と押しとゞめて、順作はゆつくり支度を始めた。どてらを棄て寢衣を脱いで、ワイシヤツからそろ〳〵洋服姿になるのである。長吉が待ちどほしさうな顏をするのを、李兵衛が慰め顏に、『なに君、洋服は四分間で着られるよ。』と言つて、ヅボンを穿いてゐる順作の方をじろ〳〵見てゐた。モーニングコートを着込み、オーヴアーを引つかけて、順作は立派な紳士になりすました。散歩にモーニングもをかしいけれど、彼れの洋服はこれ一着であつた。

いざ出ようとなると、困つたのはまた李兵衛の足もとであつた。『痛い痛い、足が痛い。』と李兵衛はまだ其の小さい女物の足駄を穿かぬさきから、見たゞけでさう言つた。

『君、尻をまくつて、ゴムの長靴を穿きたまへ、僕のがもう一足あるよ。』と、順作はニコ〳〵して泥だらけの長靴に足を突ツ込みながら言つた。『いやヤ。』と李兵衛は頭をかいて、『長靴は重くて仕やうがない。足駄を貸したまへ、足駄を。君のがあるだらう。』と、李兵衛はキヨロ〳〵土間を見廻した。そこには李兵衛の穿いて來た女物の足駄に並んで、今一足、矢張り女物の、紫の爪革をかけた足駄があるばかりだつた。

『さうか。それぢや僕のを貸さう。』と言ひ〳〵、順作が長靴の足をドタ〳〵と運んで、隅の下駄箱から大事さうに取り出したのは、茶色の爪革のかゝつた男物の足駄で、まだ新らしさうなのが、きれいに洗つて乾かしたばかりといふ色をしてゐた。

『いや、有りがたう。これさへあれば、十里ぐらゐ歩けるよ。』と、李兵衛は嬉しさうにして、モーニングコートの紳士が揃へてくれたのを、ちやんと穿いて歩き出した。長吉は飛白の着物に飛白の羽織、黒いソフトを冠り、李兵衛は縞の着物に縞の羽織、コールテンの足袋で、帽子はいつもの通り冠つてゐない。それにモーニング高帽の順作が、オーヴアーにくるまつて加はつた一行の形は何んとも知れぬ妙なものであつた。

三

五六丁行つて、一ときはひどい泥路へ差しかゝつた時、『あゝツ、しまつた。』といふ李兵衛のとんきやうな聲がした。彼れの借りた足駄は、右の方の後歯が半分に割れて、臺から抜けてしまつたのであつた。順作は自分の持ち物がこはれたので、苦い顔をした。李兵衛は、『大丈夫だよ。』と言ひ〳〵、泥の中に落ちた下駄の歯の片われを、指先きに摘まんで拾ひ上げ、ぐつと固く締まるやうに、白紙を挾んで元の臺へ箝め、道端の石地藏の側まで、チンチンモガモガをして行つて、地藏の頭にコツ〳〵と箝めた歯を叩いて、うまく箝まつたのを喜びながら、ちやんと右の足に穿いて、泥によごれた手を、石地藏の頭でこすり落した。雜草の上に殘つてゐた雪を、地藏の顔へ白粉のやうに塗り付け、それによごれた手をこすり付けると、雪が解けて、自然に手が洗へた。其の代り地藏は頭も顔も泥だらけになつた。

『罰があたるぞ、地藏さまの。』と、順作はおどかす風に言つた。

『なアに、地藏さまはおとなしいから罰なんかあてやしない。大丈夫だ。』と言ひ〳〵、李兵衛は、泥を塗られて滑稽になつた地藏の顔を見てゐた。

『おれの面へ泥を塗つた、と言つて、今夜君のところへ、この地藏がおこつてくるよ。』と、長吉が笑つた。ぼつ〳〵歩き出しながら、

『地藏と閻魔と、どつちが強いだらうか。』と、李兵衛はをかしなことを言つた。

『地藏と閻魔とでは角力にならない。平和と戰爭と、慈悲と腕力とのやうなものだ。地藏が出て來れや、青鬼も赤鬼も皆逃げる。閻魔だつて、地藏にはどうしたつて敵はないんだ。』と、長吉は講釋でもするやうに言つた。

『其のえらい地藏が、おれには敵はないんだな。下駄で頭をなぐられたり、顔へ泥を塗られたり。』と、小氣味よさゝうに

言つて、李兵衛が大口開いて笑つたとたん、左の足をくねらして、足駄の鼻緒がプツリと切れた。

『そうら、地藏さまの罰があたつた。』と、長吉は囃し立てるやうに言つて、手をたゝいた。自分の足駄が、李兵衛の足でさん〳〵に痛められるので、順作はいよ〳〵苦い顔をして、『だから言はないことぢやない。長靴を穿け、と言つたぢやないか。』と、怒るやうな口振りになつた。

爪革を力に、李兵衛が足を引き摺りつゝ、漸く大きな池のところまで、二人に扶けられて辿りついた時は、爪革がパク〳〵口をあけて、足駄が脫げさうになつてゐた。池の端の茶店の寂しく人もゐないところへ入つて、漸く出て來たおかみさんに麻緒をもらひ、李兵衛は、昔デエ〳〵屋をやつたことがありさうだ、なぞと冷かされながら、巧みな手つきで鼻緒を立て、『もう大丈夫だ。』と、元氣よく言ひながら穿いてみて、固い土間を強く蹈み立てた。さうして、『こゝには地藏はゐないかなア。』と戯れつゝ、泥だらけの手を、おかみさんの汲んでくれたバケツの水に洗つて、『さア、矢でも鐵砲でも持つて來い。』と叫んで歩き出した。右の方の缺けた齒に挾んだ白い紙が、後から雪のやうにチラ〳〵と見えてゐた。

『今度は、右の方の、さつき缺けたやつの鼻緒が切れやしないか。』と、長吉が後から氣づかふのを、李兵衛は嘲笑ふやうに受けて、『一日に兩方の鼻緒が切れるといふことは、決してない。これが僕の哲學だ。』と、大きな聲で言つた。

それから、二里ばかり雪解けの田舍路が先づ無事に歩けた。高足駄と日和下駄との二人が、どこまで行つても元氣のよいのに引きかへ、ゴムの長靴の一人はひどく弱つて、肩で息をしてゐた。大きな九つの佛像が金色に、暗い堂の中で光つてゐる寺まで行つた時は、順作がもう倒れさうであつた。しかし、倒れたのは順作でなくて、李兵衛であつた。李兵衛は何やら喋舌りながら、堂の前の石段を下りやうとして危まれてゐた右の方の足駄の鼻緒を蹈み切り、勢ひあまつて、づでんだうと轉がり落ちた。一日に兩方の鼻緒が切れるといふことは決してない、と言つた彼の哲學は破れて、彼れはぼこ〳〵と霜解けのした土に塗れつゝ、むく〳〵起き上つて、『あはゝゝゝゝ。』と笑つた。足駄は鼻緒が切れたばかりでなく、

前齒が摧けて、臺の顎まで缺いてしまつてゐた。もうどうにも應急修理の途がない。

　李兵衛は、折よく落ちてゐた縄ぎれを拾ひ取つて、こはれた足駄をぐる〳〵巻きに足へ縛りつけた。まるで藁沓でも穿いたやうな恰好になつた。『大丈夫だ。矢でも鐵砲でも持つて來い。』と叫んで、彼れは矢張り三人の先頭に立つた。

『順作君、あの足駄は、ぜんたい、いつ買つたんだい。』と、長吉は試みに、順作に問ふてみた。見たところ新らしさうだが、餘りに脆いのを怪しんだのである。

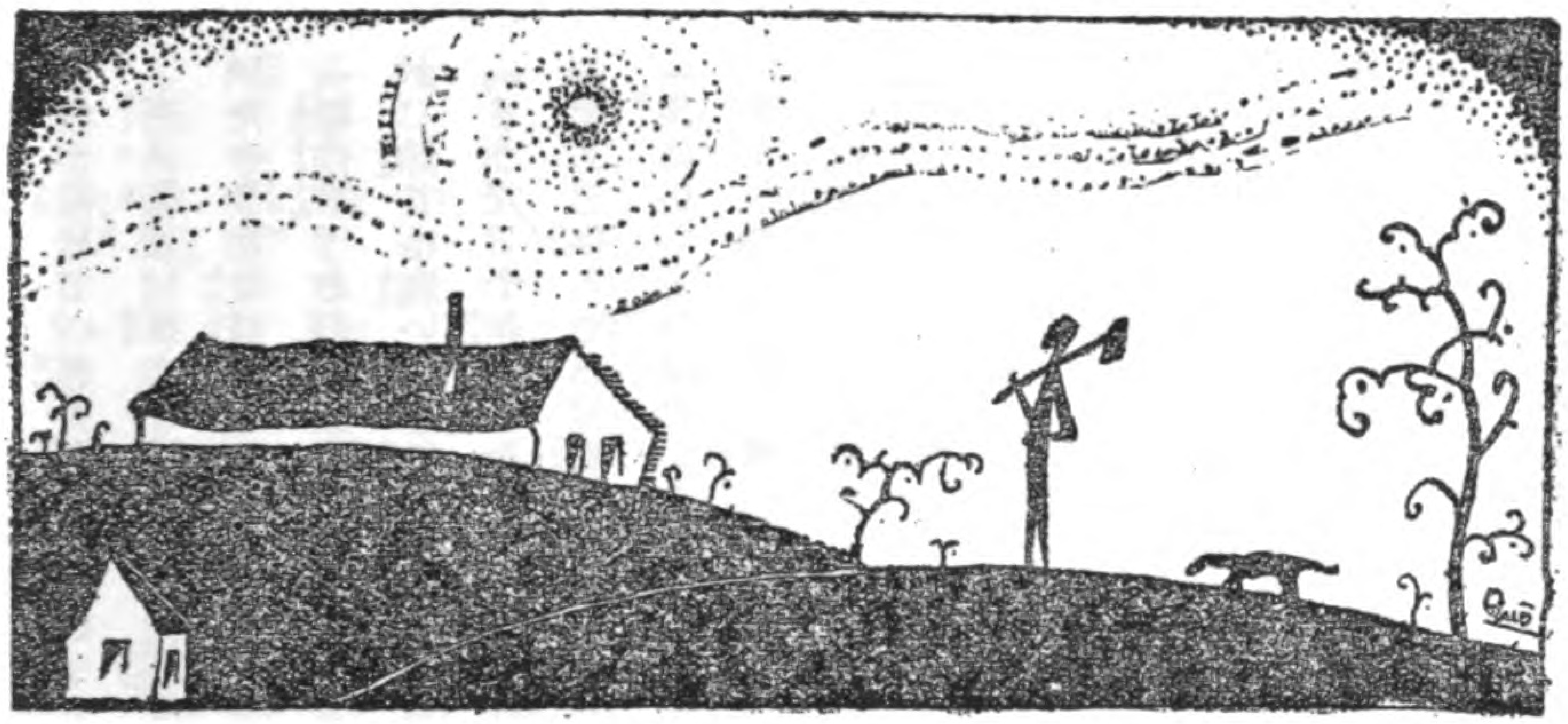
『さうだ。十年ぐらゐのもんだらう。いや十二三年になるかなア。』と、順作は平氣で答へた。

『十二三年？』と、長吉は目を圓くして驚いた。

『僕はいつも洋服だからね。足駄はたゞ雨降りに錢湯へ行く時穿くばかりだ。一生に一足で十分なんだ。李兵衛に貸さなけやよかつた。』と、順作は殘念さうにしながら、李兵衛の足もとを見つめた。

　其の時、李兵衛はまた、左の方の横鼻緒を兩方踏み切つた上、齒をへし折つて、泥の中に立ち往生をしてゐた。

（をはり）

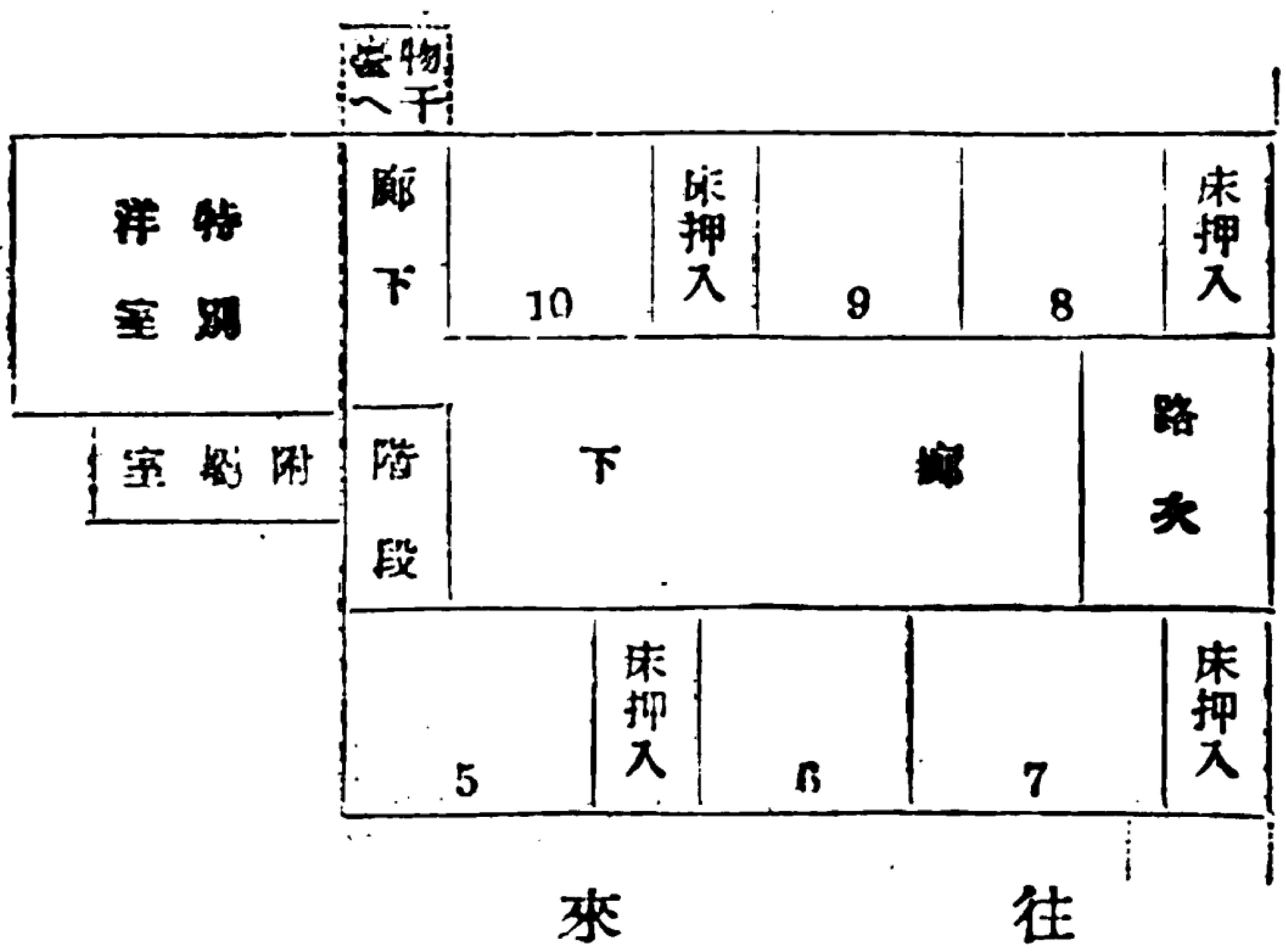


出世五人男（長篇小説）

宇野浩二

赤木阿珂丸が三年越しに住んでゐるところの、蓬萊館の二階の各部屋と廊下との構造は、これ亦一種風變りなものであつた。それはこの下宿屋の何代か前の主人が、少しでも間數を多くしようとして、と言つて地上の建坪を增やす譯に行かなかつたので、一階の屋根の上、卽ち二階で無理して間數を增やしたことから起つたものに違ひなかつた。一般の宿屋や下宿屋の型通り、こゝでも下の玄關からすぐに二階への階段が始まつてゐたが、何でも以前はこの階段が途中で右に折れて附いてゐたか、或は最初から今のとは向きが違つて、玄關からすると、直角に右に曲つて上つて行くやうな方向かに附いてゐたものらしかつた、だから、階段を上り切ると、直右側（卽ち往來に面した側）に一間と、同じ側のその次に一間と、それから階段を上つた廊下の突當りに一間と、多分三間ぐらゐしか持たなかつた二階に違ひなかつた、そして一階の屋根の上の殘りの部分には物干臺でもが附いてゐたものであつたらうか。それが、今は階段が玄關から一直線に上り切るやうになつてゐて、以前それが右向きであつた時に、そこから廊下に依つて、突當りになつてゐた部屋を、廊

下と共にすつかり犠牲にしてしまつて、その右側の往來に面してゐた部屋を、二間であつたのを三間に延長したものらしかつた、もつとも、その延長した一間といふのは、その半分を、隣家の床屋との間の、路次の入口に橋渡しにして載せたものである。そして先の犠牲にした部屋の幅だけを廊下、といふよりは空地（空床といつた方が一層適當であらうか、）として殘して、兎に角その尨大な廊下を挾んで、左手の、即ち裏側に面した方に新しく三箇の部屋を建て増したものである。その三箇のうちの一番端の部屋の半分は、先の例にならつて矢張り隣の路次の上に橋渡しになつてゐた。更にその設計者の擴張慾は、階段の右手の、例の途方もない空地のやうな廊下の外に、それを上り切つたところから、更に一直線に



一間幅の廊下を、裏側から物干臺（最早やどんなに工夫しても、二階の屋根にはそれをつける餘裕がなかつたので、それを二階の屋根にこしらへた、それがどういふつもりだか、馬鹿に大きな堂々たるものであつた。そこへは二階から更に鐵製梯子で上つて行くやうになつてゐるのである。）へ出る爲につけて、驚くべきことには、その廊下の左側に、長さ四疊敷ほどの日本間を持つた、五坪程の西洋間をこしらへたものである。それに無論蓬萊館自身の屋根の上ではなく、隣家の疊屋の仕事場の屋根の上に當つてゐた。

階下は玄關のすぐ隣が第一號になつてゐて、合して四間あつた。阿珂丸は初こゝに引越して來た半年ばかりの間、外に都合のいゝ部屋がなくて、その玄關脇の一號の部屋にゐたのであるが、後に變つて、二階の、往來に面した側の一番端の、七號の部屋に越して行つたのである。それから二年半。彼のやうに故郷らしい故郷を持たず、早く幼年の頃に親の家の解散に會つて、眞に自分の家

といふものゝ味を知らないからであらうか、どんな忙しい町の、どんな住み心地悪い下宿屋の一間にでも、越して行つた瞬間から忽ち先祖傳來の巣のやうな親しみを感じる者にとつては、二年半も、同じところに動かずに住んでゐたといふことは、その記憶だけでも堪え難い負擔と退屈であつたやうな氣がした。

私はこの小說の初で、赤木阿珂丸の生涯をだんだら染に譬へて、彼は學校が變るとか、住居が變るとか、境遇が變るとかするのを區劃にして、無口な、音無しい行狀だつた次には饒舌の不良少年めいた傾向に移り、おつちよこちよいの浮海者らしく振舞つてゐた次の時代には、厭に落着いた、君子人らしい態度になるといふ、妙な癖があることを指摘しておいたが、その例をこゝで窮めると、今彼は入井時代の、厭に陰氣で、猫を被つたやうな、音無し者に見えたのとは變つて、この蓬萊館時代には、殊更に陽氣を裝つたやうな、何處か苦勞人らしさを持つた洒落味を附けて、出來るだけ輕快に振舞つてゐた。斷つておくが、このだんだら染といふのは、作者である私が考へた名稱ではなくて、阿珂丸自身が常に自分のことを譬へてさう言つてゐたのである。現に彼はこの蓬萊館時代に斯ういふことをよく言つてゐた「君、だんだら染は僕ばかしぢやないよ。唯、僕のは外の人たちより少し規則的なだけで、誰の生涯だつて多少はこのだんだら染の理屈に當てはまると思ふがね。君だつて、考へて見給へ、屹度幾分はそんな傾向を見出せるに違ひない。何と言つたつて、四十年とか五十年とかいふ長い生涯だもの、誰がさう一本調子に暮せるものか、虫だつて、毛虫になつたり、蝶に變つたりするぢやないか。……それや餘談だがね、斯ういふ下宿屋の代だつて、僕のやうに何代も何代も入り交りする主人を送り迎へすると、妙な現象を發見するよ。といふのはね、以前の主人が寛大だと、屹度次の主人はみちだ、そしてその次は又屹度太つ腹が來る、とてもこんなにひどい食ひ物ぢやあやり切れないと思つてゐると、必ず代が變ると、割合にいゝ物を食はす奴が來る、規丁面な奴の後の代は大抵だらしのない主人が來るとなつてゐる。それや、僕のやうに一つの下宿に坐つてゐて、何代か違つた主人を見た奴は、僕ばかしぢやない、屹度この說に贊成するよ、可笑しなもんだよ。そこへ行

くと、下宿人は大勢のことだから、さう頭ごなしには行かないがね、然し、それでも矢張り多少その傾向があるから可笑しいよ。遊び好きの、怠け者の多い時には、どうもさういふ奴ばかりが集まつて來るやうな氣がするし、眞面目な、勉強家のそろふ時には、不思議に又さういふ者が多くなるんだ。……」

「ぢやあ、君なんかのやうに一人で色んな代を居つゞけてゐる人間はどうなんだい?」と冗談に聞きかへすと、

「麻につるゝ蓬か、それとも方圓の器に從ふ水かね。僕なんか、その日その日の風次第で、何方にでもなるよ、アハハハへ。」と赤木阿珂丸は笑つた。

或日珍しく厨戸夏生が尋ねて來た。それはヒステリイ氣質の阿珂丸にとつて、夏生のやうな、さういふ因循な、鈍な男を見ると、妙に氣が苛々して來て、すると反對にひどく快活になつて、饒舌になるやうな日であつた。

「君は一體どうしてるんです、相變らず遞信省へ通つてゐるんですか、己に會ひますか、見返君とこへも時々行きますか?」と阿珂丸は詰るやうな調子で尋ねかけた。

「え、いえ、と、時々、」と夏生は相手の權幕に驚いて、一層おど〱した樣子に見えた。

「そ、そんなに何も驚かなくてもいゝんだよ、」と阿珂丸も相手のを移されて、幾分吃り口調で「ね、もうお互に面倒臭い叮嚀な言葉遣ひを止さう、これからはもつと友達らしい言葉を使ふことにしよう。ね、厨戸君、僕はこの頃考へたよ、お互にもつと快活にならうぢやないか、もつと青年らしく、もつと浮氣で、何でも彼でもやりたいことをやつて、面白く暮すのが一番いゝと思ふね、考へて見ると、あの入井の家にゐた人たちは、おそこの主人と同じく、みんな誰も彼も日蔭者見たいだつたよ。それから思ふと、こゝの下宿は面白いよ。もつともこゝの家も、今は變に眞面目な、といふよりは、何だか野望を抱いてゐるとか、試驗勉強に沒頭してゐるとか、さういふ連中が多くてつまらないが、去年の春時分は妙に思ひ切つた人たちがゐたよ。現にその梯子段のとつ附きの角の、十號の部屋にゐた男たんか、最もふるつてたね。明治大學

の學生で、黒井黒助といふ男なんだが、黒助は綽名だよ、黒井何といふ名だつたか忘れたが、あんまり色が黒いので、黒助といふのは、僕が命名したんだ。見たところ、別に惡氣のなささうな男だつたが、あんまり色が黒いのと、それに體の恰好が、不具でも何でもないのに、不具者より惡いんだ、その顔が又、當節どんな山奥へ行つたつて、あんな代表的に不細工な田舍者の顔は、最早や参考館行だね、型として見てゐるのは面白いが、迚も人として言葉を交したり、茶を飲み合つたりする氣にならないものだから、顔を合はしたら挨拶の言葉位は交してゐたが、僕はそれ以上どうしても近づかないつもりでゐたんだ。ところが、或日のこと、この我々の部屋の前にある大きな、廊下とも空地ともつかないものがあるだらう、誰が名をつけたのか、運動場といふ名前になつてゐるんだが、この前の代の主人が來た時に、今のこの紙の上敷のやうなもの、あれを運動場の板の間に敷き詰めたんだ、今こそ古びて、何だか分らないやうなものだが、あれで更紗模樣の、花と鳥との圖案をした、中々奇麗なものだつたよ。それがつる〳〵光つてゐるんだ、ニスか何かを塗つたものらしいがね。だから、あの上をスリツパを穿いて、用心しないで歩くと、つる〳〵滑るんだ、實際、あれを敷き初めの頃に、あの上で滑らなかつた者は一人もゐなかつたよ、女中から女將まで大抵二度や三度ぐらゐ轉んだからね。ところで、僕は例に依つて退屈してゐたものだから、それを利用して、氷滑の稽古をしたもんだ、なアに、廣いもんだよ、何しろ運動場といふ位だからね、十坪ぐらゐは確にある、ところが、僕は元來、氷滑なんて、輪靴滑だつて一度もやつた經驗がないから、とてもうまく行かないんだ。それでも、一生懸命にやつてゐたと思ひ給へ。すると、そこへあの十號の部屋から黒助が突然出て來て、初の中は僕にかまはず彼も氷滑をやり出したんだが、それが實にうまいんだ、つい僕の方でも教へてもらひたくなり、向うでも教へたくなつたんだね。つまりそれがきつかけで、互に大分親しく口をきくやうになつたんだ。

「その黒助が遊蕩家なんだから驚くよ。もつとも、今も言つた通り、その時は黒助ばかりでなく、下宿中にゐた者は、僕

を除いて悉く遊蕩家だつたんだが、よく女將が、『おや、まあひどいわ！』と朝になつて叫んでゐたことがあつた。』昨夜は赤木さんの外は、一人も歸つて來なかつたのね。』しかし、その唯一の非遊蕩家である赤木さんにも餘り感心する譯には行かないんだ。何故と言つて、女將が女中を相手にそんな嘆聲を發してゐる時、僕は二十四歳にもなつて、朝からその運動場で相變らず一人で滑つてゐたんだからね。なアに、それで。黑助だつて、決してそんなに裕福な家の息子とも思へないんだ。『私の國は河内です、楠正成と石川五右衛門の外に、昔から一人もえらい人物の出たことのない國です。』と言つてたから、何でも河内の或町の小商人の息子らしかつた。それどころか、段々したしくなると、彼は一週間に一度位づつ僕の部屋を訪問して來て、『赤木さん、あなたは實に感心ですな。然し、あなたのやうな人がお遊びにならない法はありません、どう見たつて、斯ういふと失禮ですが、見たところ、この下宿中であなたは恰好といひ物腰といひ、一番遊び人らしいんですもの、あなたは屹度何處か他所の土地に入らつしやるんでせう。』などと煽てゝ、僕に『いや、さうぢやない。』と辯解する餘地を與へないうちに、『ところで。』と來るんだ『あんまりやり過ぎて、到頭文なしになつたんですが、失禮ですけどこの月末まで二圓でも三圓でも。』と言つて、僕の顏色の都合では、『一圓でも五十錢でも』と値下げして、借りて行くやうになつた。さういはれると、俺は變なところに見え坊の氣性があるもんだから、內實はその一圓でも五十錢でもに困つてゐながら、つい、抵あるだけを借りられ借りられしたものだ。ところが、初めのうちは黑助もそれを返しに來てゐたが、最後に去年の五月だつたか、彼も到頭學校を卒業して、國へ歸つて勤めることになつたんだ、その時分には、歸る時には家からも少し纏めて送つてくれるから、と云ひ云ひして、その五十錢、一圓の俺からの借りが五圓以上になつてゐたが、或日到頭金が着いたといつて、それを持つて、不斷借りてゐる待合と料理屋とへの始末をして行くといふのはいゝが、僕は君も知つてる通り妙な男で、そんな貧乏をして居た癖に、着物を一そろひだけは、女でも斯うは行くまいといふ程、大事にして失くさないで持つてゐたもんだが、そのおちややへ勘定を拂ひに行くのに、黑助めその俺の秘藏の大島の

着物と羽織とを貸してくれといふのだ。僕だつて、着物は不斷着てゐるのが外に一枚あつたが、羽織は不斷にも他所行にもその大島が一枚切りなんだらう。それを黒助は僕が言ひ出さない先に、『羽織はお困りでせうから、その間私のこれを着てゐて下さい、』と言つて、彼のは田舎者だけに、そんな遊蕩などする癖に、染絣の齒染みた奴なんだ。然し、結局僕は彼の言ふ通りにしてやつたものだ。さうだ、五月だつた、何でも靖國神社の祭のあつた日だ、蓬萊館から靖國神社まではものゝ一二町とないからね、この前の往來は引つきりなしの人通りの爲に、いくら障子を締め切つておいても、煙のやうな砂埃が舞込んで來る、ぞろ〱と蟻のやうに阪を上つて行く群集の足音、ぽん〱と上る花火の音、だが、僕は三錢しか持つてゐないんだ、だのに、氣のきかない黒助！僕の着物まで借りて、おちやの借金を拂ひに行かうといふ時に、『あなたの借りは歸りましてお拂ひします、』なんて言つて、出て行つてしまつたんだ。と、それから、二時間ほどすると、黒助の聲で、すぐ外の往來から『赤木さーん！』と呼ぶのが聞える、窓を開けると、黒助がにこ〱しながら、『ちよつとそこ迄散歩に入らつしやいませんか、』と誘ふのだ。僕もどういふつもりだつたか、ついでに金を返してもらふ望みでも抱いたものだつたか、ついふら〱と出て見る氣になつたのだ。黒助は僕の着物と羽織を着てゐて、僕は黒助の染絣の羽織を着てゐた譯だ。――や、つまらない饒舌をしたが、その時黒助は僕を無理耶理に靖國神社へ引張つて行つて、輕業を見ようといふのだ、もう抵抗しても仕樣がないので、俺も觀念して、一緒に這入つて行くと、何のこつた、そこに黒助の馴染の、あの邊の藝者なんだらう、女が二人ゐるところへ、黒助は多分さつきおちやへ勘定を拂ひに行つた時、その女たちの行先を聞いて來たんだつたらう、然し、如何にも偶然のやうな顏をして『やあ、やあ、』と聲をかけたものだ。それも、然し、まだよかつたんだ、それから十分もしないうちに、女たちが歸ると言ひ出したので、黒助も出ることになつて、僕も一緒に出たのだが、それから富士見町の大通まで行動を共にして、僕だけ別れて歸るつもりだつたところが、その大通に出た途端に、向ふから一人の力士が俥に乘つて、悠々と走つて來るのに出遭つたちやないか、それが大淀猪之吉だ。そ

の頃彼はめき〳〵出世をしてゐた盛りだつたからね、何でも幕下まで取り進んでゐた時分だつたらう。それで多分贔屓神社の花相撲にでも來たものだらう。然し、彼は多分染絣を着て群集の中を蟻のやうに歩いてゐた僕には氣がつかなかつたかも知れない、然し僕は氣がついたよ、そしてはツとした瞬間、僕は忽ち黒助も、黒助の連の藝者も、何も彼も忘れて逃げ出したね。ところで、君、黒助はひどい奴だよ、その晩は歸つて來なくて、翌日、僕の部屋へ着物を返しに來て言ふには『赤木さん、誠に濟みませんが、家から二百圓送つて來たんですが、おちややの拂ひをすると、こゝの勘定を濟まして、後汽車賃と辨當代しか殘らないんでせう、まさか、あゝいふ家の拂ひですから、それをしないといふ譯には行きませんから、私はすつぱり拂つて來たんです。ですから誠に濟みませんが、あなたにお借りしたのは、國へ歸つてからお送りすることにしますから、それ迄どうかお待ち下さい、』だと。おちややの義理を、黒助は親の恩より大事に思つてゐるらしいんだ、無論、國へ歸つてからも、送つて來なかつたよ。アハハハハ。

「八番――つて、この向ひの部屋だが、――あそこには又一風變つた男がゐたよ、早稻田の法科にゐたことがあるつて言ふんだがね、兎に角、こゝにゐた間は完全に學校たんかへは行つてなかつたよ。田川大次郎といつて、最後に向ひの八番から奥の特別室へ引越して、それから一ケ月目に出てしまつた男だ、後で見せるがね、その奥の特別室といふのは、日本間の豫備室の附いた、十疊敷ばかりの西洋間なんだが、何しろ間代だけで三十五圓といふんだから、外の部屋の賄付の倍以上の値段だ。おまけに食料もあの部屋だけは特別に高いんだ、この食料まであの部屋に限つて高くしたのは、今度の主人になつてからだよ、女主人といふ奴は變にづるいもんだね。然し少々ぐらゐ高くつても、ちよつとあの位の部屋におさまつて、金口でも吹かしてゐたら惡い氣はしないだらうと俺も思ふよ。だから、さすがにあの部屋だけは始終空いてるこ、殊にこの頃は時々一夜泊りの客が來た時に使ふくらゐのもんで閑散を極めてゐるよ。それを、さ、その田川といふ男は始終借りたがつてね、女將に申込むんだが、女將は承諾しないんだ、無理もないよ、その半分の値段の下宿料さへ碌に

拂はない客だからね、女將の口實として、あの部屋だけは間代から食料、恐く前金でいたゞきます、と斯ういふんだ。すると、田川の奴、到頭どこからか工面して來て、もつともこれ迄の八號の部屋時代の殘つてゐる勘定は不問にして、一ケ月分のその特別室の間代と食料とを前拂ひすることで、やつと女將を納得さしたんだが、一ケ月目には以前の殘つてゐる分をも乾度拂ふといふ條件がついてだよ。ところが、その後の方の條件を怠つたので、つまり田川は一ケ月分だけの思を晴らして、こゝを引拂つてしまつた、と斯ういふ經歷の男だ。見上げるやうな大男で、少し氣狂ひ染みたところのある男だつたが、法科にゐたといふのに、法律のことなどはまるで知らないらしく、常々口癖のやうに自分は女と音樂とが好きだ、と言つてゐた。どうしてこの男と僕が親しくなつたかといふと、これは僕の話を少ししなければ分らないが、最近僕は三味線をやり出したんだ、さう變な顏をしなくてもいゝよ、もつとも僕は君も知つての通り、子供の時分十五六年色町にゐたので、見やう見眞似、或は聞きやう聞き似で、下地はあるんだよ、つまり糸道といふやつはついてるんだ、つまりちよつとした端唄ぐらゐは彈けるし　調子は合ふんだ、君、この調子といふやつは、俗に調子三年と言ふくらゐで、……いや、止さう、止さう、又自慢を始めたなと言ふやうな顏をしてるね。兎に角僕はその三味線に少し身を入れて見る氣になつたんだ。それから思ひついて古本屋といふ古本屋を片端から廻つて、これ迄刊行されてゐる　らゆる種類の三味線の譜本を集めたんだ、それから西洋音譜を研究して、それで現はされてゐる日本音樂の曲譜を、これ又集められるだけ集めて、間もなくそれ等のものだけは一通り卒業したものだから、今度は自分で最も完全だと思はれる、三味線の譜本を著さうといふ野心を起したのだ、その野心は今でも持つてるんだよ、笑ふなよ。ところで、そのやり始めの時分のことなんだ、田川大次郎が向ひの八號へ何處からか引越して來たのは。彼が來てから、確二日目だつたかと思ふが、丁度日曜日だつたので、僕が消々あたりに遠慮なしに三味線をやつてゐると、いきなり『御免なさい、』と言つて、あの男が尋ねて來たんだ。『あなたは音樂がお好きですか、僕は大好きなんです、で、友達になりに來ました。』と斯ういふ調子だ。隨分驚か

されたね。兎に角、それが田川といふ男と交際の始まりだよ。無論、この男も黑助時代だからね、矢張り遊蕩家の例には洩れなかつたが、それがこの男らしく變つてゐたのは、相手が藝者とか娼妓とかいふのでなく、徹頭徹尾この男のは淫賣婦が相手なんだ。田川に言はせるとこの世の中に淫賣婦よりいゝ女性はない、彼等は美の極致で、神の化身だといふんだ、そして彼自身は眞からさう思つてゐたらしいんだ。だから、若干の金があつたら、彼は屹度彼等のゐるところへ出かけて行くし、金がないと、日曜であらうが、月曜であらうが、晝であらうが、晩であらうが、マンドリンを彈くか、唄をうたつてゐる、マンドリンも唄も悉く出鱈目だ、マンドリンは唯ぢやか／＼鳴らしてゐるだけだし、唄は何でも彼でも『ラララ』といつ迄經つてもラの連續に、出鱈目の節がつくだけなんだ。初めのうちは下宿の女將は勿論、隣近所の客たちが幾度となく抗議を申込んだものだが、幾ら言つたつて止めないので、終ひには氣狂ひだらうと言ふことになつて、結局彼の無理が通つてしまつた譯だ。矢張り貧乏らしくてね、寢るのにも、外に出るのにも、家にゐるのも、コール天の洋服一着切りしか持つてゐなかつた。無茶なやうな男だつたが、僕は何となしにこの男が好きだつた、田川の方でも僕が氣に入つたと見えて、僕と附會ふやうになつてから、音樂の外に、畫も文學も好きになつたと言つて、始終その方の話をしに來た。殊に淫賣婦を讃美した畫とか文學とかをなるべく研究するやうにしてゐた、今でも時々この男のところへ遊びに行くことがあるし、向うからも尋ねて來ることもある。

「さうさう、この話をするのを忘れてゐた、一週間ほど前のことだがね、その田川のところへ遊びに行つたんだ、中澁谷なんだ、中澁谷つて君は知らないだらうが、あそこに道玄横町と言つて、大通から少し反れた路次に、さつと一町ほどの間、まるで淺草の六區の銘酒屋町のやうなところがあるんだ、それや一度行つて實地を見なければ分らないが、まあ一口に言ふと魔窟といふ感じだね、その癖提灯屋もあるし、普通の仕舞太家もあるし、何でもない堅氣の一品洋食屋もあるし産婆の家もあるし、といふ中に、さういふ家の間へ挾まつたり、或はさういふ家と家との間の路次の奥になつたりして、

無數の淺草式の銘酒屋や、かと思ふとカフエーのや　な恰好の家や、何にしても一見怪げ、體裁のものが、無數に軒を並べてゐるんだ、そしてその中に、ぽつんと一——さあ、その初は誰かどういふ目的で、そんな町に、そんな風變りな、西洋館を立てたものか知らないが、兎に角、木造の安普請には違ひないが、入口にポーチを持つた、一廓の構えの家があるんだ、それが田川が今ゐる下宿屋なんだ、以前は貸席だつたとか、女ホテルだつたとか言ふ話だが、何にしても田川に打つてつけの家だよ、田川のやうな男を豫想してやつてゐる下宿屋のやうなもんだ、もつとも賄なしで、部屋だけ貸す仕掛になつてゐるんださうだがね。さういふ町のことだから、晝間の姿のだらしなさと言つたらない、まあ芝居の樂屋裏か奈落の光景と思へば間違ひない、さて夕方が來て、顳顬に頭痛膏を貼つた女や、叩き潰したやうな銀杏返しを頭の上で躍らしてゐる女や、でこ／＼の束髮に結つて、毒々しい墨色で眉毛を畫いた女やが、ぽつ／＼湯屋行の道具を持つて往來し、その間を豆腐や、煮豆屋が喇叭を吹いて通り、近所に住んでゐる大工や鳶の者たちがそれ／＼の道具を肩にして歸つて來る時分から、ぽつ／＼その町が怪奇な化粧を始めるのだ。やがて燈火がつく、空の色が暗くなつて來る、町が闇に包まれて來る、なる程、あゝいふ町の夜の景色は、田川でなくても、一種の不思議な美を持つてゐることは僕だつて認めない譯に行かないね、然し、田川と來たら又別だ、彼のその大きな身體に適はしい大きな顏が、それは不養生の爲に、大きなばかりで變に脹れぼつたくて青味がゝつてゐる上に、晝間と來たら殊に元氣なくしをれ切つてゐるのに、忽ち注射でもされたもののやうに元氣になつて來る、そしてマンドリンを取上げる、無暗にかき鳴らす、例の「ラララテ」の唄を止め度なしに呶鳴る、傍に友達がゐると『君、杯を上げようぢやないか、君大いに飲まう。』と叫ぶ、その聲が又身體相當にばかに大きいのだ、その癖、田川自身はどんな薄い葡萄酒を、リキウル・グラスに半杯飲んでも、忽ち蛸のやうに正體なく醉つ拂つてしまふ程弱いんだから手に負へないよ。ところが、近所の淫賣どもにして見ると、幾ら男の數は知つてゐても、田川のやうな男は初めてだらうからね、氣狂ひと思へばそれ切りだらうが、普通の人間として見れや、變ることは變つてゐると

しても、別に有害な愛り方ぢやなし、コール天の洋服を着て、マンドリンを鳴らして、大きな聲で唄をうたつて、彼等を見れば有頂天になつて歡迎する外他意ないといふ始末だから、晝間退屈し切つてゐる淫賣どもにはこの上ない面白い慰めか、玩具のやうな氣のするのも當然だよ、玩具としても、まつたく珍しい西洋玩具のやうなものだね。だから、晝間、田川のところへ行くと、屹度一人か二人か、時によると三四人も、さういふ風俗の女たちが、彼の怪しげな西洋間にきやつ〳〵言つて集まつてゐるか、ゐない時でも、丁度彼の部屋が玄關脇にあつて、往來に窓を持つてゐたので、通りがゝりに『田川さん、今日は、お客様？』などと黄色い聲で呼びかけて行く女が屹度四五人はある。ところで、今言ふ、一週間ほど前といふのは、その日僕は同じ中澁谷だが、外にちよつと尋ねる人があつて、その人のところへ行つた歸りに、ふと田川のところへ廻る氣になつたんだ、だから、もう日が暮れてからのことだつた、玄關の扉を押して、直左手が彼の部屋なものだから、別に案内も乞はずに『田川君』と聲をかけた。すると、その時に限つて、いつもは中々返事をしない男だのに、こちらの聲が終るか終らないうちに『おゝー』と言つて、何か惡いことでもしてゐたやうなあわて方で飛び出して來て、そして俺の顏を見ると『やあ、君、君、今夜は、君、大變な日なんだよ、君、濟まないけど歸つてくれないか』と言ふぢやないか『どうしたんだ？』と聞き返すと、彼は入口の正面にかゝつてある時計を見て『ぢやあ、君、十分間だけ、ね、十分間だけ會はう』と言つて、僕を部屋の中に入れてから『僕は、君、天才を一人發見したんだ、それが女で、而も素的な美人なんだ、その人が今夜こゝへ來ることになつてゐる、君にもいづれ紹介はするが、今日はいけない、今日は僕たちだけに會はしてくれ給へ、ね、いづれ君にも屹度紹介するから、ね、ね』と例の感激的な口吻で叫ぶのだ『一體、その人はどういふ人なんだ、どうして知つたんだ？』と聞くと『君、それは聞かずにおいてくれ給へ、それは永遠に聞かずにおいてくれ給へ、然し、彼女は心の純潔な婦人だといふことは、君、信じてくれ給へ。兎に角、彼女は虐げられた境遇にゐたんだよ、貪慾な叔母の家にずつとゐたんだが、自由を求めてそこを出てから、更に一層慘めな境遇に泣いてゐたん

だ、君、いつか君が話したドストイエフスキイの小説の中の女性そつくりだよ、さうなんだよ、彼女は純潔そのものだよ、そして、君、彼女は確に天才なんだ。』『何の天才なんだ？』『それは、君、まだ僕にも分らない、彼女自身にも發見されない。……然し、確に何かの天才なんだ！』ところが、さう言つてる時に、折から入口を叩ける音が起つて、『田川さん、お客樣ですよ。』と取次いで來た玄關番の婆やのすぐ後から、『御免下さい。』と這入つて來たのが、その當の女なんだ。田川のあわてゝゐる暇も、俺が躊らうとする暇もなかつた。而も俺は這入つて來たその女の顏を見ないうちに、その聲に聞き覺えがあるやうな氣がしたので、見ると、驚いたね、まつたく變な氣がしたね、それが入井の家の花子ぢやないか！

「吃驚しなくてもいゝよ、そんなに吃驚しなくても……。然し、その時は實際俺も吃驚して、一瞬間自分の目を疑つたね、然し、疑ふ前に『おや！』と口の中で叫んだ、と、相手も、相手は一層僕の顏を見て驚いた樣子で、一瞬間息の詰まつたやうな表情をしたかと思ふと、次には何とも言へぬ、さうだ、よく言ふ言葉だが、蛇のやうな狡い、邪惡な光を目に湛えたかと思ふと次の瞬間にはけろりとした、實に涼しさうな顏をしたよ。今度は僕の方で息を詰められたやうな感じになつて、何にも言へなくなつてしまつた。

「なアに、君、輕子さんの話を聞くどころか、そんな譯だから、僕の方で確に相手が花子だと思つても、向うでさうぢやない振をするんだから、取付く島がないぢやないか。――いや、行つたつて駄目だよ、それや、君が行きたけれや、いつでも田川君に紹介狀は書いて上げるよ。然し、田川君に會つたところが、その田川君のところへ來る女が、此方がそれを花子に擬しても、相手がそれを承認しない上に、その花子といふものと田川とは何の關係もないんだから、つまり田川はその花子に似て居る女と關係があるといふに過ぎないんだから、折角、君が會つたつて、これも亦話のしようがないぢやないか、それに君のは、その目的が花子ではなくて、又その向うの輕子さんにあるんだから、それは餘り火が遠過ぎるといふもんだよ、現にそれが花子だとして、相手が花子を名乘つて來たところが、花子だつてとつくに輕子さんとは別れた

まゝだらうぢやないか。それに、ね、――さうだ、まだ話があるんだよ、その時、さ、仕様がない、そんなはめになつたもんだらう、田川にしたところが、幾ら惜しがつたところが、もう僕がその彼の秘藏のものを見てしまつた譯だから、そこで僕を紹介したよ、これが今お話した人だ、光子さんといふ人だ、と言つたよ、確に光子さんと言つたよ、どうもをかしいね、確に花子なんだが……。それで、僕もそのまゝ歸りそびれて、つい一時間か、若しかすると二時間近くもゐたかも知れない。花子の裝？ そりや入井時代よりずつと風采を上げてゐたよ、と言つて大したことはない、何でも銘仙の着物に、べろ〳〵の綿入りのお召の羽織を着てゐたがね、顏はあれで確に道具はそろつてゐるね、變に白粉をこて〳〵塗つてゐて、餘りいゝ體裁ぢやなかつたが、兎に角美人に見えたよ、然し、どうもその全體の感じはあの田川の家の邊にゐる女たちと同じやうな事をしてゐるんぢやないかと思へるんだがね、然し、ね、まさか、ねえ、然し、どうも、さうとしか思へない感じなんだよ。それで、一二時間してから散歩に出ることになつたんだ、僕は歸りがそびれてゐた時だから、それをきつかけに一緒に外へ出て、直に別れて歸るつもりだつたんだが。三人でその西洋館の下宿屋の入口の、ギイーと鳴る扉を押して外に出た時だ、扉の外はポーチになつてゐるんだ、そのポーチのところへ出た時、田川がステッキを忘れて、僕等二人を待たしておいて、も一度ギイーと鳴る扉を開けて中に這入つて行つた、すると、それを待ちかまへてゐたやうに、光子が僕に、一度あなたのところへお邪魔してもいゝか、と聞くんだ、『えゝ、どうぞ、僕のところは……』と言ふと、光子は田川が歸つて來るのを恐れるやうに、『えゝ、いゝわ、それは後で田川さんに聞きますから、』と、僕が話しつゞけるのを、打消すやうに斯う言つて、そして、その時まだ田川の姿が戻つて來なかつたと見ると、突然、僕ははツとした、本當に唯はツとしたといふ感じだけだ、それはあんまり素ばしこくつて、後になつて考へるとそんな事ぢやなかつたか知らと思はれる位なんだ、いや、然し、さうなんだ、そんな早さで僕の口に接吻したんだよ、そしてその一秒時間には ギイーと扉が鳴つて、ステッキを持つた田川が現れたんだ。入井の花子はそんな事をする女だつたかね、ね？ 變だよ。何故？

さうかね、し兼ねないところがあつたかね。鬼に角、近いうちに來るといふから今度會つたら分るよ、花子か、花子でないか。その內、君も會ひ給へ、こゝで……」

その時、赤木の部屋の入口の外で、

「赤木さん、お客樣ですか、」と呼ぶ皺枯れた男の聲が聞えた。「あの、ぼつ／＼又稽古を始めませうか？」

「えゝ、直行きます、もう十分ほどお待ち下さい、」と赤木は內部から答へた。

「な、なにか御用なんですか？」と廚戸が中腰になつて聞いた。「ぼ、ぼくもう歸るから……」

「いや、まだいゝよ、」と赤木はゆつくりした調子で答へた。「あれはこの向ひの部屋で今ゐる男なんだよ。これも變な男でね、甲種工業學校を出て、四五年間技手とかをしてゐたんださうだが、今度芝居を始めたいといふんだ、それには自分も役者になるつもりなんだが、それと同時に興行といふやうなことにもひどく興味を持つてゐるらしいんだ。一種の空想家には違ひないがね、空想家としても可成り念の入つた空想家ではあるんだ、文學などにはさう理解のある男とは思へないが、脚本なら創作と飜譯とに抱らず、現在日本で發行されてゐるものは全部讀んでゐると言つても嘘にはならないね。それから、暇さへあると、小劇場大劇場、樂屋、稽古場、切符賣場、下足場、すべてさういふ劇場の建物に關したもの丶設計圖を夢中で描いてゐるかと思ふと、一の興行をする爲の、役者の給金から、稽古中の費用から、劇場の借賃から、諸雜費の計算などを、算盤と首引で、數枚の紙に書き並べて、滿員なら幾ら幾ら、八分入なら幾ら幾ら。『まあ、この位の儲けなら我慢しなければならないかなア、』とか、『いや、もう少し儲けておかないと、次の興行にかゝる迄の費用が十分と行かないから』とか、そんな獨言を言ひながら、頻りに悦に入つてゐたり、かと思ふと、突然部屋の中で起ち上つて、始めるんだ、『僕には分らない――人間は長い間女と一緒に暮してゐて、ついぞ女の事や二人の關係なぞといふことを考へもしずにゐる。そのあとで……ふいと考へはじめる……さうなると厭でもあとを考へずにはゐられなくなる……グスターフ、君は僕の友達だ。君は僕の』――これか、これはストリンドベルヒの『債鬼』といふ脚本に出て來る男の言葉なんだ、そ

れを言ひながら、やあ、工藤！　工藤、うまいぞ！　なぞと、大向うの掛聲まで自分で入れるんだ、工藤久太郎といふ男なんだがね、まるで町の聲色屋だね、然し、聲色屋よりも、職業的でないだけに、もつと眞に迫つてゐるよ、あんまり眞に迫つてゐるので、或日、僕もうつかり、その時はもつともシェークスピアの『ハムレット』だつたかね、うつかり「工藤、よおよお！」と此方の部屋から掛聲をかけてしまつたんだ。それがその男と物を言ひ始めになつたんだがね。然し、惡いことは出來ないもんだよ、人を呪はゞ穴二つといふ譯かね、それがきつかけで、僕も到頭その男に引張られて、目下役者の修業をしてゐるんだよ、……そんなに驚かなくてもいいよ、それで、今誘ひに來たのは毎日一時間づつ、こゝの家の二階の大屋根の上に、大きな物干臺があるんだ、それが又都合よくばかに大きな物干臺なんだ、工藤の話では十人や十五人出る芝居の稽古なら出來るつて話だが、今のところ工藤と僕と二人つ切りだからね、それで、今言つたストリンドベルヒの『債鬼』といふ芝居、これは男二人と女一人切りの芝居だもんだから、それの稽古をしてゐるんだ、その中の男二人出て來るところだけなんだがね。……」

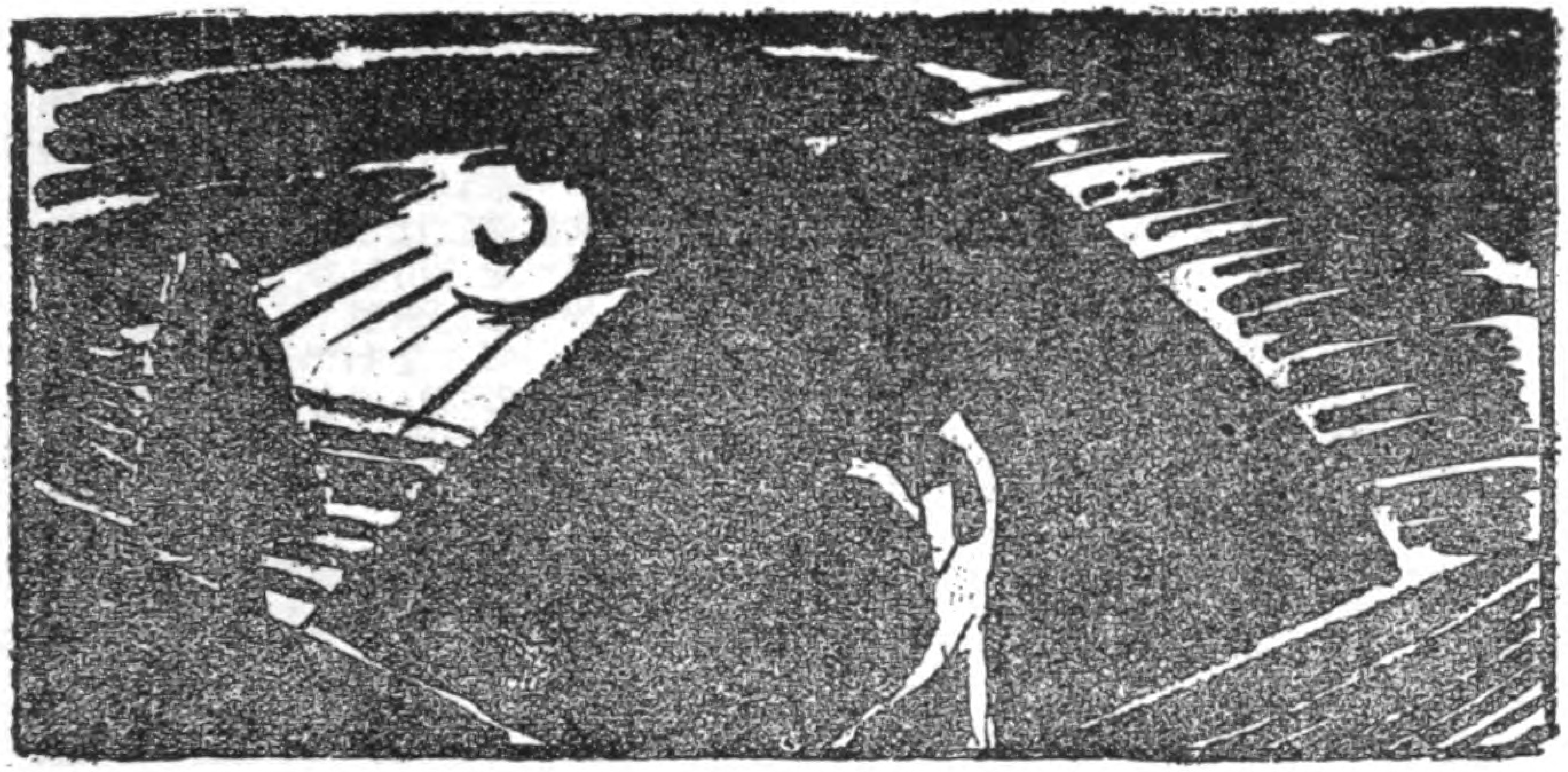
話の間、厨戸叉生は徹頭徹尾目をぱちくりさして、聞いてゐるやうな、聞いてゐないやうな、唯氣を拔かれたやうな恰好で坐つてゐたが、

「赤木さん、あ、あんたは隨分變つたね、」と呆れたやうな顏をして言つた。その時

「赤木さん、もう十分經ちましたよ、如何です？」と扉の外から工藤の催促する聲が聞えたので、それを機會に、厨戸は立ち上つて、

「ぢやあ、失禮します。」

「さう、ぢやあ、又來給へ、近いうちに花子さんが來るから。ぢやあ、こゝで失敬するよ、」と赤木は『運動場』の端れの、階段の下り口のところで、厨戸に別れを告げて、最早やそこで工藤久太郎が地駄太踏んで待つてゐるに違ひない、大屋根の物　臺へと向つた。



心

一

木村毅

大西道三は廣島の驛で下車するとすぐ、久子宛の電報を打つた。彼女の住んでる木挽町と云ふのは、驛からどの位な距離にあるのか分らなかつたけれど、どんなに遠いとしても市内の事だから、彼女が出迎へに來てくれるまでに、一時間とは手間がかかるまいと思つてゐた。しかしその一時間が過ぎても、更に又もう一時間經つても、それらしい女はまだ顔を見せなかつた。大寒あけの短い午後の日影が一二等待合室のガラス窓から次第に薄れてゆくのに眼をとめながら、彼は焦り氣味になつた。

こんなに待つ位だつたら、豫め手紙で到着の日取と時間を知らせておくか、せめて列車の中から電報を打つておくのだつたと、悔みもすれば、又、或は既に彼女は驛に來てゐるのに、お互に見外れ合つて了つたのではあるまいかと云ふ不安にも襲はれた。

道三ははじめ、見外れるなどと云ふ懸念は毛頭ない積りでゐた。彼女の大體の輪廓はあやまちなく自分の胸に收めこんでゐるとの自信があつた。しかし後に手紙でこそ親しくなりはしたものの、二人が直接に顏を見合はした事があるのは、一昨年のことで、それも十日に足らぬ短い間だ。殊にその時は今日のやうな交渉が開けて來やうとは夢にも思つてゐなかつたのだから、自分の大切にしてゐる彼女の印象が、絶體に謬ちがないものだと云ふ保證は出來かねた。

彼はいま丁度立上つて、驛の中にゐる彼女とおなじ年位な若い婦人の顏を一つ一つ吟味するやうにのぞいて行つた。これかと思はれるのが一人ゐないではなかつたが、じつとその眼に見入つても、些少の反應をも示さないのが、人違ひを語る何よりの證據であつた。道三の方では久子を見はぐつても久子の方では少くとも、その制服や制帽で容易に彼を見分け得る筈なのだ。……

彼はこの上卅分も待つてみて、それでも久子が來なかつたら、彼女の家まで出掛けやうかとも思つたが、しかし家の人から何んと考へられるかゞ氣遣はれるので、それは最後まで取つてはならぬ手段であつた。彼は、久子に會へなくて立去る場合を腦裏に描いてみた。切りつめた時間と、キチ〳〵に親から渡された小使とを無理に工面して來たのだから、會へないなどと云ふことは想像するだにも堪へ難い事であつた。

Y大學の文科の生徒である道三は、この冬休みに郷里の美作の山奥の村まで歸つたが、今、休暇がつきて上京する途中久子と會ふために、わざ〳〵廣島まで廻り道をして來たのである。彼の村は津山驛からまだ四五里も奥なので、今朝の一番列車に乘るためには夜中から起出てゐるのであつた、だから今あてもない者を待つやうに、ぼんやり腰かけてゐると、その睡眠不足と長旅の疲れとが一時に發して來たので、彼は外套を引被つて横になつた。

一時間位はたつぷり寢た。眼がさめると息で曇つた眼鏡を拭いて、再び短い日足を氣遣ひながら窓を見上げた。と、丁度その時だ！、幌をおろした車がサッと窓をかすめて走り過ぎた乘つてゐるのは男か女かさへも分らなかつたが、道三は

妙に胸が躍つたので、驛の表口まで馳出てみた。威勢のいい掛聲と共にセメントの叩きの上におかれた梶棒を跨いで、幌の前掩ひをはねのけて出た女は、まがふやうもない彼女であつた。その顏を綿密に吟味したり、のぞいたりする必要は毛頭なかつた。一眼で彼女である事が全身に直覺された。二人はいづれがさきともなく双方から手をさしのべた。

『大變お待たせしました。』

『いゝえ。』

『ほんとに申譯ありません。私、滅多に家をあけた事はないのですけれども、今日に限つて、あんまりお天氣がいいものですから散歩に出たのですよ。そして歸つてみたら机の上に電報がのせてあるのでせう。電車ではまどろッこしいから大急ぎで車を駈けさせたんですわ。』

『あんまりお見えにならないから、僕は歸らうかしらと思つた。』

『私もどんなにその事を氣遣つたでせう。こんなに遲くなつたけれど、まだ待つてて下さるかどうかと、お顏を見るまで心配で、心配でたまりませんでしたわ。どうしてお手紙でさきに知らせて下さいませんでしたの。』

『家の都合で、こちらへ出掛ける日がきめられなかつたのです。だが兎も角も會へてよかつた。御病氣はどうなんです。』

『え、まあ、どうかからかね。』

と久子はさびしく微笑した。

道三は彼女と會つたら最初何から話し出さうか――と言ふよりも寧ろ、二人の交話は、物語で讀む戀人同志の間のやうに、ドラマチックな華々しさを以て展開するのであらうかと期待と畏怖との相半ばしたやうな氣持でゐたのに、二人の口が極めて自然に極めて平淡にほぐれて來たので、非常に安心すると共に、又一味の淡いあき足らなさをも感じた。彼はこの時になつて初めて、つくぐと久子の顏に眼を留めた。

胸に重い病患を抱いてゐる者とは思へない程、頰の肉も豐かだし、無雜作に卷いてピンで留めた髮にも艶があつた。話にも表情にも年盛りの處女に特有な、いき〳〵とした生氣と彈力とが充ち渡つてゐた。たゞ兩眼に熱のための燃えるやうな怪しい輝きがあるのと、頰の上に鮮やかな色の血が刷毛で撫でたやうに寄つてゐるのとが、誰の眼にも彼女の健康體でないことを思はせたけれど、しかしもともと美しい女である丈けに、それさへも魅力の一つとなつてゐた。

人ごみの中では充分に話が出來ないので、二人は驛を出たが、さしあたつて何處へ行くと云ふあてもなかつた。

『何日間位、御逗留が出來ますの。』

『時間の餘裕は些ともないんです。今夜の夜行で立ちたいと思つてゐます。』

『そんなことはいけませんわ。今夜は是非ともお泊りなさいましよ。そして日のある中に少しその邊を歩いて見ませう。お話は歩きながら致しませう。』

傾く日の影を孕んだ焦茶色の明るい薄雲が低く垂れて、その合間々々からは寶石でも敷いたやうな深い、碧い空の生地が窺はれたけれど、陽氣は非常に暖かだつた。さすがに南國の都會で、殊に蜜柑は出盛りの時であつたから、到る所にそれをあきなふ家が、店先に鮮やかな黄金色をひろげてゐた。かつて初夏の宇治に旅して町が隅々から街路まで新茶の薫りに浸つてゐるのに驚いた記憶のある道三は、この町に來ては仄かなゆかしい橘の匂ひがどこまで行つても嗅覺から消えないのに、特に氣付いた。冬の廣島は直ちに又蜜柑の廣島であると思つた。――その外には馬鹿に宿屋の多い町、大阪を思はせるやうな河沿ひの町、松並木が街路の眞中に並ぶ町、久子との話により多く氣を取られてゐた彼は、初めて見る町であるのに、さうしたぼんやりとした印象をしか受取らなかつた。では話には際立つたトピックでもあつたのかと言へばさうでもなかつた。歩きながらでは重要な話も出來なかつた。話した瞬間、きいた瞬間に、もう心から逃げて了つてゐるやうなたわいもない事ばかりであつた。實際話はまた無意味な囈言の連續でもいいのであつた。只お互がお互の聲を耳にし合

つてさへすれば、そこに滿足もあつた。歡びもあつた。

最後に二人が練兵場の草原に出た時には、日は既に沈みきつて、たゞ雪を被つた帝國山脈が巨大な氷砂糖を幾つもつらねたやうな色を、薄闇の中に輝やかせてゐた。野末には何時の程にか初春の暮方に見るやうな、柔かい、白い靄が立てこめて暖かさは晝間と殆んど變らなかつた。山肌を撫でて來る冷たい雪風はそよぎだもなかつた。

『疲れたでせう。』

『いいえ。あなたこそ長旅の後ですからお疲れでしたでしよ。』

『僕は健康體ですよ——だがいづれにせよ暫く休まうじやないですか。』

久子はコートの袂をさぐつて、白いハンカチを枯草の上に敷いたが、道三はその上には强いて彼女自身を坐らせた。それから彼の着てゐた黑羅紗の學生マントをも半ば彼女の肩から掛けてやつた。彼は彼女が歩きながらも時々立留つては、痛みがさしこんで來るのを壓へるやうにして、帶の間から胸の上へ手を入れるのを見かけたので、夜氣が彼女の病氣を重らすことを、かうして少しでも防いでやらうとの、心遣ひをしたのであつた。

彼等の外に人影のない廣い練兵場は、水底のやうに靜かであつた。たとへ意味をなさぬ言葉のかけら一つでさへ他人の耳には入れたくないと思ふやうな、二人の胸にのみ秘められた貴重な話材を語り合ふのには丁度いい場所であり、又機會であるやうな氣がした。

『久しぶりで會つたのです。——いや、初めて會つたと言つてもいいんです。さあ、今からもつと大切な話をしませう。』

久子はそれを聞くとなぜか恥しさうにうなだれて、小さな聲で答へた。

『みんなお手紙で濟ませたじやありませんの。——大切な話は。』

『大部分は濟んでゐます。しかし皆濟んでる譯ではありません。第一、去年の四月以後の事や、あなたのお父さんのお亡

きなりになつた前後の事は、充分には伺つてゐないじやありませんか。』

二

全く久子の言葉通り、彼等の交渉には手紙が重大な役割をつとめてゐた。手紙以外には何物もないのだと言つてさへよかつた。尤も最初は僅かな日數だけ直接に顔を見合はせた事があるのには相違ないのだけれど、それは交渉と云ふ文字に當るほどのものではなかつた。

それは一昨年の事であつた。道三は長い夏の休暇をすませて上京する途中、汽車の中で急に齒が痛み出した。京都には彼の叔父が住んでゐたので、彼はそれをあてにたうとう途中下車をした。そして叔父の家に滯留して一週間あまり齒醫者に通つたが、此の機會が久子を彼に邂逅せしめたのであつた。

久子は叔父の家の隣りの娘であつた。道三とは丁度同じ位な年頃だつたので、最初見かけた時から、彼の眼と彼の注意は、彼女の上に注がれないではゐなかつた。叔母は、きゝもしないのに、彼女がDと言ふ有名なミツシヨンスクールの女學部の生徒である事や、そして非常によく出來ていまは四年級の級長である事やを、恰も自分の娘のことをでも自慢するやうにして語つて聞かせた。又ある日彼は、彼女が二階の廊下で籐椅子によりかゝりながら、二葉亭に依つて譯された『浮草』と題するロシアの小説を讀んでゐるのを見かけた。當時世界のどの作家よりもツルゲーネフを崇拜してゐた彼には、これが又打ち克ち難い強い魅惑となつた。

しかし彼は、性道徳には極めて厳格な家に生れた上に、女兄弟の中で育つたから、ぶこつな少年に似合はぬ臆病と羞恥とを持つてゐた。又自分の容貌の醜さも幼い時母や姉から何度も言はれたのでよく知つてゐた。で、自分が都會の少女の眼に觸れやうなどとは夢にも思つてゐなかつたから、今迄どんなに強い誘引や魅惑を感じても、それを抑えて了ふだけの

自制力をもつてゐた。

だが久子に向つてのみは　初め會つた時から妙に血が騷いだ。胸が躍つた。これこそ數知れぬ女性のうち、彼のために選ばれた唯一人者ではあるまいかと云ふやうな氣がしてならなかつた。――彼女の特に人を捉えるのは、長い睫毛を蹴つて、いき／＼と動く眼と、夜中のやうに靜かな、やさしい話聲とであつた。道三は不幸にしてその聲で直接話しかけられる機會は持たなかつたけれど、併し久子は朝夕顏を見合はして會釋を交はす度にその美しい眼眸を彼の上に投げかける事を惜しまうとはしなかつた殊にある時思ひもかけず町で出會ふと、彼女は洋傘を傾けて、愛想のいい微笑を以て彼を迎へた彼の中の自制力は最後まで闘ひながら、たうとうここで勝ちきれなくなつた。

齒の治療をすまして上京する日はその町の祭禮に當つて、御輿が街上を練り歩いてゐた。彼は、別に興味もなささうな顏をして人出を眺めてゐる彼女の手に、この混雜を利用してたうとう手紙を握らせて了つた。

汽車に乘つてから彼は初めて、自分のした事にはつきりと氣付いた。愕然として思はず彼は、一度尻をおちつけた腰掛から飛上つた程であつた。彼女がもしあの手紙を開封するのも汚らはしいやうに思つて道傍へ投げ捨て、それを叔父でも拾つて見るやうな事があつたらどうする？　もしくはそれが彼女の父母か學校の先生に手渡され、彼等が自分を不良少年として告發するやうな事にでもなつたらどうする？　彼は強盜や殺人と並べて新聞の三面に名前を晒されてゐる自分を想像したり、それを讀んでゐる故郷の父母の顏を想像したりした。

水が何よりの誘惑となつた。車窓の左手に琵琶湖が碧色を湛えてゐるのを見た時も、右手に淡路灘が空と抱き合つてゐるのを見た時も、窓から躍り出て、あの底に飛びこんで了ひたいやうな氣が起つた。もしあの手紙一つで自分の前途を葬られて了ふやうな面倒でも起れば一思ひに劇藥でも仰ぐばかりだとも考へた。東京の下宿へ着いてからもその日一日は不安の中に暮れた。翌日の夕方になつてやつと桃色の封筒に包まれた返事が來た。その返事一つが彼を生かしもすれば殺し

もするのであつた。吉か凶か、彼はおみ籤でも引くやうに自分の全運命を賭けた氣で封を切つた。

讀んで行くうちに彼の不安は次第に消えて行つた。彼は思はず手紙の封じ目に接吻した。饒舌な叔母は、久子のことを彼に傳へたと同じく、又彼の事をも久子の耳に入れてゐるのであつた。だから彼女は、道三が意外とする程彼の身邊の事情をも細かに知つてゐた。手紙には、あなたのやうな秀才からお手紙を頂くとは何と云ふ不意な事であり、又何と云ふ身に餘る光榮でも、歡びでもある事だらうと書いてあつた。あなたと私とはおない年であるのに、あなたは既に專門學校の豫科生で、自分はまだ高等女學校の生徒である事が恥しいとも書いてあつた。東京には才媛が數多く居られる事でおらう私ももし東京に住んでゐるのだつたら、好きな文學の御指導を願ふのにとも書いてあつた。その他彼を偶像化して讀むのな氣まり惡く思はせるやうな事や、又ぞく〳〵と心の底から嬉しくならやうな嘆美と崇敬の文字をやたらに書き並べた末に、これからの手紙は女名前にして寄越してくれとか、封筒はなるべくならば婦人用の型の小さいのを用ゐてくれとか、他聞を憚るやうなことは英文で認めてくれとか、樣々な細かい注意が述べてあつた。

それからは西の京と東の京とを梭のやうに手紙が飛び交ふた。二人は手紙を通じて言葉を交へ、半紙を媒として心をかはした。それは一面から言ふと隨分まどろッこしい事には違ひなかつた。會つてさへ居れば目ばたき一つ、唇の筋肉の動かし方一つでも充分に了解出來る筈のことが、どんなに言葉をつくしても完全には表現出來なかつた。その代り、相手の顏を見てゐたのでは到底恥しくて口に出せないやうな事が、何の苦もなく傳へ得られる便宜があつた。頭の單純な兵隊が君國のためと云ふ言葉で夢中に躍り立つやうに、戀愛を初めて經驗する二人は、「あなたのため」と云ふ言葉の響きに醉ふた。不思議な程双方とも献身的な氣持になつた。だからお互がお互を占有して了ふまでに交渉が進むのに何の雜作もいらなかつた。毎日顏を見合せてゐる戀人同志が互に相手の氣持を模索し合つてゐたのでは二三年もかかるだらうと思はれる深みにまで、久子と道三とは二三ヶ月――言ひ換へれば二十通足らずの手紙の交換で到達した。

道三は幼い時から小說を繙いて華々しい戀愛の場面に讀み到る度に、かう云ふ事が實際生活にあり得るものかどうか此だ疑問としてゐた。たとへあり得たとしても自分のやうな男は到底それに遭遇する機はあるまいとあきらめてゐた。――だのに今日はそれが思ひがけなくも自分の上に惠まれたのであつた。彼は人生と云ふものが豫想外に色彩の美麗なのに眩惑されるやうな氣がした。かうまで愉快な、たのしみの多い歡ばしいものであらうとは全く思ひの外だつた。

彼は時間は凡てが手紙を書くことで費されてゐるのだと言つてもよかつた。手紙を書かない時は少くともそれを待つ事で費された。手紙……手紙……手紙……。起きても寢てもこの意識から離れる事がなかつた。だが二人は他の注意を惹く事を恐れて、二三ケ月經つた時、今後は一週間に一度しか手紙は出さない事にしやうとの申合せをした。又切手二枚以上を要する重い手紙を書く事は避けやうとも相談した。で双方で洋罫紙の裏表にペンで點のやうな細かな字を書く工夫した。それは一見するとまるで蠶卵紙のやうに、密字が空白もなく紙面を埋めつくしてゐたそれに二人共毎日、たとへ少し宛でも手紙を書かないと氣がすまなかつた。だから『只今夜の何時、今朝ペンをおいた後に書きつづけます。』と云ふやうな文句が一通の手紙の中には數ケ所にわたつてあつた。七日目が來ると封をして投函した。その度に精根を傾けつくした創作でも手離すときに似た、命の一部に空虛を生ずるやうながつかりした氣持を經驗した。しかしこの空虛は相手の手紙を受取ると共に埋められた。封を切る度に、期待と懸念とで指尖がかすかな慄ひを生じた。若い者に取つては無上な實の秘められてゐる心の扉を開くのだからそれも無理でなかつた。道三は手紙を讀み終ると、いつも、自分を動かすかうも力強い力がどこに潜んでゐるのかと、不思議な感に打たて、ぼんやり紙の面をみつめてゐる事が屢々であつた。丁度幼い時、蓄音機のレコードを眺めて、此のどこにあの美妙な音色が潜んでゐるのであらうかと、怪しんだのと同じやうな氣持であつた。

かうした手紙の交換は自然に、久子の家庭の事情まで、かなり詳しく彼に知らせるに到つた。彼女の父母は共に廣島縣

のＦと云ふ田舍の生れであつた。しかし父が小官吏を務めてゐたので、彼女もそれにつられて、生れ落るとから中國・九州、四國の諸地方を轉々として歩いた。最後には伊豫の新居ケ濱に轉任させられたが、海と山とにかこまれたその風光明媚な土地はひどく父の氣に入つた。彼は老後をそこに落付くつもりで、溜めた小金で土地を買つたり、家を建てたりしたしかし漸く成長して來た久子は小學校を一年からずツと首席で通して卒業間近になつて來た。前後に類のない拔群の好成績と云ふので、敎師達もみなここで彼女に學業を廢止させる事を惜んで止まなかつた。父もそれに心を動かされた。殊に久子のあとが二人ともみな女で男の子は一人もないのだから、久子にしつかり勉强させて一家の將來を彼女によりかかるやうにするのも一策だと考へた。

しかし彼女一人を都會へ出すとすれば資力も長くは續きかねるし、且つ心元なくもあつた。で家と地面とを賣拂つて一家みな都會へ轉住する事にきめた。出來ることなら東京を望んだのであつたが、そこには傳手がなかつた。京都ならば染織會社を經營してゐる遠緣の者がゐたので、それをたよりに出て來ておちついたのが今の住居である。

久子は女學校が濟んだら高等師範に入るか檢定でも取るつもりで、學校の課業以外別に、漢文と英語の私宅敎授に通つてゐた。『こんな事情のもとにある私は、父母を失望させないためにはあなたから養子に來て頂くより外に道がないのですが、しかしそんな勝手を言ひ張らうと云ふつもりは毛頭ありません。カクントロフはいづれ苦しい悲しいことになりませうが、私は父母をすてても必ずおん許へ參ります。』と彼女は言つて來た事があつた。その時は二人ともまだ十八だつたから、男の道三の頭にはまだ結婚と云ふことがはつきりした觀念となつてゐなかつたけれど。久子は女であり、殊に早くから父母をたすけて家庭を切廻してゐたのだから、練熟した主婦も及ばぬ堅實な考へを持つてゐた。

久子が凡てを手紙で語つたから特別なトデックがないと言つたのは、かう云ふ點をさしたのであつた。

三

しかしながら二人が自由に書信を往復し得たのは九月から翌年の三月まで半年餘りのことで、四月に入ると道三から送つた手紙を、久子は運惡く父に押收されて了つた。それなり彼女は嚴しい監視のもとに置かれて、文通は勿論禁止される事となつた。

後に久子はその時の事情を細かに知らせて來た。家の人達はみんな夕飯をすまして、彼女一人が茶の間に縫物を展げてゐた。その日社の花見が嵐山で催されて父は暗くなつてから歸つて來たが、日頃の大酒家だから足許の危い程醉つてゐた。彼はこの上まだ飲むから酒を出せと言つた。こんな場合爭ふことが無益なのをよく心得てゐる久子は、素直に燗をつけて出した。しかし相手になるとうるさいので、傍へ寄つてせつせと針を動かしてゐた。これが父の機嫌をそこねた。所へ心待ちにしてゐた道三からの手紙が配達されたのである。久子はすぐにも讀みたいと思つたのだけれど、それでは却つて疑を惹くやうなものだから、何でもないやうに見せかけるためわざと針箱の上にそれをのせたまゝ縫物をつゞけた。父はどこから來た手紙だと聞いた。友達からだと彼女は答へた。お見せと言つて父は手をのした。しまつたと彼女が思つた時はもうその手紙は針箱の上から攫はれて封が切られてゐた。讀んでゆくうちに父の顔には燃えるやうな險しい色がむら／＼と寄つてゐた。彼は手紙を叩きつけて、それから片手を德利にかけた。彼女は酒をつぐ事だとばかり考へてわざと氣にかけないやうな風をしてゐたら、思ひがけなくもそれは自分の肩をめがけて投げつけられた。熱い酒が燒くやうに半身を濡らした。いかに何でもこれはあんまりだと思つた彼女は思はずフ／＼と立上つた。頭はカッとのぼせて、兎も角も家を出やうと云ふ一念しか思ひ浮ばなかつた。もとより道三の許以外に身を寄せる所はなかつた。けれども母と妹とが父をなだめたので、彼女も家出を思ひ止る事となつた。

翌朝父は會社へ出かけた、今迄受取つた手紙をみんな持つて來いと言つた。久子は束ねて手文庫にしまつてゐたのをその儘差出すと、父は手に取つてはみたが、こんなに揃へてある位なら別に差支へる事も書いてあるまいからと言つて、中まで披いて見やうとはしなかつた。或は見ることを恐れたのかも知れなかつた。もう文通はさせないからと行つて父に詫びを入れた母と姉とが自然その後は彼女の監視者となつた。

監視はなか〳〵厳重だつたが、事件の二三日後、母が寺參りをした暇は、妹へは學校の作文を書くのだと偽つて、久子は前後のことを詳細に道三に報じたのであつた。私にはもう絶體にお手紙下さいますな、さびしいには心淋しいけれど双方充分の了解が出來た後だからこの淋しさにも堪へる事が出來ると彼女は書いてゐた。又、私の方からはどんなにでもて監視の眼を盜んで月に一回位なたよりは必ずするとも書いてゐた。

だが道三は、彼女のこの誓ひを危ぶまないでは居られなかつた。彼は十三四の少年の頃から雜誌の投書欄などで名前を知つて遠い他國の見も知らぬ誌友と文通した經驗を以てゐたが、それは二ケ年と續いたためしがなかつた。親密の度が高潮に達するまでは乘氣になつて筆を取るが、その峠一つを越えると、後へは弛緩期がつゞいて來る。そしてどちらからともなく中絶して了ふことになるのであつた。だから今迄でさへも久子との手紙の交換が、いつ迄繼續されるものかは自分でも疑問としてゐた。手紙は何と言つたつて間接手段だ。もし自分の前に彼女に代るべき有力な誘惑者が現はれて來たら、自分の心は必ずその方へ動くに違ひない。彼女の前に自分に代る男が出て來ても結果は同じ事だ。――と、かう道三は考へてゐた。その矢先に今度の事件である。久子は、お互に充分な了解が出來た後だからと安心してゐるが、道三に言はせればそれだから尚更危いのだ。

當時は丁度ある批評家が、明治末(Fin Meiji)と稱した時代で、日本には珍らしい憂欝な絶望的な、氣持が文壇を中心として思想界全體の上に擴がつてゐた。文科の生徒である道三は勿論その影響を免れなかつた。彼は當時の多くの青年

がさうであつたやうに、廿歳前後に固有なロマンチシズムを無理に押し殺してゐる事を一つの榮として居るやうな變態な青年であつた。華やかな戀愛論や處女禮讃に共鳴すべき年頃を、變に燻んだ、摺れ枯らした、唯物主義の思想の中にはぐくまれてゐた。強者になれ、惡魔の魂をもて。女は捨てて泣かす事があらうとも、捨てられて泣くやうな事があつてはならぬさう云ふ向ふ見ずな考へを處世の標語としてゐた。だから久子の手紙を見た瞬間、道三は思つた。

『いよ〱交渉の打切り時が來た。』と。

只いかにして此の自分の考へを彼女に通じるか、その手段に當惑はするものの、彼女を忘れるに別段六ケ敷い筈はないと高を括つてゐた。

だが實際は決してさうでなかつた。氣にすまいと思へば思ふ程、彼女は道三の念頭に絡まつて來た。彼は庭の草花を拔きすてやうとしてそれが意外に根を張つてゐるのに驚く園丁のやうな氣持で、胸の中から動かうとしない、彼女の姿を眺めた。彼はいつの間にやら知らず識らず彼女の手紙を待つてゐる自分を發見した。

彼女はよく約束を守つた。新學期が初まると、祈禱や、體操や、習字の時間をエスケープしたのだと言つては手紙をよこした。四月には四通、これは例月の通りであつた。只いつもと違ふのは、紙一面を密字で埋めつくした内容の充實したものとは違つて、大きな字を鉛筆で走り書してあつた。五月には手紙が一通と奈良へ遠足してよこしたエハガキが一葉。六月には末になつてから手紙が一通。――それには父が患ひついて寢たまゝになつてゐるが、恢復の望みは到底ないのだから家内中、心細い日を送つてゐると書いてあつた。

彼女の父が病氣であることも彼はかねてから承知してゐた。それは前の年の十一月頃の手紙であつたらう。餘程以前から父の身體の調子が變なので、本人は何ともないと言つて嫌がるのを無理に醫者に見せたら肺を侵されてゐると言ふのです。父一人をたよりにしてゐる私達一家の者ですから、今父にもしかの事でもあられたら途方に暮れて了ひますと、久

子は書いて來た事があつた。
だからそれ以來、七月と八月とは手紙はおろかハガキ一枚だも來なかつた。
何と云ふデソレートな日が道三の上には明け暮れした事であらう。歸郷するとしても京都で降りて彼女を訪ねるわけには行かないのだし、それに第二外國語の講習も受けたいと思つたので道三はその暑中休暇を東京に居殘ることにきめたのだが、友達がゐる間はまだ氣がまぎれてよかつたものの、彼等がそれ〲郷里へ立つて了ふと、一日の長さをもてあぐねるやうな日ばかりがつゞいた。
こんな時もし彼女と今迄通り文通が出來たのだつたらどんなによからうと思ふにつけ、月に一度位なたよりは必ずするといつておきながら、それを果さない彼女を憎み、恨み、罵らずには居られなかつた。最後には彼女が俄かに文通の遮斷を言つて來たのは、自分に代る心の對象を得たからではなからうか、父に手紙を押收されたなどと云ふのは、體のいい辭柄ではあるまいかとの猜疑すら起すに到つた。よし、それならば自分の力でも彼女の代りに新對象を求めればいいのだとも思つたが、それは石ころでも拾ふやうな容易なわけのものではなかつた。夕方銀座通りをぶらついて輕い着物を涼しげに裝ふた少女の行きかふのを見るにつけ、眞先に思出すのはやはり久子のことであつた。彼は何とかして此の心の空白を埋めたいと思つた。新らしい刺戟に、沈滯した自分の全生命を甦らせたかつた。
女が欲しい――？　と言つてもたやすく接近し得るのは廓のある町か十二階下あたりへでも行かなければ居ない。しかし臆病で、ピユーリタンで、今迄そんな場所へ一度も足踏みをした經驗のない彼は、一人でさうした未知の世界へ冒險を試みる勇氣は勿論なかつたし、また二つ返事で案内に立つて呉れさうな友人はみな歸郷して東京にゐなかつた。
この前後に彼は探偵小說を耽讀することを覺えた。女に別れたのだと云ふ意識が彼を誘ふて犯罪行爲に興味をもたせるやうになつたのである事は自分でもよく氣付いてゐた。

元來道三は花柳の巷に肉を漁つたり、後から受ける刑罰を考慮しないで無思慮な犯罪行爲に出でたりする者は、人間の中に數へたくないと云ふ程な頑固な道德觀を以てゐたのだが、どうやらそれが崩れかかつて來た。今迄考へてみやうともしなかつた放蕩者や犯罪人の氣持の一面は、やつぱり自分の中にもあるのだと考へられだした。それだけ世間がわかつた。人生を掩ふてゐた被膜が一枚むけた——言ひ換えれば自分がそれだけ年を取つたのだと云ふ氣持がして來た。何事も輕率に審いてはならない、人間の心は複雜なものなのだと云ふことを。戀愛から生じた惱みが、道三に暗示した。

八月も暮れに近くなつたある日の夕方、近所の町をぶらついてゐた、彼はふと小さな基督教會の前に足を停めた。その菱形の建物と中から洩れて來る讚美歌とに心を惹かれて、彼はフラ〳〵とその中へ吸ひこまれた。

これは少くとも彼の内生活の一轉機となつた。彼は今迄どうしてこの教會に氣付くことがなかつたのかを自ら疑つた。彼の兄妹みんなその信徒であつた。殊に久子は、自分ではクラス中の新思想家を以つて任じてバプテスマこそ未だ受けてはゐなかつたやうだけれど、ニュー・イングランドの淸教徒的精神を基礎として立つてゐる學校の風に薰染されてゐる事は、彼にしば〳〵聖書だけは讀んでおけと勸めて來たのに徵しても明かだつた。彼女と交はりを絕つたやうな狀態にある今になつて初めて、この勸告が强い意義を帶びて彼の心に響き渡つた。『死美人』『人耶鬼耶』などと題する本は道三の机の上から影をひそめて、その代りに『馬太傳講解』『羅馬書精義』などと云ふ本がのせられるやうになつた。

九月の末になつて久しぶりに久子のハガキを手にした。父は遂に養生叶はずこの十七日夜、永久の眠につきました。この一二ケ月私も健康を損じ何をする事も出來ませんので一先づ田舍に入つて養生するつもりでございますから、いつれ詳しいお手紙は田舍から差上げます。』とあつた。果して十月に入ると父母の故鄕なる廣島縣F郡に退隱したとのハガキが來た。十一月に入ると、身體が少しよくなつたから自分一人、廣島市へ出て小店でも開く準備をするとの手紙が來た。

しかし道三は新らしく開けて來た内的世界の光彩に眩惑して、それらの書信にも餘り多く感動されなかつた。彼は、勉

強が忙しくて長い手紙の書けないことを悲しむとの素氣ない返事を出した。

四

新らしいものに手をつけると、當分はそれに凝つて了ふ性癖があるので、道三が久子に疎々しくしたのは、聖書の研究がたしかに一つの重大なる理由ではあつた。がそれには、夏休みの間彼女の手紙を待ちながら焦れて苦しんだ同じ惱みを、彼女も思ひ知るがいいと云ふ復讐心もかなり手傳つた。廣島市へ出て以來、又繁々久子から手紙が來はじめた事によつて、自分が彼女から捨てられたのでないと云ふ安心を得た道三は、出來るだけ相手を焦らしてそこから殘虐と無邪氣との相半ばしたやうな戀する者に特有な快感を汲み出さうとして、彼はろく／＼返事を出さなかつた。

このまゝに進んだならば、或は双方で路傍の人の昔に還つて了ふかも知れない所であつた。そこへ丁度冬休みが來た。夏歸郷しなかつた道三は試驗の終るのを待ちかねたやうにして西下の汽車に乘つた。そして京都！——さすがにここは素通りしかねたので、彼は途中下車をして一夜を叔父の家に明かした。それがゆくりなくも彼の心を再び久子の胸につれ戻した。道三と久子との關係を少しも知らない叔父は、たゞ普通の世間話のやうにして、彼女の父の死の前後の事情を語つたのであるが、聞く道三の身になれば、今迄疑問ともしてゐた久子の態度が、それによつて一々、暗語でも解くやうに、明白になつて來るのであつた。

久子の手紙にあつた通り、彼女の父は梅雨期に入ると共に數回咯血した。それまで彼は無理をして會社に通勤してゐたので、一旦寢つくと病勢の進むのが急速であつた。久子は學校に行く以外は夜も晝もつききりのやうにして看病につとめたが、その中に彼女自身も病氣に感染した。彼女は自分でよくそれを承知してゐた。しかし今は一家の中心となつてゐる自分がここで倒れるやうなことがあつてはならないと考へて、氣丈にも彼女はそれを秘しがくしに隱してゐた。併し斯

しい病魔が若い命を蝕むのは、いつまでも表に出すには拙なかつた。彼女の顏色は白蠟のやうな透明さを帶びて來た。

しまいには、たうとう近所の人が見かねて無理にも醫師の診斷を受けるやうに强ひた。道三の叔母が付き添つて大學病院へつれてつたが、その控室へ入ると今迄こらへ〳〵てゐた我慢が一時にゆるんだと見えて、久子はその廊下で卒倒して了つた。呼吸器科の權威であるH博士は、兩肺とも侵されてゐると言つた。

その日から彼女は、家で父と枕を並べて寢る身となつた。七月の終りには母も心配のあまり病みつき、大きい方の妹も暑氣にあてられて、一家中に身體の滿足なのは、七つになる末の妹が一人と云ふ悲慘なことになつた。食事の用意も出來なかつた。誰かに救援を賴みに行くとしても身體の動かせるものがゐないのだし、第一それは誇の强い一家の人の肯ずる所でもなかつた。親子兄弟無言で顏を見合せたまゝ一日中何も喰はないでゐた。

しかしこれに近所の人達が永く氣付かないでゐる理由がなかつた。日頃から久子が若いのによく〳〵一家を切廻して行くのに、陰ながら驚嘆の念をよせてゐた近所の人達の好意は、或は溫い粥を炊いて持つて來てくれたり、或は家の掃除や片付けをしてくれることになつて現れた。勝氣な久子も此の時ばかりは咽喉が淚でつかえた、禮の言葉も滑かには出なかつた。

若いだけに久子の身體はとも角も小康を保つて、最初に起上る事が出來るやうになつた。母も元々健康なのだからその氣病みも程なく癒えた。併し父は段々惡くなつて行くばかりであつた。

その臨終は午後の二時頃であつた。蒲團の上に端座して、極めてしつかりした聲で、娘達には、仲よくするんだよと言つた。それから手傳ひに來てゐる人達に向つては、ながながお世話になりましたと言つた。そして横になつたかと思ふともう脈搏は打つてゐなかつた。

久子は父の容態があらたまると、前後の思慮もなく醫者を迎へに駈け出したので、臨終の席には列なつてゐなかつた。

しかし病後の衰弱し切つた足だから、ものの三町と歩かない中に、後から人が追かけて來て、只今事ぎれになつたと知らせてくれた。

彼女は歸つて來ると『お父さん』と言つたまゝ屍骸の上に泣き崩れてゐたが、やがて卅分もして立上るとそれから涙一つ見せなかつた。その襷がけで働く姿がいとをしいと言つて、却つて近所の方が貰ひ泣きをした。

會社からはかなり纒つた弔慰金を呉れた。葬式がすんだ後で道三の叔父が、

『これからはあなたが家の中心なんだからその金で充分に養生して何より早く身體をよくしてから、家を立て直すことを考へたらいゝでせう。』と言つたら。

『有難うございますけれど よくなるやならならないやら解らない私のために使つて了ふのには、あまりに大切なお金なのです。』と言つて、久子はそれを肯んじなかつた。

いよ〳〵郷里に歸ることにきめて、京都をひき上げる時には、叔母が娘をつれて驛まで見送りに行つた。

『久子さん。早くよくなつて又出て來らつしやいな。』と言つたら、

『えゝ、命さへあつたら又お目にかゝります。』と、さびしく微笑んだ。そして叔母の娘の頭を撫でて『御丈夫で御勉強なさいよ。』と言つた。

脂粉にたゞれた妖婦のやうに田舎者を招きよせてその血を啜らないではおかない都會、夏の虫を蠱惑する灯のやうに若い者の心をむやみに煽り立てる學問――みす〳〵その犠牲となつて潰滅のうきめを見た一家は、かうして永久に都會からその存在を消した。

叔父のこの物語に、道三は座に堪えられない氣がした。これで長い間手紙をくれなかつた譯も明白になつた、さうとは知らないで彼女を恨み、憎み、罵しつた自分を顧ると、その前に跪いて詫ぶるより外に道がなかつた。自分達のやうに浮

渺な、不健全な、生意氣な所謂新思想に微塵もスポイルされてゐない處女の心の純眞さ、尊さが、光のやうに胸を射ぬく思ひがした

翌日の夕方道三は京都を立つた。立つ前にもと彼女の住んでゐた家の所で暫く佇んでゐた。かしや札が薄暗い中に仄白く浮いて見えるのに眼を留めてゐると、眼鏡が涙で曇つてならなかつた。

郷里へ歸ると先づ彼は、彼女が現在身を寄せてゐるのはどう云ふ家か、會ひに行つても差支へないかと訊いてやつた。今迄疎々しくしてゐた彼から突然かうした手紙が行つたことは、彼女を躍り立つ程喜ばせたやうであつた。いま世話なにつてゐるのは親身の叔父の家である。叔父は父程嚴格ではない。現に妻として迎へてゐるは田舍廻りの藝者上りの女でゐる。しかしこの人も苦勞したのた似合はず氣立がやさしい。私は叔父夫婦から毎夜、お前の病氣は戀患ひであらう、戀患ひはお前のやうなおとなしい娘に限つてするものだと言つて冷やかされてゐる、そんな始末だから少しの懸念もなく來て頂きたい――かう彼女の返事にはあつた。それが今日此の道三の來訪となつて現はれたのである。

五

『ねえ、宿屋へ參りませうよ。こんな所ではおちつかなくてお話もゆつくりとは出來ないぢやありませんか。』

久子はさう言つてきかなかつた。そして道三から尋ねかける事には返事をしやうとしなかつた。返事をしないことが彼を自分の考へに同意させる、おとなしい、間接的な、しかし最も有效な策略だとでも考へてゐるやうであつた。道三もたうとう夜行で立つと云ふ計畫は捨てる事にした。

二人を乘せた車は、さう大きくはないけれど、河に面した小綺麗な宿屋の前についた。食事の前に久子はちよつと歸つて來ると言つて宿屋を出たが、卅分程すると又戻つて來た。『只今叔父にことはつて來ましたから、今夜は私も一緒に泊

りますわ。』
室の中に一人だけ殘されて、妙な底深い心淋さに襲はれてゐた道三の耳には、この言葉が大變嬉しく響いた。
『何と言つて許可を得て來たんです。』
『何にも申しませんの。たゞ今夜はよそで泊りたいと言つたら、さうか、よし〱と言つてくれました。』
『叔父さんは――僕のことを御存じなんですか。』
『ええ。』
兩方で默つて暫く顏を見合せた。
食事の時には女中をさげて了つて、彼女が給仕をした。
食事がすんだ時、立てこんでゐた食前に間に合はなかつた詫びを言ひながら、女中がお湯の案内に來た。彼女は風邪を引くといけないからと言つて入らなかつた。道三は煤煙をかぶつたのを洗ふため、一人でかなり長湯をした。
そして室に歸つて見ると、明るい電燈の下に寢床が二つ並べて敷いてあつた。久子は彼の方へ振向からともしないで、『暖かさうでもしん〱と底冷えがしますから早くお休みなさい。』と言ひながら彼の脱ぎすてた制服をたたんでゐた。
それから今度は自分の着物を夜着と着換えた。あれほどしつかりと身體をかためてるやうに見える大きな帶が、帶あげを取ると輪を解いた柳のやうにたわいもなく崩れて、シユツ〱と絹のすれる響きを立てながら疊の上に流れ落ちるのが、道三の眼には珍らしかつた。
久子は着物もたゝみ終ると、呼鈴のボタンを押して蜜柑を以て來させ、
『これでも頂きながらお話ししませう。』
と言つて自分も寢床に入つた。

二人は氣持の上でお互に窮屈さうに、ちツと天井を見たり互に顔を見あはせ合つたりして暫く黙つてゐた。

『道三さん。』

さきに口を切つたのは久子であつた。

『あなた、もし私が父の話をすれば不愉快ではありませんか。』

『いいえ。どうして……？』

『だつて父が死んでからと云ふもの、何だか私の心に空洞が生じたやうな氣がして、私は父の事ばかり考へてゐるのですもの。』

と、ゆるしを求めるやうに道三を見たが、彼にはそれを妬むやうな氣は微塵も起きなかつた。

しかし彼女の話した父の臨終前後のことには、道三が京都で叔父からきいたと變つた點は殆んどなかつた。たゞ。彼女が姉妹のなかでも一番父から可愛がられてゐたと云ふことと、それからまだ伊豫にゐた頃。夕方父と濱邊へ散歩に出る度に何となく心細い氣がして、『お父さん、私は屹度若死しますね。』と云ふとその度に、『神經を起すな』と云つて父から叱られたが、幼ない時のあゝしたそこはかとない豫感は不思議にあたるものだと言つた事とが特別に耳に殘つた。彼女が遠からず自分を死ぬるものときめてゐるやうなのと、それでゐながら死に對する畏怖は少しも抱かずに平氣てゐるのとが稍や異様にも感じられた。

『久子さん。』

と。今度は道三の方から呼びかけた。

『え。』

『僕わね。あなたにお詫びしなければならん事があるのです。』

『まあ、大變に改まつて……どんな事ですの？』

『あなたの御病氣の事も、お內の御心配のことも、僕、知らなかつたのでせう。だから一時あなたがお手紙下さらなかつたのを……』

『あ、私はお手紙差上げないのをお怒りなすつたのでせう。』

と、みなまで言はせずに彼女が言葉を引取つた。

『さうです。だが、どうしてそれが分ります。』

『病氣しますと、大變に神經が過敏になつて、あなたのお胸の中が手に取るやうに、分るやうな氣がしたんですわ。自分ながら不思議で、誰かに催眠術をかけられてゐるのではないかと疑つたり、千里眼とはこんなのを言ふのではなからうかと思つたりしました。あなたは私を恨んで、何だか大變に危い所を迷つてゐられるやうな氣がするのでせう。だけれどお手紙差上げたいにも、私だつて寢てる身ですし、人に賴むわけには行かないし、どうぞあなたをお護り下さいますやうにと、心でひとり念ずるばかりでございました。』

道三は自分の心を鏡にうつされてでもゐるやうに、思はずひやりとした。

『全く申譯ありません。僕は實際あなたを恨みも、怒りも、呪ひもしました。そして一時は無理にもあなたから遠ざからうと努めてゐたので、お父樣の御死去のおハガキを貰つても大して感動しなかつたのです。』

久子は一寸默つてゐたが、『人に托せるハガキではなし、私は杖にすがるやうにして、やつとポストまで行つて入れたのですよ。』と、悲しさうに言つた。

『僕のふまじめさから、あなたのお悲しみを一緒に頒つ事が出來なかつたのです。許して下さい。許して下さい。』

『わざ〳〵こんなに遠い所まで訪ねて來て下さいましたお心を思つた丈けでも、私には勿體なさすぎる位です。許すの許

さないのと云ふどころか、私の方からどんなにしてお禮を申上げればいいのか分りません。』

『久子さん。』

『はい。』

『この夏休みには、僕、またお見舞に來て、今度はながく滯在しますから、それまで丈夫で待つてゐると、ここで誓つて下さい。』

『ほんとうに、お待ちしてよ。屹度。そのお言葉を頂いただけでも、私は死んではなりませんわ。』

『お目にかかつても外に何も言ふことありません。たゞお身體を大切にして下さいと云ふ外は。』

『ありがたう。』

二人が寢たのは一時をきいてからであつた。

翌朝道三が眼をさまして見ると、久子はもう起きて着物まできかえてゐた。

『お疲れでしたでせう。大變よくおやすみになりましたのね。』

と彼女は靜かに言つた。

『あなたは？　私は些つともおやすめませんでしたけれど、これは毎夜の事なんですわ。』

一夜が何事もなく、清らかに明けた事を歡ぶの情で、道三の心は一ぱいになつた。彼は今迄も見る事を自ら恥づるやうな醜い欲望が、不可抗的な力を以て迫つて來るのに困惑した事がしば〱であつた。自分は人並以上に獸性が逞しいのではあるまいかと、悲觀し、絶望した事さへあつた。その位だから昨夜並べて敷かれた夜具を見た時には、一向久子の心をはかりかねると共に、どうぞ發作的に自制力を失ふやうな事がないやうにと、念じて止まないのであつた。しかし愈々寢

に就いて彼女と話を交へて行くと、極めて穩やかな氣持になつて、自分ながら別人かと驚く位に、さうした欲念から離脫する事が出來たので、漸く安心したのであつた。そして彼が意識してから嘗つてない位な、聖者のやうな清淨な一夜を明かす事が出來た……

宿屋の拂ひはみんな久子がした。見送りに來た彼女をプラットフォームに見殘して、道三は正午の急行で東上の途についた。

六

その後久子から來た手紙には、小さな雜貨店を買つてそれに引越し、田舍にゐる母や妹を呼びよせて、久しぶりに一緒に暮らしてゐる歡びが述べてあつたので、道三は大變に安心したが、二月に入つて暫くすると、急に又消息が途絕えた。近況を知らせよと、いくら手紙で促してやつてもその返事は來なかつた。彼の胸は曇らざるを得なかつた。

ある日學校から歸つて机の上を見ると、筆蹟はついぞ見かけた事がないが差出人の署名は久子となつてゐる手紙が彼を待つてゐた。彼は妙な胸騷ぎを感じながら封を切つた。

手紙は二通入つてゐた。先づ短かい方から讀んで行つた。

『一寸申送り舛。久ちやんも此節は病氣つもり、どう致す事も出來ませず、私、まことにかわいそうだと思ひますけれどぜひがありません。お手紙お送り下されても御返事かく事も出來んし、さぞ〳〵久ちやんが心で苦しむことを察し、今朝參りて、返事でも送り度くばかいて上げますと申しましたら誠に喜び、涙乍ら申しましたのが別紙です。粗末な書き方ですけれども、久ちやんの心中察しなされて見て下さい。』

この筆者が、藝者上りだと云ふ叔母であることは、下手ながら妙に仇つぽい書體で、推察された。久子の口述だと手紙

にはこんな一節があつた。

『今月五日頃より床につき、今日では便通さへも人手を煩ばさなければならぬ次第で、毎日毎夜苦しい思ひをしてゐます私も一度無事になつて一家も立直し、夏にはお約束通りお許さまをお迎へしたいは山々ですが、その望みも絶えましたどうせ今回は全快なりますまい……』

道三はその手紙を握りながら、帽子も外套も着たまゝ、暫く机に向つて端然と坐して、瞑目してゐたが、やがて何か思ひ付いたやうに外へ出かけた。――一時間の後彼の姿は銀座の教文館の前に見出された。丁度月末で、郷里から金を受取つて間もない彼は、まだ相當に小使が殘つてゐたのを、全部出してキリストや、聖母や、花の風景のエハガキとカードを買つて了つた。そしてその日から毎日三四枚宛、歌を書いたり、聖句を書いたりして投函した。手紙を讀む氣力はなくても短い文句なら解るであらう。よしそれも解らないとしてもせめて繪だけは眺める事が出來て、多少ともそこから慰めを得はしまいかと、道三は考へたのであつた。この買つて來たエハガキのつきる時が、同時に彼女の息を引取る日ではあるまいかとの不吉な豫感に襲はれなくもなかつたが、それは強いても心の上から拭ひ消して思ふまいとした。

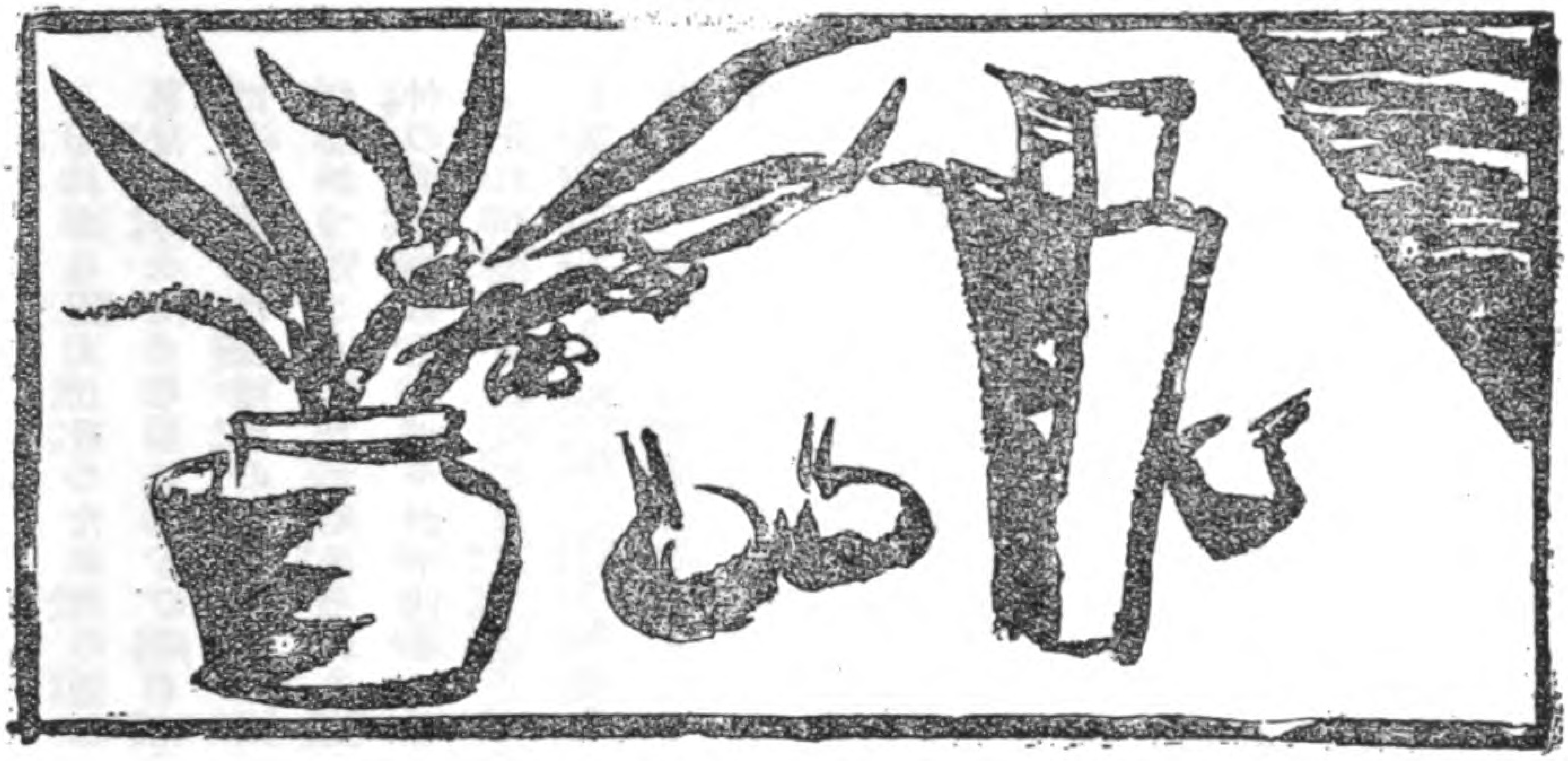
一週間程たつと先日と同じ筆蹟の手紙がまた屆いた。

『一寸取急ぎ申上候。先日よりお手紙差上げたくと存じ乍ら、餘り多忙なためつい〳〵失禮いたしました。久ちやんもいよ〳〵病氣つのりて一昨日頃より足が腫れ、今日では表まで水氣が廻り、目もとぢ、話などは少しもせず、先日來のおたよりも見たか見ないかでせう。私が見てあげませうと申しましたれ共、首をふつて見せませず、其時最早おたよりお送り下さるなと書きおくりてくれと申し付けられ候へど、私も少しはよくなりはせんかと見合せをり候次第に候。しかしよくなるどころか日々弱つてゆきます。若い人故まことにふびんです、變つた事があれば又お知らせ申上ぐべく、もう四五日の事と思ひます。

それから四五日經つたが何の通知も來なかつた。道三は、廣島で會つて別れた時の、病人にしては仲々元氣のいい彼女を思ひ浮べた。そして、あの時も京都の叔父の話によつてはもつと重態にある横臥したまゝの彼女を豫想して行つたのに、あんなに長時間の歩行にさへ堪えた位だから、今度も或ひは持直したのではあるまいかとの、希望を繋がずには居られなかつた。――だが結局それは空しい希望に過ぎなかつた『本日正午、久子儀永眠いたしました。』と書いた三月十二日付の消印のあるハガキが十四日さきの手紙を受取つてから八日目についた。

それが配達されたのは夕方近くであつた。道三は涙も出なかつた。けれどその夜こつそりと自分の所持品一切――着物も蒲團も本も、學校の教科書をさへも賣拂つて了つた。そしてその金をつて新橋驛――まだ東京驛は出來てゐなかつた――へ駈けつけ丁度出やうとしてゐる汽車に、行先は曖昧なことを言つて、無札のまゝ乘車した。彼はそれが下關行の汽車であり、隨つて久子が昨日まで住んでゐた、そして今は彼女の屍骸がその土の下に冷たく眠つてゐる廣島市へも行くことをぼんやりとは知つてゐた。だがいよ／＼發車するとそれは無限の空間の中を無限の時間にわたつてひた走りに走つて駐まらないやうな氣がし初めた。道三は、人さへ見てゐなければむやみに彼女の名を叫びたくてたまらなかつた。彼女を求めて躍り出したかつた、又、いや／＼、その彼女はここにゐるのだと胸を打ちたくもあつた。

汽車は、若者のこの狂はしい心をのせて、ゴーゴーと凄い響を立てながら闇の中を走りつゞけた。



大國主の神

武者小路實篤

八十神は八上姫の處へゆくことを相談した時に大國主の神は相談にはあづからなかつた。しかしいよ〳〵行く時になつて、皆の荷物をもつてゆくものが必要になつた。其處で皆は大國主の神に荷物をもたせることにして、つれてゆくことにした。大國主の神は行きたくなかつた　彼は兄弟達が居なくなるので一人で呑氣にしてゐられるのをよろこんでゐた。しかし荷物を持つて來てくれと云はれると、いやとは云へなかつた。

「それでは一緒にゆきませう」

と云ふことになつた。其處で皆てんでに自分の荷物を持ちよつて、大國主の神に持てるだけの大きな荷をつくつて、それを大國主の神にもたせて、自分達は手ぶらで、元氣よく先に出かけて行つた。

大國主の神は、あまりい〻氣持もしなかつたが、別に今更始まつたことではないので、馴れつこになつてゐた。だから別に腹もたてず、あとからのこ〲ついて行つた。

大國主の神は、八上姫に逢ひたいと別に思はなかつた。彼は元來女嫌ひではなかつた。しかし女に嫌はれることを度々の經驗で腹の底から知らされてゐた。だから八上姫にあつても始まらないことを知つてゐた。大國主の神は兄弟の内で、一番馬鹿者になつてゐた。凡そ小才がなく、お人よしで、皆に馬鹿にされることを本職にしてゐた。一人仲間はづれにされてゐた。自分でも、自分は馬鹿なのだらうと思つてゐた。

皆の眞似は大國主の神には出來なかつた。

皆は中々すばやしこく、するかつた。そして快活で、仲がよく、いつも一緒に愉快さうにしてゐた。大國主の神だけ一人のけものになつてゐた。偏人あつかひされてゐた。

實際自分でも他の人と仲よくしたく思つても、皆と話をすると氣が滅入つて來て、頭が空虚になるやうに思つた。それに皆の皮肉に逢ふと、氣が滅入つた。

それでなるべく皆をさけてゐた。時々は皆が、無邪氣に愉快さうにしてゐるのを見ると、羨ましく思つたが、仲間入りする元氣はなかつた。彼はさう云ふ自分の無邪氣でない性質をはぢてゐた。

しかし一人でゐると元氣になれた。そして世界は自分のもの〻やうな氣持になりて、愉快になつた。それで益益一人ぼつちになつた。

そして他の兄弟達が、女にすかれるたちなので、自分だけが嫌はれる質なのも、生れつきだと思つて、あきらめて居た。

彼は兄弟達を憎んでゐない處が、私かに尊敬さへしてゐた。自分の兄弟達は皆自分に似合はず立派だと思つてゐた。

それで彼は兄弟の荷物を持たされても、重いのと、家に一人でゐられないのにがつかりはしたが、兄弟に腹を立てるや

うなことはなかつた。さうしてとぼ〱歩いて行つた。

重荷は次第に彼の肩に喰ひ込んで來た。背なかからも、額からも氣味わるく汗が出て來た。しかし彼は馴れてゐたから辛抱は出來た。その上彼は珍らしく辛抱強かつた。彼は時々袋を右の肩にやつたり、左の肩にやつたりした。そして額の汗をぬぐつた。時々涼しい風が吹いてくると彼は助かつたと思つて、立ちどまつて、その風の涼しさを味はつた。

彼は八上姫のことは少しも考へなかつた。どんな女だらうと一寸は思つても、それは自分とは縁がなさすぎる上に、重荷の苦しさが、彼の頭を段々熱病の時のやうにした。彼はとりとめのない同じ考がくり返りくり返るのを氣味わるく思つた。彼は重荷を本當に負ふ人であつた。段々前こゞみになり、そして重荷は一歩々々次第に重くなるやうに思はれた。

この時、彼は兎の泣き聲を聞いた。それはいかにも苦しさうな泣き聲だつた。彼はへんに同情心の強い男だつたから、その聲をきくとぞつとした。

彼はその聲の方へ行くと、とても正視することが出來ない赤むけになつた、血みどろになつた兎がヒーヒーないてゐた。

「なぜそんなになくのだ」

「いたくつてたまりません」

「どうしてそんな目にあつたのだ」

兎は鰐をだました罰で皮をむかれたことを話した。そして泣いてゐる所に八十神が來て、海水で身體をあらつて高い山へのぼつて風にふかれるといゝと云はれたので、その通り海に入つて出て來たら、日光にてらされて其處へ風をうけたら御らんの通りになつていたくつてたまらないと言つた。

大國主の神は兄弟達の惡い冗談を眞に受けた兎に同情した。それで眞水でよくあらつて川岸の蒲の花をとつてそれを地

面に吹き散らしてその上を靜かにころげまはると、元の通りの身體になれると教へた。そして何かと世話をやいて、身體を洗ふのを手つだつたり、蒲の花をとつてやつたりした。

兎は大國主の神の親切と、眞心を心からよろこんだ。そして云はれる通りしたら、身體がすつかりなほつて、もとの通りになつた。

其處で兎は泣いてよろこんで、きつと八上姫はあなたのものになりますと云つて、あつく禮をのべて、何處かへ行つてしまつた。

大國主の神はいゝことをしたと思つた。そして心が何となくうれしくなつた。そしてその暫くは重荷も以前よりはずつと輕くなつたやうに思つた。しかも八上姫について兎の云つたことは信じなかつた。しかもそれから八上姫はどんなに美しい人なのだらう。誰のものになるだらう。本當に自分のものになつたらどんなだらう。皆さぞおどろくだらう。羨ましがるだらうなぞと考へるやうになつた。

しかし行くに從つて重荷は又段々重くなり、それに從つて八上姫のこともあまり考へなくなつた。しかし彼の口は、習慣のやうに、八上姫、八上姫とくり返しくり返し一人言を云つた。頭は熱病の時のやうにすつかり自由を失つて同じ節圍をうろつきだした。八上姫の名前も彼にはうれしいものとしてはひゞかなかつた。早くゆきつく所にゆきついて重荷をゝろすたのしみだけがはつ切りしてゐた。

彼が八上姫の家について重荷をおろして汗をふいた時、涼しい風が吹いて來た。彼は心から愉快になつて來た。肉體の苦痛はすぐすぎ去るものである。彼は兄弟達が、八上姫の家にあがつて賑かに饒舌りあつてゐるのを聞いた。その聲は如何にも愉快さうであつた。

中に八上姫の聲らしいのもまぢつてゐた。そして皆で陽氣にさわいでゐた。彼は兎の云つたことは嘘だつたのだなと思

つた。

信じすぎてはあとでがつかりしすぎるぞと思つた。そしてなるべく自分相當な考へをもつて野心なんかは起さないやうにしやうとした。しかし彼の心の底に八上姫が自分のものになつたらどんなにうれしいだらう。

そして兄弟達はどんなにおどろくだらうと思つた。しかしそんな夢を少しでも見ると、失望した時の落膽さが思ひやられるのでなるべく他のことを考へるやうにした。

彼は「兄さん荷物を持つて來ました」と云つた。すると八上姫が出て來た。「大國主の神は一目見てそれが八上姫だと云ふことを知つた。彼の顔は眞赤になつた。こんな美しい人を見たことはない、之では兄達が夢中になるのも無理はないと思つた。

八上姫は丁寧に「どうかお上り下さい、皆さまはさつきから御待ち兼ねです」と云つた。

彼は云はれるまゝ默つて上つた。そして兄弟のゐる一番下の席に坐つた。兄弟達は皆、自分の才や、力を八上姫に示したがつて、お互に利口さを示しあつて、大きな聲を出して話しあつてゐた。皆、自分の云ふこと許りに氣をとられて相手の話を聞く人はなかつた。大國主の神だけは默つて坐つたまゝ、八上姫に見とれてゐた。時々八上姫の目と逢ふと、下手にうろたへて庭の方をあわてゝ見る。そして又暫くすると、八上姫の方を見る。八上姫が自分の方を見てゐないと、安心すると同時にがつかりした。しかし八上姫はだん〳〵彼の方許りを見、他の人のことは忘れてゐるやうに見えた。

彼は段々勝利の自覺を得て來た。そして兄の云つたことは本當だと思つた。

二

皆が、夢中で話してゐる内に、不意に一番の兄が云つた。

「八上姫さん、さあ皆、そろひました。誰があなたのお氣に入つたのですか。云つて下さい」皆すぐ默つてしまつた。

「私が誰を擇んでもあなた達はきつと怒るやうな、馬鹿なことはなさらないでせうね」

「大丈夫です」

「それでは云ひませう」

八上姫はさう云つて、皆の顔をあらためて一通り見た。

異樣の沈默が室を占領した。そして今迄聞えなかつた。波の音が遠くから聞えて來た。しかし誰もそんなことは氣がつかなかつた。皆、八上姫の宣告を異樣な緊張で待つてゐた。皆、自信があるやうにも見えたし、皆不安なやうにも見えた。

八上姫は皆が、出來るだけ自分を立派に見せやうとしてゐる顔を見ると、滑稽でもあり、淺ましくもあつた。そして皆媚びをふくんでゐた。たゞ大國主の神だけは、眞拔な顔と云ひたいやうな、少しも偉く見せやうなぞと云ふ努力をしない、しかし八上姫を愛してゐることを露骨に示してゐる、人のいゝ顔をしてゐた。しかしその顔は、他の兄弟と出來がちがつてゐた。何處か特別なものがあつた。

しかし八上姫は、女が買ひ物でもする時のやうに念には念を入れて、一人々々の腹を、腹の底までさぐるやうな目つきして見てゐた。それは八上姫の顔をなほ生々させ、なほ賢こくさせ、なほ美しくさせた。

第三者がこの八十神達の顔を見たら、噴き出すか、不愉快を感じるかしたらう。馬鹿々々しくもおり、同時に淺ましくも見えたらう。

大國主の神は、さすがに腹が立つて來た。皆が八上姫に侮辱されてゐるやうな氣がして來た。そして皆の淺ましさがわかると同時に自分の淺ましさもはつ切りして來た。腹を立てゝその場を立ち去りたいと思つたが、八上姫を見るとさすがに立ち兼ねた。そしてこの女を得るためには何にもかもよろこんですてると思つた。其時、八上姫の目と大國主の神の目は

ゆきわたつた。八上姫はもう迷ふ力はなくなつた。

「荷もつをかついでゐらつした方が、私の夫になる方です」

皆、一時に笑つた。その笑ひはいかにも可笑しくつて笑つたやうでもあつた。又何んだかわけのわからない、少し氣違ひぢみた笑ひでもあつた。

「冗譚はやめて下さい。もつと眞面目なことを云つて下さい。本當のことを云つて下さい。」てん〴〵にそんなことを云つた。

しかし八上姫は笑はなかつた。

「私は冗談はいひません。皆さんはこの方を馬鹿にしてゐらつしやいます。皆さんはこの方が如何にもまぬけで、滑稽な方のやうにおつしやいますが、私にとつては、この方は、皆さんすべてをあつめたよりも、貴い方に思へます。この方こそ、今にきつと立派な方におなりになります。あなた方はこの方の支配をお受けにならなければならないでせう。私はこの方程、立派な方は知りません。男らしい、そして福々しい方は知りません」

皆はまた大聲を上げて笑つた。しかしその笑ひは空洞に響いた。

「あなたは私達を侮辱するのですね」

「今云つたのは冗談ですが、私はこの方が、私の大事な兎を救つて下さつたので、この方が大好きになつたのです。それは本當のことなのです」

皆はもう笑はなかつた。

皆泣きさうな顔になつた。そして皆歸り仕度をした。

三

大國主の神は今や、本當に男らしい神になつた。彼は今まで知らなかつた自分のいゝ處をすつかり自覺した。彼は私かに自分で思つてゐたことが本當だつたことを知つた。

それは皆、八上姫のおかげだつた。彼は自分一人の世界にすみ、自分の思つてゐること、考へてゐること、又云つたり行つたりすることは他人には通じないものと思つてゐた。そしてその通じないのは自分が足りない所があるからではないかと思つた。

そして皆の感心するものに感心出來なかつたり、皆と喜びを分つことが出來なかつたりするものは、自分に缺けてゐる處があるからではないかと思つた。所が彼はこの考へがまちがつてゐることを知つた。

彼は自分の方が正直ものであること、又自分の考へてゐることの方が正しいこと、又自分が皆に愛されなかつたり、理解されなかつたりするのは彼等と目指す所がちがうからで、そして彼の目指す道のまちがひないことを知つた。

彼は皆のやうに他人をやつつけることを考へずに、他人と平和に仲よくくらしたいと思ふのは卑怯なからではなくつて、思ひやりがあるからで、そのことはいゝことなのだと云ふことを自覺をもつて知つた。

又彼は自分が生命を大事にし、そして死ぬことが嫌ひなのも決して臆病だからではなく、自分に生てゐる内にしなければならない使命があるからだと云ふことを知つた。

それ等は皆、常識が發達してゐ、しかも優れたものを愛する八上姫から彼は敎へられた。彼は今迄、自分には運命は味方してくれないものゝやうに思つてゐた。しかし今彼は、自分の使命を信じ、自分の運命を信じ、自分の實力を信じることが出來た。

彼は今迄、あまりに孤獨すぎた。そして自分の考へは他人には通じないものと思ひ込んでゐたが、それは嘘で内心は皆矢張り生命が惜しく、そして平和を好んでゐることを知つた。

彼は八上姫の處に三晩泊つて、そして兄弟の處へ歸つて來た時は、彼はもう以前の彼ではなかつた。そして兄弟達の口と腹とのちがひが、今迄よりははつ切りわかつて來た。

四

彼は兄弟達が自分を嫉つてゐるだらうと思つた。そして彼につらくあたるだらうと思つてゐた。處が兄弟達に逢ふと兄弟達は彼をよろこんで迎へた。彼は一寸へんに思つたが、兄弟達も自分の値打を認めるやうになつたのだらうと自惚れがあつた。それで彼は兄弟達に惡だくみがあるなぞとは夢にも思はなかつた。何しろ彼はうれしかつた。彼の頭は半分八上姫のことでうづまつてゐた。

あんな可愛い〻、あんな美しい奴はありはしない。又あの位利口な奴もありはしない。そして俺のこと許り考へてゐる。」

そんなこと許り考へてよろこんでゐる彼は、すべての人に厚意をもたなければならなかつた。そして氣まりのわるい程元氣になつた。

「いやにお前は元氣だね」

から父に言はれて、彼は大得意であつた。

「お父さん、本當にこの頃はい〻天氣ばかりつゞきますね」

五

彼に兄弟たちから赤い猪が山にゐるから狩りに行かうとさそはれた時も、彼はいつもになくのり氣で承知した。

「それは面白いでせう。是非つれていつて下さい」

そして兄弟達がへんな笑ひ顔をしたのも、少しも氣にならなかつた。彼は内からくる元氣と、よろこびにすつかりときこまれてゐた。それを見せない力に骨が折れて、その他のことは殆んど考へなかつた。

そして兄弟達のよろこぶことなら何んでもしてやりたいと思つた。

そして兄弟達と山へ入つてゆく時も、つい足が早くなつて、いつも皆のあとについてゆく彼が、皆のさきになりがちであつた。

「あいつの元氣と來たら大したものだね」

なぞと云ふ聲が聞えて、はつと思つたが又すぐ元氣になつて來た。今迄出たがつて出られなかつた元氣が一時に出て來たので、彼はどうすることも出來ないやうに見へた。

「さあ、こゝで待つてゐろ、上から赤猪をおいおとすから、手づかまひにしろ、さう大きくない奴だから、殺さないやうにつかまへろ、そして何しろ珍らしい奴だから飼つてやらう。逃がしたら承知しないぞ」

「よろしい、上から逃げて來たらきつとつかまへます」

其處で他の連中は山にのぼつて行つた。大國主の神は一人で其處で待ちながら、八上姫のことを考へてゐた。

「今晩どうかして行つてやりたいものだな。今時分何してゐるだらう。」

彼は八上姫の家の形を頭に浮べて、そして八上姫の姿を思ひ出さうとしたが、中々思ひ出せなかつた。

「あんないゝ奴はゐない。あんな可愛いゝ奴はゐないな」

そんなことをくり返し考へてゐる時。

「そら逃げたぞ、そらいつたぞ、逃がすな」

なぞと云ふ聲が山の上から聞えた。びつくりして見ると、何んだか知らないが、日にかゞやいて眞赤なものが非常な勢ひでおりて來た。彼はいきなりとびついた。

彼は非常な痛さを感じた。あついのか、つめたすぎるのか、そんなことはわからなかつた。何しろ非常な痛さだつた。同時にやられたと思つた。それは實に一瞬だつたが、死の恐怖は實に强く彼をつかんだ。同時に彼は一寸八上姫のことを思つた。しかしすぐ氣が遠くなつた。

六

彼はふと氣がつくと、兩親がわきにゐた。そして彼は不思議に早くなほつた。そして猪にやられて生きかへつた獵犬は反つて大ていの場合今迄よりも氣が强くなるのと同じやうに彼は今迄よりもなほ勇氣のある。男らしい男として生きかへつた。彼は本當に猪にやられたのだと思つてゐた。そして又兄弟達と山に木を切りに行つて其處で又殺されかけた。

彼は其處で始めて兄弟達が自分を殺さうとしたことを本當に知つた。

彼は心から兄弟達を賤しんだ。女に愛されないからと云つて、愛されたものを殺す馬鹿があるか、それも男らしくない方法で、あざむいて殺す、その卑劣さに愛想をつかした。

しかし彼は一人で、相手は多かつた。彼はどうすることも出來なかつた、しかし兄弟達のそばにゐるのはますます危險

になつた。彼はその時、自分にも力がなければならなくなつた。

七

彼はふと氣がついた時は、自分は家にねてゐた。そして兩親と、八上姫が自分のわきにゐた。彼はまもなく身體が丈夫になつた。そして彼は今迄よりもなく勇氣がわくのを覺えた。

「俺は不思議に死なかゝつた」

彼は生れかへつたよろこびを感じた。

そして何かして見せると決心した。

彼は兄弟達から石を燒いておとされたのに自分がとびついて死んだのだとは思はなかつた、本當に赤い猪にやられたのだと思つてゐた。だから兄弟達とも以前と同じく仲よくし、そして八上姫の處へよく出かけた。

彼は幸福であつた。そして段々自覺を得て來た。そしてますます男らしい神になつた。……(二四、一、二九)

◇應募原稿のこと

本誌は毎號期日を限らず、その種類を問はずに廣く全國諸姉の隨意投稿を歡迎してをります。そしてその中から綿密な鑑査の上、誌上に推選發表してお互ひ同志の生活を思想的に、藝術的に、實生活上の各方面から交換發養しあひたいと思ひますから、單に文藝創作に限りません。皆さんが今日までに研究された思想問題や、科學や、文藝の研究、美術の問題 實生活の改善や、新らしい工夫、其他少くとも皆さんの努力と創意によるものでしたら種類の別なく御投稿を希望します。そして本誌は澤山の無名の寄稿家の中から、熱心な鑑査をつゞけることに努めてゐます。尙來月は全國の女子專門學校や女學校の卒業生が三萬人余も實社會へ踏み出される時ですが、新時代の皆様には、人間生活についても、女性として生きる道についても、一層深く高い各自の意見や決心を持つて世の中へ出られることでせうと思ひ、本誌は四月號掲載の特別課題として、全國の女學校卒業生の方々に左の標題をお贈りしますから、どうぞ校門を後に初めて街頭に出られる皆樣が、どの方向を指してをられるか、根據の坐つた正直な御考へをなるだけ具體的にお知らせ下さい。

特別課題 初めての十字路に立ちて

規定
一、原稿は四百字詰用紙にて六枚以內、
一、〆切は二月二十七日。入選の物には薄謝を差上げます。
一、住所氏名明記のこと。(但し誌上の匿名は差閊ありません)

女性改造編輯部

女性改造定價表

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	貳錢五厘
六冊	參圓	郵税共
十二冊	六圓	郵税共

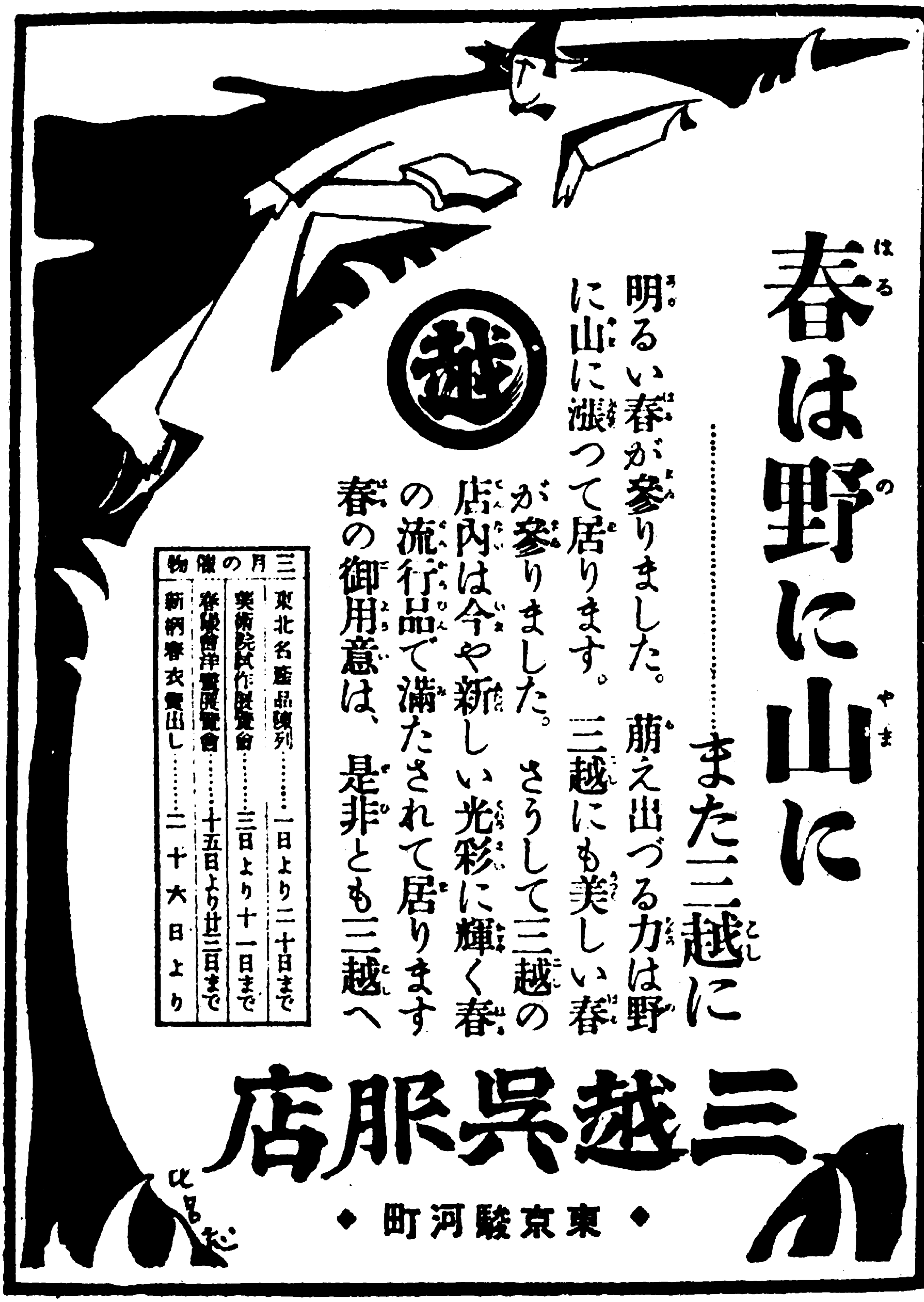
註文の注意

◇特大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は本部郵税拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によるが最も便利なり

本誌告廣料一頁〔一等百圓 二等七拾圓〕

◉本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十三年二月十八日印刷納本
大正十三年三月一日發行
（三月號金七十錢）
東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行印刷者 平田貫一郎
東京市牛込區加賀町一ノ一
印刷所 株式會社秀英舍
東京市芝區愛宕下町一ノ一
發行所 改造社
電話高輪四九九三
振替東京八四〇二


春は野に山に
……また三越に
明るい春が参りました。萠え出づる力は野に山に漲つて居ります。三越にも美しい春が参りました。さうして三越の店内は今や新しい光彩に輝く春の流行品で満たされて居ります
春の御用意は、是非とも三越へ
三月の催物
東北名産品陳列……一日より二十日まで
美術院試作展覧會……三日より十一日まで
春陽會洋畫展覧會……十五日より廿三日まで
新柄春衣賣出し……二十六日より
三越呉服店
東京駿河町


使へば使ふほど、
歯を強く美しくするものは、ライオン歯磨ばかりで御座います。
香といひ、味といひ、效果といひ、全く申分が御座いません。
ライオン歯磨

復刻版 女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕
第3回配本（第7巻〜第9巻・別冊1）

2008年6月25日 発行

揃定価（本体60,000円＋税）

発行者 船橋 治
発行所 不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433
印刷所 三進社
製本所 青木製本
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6078-1（全4冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6076-7）